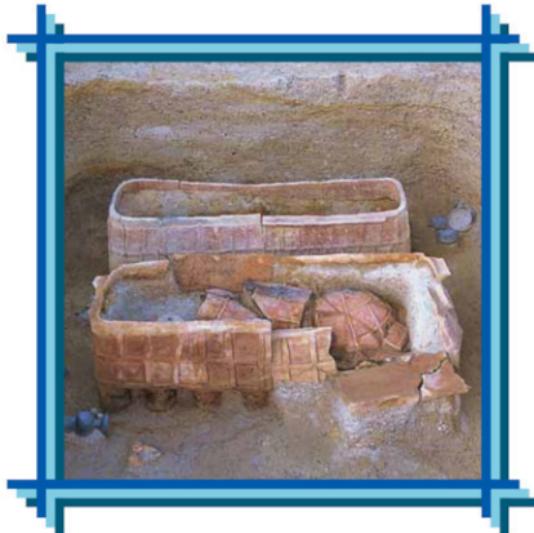


奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 22 (2010) 年度



奈良市教育委員会

2012

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 22 (2010) 年度

奈良市教育委員会

2012



5号墓陶棺全景（南東から）



7号墓全景（南から）



HJ第631次調査 A発掘区全景（東から）



HJ第623次調査 A発掘区南半全景（西から）

例　言

1. 本書は、平成 22 年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と、埋蔵文化財調査センター紀要を収録したものである。

ただし、平成 22 年度に実施した調査のうち平城京跡第 630 次調査と、史跡東大寺旧境内第 12 次調査については、次年度以降に報告の予定であるため本書には収録していない。

また、平成 21 年度に実施した平城京跡第 623 次調査については、平成 22 年度に実施した平城京跡第 631 次調査の成果とともに、本書に収録した。

2. 平成 22 年度の埋蔵文化財に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育総務部

文化財課

課長 西崎卓哉

課長補佐 中井 公 大西章市（文化財総務係長事務取扱）

文化財総務係

主任 植松宏益

技術職員 松浦五輪美 大庭淳司

埋蔵文化財調査センター

所長 森下恵介

所長補佐 篠原豊一

主任 三好美穂 鐘方正樹

技術職員 秋山成人 安井宣也 武田和哉（現 大谷大学）宮崎正裕 原田憲二郎 久保清子

池田裕英 久保邦江 中島和彦 原田香織 山前智敬 池田富貴子

事務職員 酒井真弓

嘱託職員 大原 瞳 奥井智子（現 京都市埋蔵文化財調査センター）

3. 発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

H J 平城京跡 D A 大安寺旧境内 G G 元興寺旧境内 S D 西大寺旧境内
T D 東大寺旧境内 K K 菩原寺跡 I W ヒシャゲ古墳 A D 赤田横穴墓群

5. 古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

6. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

S A (柱列・壠) S B (掘立柱建物) S D (溝・濠・溝状遺構・暗渠) S E (井戸)
S F (道路) S K (土坑) S X (その他)

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

7. 本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査数の前に下記の略記号を使用し表記した。

国 — 独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所含む）

県 — 奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所

市 — 奈良市教育委員会

8. 本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代 軒 瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996

土 器：『平城宮発掘調査報告書VII』奈良国立文化財研究所 1976

『平城宮発掘調査報告書XI』奈良国立文化財研究所 1982

古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

弥生時代 土 器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所 2003

9. 発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500)を、また調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000の地形図を利用した。

10. 本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の表・図中の記標については単位（m）を省略した。

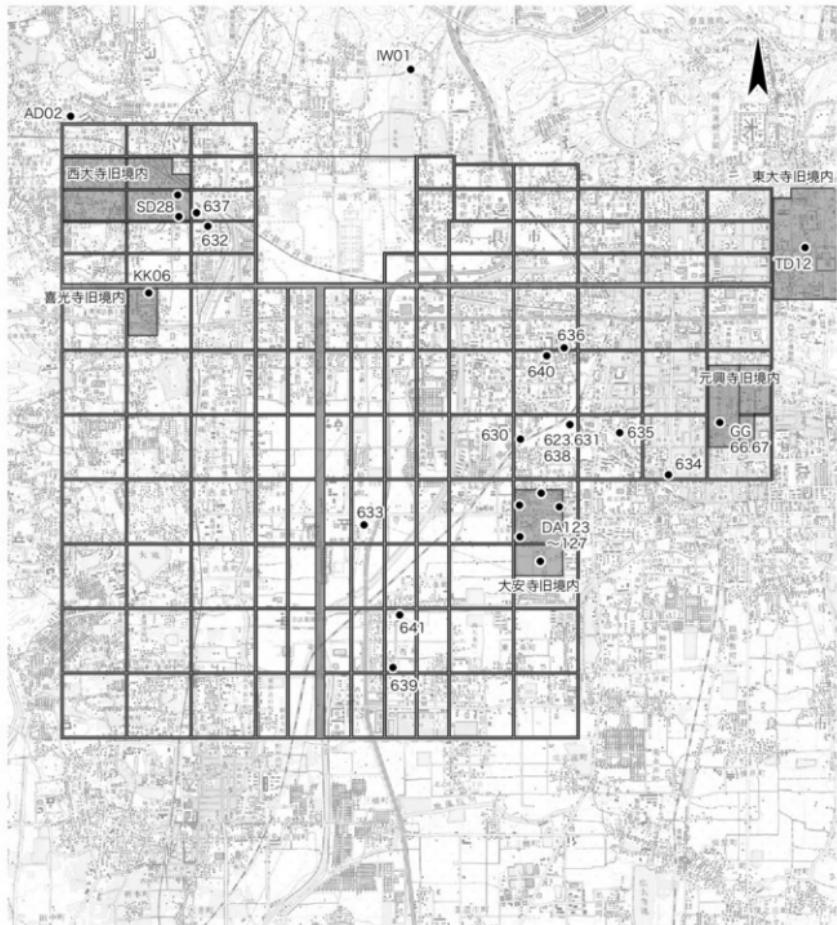
11. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

12. 第1・3章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。第2章は分析機関の報告を再編集して構成した。第4章は埋蔵文化財調査センター職員が執筆した紀要を掲載した。

13. 本書の執筆および編集は平成24年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長森下恵介、同グループリーダー主任三好美穂・鍾方正樹の助言を得て、中島和彦が編集を担当した。

目 次

巻首図版	1、II
例言・目次	i～v
第1章 平成 22 年度奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告	1
1. J R 奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査	2
平城京跡（左京五条四坊十五・十六・四条大路）の調査 第 623・631・638 次	3
2. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査	35
(1) 西大寺旧境内の調査 第 28-1・2 次	36
(2) 平城京跡（右京一条二坊十三坪）の調査 第 637 次	41
3. 平城京跡（右京二条二坊九坪）の調査 第 632 次	45
4. 平城京跡（左京六条一坊十一坪）の調査 第 633 次	47
5. 平城京跡（左京五条六坊五坪）の調査 第 634 次	51
6. 平城京跡（左京五条五坊十坪）の調査 第 635 次	57
7. 平城京跡（三条大路）の調査 第 636 次	60
8. 平城京跡（左京八条二坊四坪）の調査 第 639 次	61
9. 平城京跡（左京四条四坊八・九坪）の調査 第 640 次	68
10. 平城京跡（左京八条二坊一坪）・杏遺跡の調査 第 641 次	72
11. 史跡大安寺旧境内の調査	78
(1) 西面中房の調査 第 127 次	79
(2) 食堂并大衆院推定地の調査 第 124 次	84
(3) 杉山古墳周濠（池井岳推定地）の調査 第 123 次	86
(4) 東面築地（倉垣院推定地）の調査 第 126 次	87
(5) 東塔の調査 第 125 次	88
12. 元興寺旧境内の調査	104
(1) 讲堂推定地・奈良町遺跡の調査 第 66 次	105
(2) 小塔院推定地・奈良町遺跡の調査 第 67 次	108
13. 香原寺跡（喜光寺跡）の調査 第 6 次	109
14. ヒシャゲ古墳の調査 第 1 次	112
15. 赤田横穴墓群の調査 第 2・3 次	114
16. 平成 22 年度実施 小規模調査・試掘等一覧	122
17. 平成 22 年度実施 工事立会一覧	122
18. 平成 22 年度実施 踏査一覧	128
第2章 自然科学分析報告	129
1. 平城京跡第 623 次調査における自然科学分析	131
2. 平城京跡第 640 次調査における自然科学分析	138
3. 西大寺旧境内第 28 次調査における放射性炭素年代測定	149
4. 香原寺跡第 6 次調査における放射性炭素年代測定	150
第3章 平成 22 年度保存活用事業報告	151
第4章 紀 要	161
平城京跡出土の滑石製容器	162



平成 22 (2010) 年度 発掘調査位置図 (過年度調査で本書報告分を含む 1/40,000)

平成22(2010)年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

No.	調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積(m ²)	担当者	事業者	事業内容	事業区分	届出受理番号
1	HJ630	平城京跡 (左京五条四坊二坪)	大森西町 684-2 他	H22.6.10～ H22.8.9	622	秋山	奈良市長	J R 奈良駅南特定土地 区域整理事業 地域活力基 盤創造交付金事業	公共	H12.3145
2	HJ631	平城京跡 (左京五条四坊十六坪・ 四条大路・東四坊坊間 東小路)	大森西町 139-2、大 森町 129-1 他	H22.6.10～ H22.12.10	2,730	中島・ 大原	奈良市長	J R 奈良駅南特定土地 区域整理事業 都市再生推 進事業	公共	H12.3145
3	HJ632	平城京跡	西大寺国見町 一丁目 2162-5	H22.7.25～ H22.8.3	330	池田裕	日本政策金 融公庫	共同住宅新築	原因者	H21.3510
4	HJ633	平城京跡 (左京二条二坊九坪)	柏木町 395-6 他	H22.8.30～ H22.9.18	181	安井	(株) ホクシン	宅地造成	原因者	H21.3455
5	HJ634	平城京跡 (左京五条六坊五坪)	南京終町地内	H22.10.5～ H22.2.3	535	宮崎	奈良市長	都市計画道路 六条奈 良坂根事業	公共	H22.3105
6	HJ635	平城京跡 (左京五条五坊十坪)	西本町辻 36-1	H22.10.4～ H22.11.4	270	池田裕	個人	児童福祉施設新築	原因者	H22.3154
7	HJ636	平城京跡 (三条大路)	大宮町二丁目地内	H22.11.2	3	武田	奈良市長	三条菅原線街路改良事 業	公共	H19.3064
8	HJ637	平城京跡 (右京一条二坊十三坪)	西大寺南町 2370-3 他	H22.12.16～ H23.2.28	354	久保清	奈良市長	西大寺駅南地区土地區 域整理事業	公共	S63.3056
9	HJ638	平城京跡 (左京五条四坊十六坪)	大森町 125-1 他	H22.12.20～ H23.2.15	400	中島	奈良市長	J R 奈良駅南特定土地 区域整理事業 地域活力基 盤創造交付金事業	公共	H12.3145
10	HJ639	平城京跡 (左京八条二坊四坪)	杏町 83-1 他	H23.1.17～ H23.3.24	480	原田香・ 大原	奈良市長	第11号(杏南)市営 住宅建替事業	公共	H22.3339
11	HJ640	平城京跡 (左京四条四坊八・九 坪)	三条宮前町 51-2 他	H23.1.5～ H23.2.3	302	武田	学校法人 白樺学園	校舎建替	原因者	H22.3090
12	HJ641	平城京跡 (左京八条二坊一坪)	杏町 393-1 他	H23.1.17～ H23.3.11	420	秋山	奈良市長	第11号(杏中)市営 住宅建替事業	公共	H22.3340
13	DA123	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1083 番地-1	H22.5.17～ H22.5.22・ H23.1.27	19.1	安井	個人	離れ棟の改築、門新築	緊急	H21.1146
14	DA124	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 4-5	H22.6.21～ H22.7.9	40	安井	個人	住宅の除去及び新築	緊急	H21.1182
15	DA125	史跡大安寺旧境内 (東塔)	東九条町 1321 番地 他	H22.7.20～ H22.9.8	120	原田憲	奈良市長	史跡大安寺旧境内保存 整備事業	公共	H22.理 23
16	DA126	史跡大安寺旧境内	大安寺五丁目 7-47	H22.8.2～ H22.8.4	4	武田	個人	個人住宅除去・新築	緊急	H22.1018
17	DA127	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目 1299 番 1	H22.11.29～ H22.12.8・ H23.2.28～ H23.3.18	103.5	武田	(宗) 大安寺	護摩堂の改築	緊急	H22.1096
18	GG66	元興寺旧境内	中新屋町 11	H22.6.28～ H22.7.21	27	池田裕	北条工務店	自己住宅新築	緊急	H22.3045
19	GG67	元興寺旧境内	中新屋町 24-1 他	H22.8.23～ H22.8.27	16	武田	個人	店舗付共同住宅新築	緊急	H22.3484
20	SD28-1	西大寺旧境内	西大寺南町 2405-6	H22.7.15～ H22.8.17	150	久保清	奈良市長	西大寺駅南地区土地區 域整理事業	公共	S63.3056
21	SD28-2	西大寺旧境内	西大寺南町 2425-3 他	H22.8.26～ H22.11.12	452	久保清	奈良市長	西大寺駅南地区土地區 域整理事業	公共	S63.3056
22	TD12	史跡東大寺旧境内 名勝奈良公園	難波町	H22.12.15～ H22.2.17	145.3	原田憲	奈良市長	公共下水道築造工事	原因者	H21.1176
23	KK06	普原寺跡(喜光寺跡)	普原町 134-1 他	H22.6.22～ H22.7.16	190	原田憲	奈良市長	(仮称) 普原公園整備事 業	公共	H21.3462
24	IW01	ヒャゲ古墳	佐紀町地内	H22.12.7～ H22.12.24	140	秋山	奈良市長	公共下水道築造工事	公共	H22.3055
25	AD02	赤田横穴墓群	西大寺赤田町 一丁目 556-1 他	H23.1.7～ H23.3.24	1,050	安井・ 池田裕・ 奥井	医療法人 平和会	病院建設	原因者	H22.3420

第1章 平成22年度 奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告

I. J R 奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査

この調査は奈良市が進めるJ R 奈良駅南特定土地区画整理事業（総面積14.6万m²）に係り、実施したものである。奈良市教育委員会では、平成13年度から当事業地内での発掘調査を行っており、平成22年度までに、約36,000m²の発掘調査を実施している。

平成22年度は、平城京の条坊復原では左京五条四坊二坪で1件、左京五条四坊十六坪で2件の発掘調査を実施した。各調査の概要は下記の通りである。

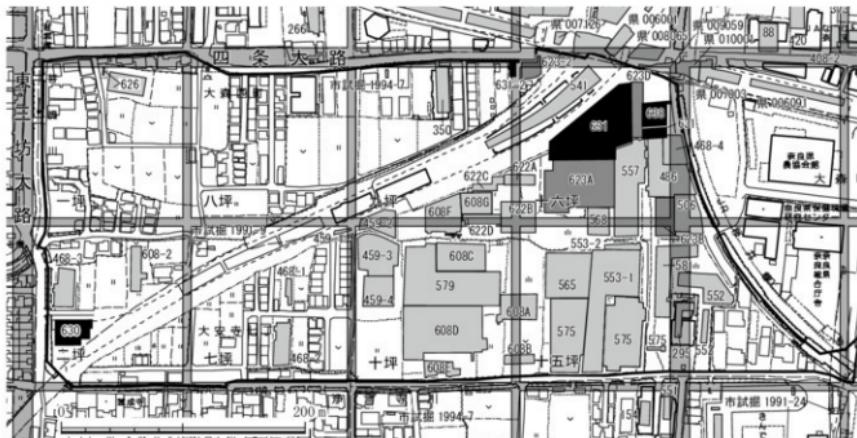
このうち、今回はH J 第631・638次調査と平成21

年度実施し未報告であったH J 第623次調査を合わせ、さらに過去の調査分も含めて十六坪全体と十五坪の一部を報告する。なお、H J 第630次調査については、次年度以降に報告する予定である。

報告に際しては、古墳時代以前の遺構には2桁を、奈良時代以降の遺構には3桁以上の遺構番号を付している。これらは、当事業に係る調査で設定している遺構番号であり、条坊遺構・坪ごとに設定した通し番号である。

平成21・22年度 J R 奈良駅南特定土地区画整理事業 発掘調査一覧表（平成21年度分は今回報告分のみ）

調査年度	調査次数	発掘区	事業名	遺跡名	調査面積	調査期間	調査地	調査担当者
平成21年度	H J 第623次	都市再生推進事業	A	平城京跡 (左京五条四坊十六坪)	2,300m ²	H 21.5.25～ H 21.5.25	大森町131・134番地他	宮崎・池田裕・ 山前・中居
			B	平城京跡 (左京五条四坊十五・ 十六坪、東四坊大路、 五条条間北小路)	520m ²	H 21.5.25～ H 21.5.26		
			C	平城京跡 (左京五条四坊十六坪、 四条大路)	180m ²	H 21.5.25～ H 21.5.27		
			D	平城京跡 (左京五条四坊十六坪)	450m ²	H 21.5.25～ H 21.5.28		
平成22年度	H J 第630次	地域活力基盤 創造交付金事業 (平成21年度難越)	平城京跡 (左京五条四坊二坪)	622m ²	H 22.6.10～ H 22.8.9	大森西町684-2他	秋山	
	H J 第631次		都市再生推進事業	平城京跡 (左京五条四坊十六坪、 四条大路、東四坊条間 東小路)	2,730m ²	H 22.6.10～ H 22.12.10	大森西町139-2、大森町 129-1他	中島・秋山・ 原田香・大原
	H J 第638次		都市再生推進事業	平城京跡 (左京五条四坊十六坪)	400m ²	H 22.12.20～ H 22.2.15	大森町125-1他	中島



平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次

I はじめに

平城京左京五条四坊十五・十六坪は、過去に数回の調査概要報告が行われている。十五坪は、平成19年度の「奈良市埋蔵文化財調査年報」（以下「市年報」とする）に坪全体が、平成21年度の「市年報」に北東隅の一部が報告されている。十五坪の全容は平成19年度の「市年報」に記され、今回は北東隅の新規部分のみを報告する。

十六坪は、H J 第468-4次調査とH J 第486次調査が平成13年度と14年度の「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」に、H J 第541次調査とH J 第557・568次と第622次調査がそれぞれ平成17・18・21年度の「市年報」に報告されている。今回の新たな発掘調査は、H J 第623・631・638次調査で、十六坪の中央から北東部分・南西部分と、十五坪の北東隅部分にあたる。今回の調査で十六坪のほぼ全容が明らかになったことから、過去の調査を含め十六坪全体の報告を行うこととした。

なお今回、掘立柱建物の復原を大きく改めたため、掘立柱建物・列の遺構番号を新たに附し、その他の遺構番号は過去調査からの続き番号とした。また、H J 第486次調査の井戸の詳細が一部未報告であり、H J 第468-4次調査とあわせて一覧表を作成した。H J 第541次調査とH J 第557・568次調査の井戸・溝・土坑の詳細は過去の報告の一覧表と変更がなく、再掲はしていない。

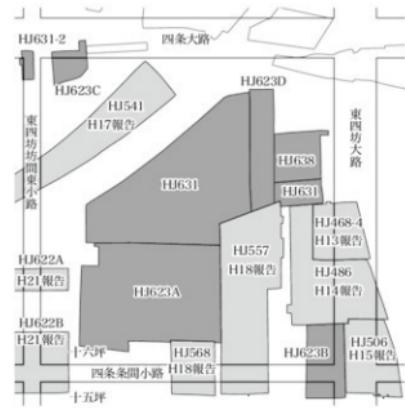
II 基本層序

十六坪内の基本的な層序は、各調査区ごとに多少の差はみられるものの、おおよそ耕土の下に1～3層の灰褐色系の砂質土があり、現地表下0.3～0.6 mで弥生時代後期～平安時代前期の遺構面となる。遺構面はおむね北東から南西方向に低くなつてゆき、H J 第638次発掘区の北東隅が標高64.2 mで最も高く、坪の中央が標高63.7 m、H J 第622次B発掘区の北東部が標高63.1 mと最も低い。

一方、この遺構面の下には縄文時代以前の河川が存在している。十六坪北側のH J 第631次発掘区北東端部から幅約18 mにわたっては、非常に堅緻な黄灰色砂礫層があり、この黄灰色砂礫層から南西側一帯には、粘土と砂からなる縄文時代以前の河川堆積層が広がる。

河川Iは大きく東西方向にはしり、深さは約2.5 mある。埋没と開削をくりかえし2時期以上あり、新しい順に河川Ia・河川Ibとした。

河川Iaは、幅約30.0 m、深さ2.5 mで、十六坪の南半部分を西流する。灰色砂礫層を主体として堆積して



十六坪 発掘調査区配置図 (1/2,000) 濃いトーン部分が新規報告おり、上層からは縄文時代中期後半～晚期後半の土器が出土し、とくに晚期前半の出土量が多い (H18年度H J 第557次調査報告)。

河川Ibは、H J 第631次発掘区中央部で河川Iaの北側約6 mで北岸のみ確認し、南岸は未確認である。幅10 m以上、深さ2 m以上で、埋土は灰色砂礫を主体としており河川Iaと似る。出土遺物はなく時期は不明。

河川Ia・bを一体のものと見ると、河川Iは最大幅約60 m、深さ約2.5 mで、十六坪南半部を西流し、十五坪部分では北西に向きをかえて流れゆくことが、各調査区の土層観察などから判明する。河川I内の流木の年代測定では、H J 第557次発掘区では、B.C2190～1980年、H J 第623次A発掘区（以下H J 第623A次発掘区とし、他も同じとする）ではB.C2850～2470年で、縄文時代中期～後期が年代が測定されている（H18年度H J 第557次調査報告と本年度第2章）。出土土器とも矛盾はなく、河川Iは、縄文時代中期～晚期のものと考えられる。

また河川Iの南側の調査でも、縄文時代の河川が数箇所見つかっている。河川の形態・規模の詳細は不明であるが、十五坪南端でも非常に堅緻な黄色礫土が東西方向にあり、これが河川の南岸と考えられる。河川内の流木の年代測定を3箇所で行っており、東からH J 第552次・575次・459-2次調査で、B.C4040～3820年（H18年度報告）、B.C4250～3980年（H19年度報告）、B.C5900～5740年（H13年度調査未報告）の結果が

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638 次

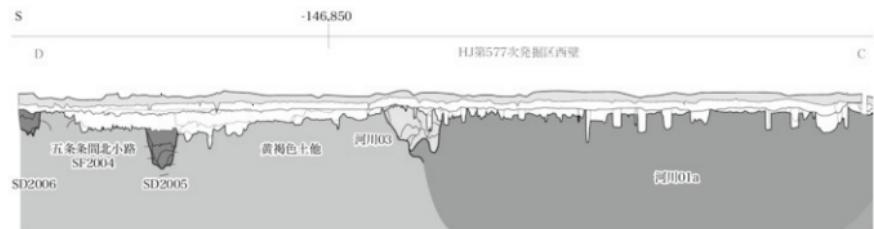
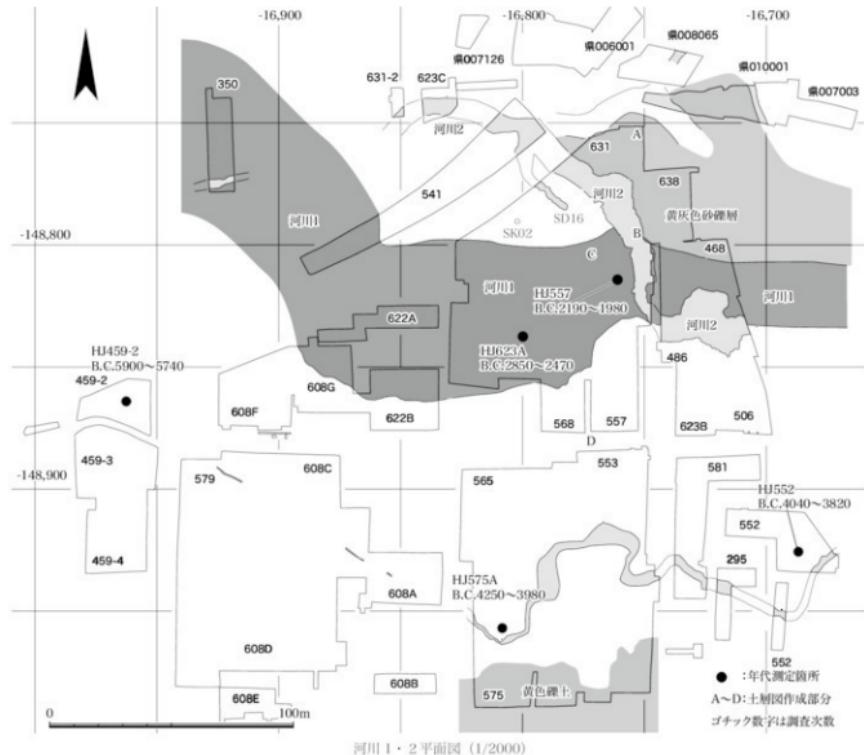
得られている。いずれも縄文時代早期から前期の年代で、十六坪検出の河川1に比べ古く、河川1に南側にはさらに古い河川があることが考えられる。

以上のことから、十六坪北辺から十五坪南辺までの幅

約170 mの東西方向の谷がかつて存在し、縄文時代を通して徐々に南側から埋没していったと想定される。

III 検出遺構

縄文時代の河川埋土上で検出した遺構には、弥生～古



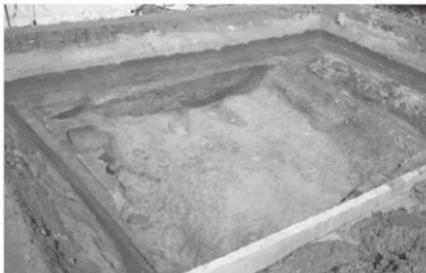
十六坪南北土層図1 (縦1/80・横1/400)

墳時代、奈良～平安時代、江戸時代のものがある。時代ごとに主要なものをとりあげ、詳細は遺構一覧表に記す。
弥生～古墳時代の遺構

河川 2 条、溝 1 条、土坑 15 基があり、他にも奈良時代以前で、出土遺物がなく時期不明のものが多数ある。

河川 河川 2 は東から西へ蛇行しながらつづく河川で、H J 第 468 次発掘区から第 557・623D・631・541・623C・631-2 次の各発掘区を通り、南西側へとつづく。幅・深さとも各発掘区で違うが、およそ幅 7 ~ 11 m、深さ 0.7 ~ 1.6 m である。河川には 2 時期あり、新しい方を河川 2a、古い方を河川 2b とする。

河川 2a は、弥生時代後期から古墳時代前期のもので、埋土は暗灰褐色系の粘土が主体で、底付近には腐植土層



HJ 第 623 次調査 C 発掘区 河川 2 (南東から)



HJ 第 631 次調査 河川 2 (北西から)

が堆積する。出土遺物は少ないが、H J 第 623C 次発掘区では、弥生～古墳時代の土器が遺物整理箱 1 箱分出土した。

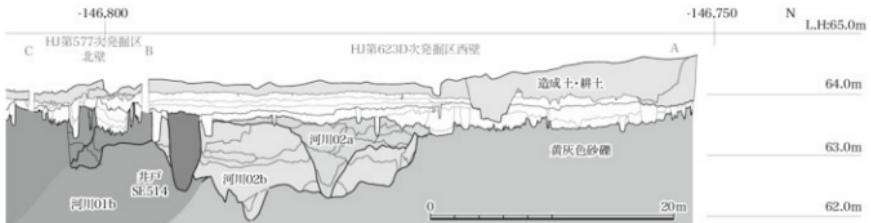
河川 2b は、弥生時代中期から後期頃のもので、埋土は灰色砂を主体としている。少量の弥生土器が出土した。

河川 2 の上面には、奈良時代の整地土が堆積しており、弥生～奈良時代の遺物とともに、縄文時代晚期の石刀が 1 点出土した。

溝 溝 SD16 は、H J 第 631 次調査区内の河川 2 の西側約 7 m の場所で河川と平行してある。断面形は浅い U 字状で、茶褐色から灰色系の粘質土で埋まり、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が少量出土した。位置関係から H J 第 631 次と H J 第 541 次調査区間で、河



HJ 第 631 次調査 SK02 (東から)



十六坪南北土層図 2 (縦 1/80・横 1/400)

川2に合流するものと考えられる。

土坑 15基検出した土坑は、いずれも弥生時代中期から後期のものである。平面形は楕円形・隅丸方形・不整形なものまで数種あり、深さも多くの場合は0.1～0.7mと浅く、性格をうかがえるものは少ない。

S K 02は、南北約1.8m、東西約2.2mの平面楕円形で、深さ約1.6mの土坑である。漏斗状の断面形態で、底から完形品を含む弥生時代後期前半の弥生土器が遺物整理箱6箱分出土した。湧水層に達していることから井戸の可能性が考えられる。

弥生時代の遺構は散発的ではあるが、遺構出土の土器はまとまった良好なものが多く、平城京造営時に多くの遺構が削平されたことがうかがえる。また、土坑・河川からは中期の土器がまとまって出土しており、後期が主体である大森遺跡の変遷を考える上で、貴重な資料が得られている。

奈良へ平安時代の遺構

条坊闇連遺構 新たに四条大路南側溝を確認し、過去の発掘調査を含めると、十六坪の四周の条坊がすべて判明した。各条坊の座標値と今回新たに判明した点を記し、過去報告分の詳細は各報告によることとする。

四条大路 H J 第623C次・631-2次調査で検出したS D 2003は、位置関係から四条大路南側溝と考えられ、規模等を遺構一覧表に記す。溝は褐色系の土の1層のみで埋まり、出土遺物も少量である。溝底の標高から西流していたことがわかる。奈良県の調査（県H20年度調査）で北側溝が確認されており、その成果と合わせると四条大路の幅は、溝心々間で16.14～16.22mとなる。

五条条間北小路 H J 第506・557・568・622-B次

調査の4箇所で南北両側溝であるSD2006とSD2005を検出した。路面幅は、溝心々間で6.7～7.6mである。

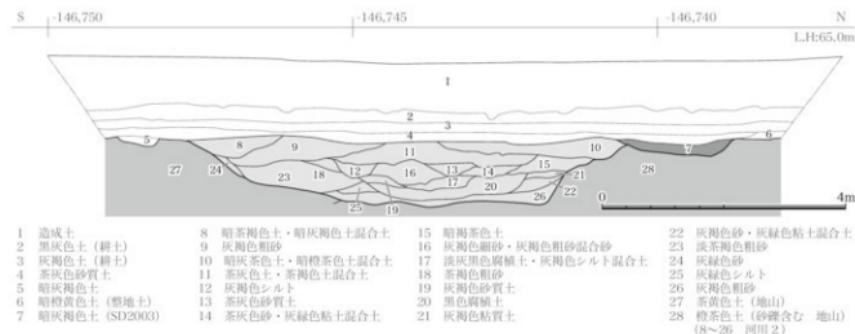
今回新たに、東四坊大路西側溝（SD1014）と五条条間北小路との交差部分を発掘調査した。調査の結果、西側溝は五条条間北小路を横切り南北に連続することが確認できた。西側溝の溝底は、十五坪側と十六坪側いずれも五条条間北小路北側溝（SD2005）に向かって下り勾配で、SD2005に向かい排水していたことがわかる。

また南側溝SD2006は西側溝（SD1014）に接続し、東四坊大路を横切らないことを再確認した。

北側溝SD2005は、規模や東四坊大路を横断することなどから、東西方向の基幹排水路と位置付けられる。このため流水の影響を受けやすく、北側溝は2回掘り直されており、10世紀の両側溝埋没後も、道路全体が東西方向の水路となっている。

東四坊大路 南北に連続するH J 第468・486・506次調査の3箇所で、東西両側溝であるSD2006とSD2005を検出した。路面幅は、溝心々間で17.4mである。五条条間北小路との交差点部分の成果については先述した。

東四坊坊間東小路 H J 第541・622A・622B次調査の3箇所で東西両側溝であるSD2006とSD2005を検出した。路面幅は、溝心々間で7.5mである。H J 第631-2次調査では、四条大路との交差点部分で西側溝を検出し、四条大路南側溝が四条条間北小路を横切って西流することが新たに判明した。西溝底の標高は北からH J 第631-2・541・622A・622B次調査の順で、63.1m・63.2m・62.8m・62.8mとなり、南に排水していたと考えられる。



H J 第623次調査 C 発掘区西壁土層図 (1/40)

十五坪の遺構 HJ第623B次発掘区内では、十五坪の宅地北端と東端の溝を2条、土器埋納遺構を1基を検出した。

溝SD101とSD112は位置関係から宅地の北と東側をかぎる溝で、SD101が幅約1.7m、深さ約0.4m、SD112が幅約2.5m、深さ約0.3mある。西側と南側の從来の発掘区で延長部分を確認している。

土器埋納遺構SX806は、蓋をした須恵器杯Bの上に、同じく蓋をした土師器杯Bを重ねて埋納したものであ

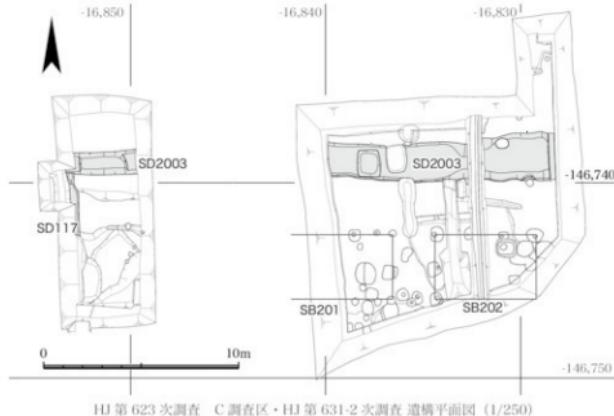
る。下段の須恵器杯内に、銅滓と考えられる金属片があつたのみである。

十六坪の遺構 9次にわたる発掘調査で、掘立柱建物159棟、掘立柱列29条、井戸23基、土器埋納土坑3基、土坑、溝、橋脚2基を検出した。

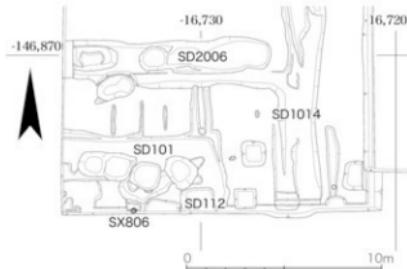
十六坪の特徴を最も示す遺構が、坪内を東西南北方向に縱横にはしる坪内通路の遺構である。坪内通路は平行する2条の溝に挟まれた空間部分に想定でき、道路幅は1.5～2.0mあり、路面上は地山のままで舗装・整地

条坊間連遺構の座標値

調査次数	遺構番号	遺構	X 座標値	Y 座標値	備考
HJ631-2	SD2003	四条大路南側溝	-146,738.940	-16,850.000	
HJ623C	SD2003	四条大路南側溝	-146,739.000	-16,837.000	
HJ623B	SD2005	五条条間北小路北側溝	-146,866.300	-16,730.000	
HJ623B	SD2006	五条条間北小路南側溝	-146,870.480	-16,730.000	
SF2001		四条大路	-146,730.873	-16,850.000	HJ第631-2次調査
SF1013		東四坊大路	-146,845.600	-16,716.907	HJ第506次調査
SF2004		五条条間北小路	-146,867.700	-16,860.800	HJ第622次調査B発掘区
SF1010		東四坊条間東小路	-146,869.000	-16,849.200	HJ第622次調査B発掘区



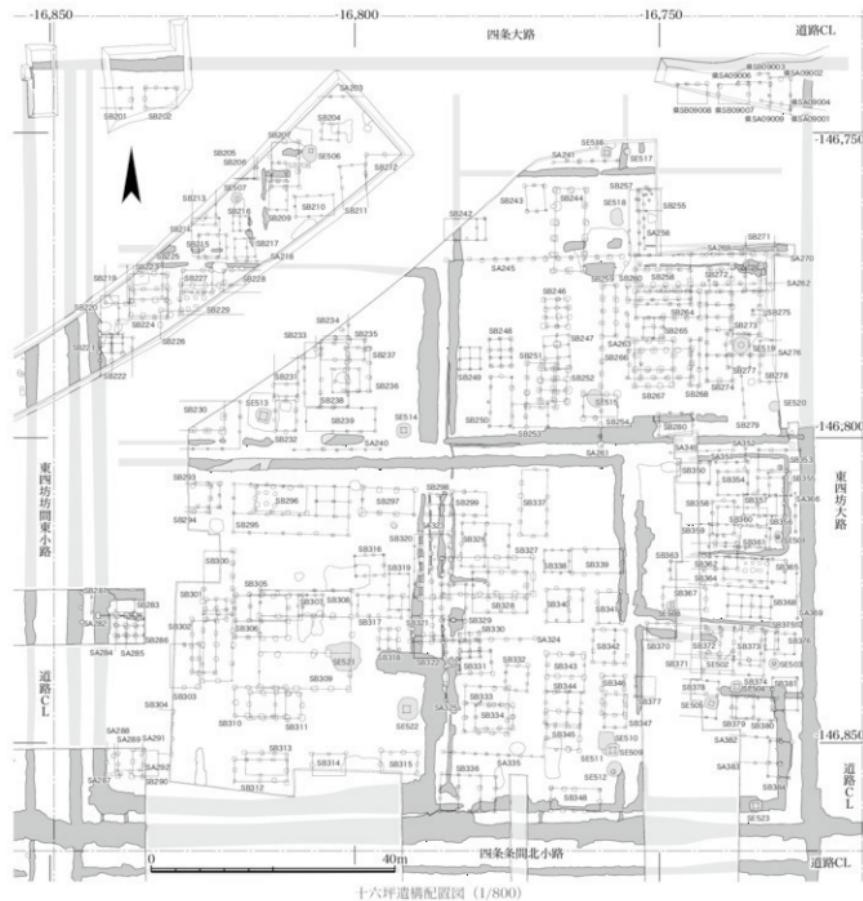
HJ第623次調査 C調査区・HJ第631-2次調査 遺構平面図 (1/250)



HJ第623次調査 B調査区 十五坪側 遺構平面図 (1/250)



HJ第623次調査 SX806 (北から)



などは確認できなかった。おおよそ十六坪の宅地内の1/2・1/4の場所に位置しているが、宅地利用の関係上、設置していない部分もある。また宅地の統廃合により、時期によっては廃止・設置されるものもある。今回の調査地では、坪内通路で囲まれた空間を1つの宅地ととらえ、掘立柱塀は宅地内の区画と考えた。さらに区画造構が存在しない場合でも、等質的な建物群が一定間隔で分布する場合、これらの1つの建物群が1つの宅地にあたるものとした。以上の条件をもととして、坪内通路と掘立柱建物・列との重複関係から大きく5期の時期変遷を設定した。以下この時期変遷に沿って造構の概要を記す。

また井戸など注目すべき造構は個別に説明し、各造構の詳細は一覧表に記す。

1期 塚内宅地分割 1/4～1/16坪規模の10個の宅地で構成される。井戸の出土遺物の年代から8世紀中頃～後半の時期である。

宅地は、北西部に1/8坪宅地（1期-宅地①・②）が南北に、東北部に1/16坪宅地2つ（1期-宅地③・④）と1/8坪宅地1つ（1期-宅地⑤）が東西に、南西部に1/4坪宅地1つ（1期-宅地⑥）、南東部分に1/16坪宅地4つ（1期-宅地⑦～⑩）が配される。

1期 宅地内建物配置 北西部の1/8坪宅地の1期

-宅地①・②はいずれも、東西に細長い宅地の中央からやや東寄りに南北棟建物（S B 207とS B 233・237）を配置し、これを中心建物とした西向きの宅地が想定される。中心建物はいずれも、梁行2間×桁行3間ほどの小規模な建物である。

北東部の1/16坪宅地の1期-宅地③・④は、小規模な建物が宅地内に漫然と配されている。建物規模も梁行2間×桁行3間または2間で、柱穴規模も小さい。小規模ながら総社建物も存在している。1/8坪宅地の1期-宅地⑤は、南北に細長い宅地の中央部に東西棟建物が2棟配され、南向きの宅地が想定される。中央には梁行2間×桁行5間の南北廻付き建物（S B 258）と、梁行2間×桁行5間の建物（S B 272）が柱筋を揃えて東西に並ぶ。

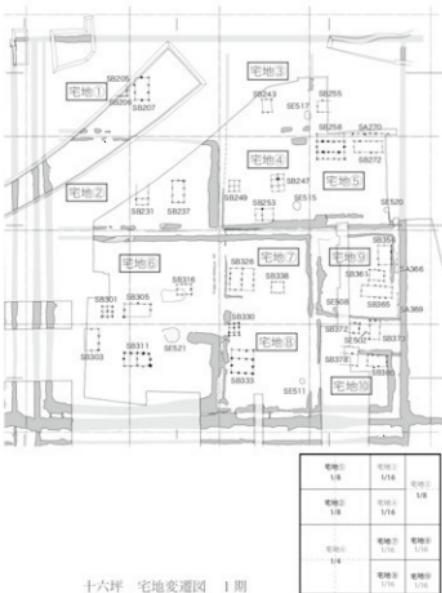
南西部の1/4宅地の1期-宅地⑥は、宅地東西中軸線付近に東西棟（S B 305・310）が南北に2棟並び、この2棟を中心建物とした南向きの宅地が想定できる。周辺には中小規模の建物が配置される。

南東部の1/16坪宅地4つ（1期-宅地⑦～⑩）は、梁行2間×桁行3～5間の中心建物（S B 326・333・365・378）と、それよりやや規模が小さい付属建物の2～4棟で構成される。中心建物の棟方向から、1期-宅地⑧・⑩は南側、1期-宅地⑦は東側、1期-宅地⑨は北側が宅地正面か。また全時期を通じて、南東部分の建物の主軸は、北で東に振れる傾向がある。建物設定の基準が、他と異なっていることが想定できる。

2期 塚内宅地分割 1/2~1/16坪規模の6個の宅地で構成される。井戸の出土遺物の年代から8世紀後半~末の時期である。

宅地は、坪西半部に1/2坪宅地(2期-宅地①)が、北東部分に1/8坪宅地2つ(2期-宅地②・③)が南北に、南東部分に1/16坪宅地2つ(2期-宅地④・⑤)と1/8坪宅地1つ(2期-宅地⑥)が東西に配される。

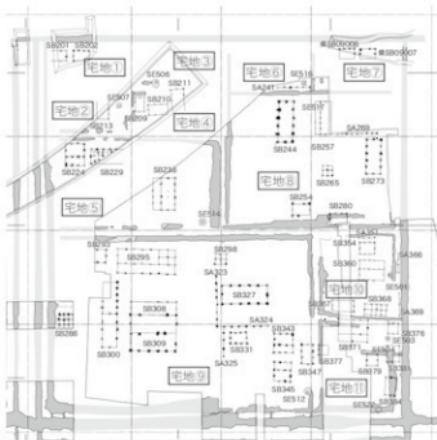
2期 宅地内建物配置 西半部の1/2坪宅地の2期-宅地①は、南北に長い宅地の南半部に、3棟の東西棟建物（SB306・310・312）が宅地東西中軸線上に南北に並ぶ。また北半部では、宅地の西寄りにS B 230が建つ。S B 230は発掘区外につづき全容は不明であるが、柱穴規模が発掘区内で最大級で柱間寸法などから見て東面・南面廻付きの大規模な建物になると考えられる。東側には、梁行2間×桁行3間または4間の中小規模の建物（S B 232・239）が柱筋を揃えて建つ。S B 230の北側にも、柱筋を揃えた建物群があり、2期-宅地①は、整然とした建物配置がうかがえる。



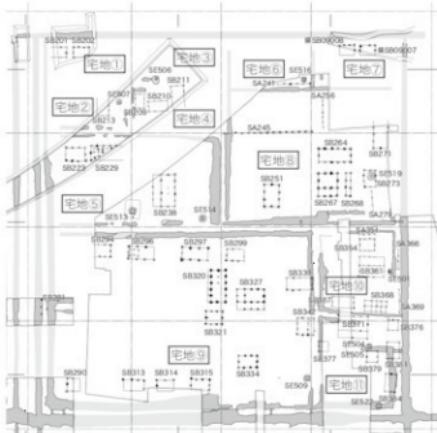
十六坪 宅地変遷図 1期



十六坪 宇地空遺圖 2期



十六坪 宅地変遷図 3期



十六坪 宅地変遷図 4期

北東部の1/8坪宅地の2期-宅地②・③は東西に長い宅地で、北側の2期-宅地②は発掘区内には建物が確認できない。南側の2期-宅地③は、南北方向の掘立柱塀（SA261）と梁行1間の南北棟建物（SB259）で宅地を東西に仕切る。塀の西側には総柱建物3棟（SB246・248・252）と掘立柱建物1棟（SB250）を配置する。SB246と252は柱掘形規模が大きく、柱痕が残存する。塀の東側は、北側を掘立柱塀（SA262）と梁行1間の南北棟建物（SB260）でさらに閉塞し、東西24m以上、南北約27mの方形に宅地内を区画する。区画内は東西棟建物（SB266）と南北棟建物（SB274）が逆L字状に配置され、西と北側の区画を形成するSB259とSB260と組み合い「ロ」字の配置をとる。2期-宅地③は、西側を倉庫群、東側を「ロ」字状配置の建物群として、計画的な配置が行われている点が特徴である。建物配置から南側が宅地正面であろう。

南東部の1/16坪宅地2つ（2期-宅地④・⑤）では、SB340とSB341、SB344とSB347が、廻付建物とほぼ同規模の掘立柱建物が柱筋を揃えて東西に並んでいるのが目を引く。この2棟のセットを1つのユニットとして、数棟の付属建物で宅地内が構成されているものと考えられる。また南側の2期-宅地⑤は、東西塀SA333で南北に分割しており、宅地内に廻付建物1棟と1・2棟の付属建物という組合せが2つ見て取れる。廻付建物と掘立柱建物の組合せを中心建物と考えると、宅地正面は西側と考えられる。

南東部の1/8坪宅地の2期-宅地⑥は、宅地中央に東西棟2棟（SB362・372）が南北に並び、南向きの宅地が想定できる。SB362の北側には、2棟以上の小規模建物が建つ。またSB362の建物内には埋甕の抜き取り痕跡が8個ある。

3期 塚内宅地分割 3/8～1/32坪規模の11個の宅地で構成される。井戸の出土遺物の年代から8世紀末頃の時期である。

宅地は、北西部に1/32坪宅地4つ（3期-宅地①～④）と1/8坪宅地1つ（3期-宅地⑤）が南北に、北東部に1/32坪宅地2つ（3期-宅地⑥・⑦）と3/16坪宅地1つ（3期-宅地⑧）が南北に、南半部に3/8坪宅地（3期-宅地⑨）と1/16坪宅地2つ（3期-宅地⑩⑪）が東西に配される。

3期 宅地内建物配置 北西部の3期-宅地①～④はいずれも、小規模な建物が宅地内にあるが配置構造は不明である。しかし、北西隅部分では梁行2間×桁行3間の東西棟が柱筋を揃えて2棟東西に並んでいる。

十六坪の北東隅部分の奈良県の発掘調査地でも、同様に梁行2間×桁行3間の東西棟が柱筋を揃えて2棟東西に並んでおり、なんらかの共通した配置の意図が考えられる。その南にある東西に長い3期-宅地⑤は、宅地東半の中央に西廂付きの中規模建物（S B 238）が、西半の北端に東西棟が2棟（S B 223・229）並んで配される。S B 238を中心建物とした西向きの逆L字状の建物配置と考えられる。S B 229の建物内には埋甃抜き取り痕跡が10個以上ある。

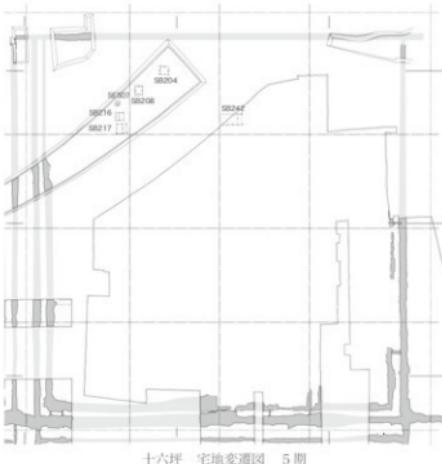
北東部の3期-宅地⑥・⑦は大半が発掘区外にあり詳細は不明。3期-宅地⑧は、北側に南北棟建物（S B 244・257）が東西に並び、南側に南北棟建物（S B 273）が宅地の東端に建つ。S B 273の北側は掘立柱S A 269で区画される。建物配置から、西側が宅地正面と考えられる。宅地の南側は建物が少なく空閑地となるが、後述するように奈良時代の素掘小溝が存在する。

南西部の3/16坪宅地の3期-宅地⑨は、南北方向の掘立柱S A 323・325で東西に区画し、東半部はさらに東西方向の掘立柱S A 324で南北に区画する。西半部は、中央に梁行2間×桁行5間の規模の大きい東西棟建物2棟（S B 307・308）が柱筋を揃えて南北に建つ。さらに北側には梁行2間×桁行7間で南廂付の東西棟建物（S B 295）、西側には梁行2間×桁行9間の南北棟建物（S B 300）があり、規模の大きい建物4棟で構成される点が特徴である。東半部の北側には、梁行2間×桁行5間の規模の大きい東西棟建物1棟（S B 327）と梁行2間×桁行2間の總柱建物1棟（S B 298）が建つ。東半部の南側には、梁行2間×桁行3間の建物2棟（S B 331・346）と、梁行2間×桁行2間で廂付きの建物2棟（S B 343・345）が建つ。3期-宅地⑨は堀で3区画に分割し、区画ごとに建物規模が大きく異なることから、区画の性格の違いが認められる。西半部の中心建物から、宅地正面は南側と考えられる。

南東部の1/16坪宅地の3期-宅地⑩⑪2つは、梁行2間×桁行5間の廂付きの東西棟建物（S B 358・369）を中心建物として、周辺に小規模な建物が建つ。中心建物から見て、宅地正面は宅地⑨が北側、宅地⑩が南側と考えられる。

4期 塙内宅地分割 3期と同様の宅地分割で、3/8～1/32坪規模の11個の宅地で構成される。井戸の出土遺物から8世紀末～9世紀初頭の時期である。

4期 宅地内建物配置 北西部の4期-宅地①～④は3期と同じと考えられる。4期-宅地⑤も主要な建物はそのまま、周辺の建物S B 223がS B 224建て替え



られる。

北東部の4期-宅地⑧は、東半部に建物が集中し、西半部は東西方向の掘立柱S A 245で南北に仕切るもの、同時期の建物はS B 251の1棟のみである。東半部のS B 264・267・268は3棟ともに柱筋を揃えて建てる。その東側の梁行2間×桁行3間の南北棟建物S B 277は、西の側柱筋が一直線にならず、西側にやや膨らむ。建物内には後述するS E 518があり、井戸の覆屋と考えられる。

南西部の3/16坪宅地の4期-宅地⑨は、建物配置を一新する。中央部や北西よりに、梁行2間×桁行5間の南北棟建物（S B 320）が建ち、宅地の南北端に梁行2間×桁行3間の東西棟建物が3～4棟東西方向に並ぶ（北側がS B 293・296・297・299、南側がS B 290・313・314・315）。これらの建物群で構成された、西に開く大きなコ字状の建物配置となり、宅地正面も西側に変化する。

南東部の1/16坪宅地の3期-宅地⑩⑪2つは、3期と同じと考えられる。

5期 十六坪内の分割 不明になる時期。井戸の出土遺物の年代から9世紀初頭～前半の時期である。

北西部で坪内通路上に、梁行2間×桁行3間または2間の小規模な建物が数棟確認できる。建物の柱穴規模も小さい。活発な宅地利用ではなく、この時期以降は、居住域として利用が終焉する。

溝 発掘区内全域で、幅約0.3m、深さ0.1m前後の

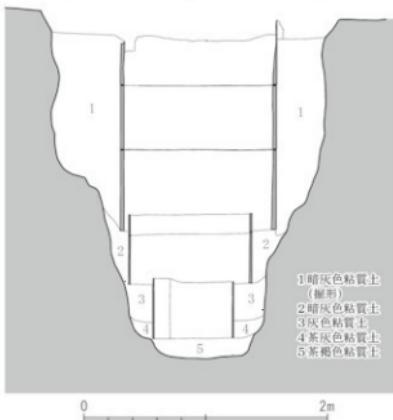
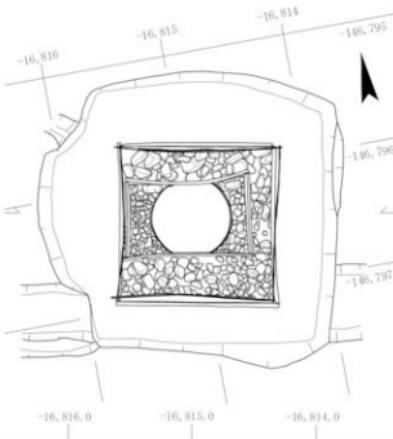


奈良時代の素掘小溝の分布

東西南北方向の溝を検出している。中近世の耕作とともに、なう素掘小溝とされるものもあるが、重複関係から奈良時代の柱穴より古いものも多数検出できた。形態から中世以降のものとの峻別は困難であるが、重複関係から柱穴より古い溝を抽出すると、溝の方向や傾き・配置間隔などから、大きく1～6群のまとまりを把握することができる。同じ方向同士の溝が一定間隔で配置され、坪内通路を越えることなく存在することが見て取れる。また重複関係から3群の溝は、4期の柱穴よりも古く、2期の柱穴よりも新しく、奈良時代のものであることが判明する。溝が建物と同時に併存しないと考えるならば、1期に4・5群、2期に2群、3期が3群、4期以前のいずれかに1・6群が存在することになる。さらに中近世の例から、これらが作物栽培に伴う溝と考えると、溝が宅地内で完結することから宅地内の菜園の遺構の可能性が考えられる。

井戸 8世紀中頃から9世紀前半までの各時期のものが23基ある。配置と出土遺物の前後関係から、1期の井戸がS E 502・508・515・518・520・521、2期がS E 505・511・517・522、3期がS E 501・503・507・506・512・514・516・522、4期は3期から引き継ぎ利用されるものと、S E 504・509が新たに追加し、S E 503が廃絶する。5期はS E 507が引き継ぎ利用されている。井戸は、おおよそ各宅地に1基存在しており、宅地の南東隅に位置する場合が多い。一方で、井戸が確認できない宅地も存在する（1期-宅地8）。

井戸 S E 515・517・518・520・521は、いずれも

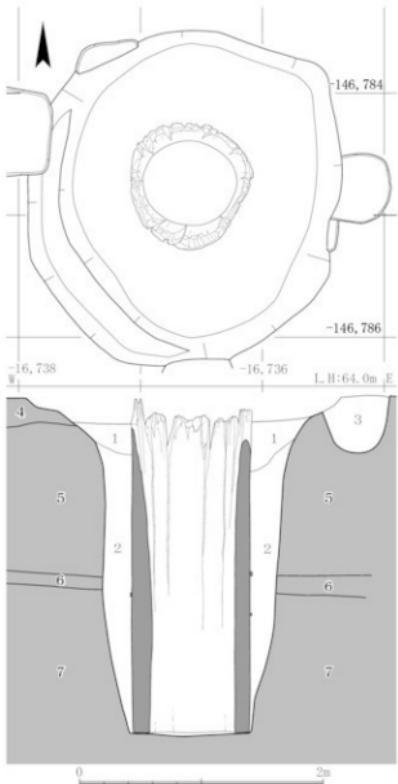


HJ第631次調査 井戸 SE513 平面・立面図(1/40)

井戸枠が残存せず抜き取られたものと考えられる。比較的古い年代のものが、井戸枠を抜き取られる傾向を示す。

S E 513は井戸枠が3段構造で、下段に曲物を据え、その上に底板を取り外した辛樋を据える。辛樋の底面には礫を敷き詰める。辛樋の上には、内法約1.2mの方形横板組井籠型の井戸枠を3段以上積む。

辛樋は、外した底板を幅約0.33mの部材に再加工し、辛樋上部に仕口を持たずに組み合わせて井戸枠を嵩上げする。また辛樋の短辺下端中央（井戸枠東面の下端）には、導水の目的と考えられる縦2cm、横6cmの長方形に



HJ第638次調査 井戸 SE519 平面・立面図 (1/40)

穿孔された穴がある。最上段の方形横板組金型の井戸枠の横板1枚は長さ約1.35m、幅0.53～0.58m、厚さは約0.04mで、上下を2か所の太柄で固定する。

S E 519は、一本削り抜きの井戸枠である。井戸枠は上部が腐食で失われており、さらに風化によるものか、縦方向に数条の大きな溝状の亀裂がはいる。井戸枠内面は平滑に仕上げるが、外面は粗い手斧の削り痕跡が残り、さらに北側の外面には「廻司」の文字を彫っている。文字は外面の手斧の削り作業の後に彫られており、「廻」の文字を斤（おの）とすると、刻書は井戸枠製作の工人に関わるものと考えられる。また井戸枠外面にはタガが数条巻かれ、木の楔が打ち込まれる。タガの残存状況が



HJ第631次調査 井戸 SE513 (南から)



HJ第638次調査 井戸 SE519 (南から)



HJ第638次調査 井戸 SE519 刻書 (1/3)



HJ第631次調査 井戸SE514（南から）

悪く正確な位置の復原は出来なかった。

井戸SE514は、方形横板組隅柱留めの構造で、横板は東面・西面が7段、南面・北面が8段分遺存する。横板1枚は長さ約0.83m、幅0.21～0.39m、厚さは約0.04～0.02mで、隅柱のはその落とし込む側の両端を削ってやや厚みを減じている。井戸底には、下から炭・砂・礫を順に敷き、濾過施設とする。

井戸SE522は、方形横板組井籠型の井戸で、横板は4段分遺存する。横板1枚は長さ約1.21m、幅0.27～0.29m、厚さは約0.08mある。
(中島和彦)

IV 出土遺物

HJ第623・631・638次調査ではあわせて遺物整理箱で約221箱分の遺物が出土した。過去の調査例を含めると十六坪全体では、約400箱分の出土遺物があり、土器類が7割、瓦類が2割、その他の遺物が1割である。

土器類には、繩紋土器、弥生土器、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・奈良三彩、鎌倉時代の土師器、瓦器、江戸時代の土師器、瓦質土器、国産陶磁器があり、瓦類には奈良時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・埴がある。この他木製品（辛檀1点、斎斗4点、曲物3点、横櫛1点、建築部材4点）、金属製品



HJ第623次調査 井戸SE522（南から）



HJ第623次調査 井戸SE516（南から）

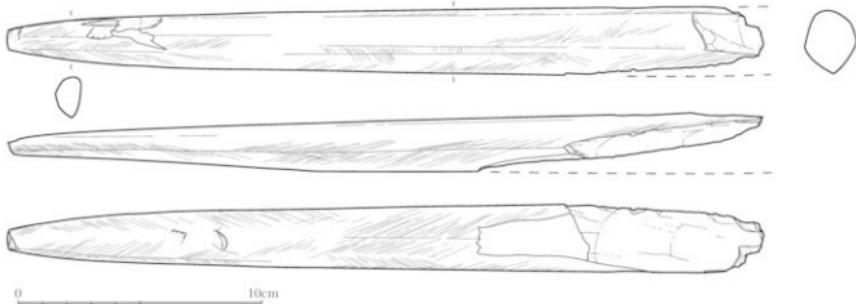
の鉢貨（神功開寶1点、寛永通寶1点）、石器（石刀1点、石包丁2点、石匙1点、石斧3点、砥石1点、石鐵4点、楔形石器1点、サメカイト剥片、石材等）がある。以下時代ごとに主要なものを記す。

縄文時代 河川2上に堆積する奈良時代の整地土から、石刀が1点出土した。石刀は細身で直線的な形態であり、一側縁に稜を作り刃部が形成されている。全面が丁寧に研磨され、斜向の擦痕が顕著で、研磨範囲毎の稜が残る。切先端部には研磨が残ることから当初の形状と考えられるが、把部は欠損しており、関や線刻等は認められない。切先側の断面が胸部に比べ扁平を呈するのは、一部に素材の割離面が認められることから、素材の形状によるものと考えられる。残存長31.0cm、最大幅2.7cm、重さ234g、千枚岩製である。

奈良・平安時代 井戸SE513出土遺物と、五条条間北小路北側溝S D 2005出土の鳥紐蓋について記す。

S E 513からは、遺物整理箱3箱分の土器と1箱分の瓦類と斎斗、横櫛が出土した。瓦類は丸瓦・平瓦のみで、総量は82点（約6.4kg）にすぎない。

井戸枠内出土の土器は、8世紀末～9世紀初頭のもので、掘形を含め1683点出土しており内訳を表にする。



HJ第631次調査 出土石器（1／2）

土師器が6割強、須恵器が4割弱を占める。全体的に小片が多く、図化できるものは少ない。図示したものは、土師器皿（2～4、10・11）、杯（5）、椀（6～9）、蓋（15）、壺（1）、甌（14）、須恵器蓋（16・17）、皿（18）、產地不明陶器（19）、奈良三彩（12）、土馬（13）、製塩土器（20～37）で、12の奈良三彩のみ掘形から出土で、他は棒内からの出土である。

土師器の杯皿類は小片が多く、法量が判明するものは少ない。椀Aは、口径が12cm代のものが最も多く、10cm代と13cm代がこれに次ぐ。図示した椀Aは、いずれもユビオサエを残す未調整の外面に粗いヘラミガキ調整を行う。杯A（5）と皿A（10・11）は口径の分布傾向を示すほど出土量はない。いずれも外面をヘラケズリ調整する。皿C（3～4）は口径10・11cm代のもののみで、口縁端部には灯明の縫が付着する。

15の土師器蓋の上面には墨画が描かれる。鞍をつけた馬とその後ろで馬をおう人物が描かれるが、他は判然としない。蓋上面はヘラケズリ調整の後、密なヘラミガキ調整をする。

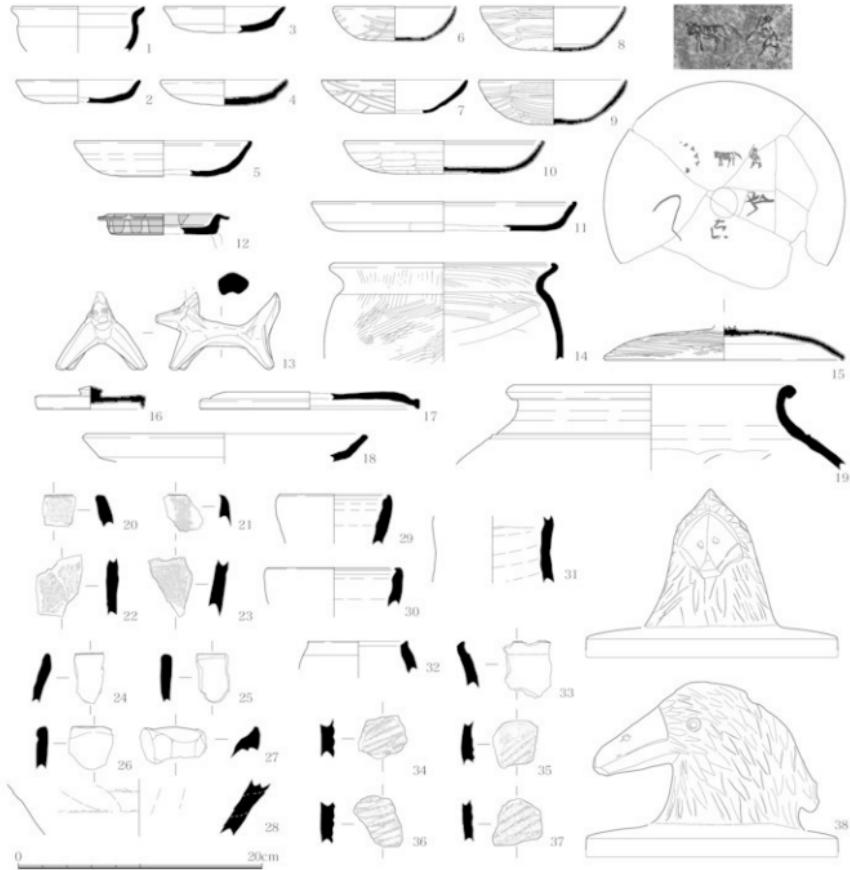
土師器蓋は、都城型とされる球胴形でタタキ成形とハケメ調整のものが多い。14は体部上半を内外面ともハケメ調整後、内面を板状の工具で横方向にナデ、その後外面をハケメ調整する。

12の奈良三彩の火舎は1/4が残存し、脚部が欠損した痕があり、三脚であったと考えられる。釉薬の剥離がはげしいが、全面に淡緑色の鉛釉を施釉し、底面をのぞく内外面に淡緑色と濃緑色の釉を塗り分けている。

19は產地不明の陶器である。瓦質風の焼成で、内外面は焼しがかり灰色で、胎土は灰黄色である。口縁は、端部を外側に折り曲げて玉縁風にし、外面肩部には強いヨコナデによって断面三角形の低い凸線をつくりだす。

HJ第631次調査 井戸SE513出土土器 器種構成表

種類	掘形			枠内		
	器種	小計	比率	器種	小計	比率
土師器	供膳具 椭A	1	0.13%	供膳具 椭A	14	1.53%
	供膳具 椭C	4	0.52%	供膳具 検C	3	0.33%
	杯A	0	0.00%	杯A	1	0.11%
	杯B	4	0.52%	杯B	2	0.22%
	皿A	1	0.13%	皿A	9	0.98%
	皿C	5	0.65%	皿C	6	0.65%
	鉢	2	0.26%	鉢	0	0.00%
	蓋	1	0.13%	蓋	8	0.87%
	杯皿類	197	25.75%	杯皿類	184	20.04%
	高杯	3	0.39%	高杯	5	0.54%
小計			218 28.50%	小計		
貯藏具	壺A	3	0.39%	貯藏具 壺A	1	0.11%
	壺B	1	0.13%	壺B	6	0.65%
	壺類	3	0.39%	壺類	0	0.00%
	小計	7	0.92%	小計	7	0.76%
煮炊具 梶			156 20.39%	煮炊具 梶		
器種不明			107 13.99%	器種不明		
合計			488 63.79%	合計		
黑色土器			5	5 0.65%		
須恵器	供膳具 朴皿	22	2.88%	供膳具 朴皿	23	2.51%
	杯A	3	0.39%	杯A	15	1.63%
	杯B	16	2.09%	杯B	13	1.42%
	杯C	1	0.13%	杯C	0	0.00%
	皿C	10	1.31%	皿C	2	0.22%
	高杯	1	0.13%	高杯	0	0.00%
	杯皿類	116	15.16%	杯皿類	101	11.00%
鉢A			0	鉢A		
鉢類			6	鉢類		
小計			175 22.88%	小計		
貯蔵具	壺蓋	5	0.65%	壺蓋	2	0.22%
	壺A	3	0.39%	壺A	0	0.00%
	壺類	21	2.75%	壺類	12	1.31%
	甌	3	0.39%	甌	13	1.42%
	壺・甌類	46	6.01%	壺・甌類	125	13.62%
	小計	78	10.20%	小計	152	16.56%
	器種不明	16	2.09%	器種不明	25	2.72%
合計			269 35.16%	合計		
鉛釉陶器	火舎	1	0.13%	火舎	0	0.00%
	壺	2	0.26%	壺	0	0.00%
	產地不明 陶器	0	0.00%	壺	1	0.11%
	合計	765			918	



HJ第631次調査 出土土器（1～37はSE513出土 1／4、38はSD2005出土 1／2）

体部内面には無文のタタキの當て具痕跡があるが、体部外面はナデ調整によってタタキの痕跡が消されている。形態から渤海産の瓦質土器の可能性が考えられる。

製埴土器は280点(2212g)出土している。多くは5cmにも満たない小片であるが、内外面の調整が良好に残存しており、型式分類をして報告する。

製埴土器は全体形をうかがえるものが少ないため、内外面の調整と胎土・器壁によって分類する。内面調整によって、布目の圧痕が残るもの（I類）とナデ調整のもの（II類）に、外面調整によって、未調整で粘土紐積み上げ痕跡や、指押さえが残るもの（A類）と、平行タタキ調整

のもの（B類）に分けられる。胎土から砂をほとんど含まず精良な胎土のもの（1類）と砂を多く含むもの（2類）の2種に、さらに器壁が厚さ1cm以上の厚いもの（a類）と、1cm以下の薄いもの（b類）に分けられる。

これら4種類の要素を順に組合せて型式を設定すると、I A1a型式以下の16種類の型式が設定できる。このうち井戸SE513からは、I A2b・II Alb・II A2a・II A2b・II B2bの5型式が出土している。出土点数はII B2b型式が最も多く約4割ほどを占め、重量では器壁の厚いII A2a型式が約3割で最大となる。

20～23がI A2b型式で、内面には織り目の単位が

16本/cm以上の布目が残る。口縁部は特に調整をして仕上げておらず、端部には板状のものの圧痕が残る。

24～26はII A2b型式で、口縁部はヨコナデ調整で仕上げるが、形態はさまざまである。

27・28はII A2a型式で、器壁が厚く復原径も他のものに比べ大きい。口縁内部の端部は、斜め上方に引き上げるナデ調整を連続して行い、口縁部の上端が波打つ形態である。体部外面には粘土紐接合痕が残る。

29～31はII A1b型式で、砂粒を含まない胎土と、内部のロクロ目風の凹凸の強いヨコナデ調整が特徴である。口縁端部はやや内側または上方に小さく摘み出す。

32～37はII B2b型式で、体部外面には平行タタキ目がある。口縁部はやや内湾し端部を外方に短くつまみあげ、ヨコナデ調整で仕上げる。

製塙土器の從来の研究から、I A2b型式が瀬戸内海西部産、II A2a型式が播磨産、II A2b型式が紀淡海峡産で、II A1b・II B2b型式は生産地が未確定である。

鳥紐蓋（38）は、H J 第623B次発掘区の五条条間北小路北側溝S D 2005から出土で、遺物整理箱21箱分の土器類とともに出土した。S D 2005出土土器はH J 第557次調査で一部報告しており、8世紀中頃～9世紀前半のものと判明している。

鳥紐蓋は、紐を鳥の頭部の形に作った蓋で、出土例から平瓶の蓋と考えられている。口縁端部を欠くが、口径は10.4cm程度に復原でき、残存高は6.7cmである。紐部下半にはヘラによる幅0.7～1.0cmの垂直方向の整形痕跡がみられる。嘴の頂部は尖り、冠毛は短い。羽毛は陰刻の線描で、目は竹管の押圧で表現している。外面全体に灰緑色の自然釉がかかかる。尾張猿投窯の黒管・鳴海・折戸地区で出土しており、猿投窯で8世紀末頃のものと考えられる。平城京では右京二条三坊の二坪と四坪などで1例ずつ類例が出土している。

辛櫃は、S E 513の井戸枠の部材として利用されていたもので、側板全部と底板の一部が残る。側板と底板いずれもスギの白木材である。

櫃身は長辺105.0cm、短辺69.5cm、高さ39.0cm、板厚2.0cmで、側板は8枚組接ぎで、各枘部を1箇所ずつ鉄釘で固定する。稜角に黒漆で幅2.65～3.3cmの蔭切を施す。漆がはがれた部分では漆を塗る範囲を示す墨線が確認できる。2枚の長側板には、短辺側から約12cm内側に脚を固定した釘穴が上下に2箇所並ぶ。外面には脚の輪郭に沿って所々黒漆が付着し、四脚形式の辛櫃で、脚は矧りが2箇所あり黒漆塗りであると分かる。脚に当たる部分の蔭切は漆がとぎれおり、櫃を組み上げてか

出土製塙土器分類表と型式別出土量						
内面調整		外側調整		胎土		器壁
布目	I類	未調整	A類	精良	I類	厚い a類
ナデ	II類	タタキ	B類	砂	2類	薄い b類

型式	出土点数(点)	比率	出土重量(g)	比率
I A2b	42	15.0%	314	14.2%
II A1b	22	7.9%	273	12.3%
II A2a	48	17.1%	669	30.2%
II A2b	48	17.1%	319	14.4%
II B2b	120	42.9%	637	28.8%
合計	280		2212	

ら黒漆で蔭切と脚の塗りが施されたことが分かる。

脚は、内側から打ち込まれる上下2本の釘で固定される。内面の釘穴の周囲には、直径1.5cm程の円形または方形の釘頭の痕跡があり、さらにその周囲には直径2.8cmの円盤状の圧痕がある。これは釘頭の圧痕よりも浅く隠金具の痕跡とみられる。釘穴の左右には、隠金具を固定したと考えられる細釘の穴が1つづつある。

櫃の背面側には、蓋との連結用の壺金具の釘穴が上部左右に1箇所ずつあり、櫃内面側のこれら2箇所の釘穴の上下には、隠金具を固定したと考えられる幅0.5～1.2cmの横長の貫通しない穴が1つずつある。

櫃の前面側の上部中央には、餌子用の壺金具の釘穴が1箇所ある。餌子用の壺金具の釘穴の内面側の周囲には、座金の痕と考えられる1.2×1.5cmの方形の圧痕と、背面同様の隠金具を固定したと考えられる穴が上下にある。

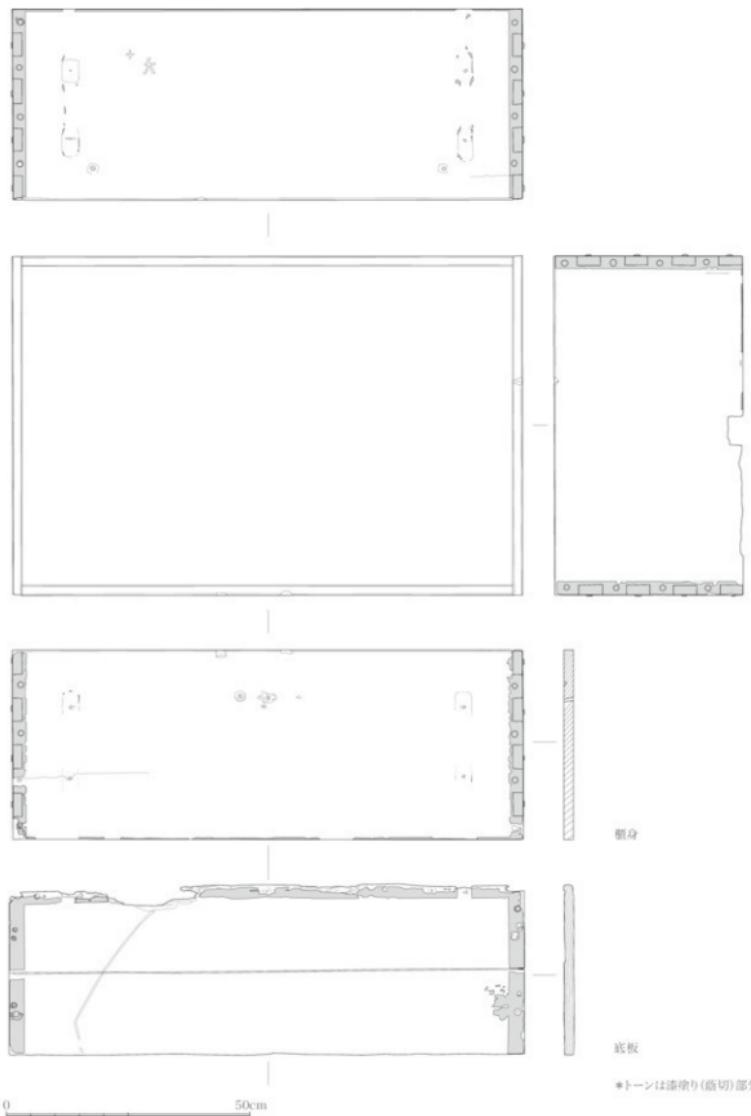
この他、餌子用の壺金具の釘穴の周辺に3箇所の貫通する穴があるが、機能は不明である。井戸使用にあたり、これら貫通する5箇所の釘穴は、すべて埋め木される。

また櫃の背面下部には、上下逆さの「大」と「十」が陰刻されるが、表面の状態から櫃製作時のものではない。

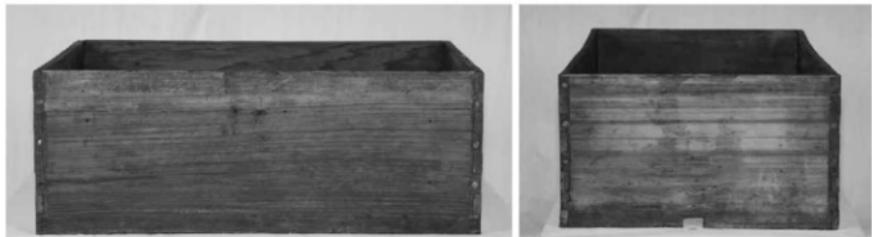
底板は、井戸使用に際して幅16.0～18.0cmで長軸方向に4枚に切断されるが、2枚ずつ接合しておおよそ復原できる。長辺105.7cm、厚さ2.0cmで、短辺は不明であるが、底板長辺の脚と接する箇所の木口面を深さ0.5cmほど切欠いていることから、櫃身外形より若干大きい70.5cmほどと推定できる。この切欠きの中央には脚固定のための釘穴が、下面側には受け棟を固定するための釘穴がある。この部分の蔭切は途切れている。また底板は櫃身に比べ、外面とも手斧の痕跡がよく残る。

今回の辛櫃は、平城京出土としては平城京右京二条三坊四坪のH J 第276次調査S E 503井戸枠使用のものに次いで2例目である。

（中島和彦・松浦五輪美・池田裕英・原田香織）



*トーンは漆塗り(薪切)部分



HJ第631次調査 出土辛櫛

V 調査所見

合計9次にわたる十六坪の発掘調査によって、十六坪のほぼ全容が判明した。十六坪は、坪内通路によって分割された複数の中小規模の宅地からなることが明らかになった。成果をまとめると、次の3点が指摘できる。

1 1坪内の宅地分割が明らかになったこと 坪内通路という区画造構を手がかりに、十六坪内を分割した宅地の単位・構造が明らかになった。宅地分割の方法は、一坪内を東西南北方向に四等分した結果の1/16坪単位の区画を基本に、この区画を分割・合併することで宅地を創出している。今回の調査では1/2から3/8・3/16・1/4・1/8・1/16・1/32坪規模と多様な規模の宅地が確認でき、これら大小の宅地が渾然と存在しているのが十六坪の特徴である。

従来から一坪内を分割した宅地は確認されているが、今回の調査では、ほぼ一坪分の宅地分割が坪内通路によって明瞭に看取できた点が大きな成果といえる。十六坪内の坪内通路は両側溝を伴っており明瞭に認識できたが、側溝のない坪内通路も想定され、同様な坪内分割の例を他調査地でも検証してゆく必要があろう。

一方周辺の調査成果から、西に隣接する九坪は播磨国の一調査に想定され、南側の十・十五坪は、ともに1坪利用の宅地であることが判明している。このように周辺には1坪規模の宅地が隣接し、1坪を分割利用する十六坪は特異といえる。これは、十六坪の北と東面の2面が大路に面するという立地条件が影響していると考えられる。大路に面しては門が開けず、この面が坪内に2つあることは、宅地利用に大きく制約がかかるることは明らかである。十六坪が大規模利用されなかつたこと、また坪内通路の設置も、この点が大きな理由と考えられる。

2 小規模宅地内の建物構成が明らかになったこと

宅地規模が確定したことにより、宅地内の建物配置・構成が明らかになった。宅地規模と建物規模を表で比較すると、桁行6間以上の建物は1/8坪規模以上の宅地

建物と宅地の規模別分布表

	桁行2間 以下	桁行3間	桁行4間	桁行5間	桁行5間 以上	合計
1/2坪	2 13.3%	8 53.3%	4 26.7%	1 6.7%	0.0%	15
1/4坪	5 13.9%	20 55.6%	5 13.9%	4 11.1%	2 5.6%	36
1/8坪	10 23.8%	15 35.7%	5 11.9%	10 23.8%	2 4.8%	42
1/16 坪以下	12 31.6%	20 52.6%	2 5.3%	4 10.5%	0.0%	38

にしか存在しないこと、1/16坪規模の宅地では桁行3間以下の建物が約8割をしめることなどがわかる。中心建物の規模は、宅地規模の大きさにはほぼ比例するようであるが、十六坪最大の1/2坪宅地である2期一宅地①では、中心建物は桁行4間の南廻付建物で、大規模なものとは言い難い。一方、建物が柱筋を揃えて南北に3棟並んでおり、広大な空間に中規模建物が整然と配置されている点が特徴といえる。また桁行6間以上の建物は、中心建物の横・後ろに配置されるのも特徴である。

3 遺跡の宅地利用の時期が明らかになったこと

十六坪の宅地利用の期間が、8世紀中頃～後半の時期から9世紀前半の間に判明した。

奈良時代後半に、小規模宅地が増加する指摘があるが、十六坪内では、大規模宅地の細分化の方向性は見いだせず、奈良時代を通じて分割・合併をくりかえしていくようにもうかる。また南側の1坪利用の宅地の十・十五坪でも、宅地利用の開始時期が8世紀中頃～後半と同様であり、左京五条四坊一帯は、奈良時代後半に宅地利用された地域であると考えられる。

奈良時代中頃以降の平城京の人口増加が、宅地利用の開始の背景と考えられるが、平城京には当時の増加する人口を受け入れるだけの未居住地が存在し、左京五条四坊もそのような場所であったのであろう。

また、9世紀前半には建物数が激減し、十坪内に残るわずかな建物群も9世紀後半には廃絶、10世紀前半には東四坊大路西側溝が埋没し、古代の遺構が地下に眠ることとなる。平城京の変遷を知る上で貴重な資料である。

(中島和彦)

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次

HJ 第468・486・541・557・568・622・623・631・638 次調査 遺構一覧表1

遺構番号	棟方向	規格(間)	桁行全長(m)	梁行全長(m)	柱間寸法(m)		廻の出	柱穴の深さ	備考
					桁行×梁行(m)	梁行			
SB201	東西	2以上×2	1.8以上	3.3	1.80	1.65等間			
SB202	東西	3×2	5.2	3.0	1.8等間	1.65等間			
SB203	東西	2以上	2.1以上		2.1-				
SB204	南北？	2×2	2.7	2.7	1.35等間	1.35等間			
SB205		1以上×1以上	1.8以上	1.8以上	1.8-	1.8-			
SB206		1以上×1以上	1.8以上	1.8以上	1.8-	1.8-			
SB207	南北	3×2	4.5	7.2	2.25等間	2.4等間			S B 208より新
SB208	南北	2×2	2.7	2.4	1.35等間	1.2等間			S B 207+209より古
SB209	南北	3×2	4.6	3.0	北から1.5-1.5 1.6	1.5等間			S B 208より新
SB210	東西	3×2	6.3	3.3	2.1等間	1.65等間			
SB211	南北	3以上×2	4.1	5.4以上	西から1.8-2.3	1.8等間			
SB212		1以上×1以上	3.0以上	3.0以上	3.0-	3.0-			
SB213	東西？	2以上×2以上	3.9以上	3.3以上	1.95等間	1.65等間			
SB214	南北	3×2	6.3	4.4	2.1等間	2.2等間			
SB215	東西	3×2	4.5	3.9	1.5等間	1.95等間			
SB216	南北	2×1	2.4	1.5	1.2等間	1.5	西 1.1		
SB217	南北	2×1	3.0	2.0	1.5等間	2.0	東 1.25		
SA218	東西	2以上	3.3以上		1.65等間				
SB219	南北？	2以上×2	3.6	3.6以上	1.8等間	1.8-	東 1.85?		
SB220	南北	3×2	6.3	3.0	2.1等間	1.5等間			
SB221	東西	2×2	3.6	3.0	1.8等間	1.5等間			鰐柱建物、S B 222より新
SB222	南北	2以上×2以上	3.9以上	3.3	1.95等間	1.65等間	西 1.8		S B 221より古
SB223	東西	3×2	6.3	4.2	2.1等間	2.1等間	南 3.0		S B 219より新・S B 224より古
SB224	東西	3×2	6.3	4.2	2.1等間	2.4等間			S B 223より新
SB225	南北	3	5.9	2.1以上	1.95等間				
SB226	東西？	1以上×1以上	3.3以上	2.4以上	3.3-	2.4-			S B 229より古
SB227	東西	3×2	4.95	3.6	西から1.5-1.5 1.95	1.8等間			S B 229より古
SB228	東西	2以上×1以上	3.0以上	1.8以上	1.5等間	1.8-			
SB229	東西	4以上×2以上	8.4以上	4.8以上	2.1等間	2.4等間			S B 226・227より新 理塗造構 が建物内にあり
SB230	東西	2以上×1以上	4.8以上	2.4以上	2.4等間	2.4等間	東・南 3.0	0.2～0.6	発掘区外西へづく
SB231	南北	1以上×2	2.1以上	4.0	2.1	2.0等間	南 1.8	0.3～0.4	発掘区外北へづく
SB232	南北	3×2	5.0	3.3	1.65等間	1.65等間		0.3～0.4	
SB233	東西	1以上×1以上	2.1以上	1.8以上	2.1	1.8		0.2	発掘区外北へづく
SB234	南北？	1以上×1以上	1.8以上	2.1以上	1.8	2.1		0.1～0.2	発掘区外北へづく、S B 06より 新
SB235	東西	3×2	7.2	3.4	2.4等間	1.7等間		0.15～0.3	S B 234・236・238より古
SB236	南北	3×2	7.2	3.9	2.4等間	西から2.1-1.8		0.2～0.4	S B 235より新
SB237	東西	2×1	4.5	3.9	2.25等間	3.9		0.05～0.1	S B 236・238より古
SB238	東西	5×2	10.5	4.8	2.1	2.4	西 2.7	0.2～0.4	S B 235・239より新
SB239	東西	5×2	12.0	3.5	2.4等間	1.75等間		0.15～0.3	S B 238より古
SB240	東西	6以上	14.4以上		2.4等間			0.3～0.4	
SA241	東西	5以上	10.5以上		2.1等間			0.25～0.4	発掘区外西へづく
SB242	東西	2以上×2	3.5以上	3.5	1.75等間	1.75等間	東 1.75	0.1～0.45	発掘区外西へづく
SB243	南北	2×1	4.2	3.0	4.2	1.5等間		0.3～0.4	
SB244	南北	5×2	13.5	4.8	2.7等間	2.4等間		0.4～0.6	S A 245より新、奈良三彩出土
SA245	東西	12以上	25.2					0.3～0.5	S B 244より新、十六坪南北1/4ラ インに位置する
SB246	南北	3×2	4.5	3.6	1.5	1.8等間		0.25～0.7	鰐柱建物
SB247	南北	3×2	5.7	4.2	北から1.7-2.1 1.8-2.1-2.1-2.1-2.1	2.1等間		0.1～0.4	鰐柱建物
SB248	南北	3×2	4.5	3.6	北から1.8-1.2- 1.5	1.8等間		0.15～0.5	
SB249	南北	2×2	3.7	3.3	北から2.1-1.6	西から1.5-1.8		0.1～0.4	
SB250	南北	4×2	7.9	3.4	北から1.7-2.5- 1.6-2.1	1.7等間		0.15～0.5	
SB251	南北	3×2	7.2	4.8	2.4等間	2.4等間		0.1～0.4	S B 252・253より新
SB252	南北	3×2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間		0.25～0.6	鰐柱建物、S B 251より古
SB253	南北	2×1	3.8	3.6	1.9等間	3.6	西 2.25	0.3～0.4	S B 251より古

HJ第468・486・541・557・568・622・623・631・638次調査 遺構一覧表2

遺構番号	棟方向	規範(間)	栄行全長	栄行全長	柱間寸法(ｍ)	廻の出	柱穴の深さ	備考
			(m)	(m)	栄行	栄行		
SB254	東西	3×2	5.6	3.6	西から 1.9-1.8-1.9	北から 2.1-1.5	0.1～0.6	
SB255	東西	2以上×1	1.8以上	3	1.8	1.5等間		S B 257より古、発掘区外東へづく
SA256	南北	5	9		北から 1.5-2.4-1.5-1.8-1.8			
SB257	南北	6×2	10.8	3.6	1.8等間	1.8等間	西 2.7	0.2～0.4
SB258	東西	5×2	9.0	3.6	1.8等間	1.8等間	北 2.4・南 2.1	0.2～0.4 S B 260・264・257より古
SB259	南北	4×1	8.4	2.1	2.1等間	2.1	0.3～0.5	S B 258より新
SE260	東西	7×1	14.7	2.1	2.1等間	2.1	0.3～0.5	S B 258より新
SA261	南北	8	16.8		2.1等間		0.5～0.6	
SA262	東西	5以上	11.1以上		西から 2.1-2.1-2.1-2.1-2.7		0.3～0.4	S B 273より古
SA263	南北	2	4.2		2.1等間			
SB264	東西	5×2	10.5	4.2	2.1等間	2.1等間	0.2～0.4	礎板に瓦を使用する柱穴多い、S B 258より新
SB265	南北	2×2	3.3	3.3	1.65等間	1.65等間		0.1～0.45 総柱建物
SB266	東西	4×2	8.4	4.8	2.1等間	2.4等間	西 2.1	0.3～0.5 S B 268より古
SB267	東西	3×2	6.3	4.8	2.1等間	2.4等間	南 2.7	0.2～0.5
SB268	南北	3×1	7.5	1.5	北から 2.4-2.4-2.7	1.5	0.3～0.4	S B 266より新
SA269	東西	6	9.9		1.65等間		0.2～0.5	S A 270より新
SA270	東西	6	11.7		1.95等間		0.3～0.4	S A 269より古
SB271	南北	3以上×2	6.75以上	4.8	2.25等間	2.4等間	0.2～0.3	南から 2間目に間仕切り柱あり、S B 272・273、SD177・178より新
SB272	東西	5×2	9.3	3.6	西から 1.8-1.8-1.8-1.8-2.1	1.8等間	0.2～0.5	S B 265・271・273、SD178より古
SB273	南北	5×2	11.25	4.8	2.25等間	2.4等間	0.2～0.5	S B 265・272、SD178より新、S B 50より古
SB274	南北	7×2	14.7	4.2	2.1等間	2.1等間	0.3～0.5	北から 1、2、3、5間に間仕切り柱あり、柱頭が残る柱穴多い。S B 272・271より新
SB275	南北	1×1	2.1	0.75	2.1	0.75	0.2～0.4	性格所属時期不明、柱抜き取り跡から須器跡Aが出土
SB276	東西	3以上	3.6以上		1.8等間		0.3～0.4	S B 277より古
SB277	南北	3×2	5.55	3.6	北から 1.8-1.8-1.95	1.8等間	0.3～0.5	西側柱筋は直線でなく西にやや彎れる、SE519の上屋か
SB278	南北	5×1以上	6.75	1.8以上	1.35等間	1.8	0.1～0.3	発掘区外東へづく
SA279	南北	3	6.8		北から 2.1-2.4-2.3		0.1～0.2	
SB280	東西	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間	0.3～0.4	
SB281	南北	1	2.7				0.2	
SA282	東西	1以上	2.4以上		2.4		0.3～0.4	
SE283	東西	1以上×1	3.0以上	2.1	3.1	2.1	0.4	
SA284	南北	2以上	3.0以上		1.5等間		0.3	
SA285	南北	1以上	3.0以上	2.4以上	1.5等間		0.3	
SB286	？	3以上×3以上	東西4.5以上	南北4.5以上	東西1.5等間	南北1.5等間	0.5～0.6	総柱建物
SA287	南北	2以上	4.2以上		2.1等間		0.3～0.4	
SA288	南北	2以上	4.2以上		2.1等間		0.3	
SA289	南北	2以上	4.2以上		2.1等間		0.4～0.6	
SE290	東西	1以上×2以上	2.1以上	4.2	2.1	2.1等間	0.4～0.6	
SA291	南北	2以上	4.2以上		1.8等間		0.4	
SA292	東西	2以上	4.2以上		2.1等間		0.2～0.3	
SE293	東西	2以上×1以上	3.8以上	4.2	2.0-1.8	2.1等間	0.1～0.2	発掘区外西へづく
SB294	東西	2以上×2	2.4以上	4.5	2.4	北から 2.1-2.4	0.4～0.6	発掘区外へづく
SB295	東西	7×2	18.8	4.8	西から 2.7-2.7-2.7-2.7-2.9-2.4	2.4等間	南 3.0	0.3～0.5 東から 1・2 間目に間仕切り柱あり
SB296	東西	3×2	8.1	4.2	2.7等間	2.1等間	0.2～0.3	埋立遺構が建物内にあり
SB297	東西	3×2	8.5	3.9	西から 2.8-2.8-2.9	北から 2.1-1.8	0.2～0.6	
SB298	東西	2×2	3.6	3.6	1.8等間	1.8等間	0.3～0.5	総柱建物、SD160・161・162より新、S B 299より古
SB299	東西	3×2	5.7	3.8	1.9等間	1.9等間	0.1～0.4	S B 298より新

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次

HJ 第468・486・541・557・568・622・623・631・638 次調査 遺構一覧表3

遺構番号	棟方向	規格(間)	桁行×梁行	桁行全長(m)	梁行全長(m)	柱間寸法(m)	柱行	廻の出	柱穴の深さ	備考
SB300	南北	9×2	21.3	4.8	北から 2.1-2.1-2.1-2.7-2.7-2.7	2.4 等間				
SB301	?	2×2	東西 3.3	南北 3.3	1.65 等間	1.65 等間				
SB302	南北	4×2	8.4	3.9	2.1 等間	1.95 等間				
SB303	南北	3×2 以上	7.2	2.4 以上	2.4 等間	2.4 等間				
SB304	南北	3×1 以上	7.2		2.4 等間					
SB305	東西	4×2	8.4	4.2	2.1 等間	2.1 等間				DH306 より古
SB306	東西	4×2	8.4	4.2	2.1 等間	2.1 等間	南 2.7			
SB307	東西	3×2	4.05	3.3	1.35 等間	1.65 等間				
SB308	東西	5×2	15.0	4.2	3.0 等間	2.1 等間				
SB309	東西	5×2	15.0	5.4	3.0 等間	2.7 等間				
SB310	東西	4×2	8.4	4.2	2.1 等間	2.1 等間				
SB311	東西	4×2	8.4	4.8	2.1 等間	2.4 等間				中央に間仕切りあり、SB310 より古
SB312	東西	4×2	8.7	3.6	西から 2.1-2.25-2.25-2.1	1.8 等間				
SB313	東西	3×1	6.8	3.6	西から 2.7-2.1-2.1	3.6				
SB314	東西	2×1 以上	5.4	1.8 以上	2.7 等間	1.8				
SB315	東西	3×2	6.0	3.6	西から 1.8-2.1-2.1	1.8 等間				
SB316	東西	3×2	4.8	3.3	西から 1.5-1.65-1.65	1.65 等間				
SB317	東西	4×2	7.2	3.6	1.8 等間	1.8 等間				
SB318	南北	2×2	3.6	3.0	1.8 等間	1.5 等間				鰐柱建物
SB319	南北	3×2	3.3	3.9	1.95 等間	1.65 等間				
SB320	南北	5×2	10.5	4.8	2.1 等間	2.4 等間				西側に 0.9 m 幅の縁がある。建物内に床束柱あり
SB321	東西	3×2	5.4	4.2	1.8 等間	2.1 等間				
SB322	東西	3×2	4.95	3.6	1.65 等間	1.8 等間				
SA323	南北	7	16.65		2.4 等間・南端 1 間分のみ 2.25					
SA324	東西	7	16.8		2.4 等間					
SA325	南北	6	15.3		北から 2.1-2.4-2.7-2.7-2.7					
SB326	南北	4×2	7.2	3.9	1.8 等間	1.95 等間	東 4.0			
SB327	東西	5×2	15.0	6.0	3.0 等間	3.0 等間				
SB328	東西	4×2	9.0	4.2	西から 2.7-2.1-2.1-2.1	2.1 等間	南 2.4			西から 1 間目に間仕切りあり
SB329	南北	5×2	9.3	3.9	1.45 等間・南端 1 間分のみ 1.2	1.95 等間				南から 2 間目に間仕切りあり
SB330	南北	3×2	4.5	3.3	1.5 等間	1.65 等間				鰐柱建物
SB331	東西	3×2	4.95	3.6	1.65 等間	1.8 等間				
SB332	南北	3×2	4.05	3.6	1.35 等間	1.8 等間				
SB333	東西	3×2	7.2	4.8	2.4 等間	2.4 等間	北 2.7			
SB334	東西	3×2	6.3	3.6	2.1 等間	1.8 等間				
SA335	東西	11 以上	20.1 以上		西から 1.5-1.9-1.9-1.9-1.9-1.9-1.8-1.8-1.8-1.8					
SB336	南北	3×2	5.85	3.6	1.95 等間	1.8 等間	東 2.4・西 3.0			
SB337	南北	5×2	10.3	4.2	北 1 間分が 2.4 以下 2.1 等間	2.1 等間		0.05 ~ 0.3		
SB338	東西	3×2	4.05	3.6	1.35 等間	1.8 等間				
SB339	東西	4×2	8.4	3.9	2.1 等間	1.95 等間				
SB340	南北	3×2	5.4	3.6	1.8 等間	1.8 等間	東 2.4			
SB341	南北	3×2	5.1	3.6	北から 1.5-1.8-1.8	1.8 等間				
SB342	南北	3×2	5.4	3.6	1.8 等間	1.8 等間	東 1.65			
SB343	東西	3×2	6.3	3.6	2.1 等間	1.8 等間	南 2.4			
SB344	南北	3×2	5.4	3.6	1.8 等間	1.8 等間	東 2.4			
SB345	東西	3×2	5.4	3.6	1.8 等間	1.8 等間	北 2.4			
SB346	南北	3×2	6.3	3.6	2.1 等間	1.8 等間				
SB347	南北	3×2	5.4	3.6	1.8 等間	1.8 等間				
SB348	東西	4×2	8.1	3.6	西から 2.1-1.8-1.8-2.4	1.8 等間				

HJ第468・486・541・557・568・622・623・631・638次調査 道構一覧表4

道構番号	棟方向	規範(間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法(m)	廻の出	柱穴の深さ	備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行			
SA349	東西	5?	10.5		2.1等間?			
SB350	東西	3?×1	5.4	3.3	1.8等間?	3.3		
SA351	東西	3	5.4		1.8等間			
SA352	南北	2	3.6		1.8等間			
SB353	東西	3×1	6.8	3.3	2.25等間	3.3		
SB354	東西	3×2	5.0	3.9	1.65等間	1.95等間		
SB355	南北	2×2	3.9	3.6	1.95等間	1.8等間		
SB356	南北	3×2	6.3	4.2	2.1等間	2.1等間		
SB357	東西	3×1	5.4	3.3	1.8等間	3.3		
SB358	南北	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間		
SB359	南北	3×1以上	5.4	2.0以上	1.8等間			
SB360	東西	5×2	8.3	3.9	1.65等間	1.95等間	北 2.9	
SB361	東西	3×2	4.9	3.3	1.65等間	1.65等間		
SB362	東西	3以上×2	5.4	4.2	1.8等間	2.4等間		
SB363	東西	1以上×2		3.0		1.5等間		
SB364	東西	5以上×2	10.5以上	4.8	2.1等間	2.4等間		埋造構が建物内にあり
SB365	東西	5×2	10.2	3.6	西から 2.7-1.8-1.8-2.1	1.8等間		
SA366	南北	3	6.3		北から 1.8-1.8-2.7			
SB367	東西	1以上×2	7.4	3.6以上		1.8等間		
SB368	東西	4×2	7.05	3.6	西から 2.25-1.5-1.5-1.8	1.8等間		矩柱建物
SA369	南北	2	7.5		北から 3.9-3.6			
SB370	東西	3以上×2以上	3.6以上	1.5以上	1.8等間	1.5		
SB371	東西	2以上×2	4.8以上	4.8	2.4等間	2.4等間	南 2.4	
SB372	東西	2以上×2	3.6以上	3.3	1.8等間	1.65等間		
SB373	南北	3×2	6.3	3.3	2.1等間	1.65等間		
SB374	東西	5以上×2	12.0以上	4.8	2.4等間	2.4等間	南 2.4	
SB375	南北	2×1	3.0	2.1	1.5等間	2.1		
SB376	東西	2×1	3.3	3.3	1.65等間	3.3		
SB377	東西	1以上×2		3.3		1.65等間		
SB378	東西	3以上×2	3.6以上	3.6	1.8等間	1.8等間	北 1.8	
SB379	南北	2×1	3.6	3.6	1.8等間	3.6		
SB380	東西	3×2	6.3	3.6	2.1等間	1.8等間		
SB381	南北	3×2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間		
SA382	東西	3以上	5.7以上		西から 2.1-1.8-1.8			
SA383	東西	2以上	4.2以上		2.1等間			
SB384	南北	1×2	5.8	2.4	5.8	1.8等間		
SB385	東西	1	2.4		2.4			

道構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
SD2003	東西	幅1.2~1.3、長さ3.5以上	0.35		土師器杯・甕・須恵器杯・壺・甕	
SD1011	南北	幅0.6以上、長さ3.2以上	0.2		土師器杯・甕	
SD114	南北溝	幅1.2~1.8、長さ20.2			土師器杯・皿・碗・甕・須恵器杯・蓋・鉢・壺・甕・土馬・丸瓦・平瓦	
SD133	東西溝	幅1.1~2.5×長さ23.5以上	0.1~0.2		土師器杯・皿・高杯・甕・須恵器杯・蓋・壺・甕・黑色土器A類杯・製塙土器・丸瓦・平瓦・砾石	
SD134	東西溝	幅1.5~1.8×長さ54.1以上	0.1~0.4		土師器杯・皿・碗・高杯・甕・須恵器杯・蓋・壺・甕・製塙土器・丸瓦・平瓦	
SD147	南北溝	幅1.5~2.5、長さ3.5以上	0.65		土師器杯・皿・碗・高杯・甕・須恵器杯・蓋・壺・甕・製塙土器・軒平瓦(6064F2点)・丸瓦・平瓦	
SD155	東西溝	幅0.8~0.9×長さ4.0以上	0.1		須恵器甕	
SD156	東西溝	幅0.8~1.2×長さ1.9以上	0.15		土師器高杯	
SD157	東西溝	幅1.2×長さ6.5以上	0.3		土師器杯・甕・須恵器杯・壺・甕・丸瓦	
SD158	南北溝	幅3.0~3.3×長さ28.8以上	0.3~0.5		土師器杯・皿・碗・甕・須恵器杯・蓋・壺・甕・製塙土器・土馬・丸瓦・平瓦・砾石	
SD159	南北溝	幅1.1~2.3×長さ33.0以上	0.1~0.2		土師器杯・皿・碗・甕・須恵器杯・蓋・壺・平瓶・甕・製塙土器・平瓦	
SD160	南北溝	幅0.6~1.8×長さ25.9以上	0.1		土師器杯・高杯・甕・壺・須恵器杯・蓋・皿・平瓶・壺・甕・製塙土器・丸瓦・平瓦	
SD161	南北溝	幅0.2~0.3×長さ17.2以上	0.1~0.15		土師器杯・須恵器杯・蓋・製塙土器・丸瓦	

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次

HJ第468・486・541・557・568・622・623・631・638次調査 遺構一覧表5

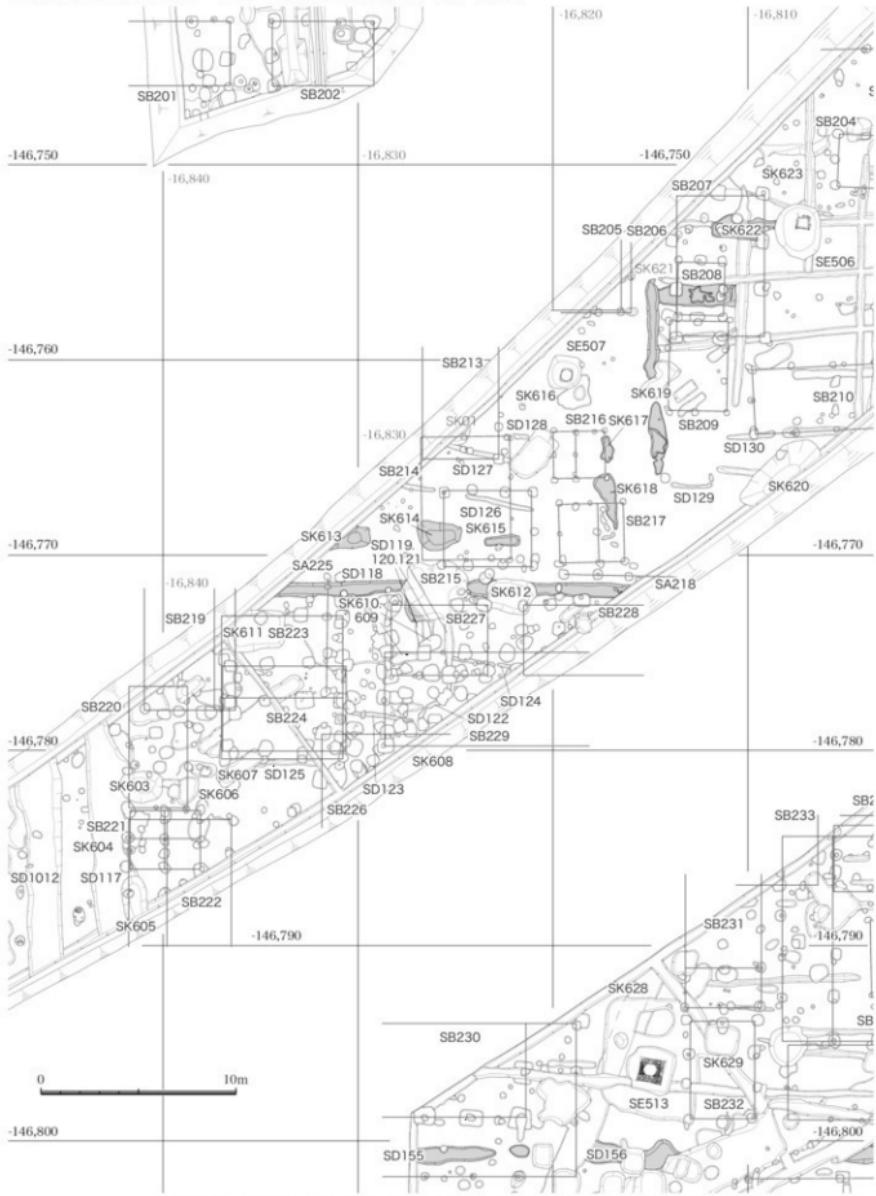
遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
SD162	南北溝	幅0.5～1.3×長さ12.8	0.1～0.3		土師器杯・皿・甕・須恵器杯・蓋・壺・甕・製塙土器・軒平瓦（型式不明）・丸瓦・平瓦	
SD163	南北溝	幅0.2～0.4×長さ35.5	0.1～0.2		土師器皿・甕・須恵器蓋・甕	SD159より古
SD164	東西溝	幅0.5、長さ6.0			土師器杯・須恵器杯・甕・壺	
SD165	東西溝	幅0.25、長さ12.0以上	0.1			
SD166	東西溝	幅3.0、長さ9.5	0.8		土師器杯・皿・甕・高杯・壺・甕・須恵器杯・蓋・鉢・平瓶・甕・甕・製塙土器・土馬・軒平瓦（6644D・6664F）・丸瓦・平瓦	
SD167	南北溝	幅1.5以上、長さ13.5	0.4		土師器杯・皿・高杯・甕・須恵器杯・蓋・高杯・鉢・甕・製塙土器	
SD168	南北溝	幅2.8、長さ4.8			須恵器杯・製塙土器	
SD169	南北溝	幅2.0、長さ9.0			土師器杯・甕・製塙土器	
SD170	南北溝	幅0.7、長さ11.5			須恵器杯	
SD171	南北溝	幅1.1、長さ4.5以上	0.45		土師器杯・皿・甕・甕・須恵器杯・蓋・平瓶・甕・甕・製塙土器	
SD172	南北溝	幅0.8×長さ1.5以上	0.4		土師器杯・皿・高杯・甕・須恵器杯・蓋・皿・甕・甕・製塙土器・丸瓦・平瓦	
SD173	東西溝	幅3.5×長さ11.9以上	0.1～0.4		土師器杯・皿・甕・甕・須恵器杯・蓋・甕・甕・製塙土器・土馬・丸瓦・平瓦	
SD174	東西溝	幅1.3×長さ4.0以上	0.1		土師器杯・皿・甕・須恵器蓋・甕	
SD175	東西溝	幅2.2、長さ1.5	0.2		土師器杯・皿・甕・甕・須恵器蓋・鉢・甕	
SD176	東西溝	幅1.5～2.1×長さ6.5	0.45		土師器杯・甕・須恵器蓋	
SD177	東西	幅0.2～1.2以上×長さ18.6	0.1～1.2		土師器杯・皿・甕・須恵器杯・鉢・甕・甕・丸瓦	
SD178	東西	幅0.3～2.2×長さ16.2以上	0.1～0.2		土師器杯・皿・甕・須恵器杯・蓋・甕・甕・平瓦	
SD179	東西溝	幅0.8～1.2×長さ12.0以上	0.1～0.3		土師器杯・皿・甕・須恵器杯・蓋・鉢・甕・甕・製塙土器・土馬・軒平瓦（型式不明）・丸瓦・平瓦・凝灰岩	
SD180	東西溝	幅2.5～2.9、長さ7.7以上	0.15			

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
河川2a		幅4.5 m (HJ631次調査区)	1.3	弥生時代中期～後期	弥生土器甕・甕・高杯・弥生土器甕・甕・高杯・鉢・土師器甕・甕・石器（石包丁1・大型船刀石斧1・石斧1・石斧1・楔型石器1・石槍1・石槍1・サカナイト洞片）、砾石1・桃核・栗・胡桃	
河川2b		幅7.0～11.1 m	1.6			HJ第631次発掘区
SK01	円形？	東西・南北1.1以上	0.7	弥生時代中期～後期初頭	弥生土器甕・高杯	HJ第541次発掘区
SK02	楕円形	東西1.8×南北2.2	1.6	弥生時代後期	弥生土器甕・甕・高杯・鉢・器台・桃核・瓢箪	HJ第631次発掘区
SK03	楕円形	東西1.8×南北1.6	0.25	弥生時代後期	弥生土器甕・甕・高杯・器台	HJ第631次発掘区
SK04	楕円形	東西0.37×南北0.48	0.3	弥生時代	弥生土器甕または甕	HJ第623A次発掘区
SK05	楕円形	東西1.3×南北1.2	0.7	弥生時代後期	弥生土器甕・高杯	HJ第623A次発掘区
SK06	楕円形	長径1.9×短径1.0	0.1	弥生時代後期？	弥生土器甕	HJ第623A次発掘区
SK07	不整橢円形	東西1.4×南北0.9	0.1	弥生時代？	サカナイト洞片	HJ第623A次発掘区
SK08	不整橢円形	長径1.4×短径1.0	0.2	弥生時代後期	弥生土器長颈甕	HJ第623A次発掘区
SK09	不整橢丸方形	東西1.3×南北1.0	0.1	弥生時代後期	弥生土器長颈甕・甕・壺・高杯	HJ第623A次発掘区
SK10	楕円形	長径1.2×短径0.8	0.1	弥生時代後期	弥生土器甕・甕	HJ第623A次発掘区
SK11	楕円形	東西0.6×南北1.0	0.3	弥生時代後期	弥生土器甕	HJ第623A次発掘区
SK12	楕円形？	東西3.1以上×南北0.9以上	0.3	弥生時代中期	弥生土器甕	HJ第623D次発掘区
SK13	不整形方形	東西1.5×南北1.5	0.2	弥生時代中期？	弥生土器甕・サカナイト洞片	HJ第623D次発掘区
SK14	不整形三角形	東西3.9×南北2.0	0.1	弥生時代中期？	弥生土器甕・石籠	HJ第638次発掘区
SK15	楕丸方形	東西1.1×南北1.0	0.2	弥生時代中期？	弥生土器甕	HJ第631次発掘区
SK26	楕丸方形	東西5.0×南北6.0	0.1		土師器杯・皿・甕・須恵器杯・壺・甕	HJ第631次発掘区
SK29	楕丸方形	東西1.7×南北1.5	0.3		土師器杯・皿・須恵器杯・甕・甕	HJ第631次発掘区
SK30	長梢円形	東西2.5以上×南北0.8	0.3		土師器杯・皿・鉢・甕・壺・甕・須恵器杯・蓋・甕	HJ第631次発掘区
SK31	楕丸方形	東西8.8×南北8.0	0.3		土師器杯・皿	HJ第631・623D次発掘区
SK32	長方形	東西1.2以上×南北10.5	0.2		土師器杯・皿・甕・壺・甕・須恵器杯・杯蓋・鉢・甕・甕	HJ第638次発掘区
SK33	楕丸方形	東西7.5×南北3.6	0.15		土師器杯・皿・甕・須恵器杯・壺・甕	HJ第623A次発掘区
SK34	楕丸方形	東西2.5×南北1.4	0.3		土師器杯・皿・壺・甕・壺・甕・須恵器杯・杯蓋・鉢・甕・壺・甕	HJ第623A次発掘区
SK35	不整橢円形	東西2.2×南北1.4	0.3		土師器杯・高杯・甕・須恵器杯・甕	HJ第623A次発掘区
SK36	不整橢円形	東西2.5×南北1.4	0.3		土師器杯・皿・須恵器蓋・甕	HJ第623A次発掘区
SK37	不整橢円形	東西2.2×南北1.0	0.2		須恵器杯	HJ第623A次発掘区
SK38	長梢円形	東西1.9×南北6.0以上	0.9		土師器杯・皿・高杯・甕・壺・須恵器杯・杯蓋・甕・甕	HJ第623A次発掘区
SK39	楕円形	東西2.6×南北2.1	0.9		土師器杯・皿・高杯・甕・壺・須恵器杯・甕	HJ第623A次発掘区
SK40	楕丸方形	東西2.7×南北6.7	0.5			HJ第557次発掘区

HJ 第 468 · 486 · 541 · 557 · 568 · 622 · 623 · 631 · 638 次調查 遺構一覽表 6

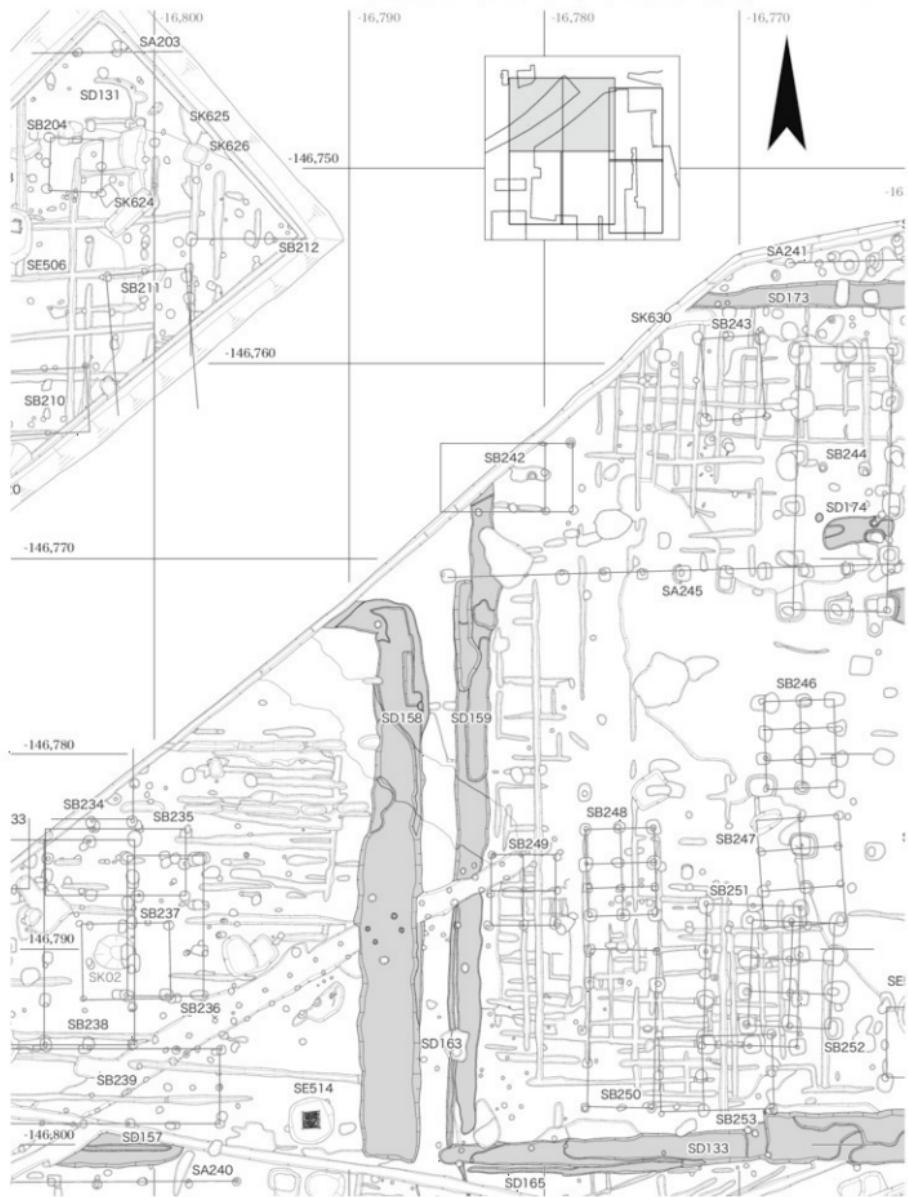
遺構番号	掘削等			井戸枠		時期	主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)			
SE513	隅丸方形	東西 2.4 × 南北 2.3	2.9	方形横板組	東西 1.2 × 南北 1.2	8世紀末～9世紀初	(面部)：土師器杯・碗・皿・鉢・高杯・壺・甕、須恵器杯・皿・蓋・鉢・壺・甕・盤、奈良三彩火舎、製埴土器・丸瓦、平瓦、崩壊	曲物(径 0.65 m × 高さ 0.5 m)利用の通路 装置あり
				辛懶丙利用	東西 0.95 × 南北 0.65		(枠内)：土師器杯・碗・皿・蓋・鉢・高杯・壺・甕、須恵器杯・皿・蓋・鉢・壺・甕、產地不明陶器皿、製埴土器・土馬、壺瓦、丸瓦、平瓦	
SE514	隅丸方形	東西 2.3 × 南北 2.4	2.6	方形横板組 隅柱留	一辺 0.85	8世紀後半～末	(面部)：土師器杯・甕・須恵器杯・蓋・甕 (枠内)：土師器杯・碗・皿・高杯・壺・甕、須恵器杯・皿・蓋・甕・盤、製埴土器・丸瓦、平瓦、種・盃	土師器皿Cの出土が目立つ
SE515	楕円形	東西 2.6 × 南北 3.0	1.2	井戸枠残存せず		8世紀後半	土師器杯・鉢・須恵器杯・皿・蓋・甕・盤、製埴土器・種	
SE516	隅丸方形	東西 1.7 × 南北 1.8	1.8	方形横板組 隅柱横枝留	東西 0.75 × 南北 0.8	8世紀末～9世紀初	(面部)：土師器高杯・甕・皿・須恵器杯・壺・甕、製埴土器 (枠内)：土師器杯・皿・碗・高杯・甕・須恵器杯・皿・蓋・平瓶、鉢・甕・黑色土器A類別、製埴土器・軒平瓦(6684D)、丸瓦、平瓦、壇、円盤形土製品、盃・曲物、桃種	
SE517	円形	直径 1.0	1.4	井戸枠残存せず		8世紀後半～末	土師器杯・皿・高杯・甕・壺・甕・須恵器杯・蓋・皿・蓋・甕・製埴土器・平瓦	
SE518	楕円形	東西 2.3 × 南北 3.0	2.0	井戸枠残存せず		8世紀後半	土師器杯・皿・高杯・甕・壺・甕・須恵器杯・蓋・皿・平瓶・蓋・製埴土器・軒丸瓦(627B)、丸瓦、平瓦、輪羽口・種	
SE519	楕円形	東西 2.5 × 南北 2.7	2.8	一本割り抜き	直径 0.7 長さ 2.7 以上	8世紀後半～末	(面部)：土師器杯・壺・甕・須恵器杯・壺・甕・製埴土器・丸瓦、輪羽口・軒平瓦(6685C) (枠内)：土師器杯・皿・碗・高杯・甕・須恵器杯・蓋・壺・甕・丸瓦、平瓦、熨斗瓦	枠外側に「糸?」との刻書
SE520	円形	直径 1.7	1.8	井戸枠残存せず		8世紀後半～末	土師器杯・壺・甕・須恵器杯・甕	
SE521	不整形方	東西 5.8 × 南北 4.8	1.5	井戸枠残存せず		8世紀後半	土師器杯・皿・碗・高杯・甕・須恵器杯・壺・甕・製埴土器・丸瓦	
SE522	隅丸方形	東西 3.4 × 南北 3.8	1.5	方形横板組	一辺 0.8	8世紀後半～末	(面部)：土師器杯・皿・高杯・鉢・甕・須恵器杯・皿・蓋・壺・甕・製埴土器・丸瓦、平瓦 (枠内)：土師器杯・皿・碗・高杯・甕・須恵器杯・蓋・壺・甕・須埴器・壺・甕・蓋・甕・輪羽口・種 (軒跡)：土師器杯・皿・碗・高杯・甕・須埴器・壺・甕・輪羽口・種	縦横板組の井戸枠内にさらに縦板組の井戸枠を張る二重構造。
SE523	隅丸方形	東西 2.0 × 南北 1.6	1.4	(外側) 方形縦板組 隅柱横枝留 (内側) 方形横板組 横枝留	(外側) 一辺 0.95 (内側) 一辺 0.8	8世紀末～9世紀初?	(面部)：土師器杯・皿・壺・須恵器杯・壺・丸瓦、平瓦 (枠内)：土師器杯・皿・碗・高杯・甕・須恵器杯・蓋・壺・甕・製埴土器・軒丸瓦(623E)、丸瓦、平瓦、壇、鉄質(和同開珍1・神功開寶2)、円盤形土製品、盃・曲物、桃種	縦板組の井戸枠内にさらに縦板組の井戸枠を張る二重構造。
SE524	楕円形	東西 1.8 × 南北 2.2	0.8 以上	円形縦板組	直径 1.1	19世紀以降	土師器皿、国宝陶器(肥前赤陶・瀬戸・美濃焼陶・益田産猪突)、国定古器(肥前左近・青花皿)	野井戸
SE501	不整形円形	東西 1.5 × 南北 2.1	1.1	A. 縦板組 B. 曲物積み	B. 径 0.45	8世紀末～9世紀初	(面部)：土師器杯・杯・皿・高杯・甕・須恵器杯・蓋・皿・壺・甕・蓋・甕・盤・須埴器・平瓶	同一場所で A から B へ取り替える
SE502	円形	直径 0.7	0.8	曲物積み	直径 0.3	8世紀中～後半	(枠内)：土師器杯・皿・壺・須恵器杯・蓋・壺・甕	曲物1段分(0.2 m)残存
SE503	円形	直径 1.2	1.5	方形縦板組	一辺 0.7	8世紀後半～末?	(面部)：土師器杯・須恵器杯・壺・甕 (枠内)：土師器杯・皿・壺・須埴器・平瓶・甕	
SE504	隅丸方形	東西 2.4 × 南北 2.1	1.9	方形縦板組 横枝留め	東西 0.9 × 南北 0.95	8世紀末～9世紀初	(面部)：土師器杯・高杯・甕・須恵器杯・壺・甕・(枠内)：土師器杯・高杯・甕・須・須埴器・壺・蓋・鉢・甕・蓋・鉢・甕・鉄刃子・曲物	
SE505	隅丸方形	東西 1.5 × 南北 2.1	1.5	方形縦板組 隅柱横枝留	一辺 0.7	8世紀後半	(面部)：土師器杯・皿・甕・須恵器杯・壺・甕・黑色土器A類杯 (枠内)：土師器杯・皿・高杯・鉢・甕・壺・須・須埴器・甕・壺・甕・曲物	

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次



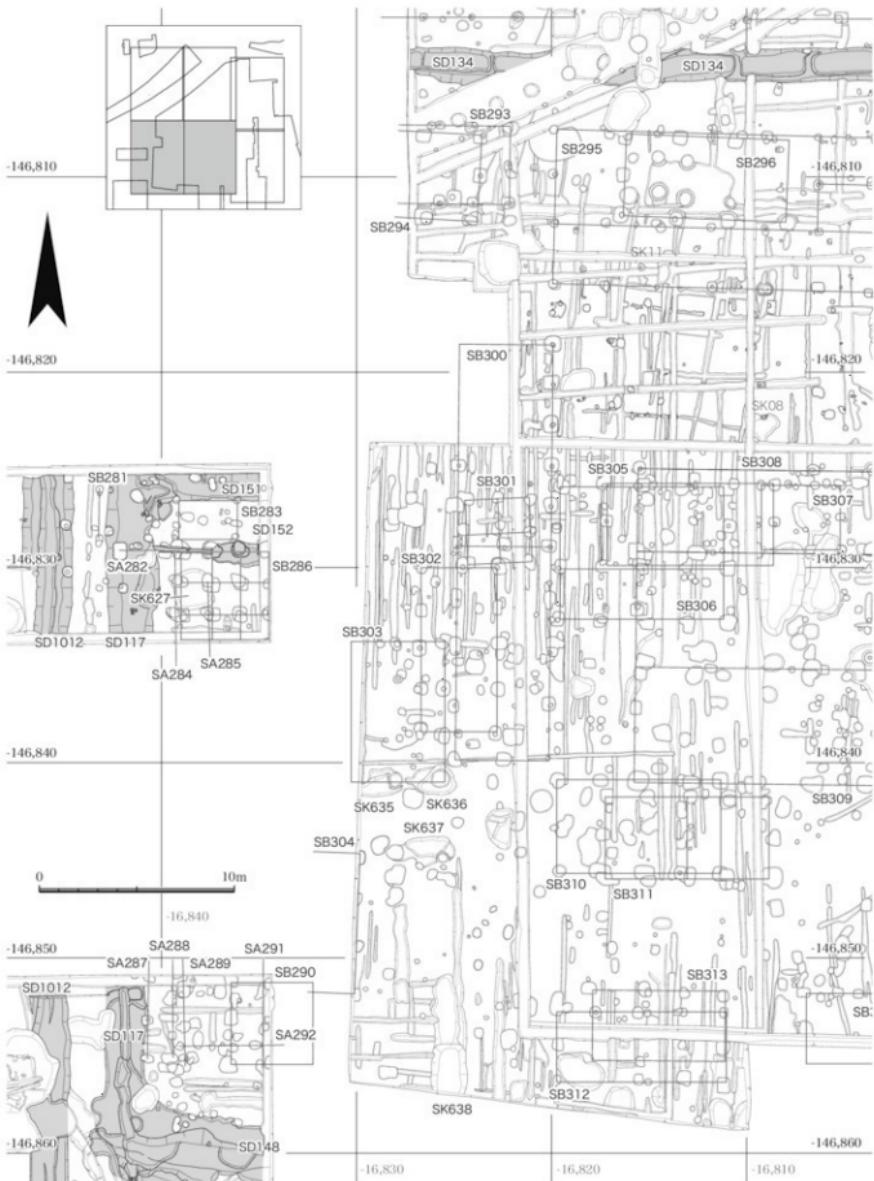
HJ 第468・486・541・557・568・622・623・631・638次調査 遺構平面図1 (1/250)

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次



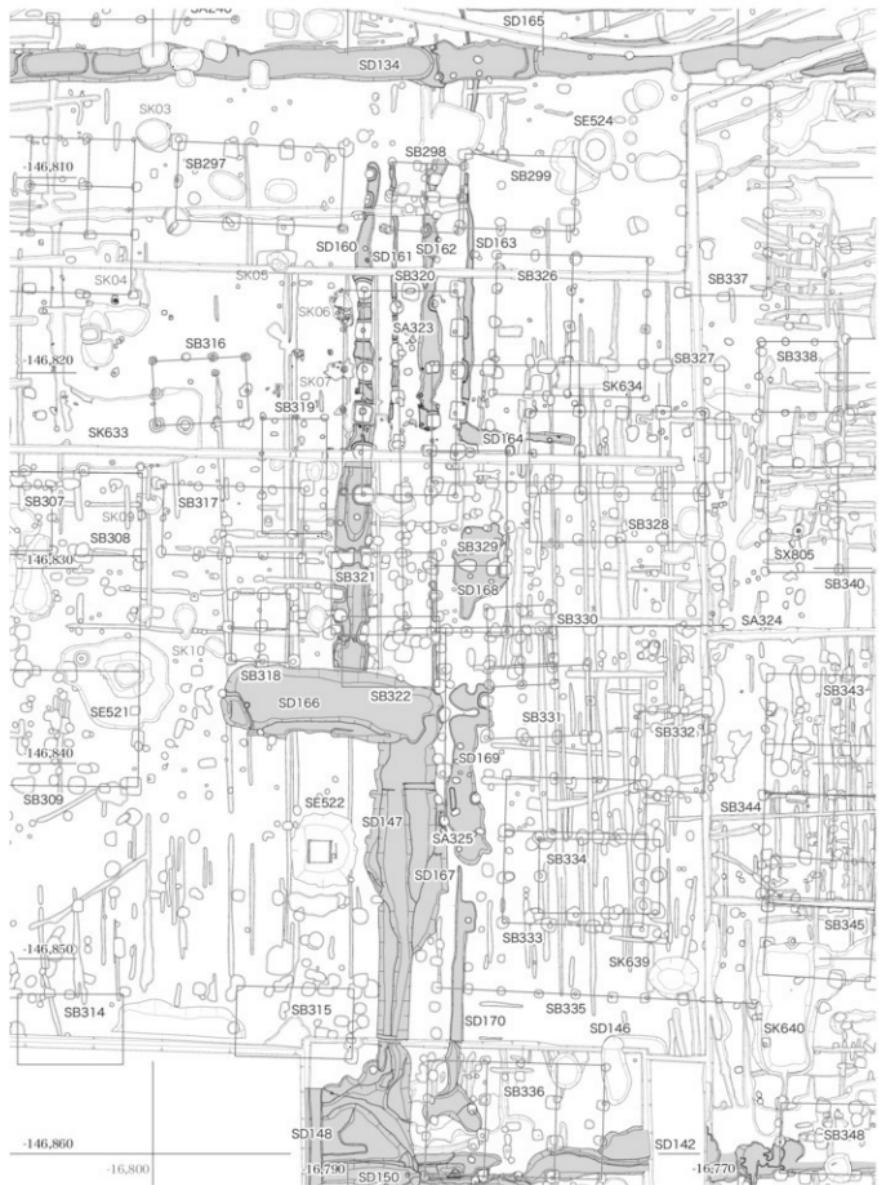
HJ第468・486・541・557・568・622・623・631・638次調査 遺構平面図2 (1/250)

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次



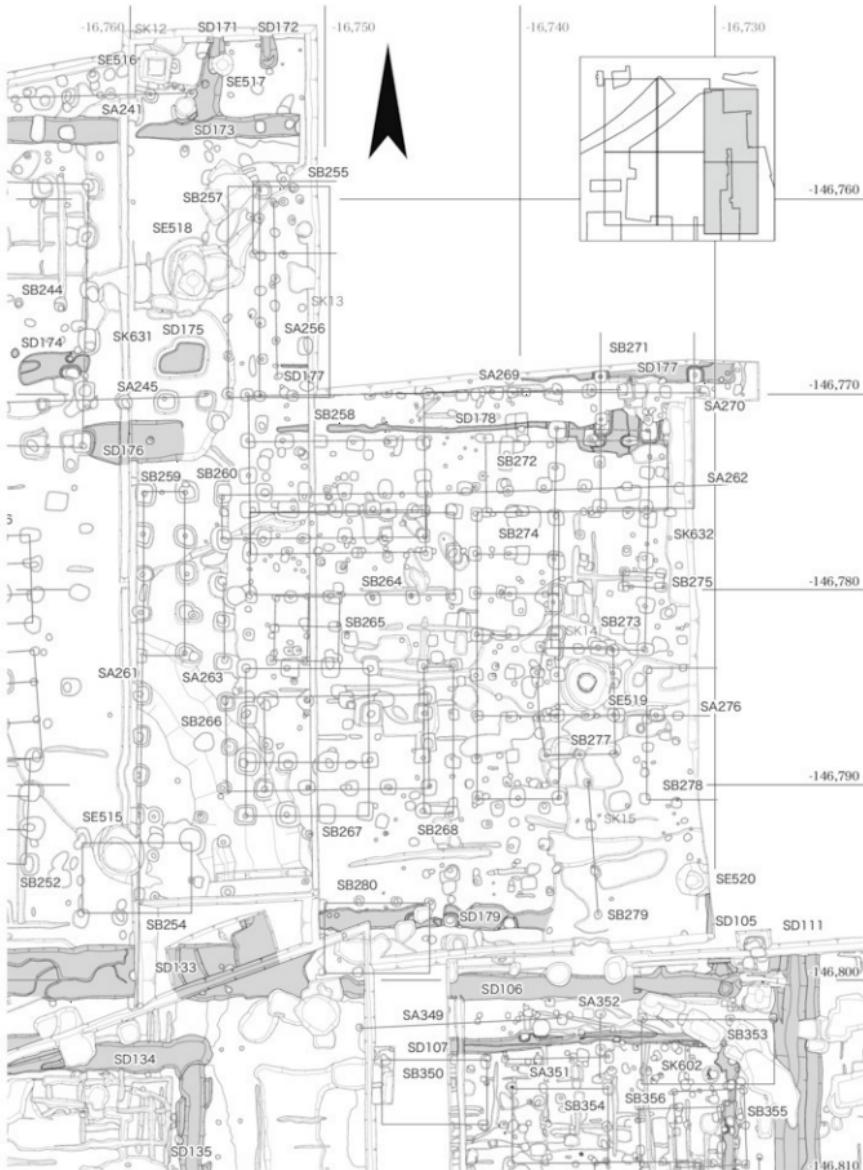
HJ第468・486・541・557・568・622・623・631・638次調査 遺構平面図3 (1/250)

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次



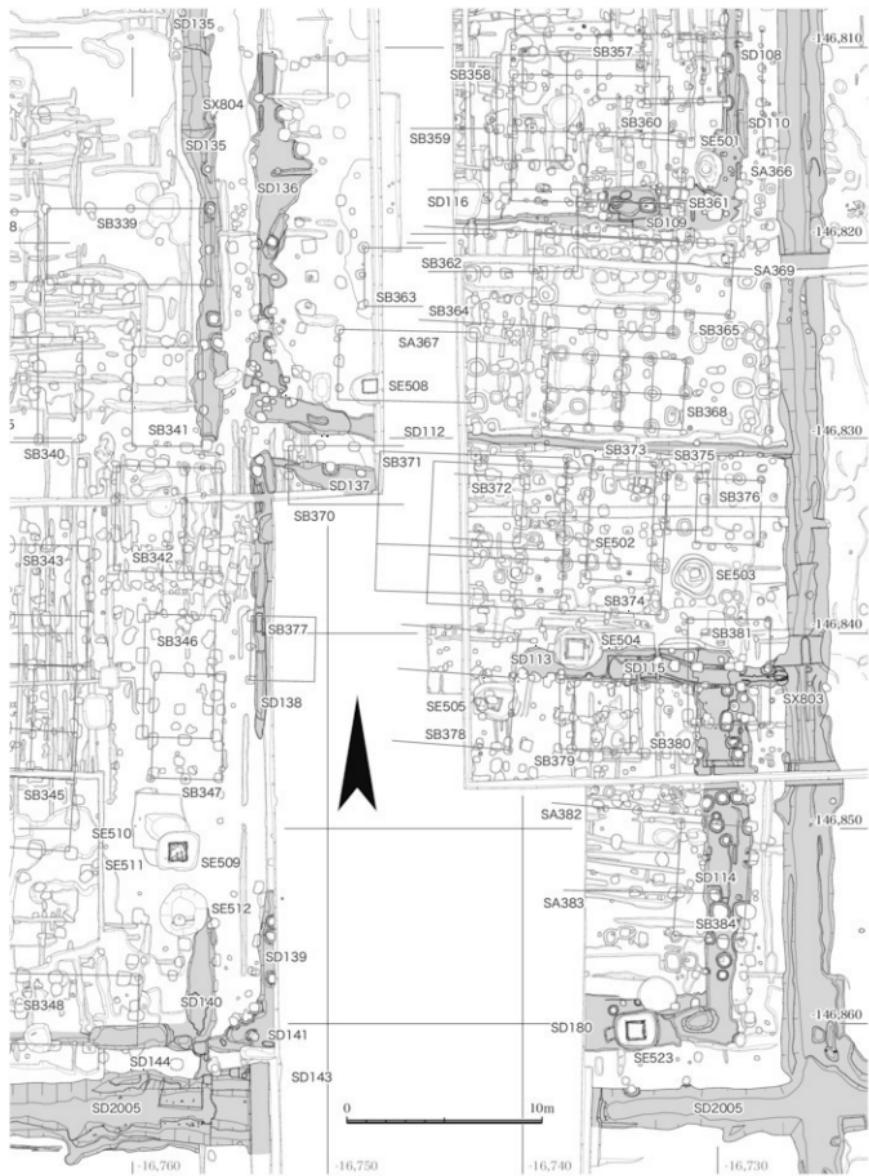
HJ 第 468・486・541・557・568・622・623・631・638 次調査 遺構平面図4 (1/250)

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次



HJ第468・486・541・557・568・622・623・631・638次調査 遺構平面図5 (1/250)

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次



HJ第468・486・541・557・568・622・623・631・638次調査 遺構平面図6 (1/250)

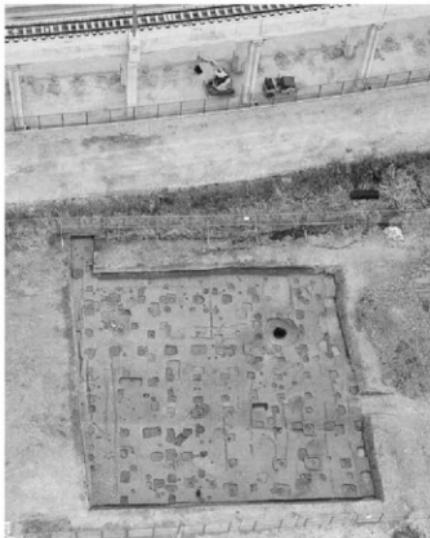
平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次



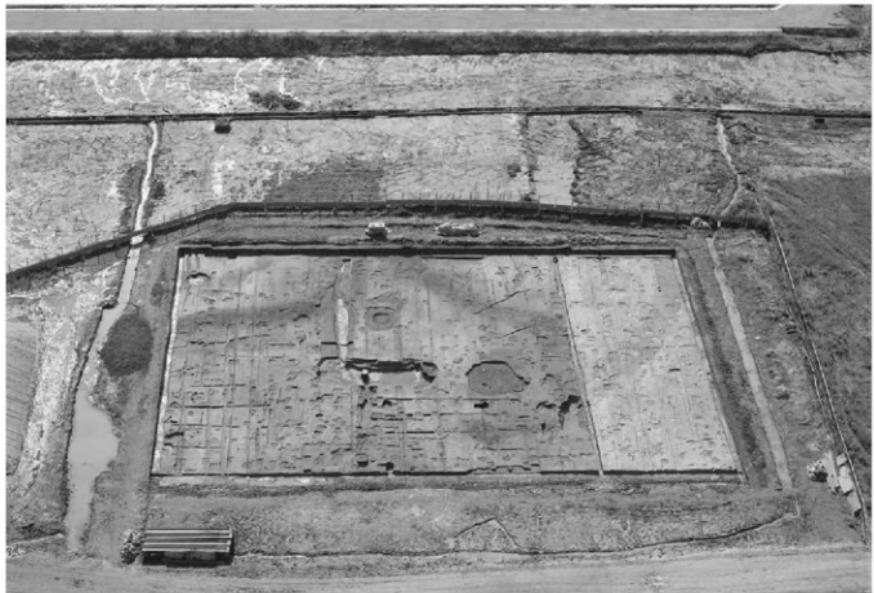
HJ第631次調査 発掘区全景（北から）



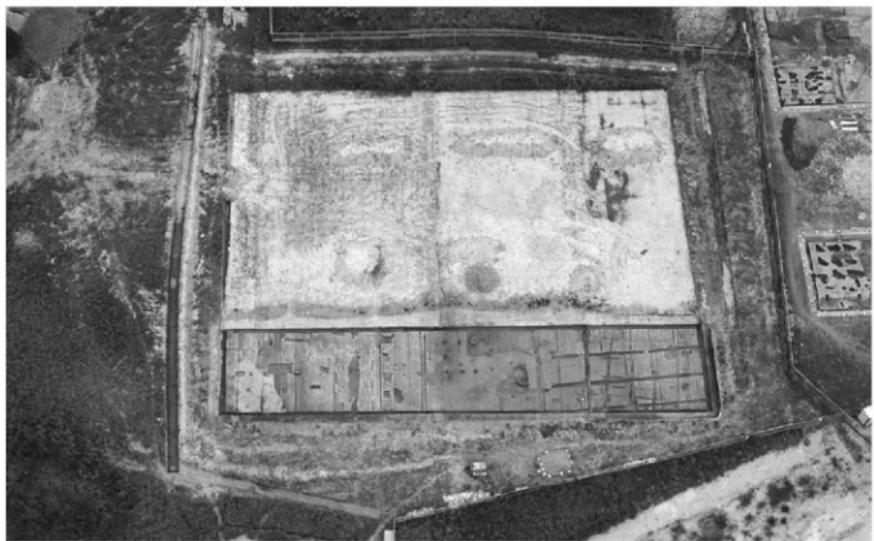
HJ第631次調査 発掘区全景（西から）



HJ第638次調査 発掘区全景（西から）



HJ第623次調査 A発掘区南半全景（北から）

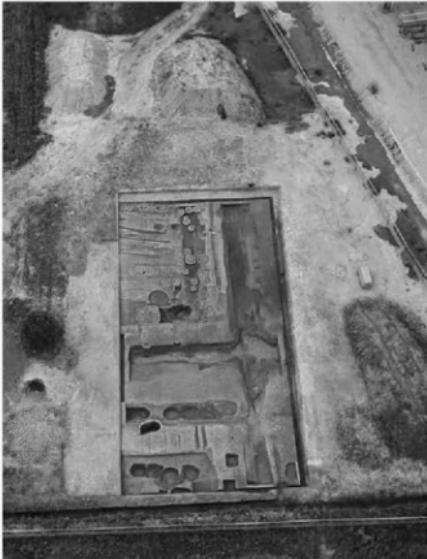


HJ第623次調査 A発掘区北半全景（北から）

平城京跡（左京五条四坊十五坪・十六坪・四条大路）の調査 第623・631・638次



HJ 第623次調査 D 発掘区全景（北から）



HJ 第623次調査 B 発掘区全景（南から）



HJ 第623次調査 D 発掘区全景（東から）



HJ 第623次調査 A 発掘区西端部全景（東から）



HJ 第623次調査 C 発掘区全景（東から）



HJ 第631-2次調査 発掘区全景（北から）

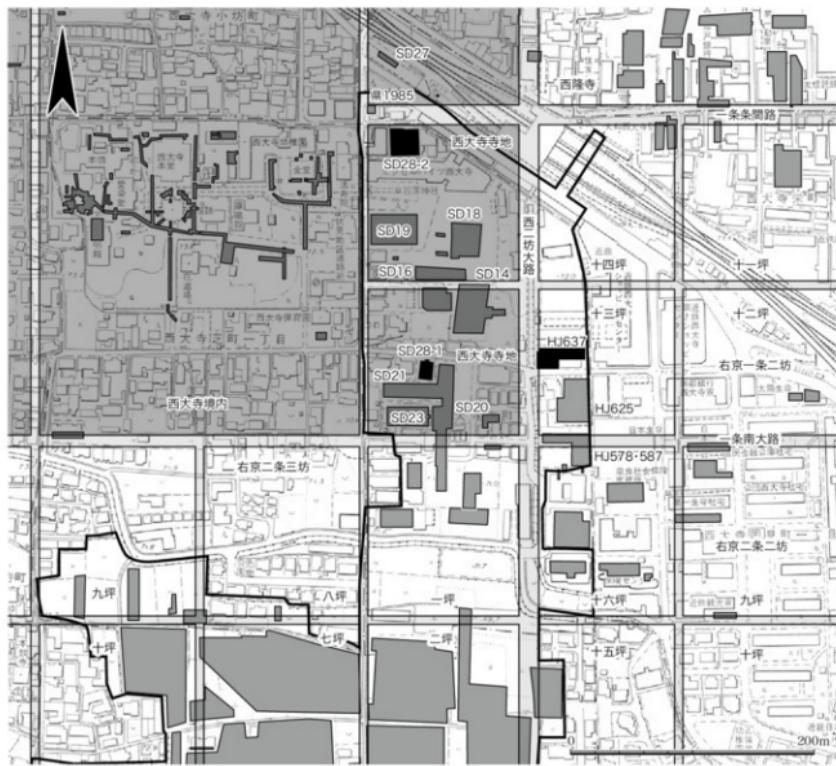
2. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査

奈良市教育委員会では、昭和63年度から近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内（総面積32万m²）の発掘調査を実施しており、平成21年度までの調査面積は、110,524m²である。平成22年度は、平成21年度繰越事業として西大寺境内で2箇所602m²（SD第28-1・2次調査）及び、現年事業として平城京の条坊

復原では、右京一条二条十三坪にあたる地点において、1箇所354m²（HJ第637次調査）、計956m²の調査を実施した。調査位置は、下記一覧表、位置図の通りである。報告に用いる遺構番号は、当事業地内で設定している番号を用い、古墳時代以前の遺構には2桁を、奈良時代以降のものには3桁の番号を用いた。

平成22年度 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業 発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
西大寺境内・ 平城京跡（右京一条三坊四坪）	SD第28-1次	通常事業（21編）	西大寺南町2405-6	H22.7.15～ H22.8.17	150m ²	
西大寺境内・ 平城京跡（右京一条三坊三坪）	SD第28-2次	通常事業（21編）	西大寺南町2425-3他	H22.8.26～ H22.11.12	452m ²	久保清
平城京跡（右京一条二坊十三坪）	HJ第637次	通常事業	西大寺南町2307-3他	H22.12.16～ H23.2.28	354m ²	



近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内 発掘調査位置図 (1/4,000)

(1) 西大寺旧境内の調査 第28-1・2次

I はじめに

調査地は、西大寺旧境内の南東隅にあたり、これまでに調査地周辺で実施した調査成果（SD第20・21・23次）から、SD第28-1次調査地（南発掘区）周辺では、奈良時代は建物の少ない地域であり、平安時代末～鎌倉時代初頭頃は屋敷地の一画になるとみられ、井戸や土坑墓等を検出している。

SD第28-2次調査地（北発掘区）周辺では、南側で実施した調査（SD第14・16・18・19次）で奈良時代から江戸時代に至る各時代の遺構を検出している。調査地北側で実施した調査（SD第27次・県1985年調査）では、現在の西大寺境内北東端付近から近鉄大和西大寺駅南側の間において、平安時代以降に東へ流れる河川があつたことも判明している。

今回の調査は、この地域の様相をさらに明らかにすることを目的として実施した。

II 基本層序

SD第28-1次調査地では、造成土（0.1～0.3m）直下、またはその下に黒灰色土（耕土・0.1m）と続き、現地表下0.1～0.4mで奈良時代以前の河川埋土の黄灰色砂上面に達する。遺構はすべて黄灰色砂上面で検出した。検出面の標高は70.9～71.0mである。

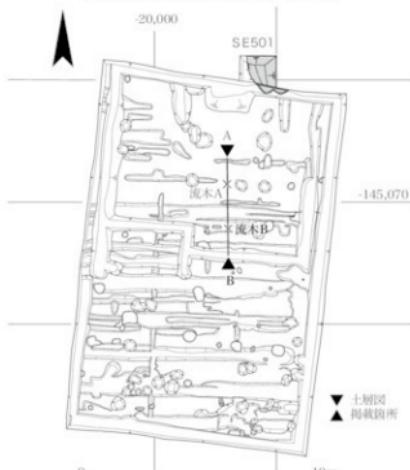
SD第28-2次調査地では、造成土（0.5～0.9m）の下に黒灰色土（耕土・0.1～0.2m）、灰色砂質土（床土・0.1m）と続き、現地表下0.6～0.9mで、奈良時代以前の河川埋土の青黒灰色粘土・黄灰色砂・淡灰色細砂上面に達する。遺構はすべてこの河川埋土上面で検出した。検出面の標高は71.3～71.4mである。

なお、兩調査地で、奈良時代以降の遺構面を形成する河川の時期を確認するために河川を掘り下げたが、いずれも出土遺物はなかった。そこで、SD第28-1次調査では、遺構面上面から0.3～0.4m以下に堆積する黄灰色砂層（土層図第3層）から流木Aを、さらに下層の遺構面上面から0.5～0.9m以下に堆積する灰色粘土層（第6層）から流木Bをサンプル採取し放射性炭素年代測定を実施した。その結果、流木Aは補正¹⁴C年代が2940±40年（年B.P.）、2σの曆年代でBC 1280～1010、流木Bは補正¹⁴C年代が3190±40（年B.P.）、2σの曆年代でBC 1510～1390の年代値が得られた。

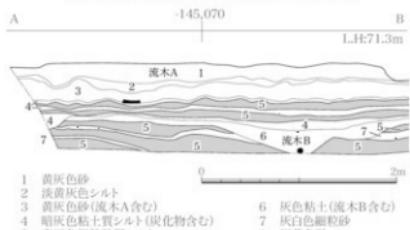
SD第28-2次調査では、遺構面上面から0.7～1.0m以下に堆積する青灰色シルトと灰色シルトとの混合土層（第8層）から流木Cを、さらに下層の遺構面上面から



SD第28-1次調査 発掘区全景 (南から)



SD第28-1次調査 発掘区遺構平面図 (1/200)



SD第28-1次調査 分析試料採取地点土層図 (1/50)

1.1～1.5 m下に堆積する灰色シルトと灰色細砂の混合土層（第19層）から流木Dをサンプル採取し放射性炭素年代測定を実施したところ、流木C・Dとも補正¹⁴C年代が 2960 ± 40 （年B.P.）、 2σ の曆年代でBC 1310～1040の年代値が得られた。

III 検出遺構

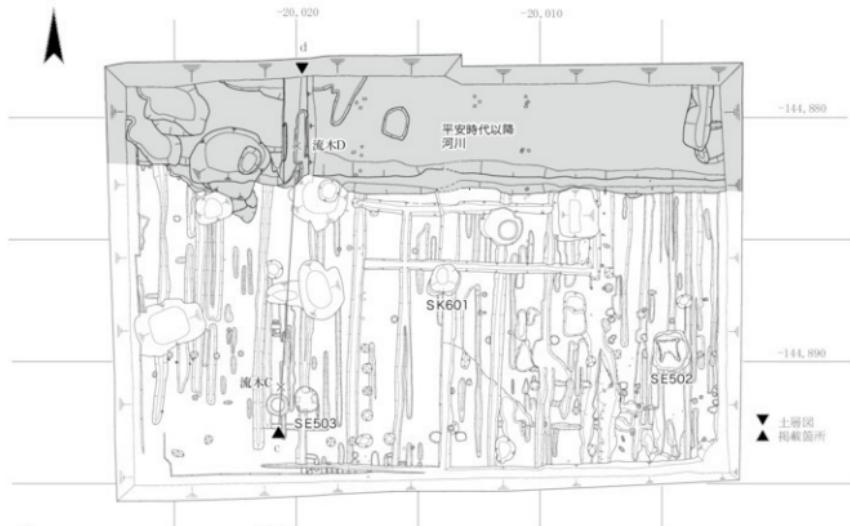
S D第28-1次調査では、時期不明の井戸1基（SE 501）と建物としてはまとまらない小柱穴がある。

S D第28-2次調査では、奈良時代の井戸1基（SE 502）、室町時代の井戸1基（SE 503）、土坑1基（SK 601）の他、平安時代以降の河川、奈良時代以降の建物としてはまとまらない小柱穴がある。遺構の詳細は一

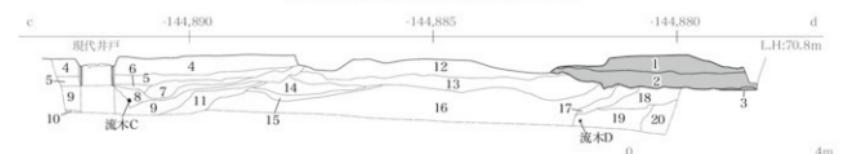
覧表に記す。

S E 501（S D第28-1次調査）発掘区北端で検出した井戸で、枠はすべて抜き取られていた。抜取坑埋土からは、時期が判明する出土遺物はなかった。

S E 502（S D第28-2次調査）発掘区東端で検出した井戸。掘形の平面形は隅丸長方形で、井戸枠の構造は方形縦板組隅柱横柱留で、内法が一辺0.7 mである。横幅0.15 m前後、厚さ0.01 m、残存長0.45～2.05 mの薄い板を2～3重に重ね合わせて縦板として用いている。隅柱は径0.1 m、残存長2.15～2.3 mで、4本とも転用材である。横柱は径0.05 m前後の丸太材の両先端を削って用いている。枠内は灰色粘土が堆積し、枠底



S D第28-2次調査 発掘区遺構平面図 (1/200)



- | | | |
|------------------------------|-------------------------------|-------------------------|
| 1 青黄灰色粘土ブロックと
灰色粘土ブロック混合土 | 6 青灰色シルト質細砂 | 11 青灰色シルト質細砂混合土 (木の葉含む) |
| 2 灰色粘土と灰色細砂混合土 | 7 淡灰色細砂 | 12 黄灰色砂 |
| 3 灰色シルト | 8 青灰色シルトと灰色シルト
混合土 (流木C含む) | 13 灰色砂と青灰色細砂混合土 |
| 4 青黄灰色粘土 | 9 灰色細砂 (木の葉含む) | 14 淡灰色細砂 |
| 5 灰色シルト | 10 灰色砂 | 15 灰色細砂 (流木含む) |

S D第28-2次調査 発掘区分析試料採取地点上層図 (1/100)

SD第28-1・2次調査 検出土遺物一覧表

遺構番号	掘形			枠造	内法 (m)	通過装置等 (m)	時期	主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)						
S E 501	不整形方	東西1.5×南北1.2以上	1.1以上	抜き取り			不明	(枠抜取坑) 燃えさし	SD 28-1
S E 502	隅丸長方形	東西1.5×南北1.6	2.5	方形籠板組 隅柱横枝留	一辺 0.7		8世紀 後半	(枠内) 8世紀後半 土師器皿A・杯ヶ皿・碗A・壺、須恵器皿A・杯ヶ皿B・杯ヶ皿蓋・壺・甕、製塙土器、軒丸瓦(6316B)、丸瓦、平瓦、壺、曲物、木製輪物、桃核、ひょうたん (掘形) 8世紀後半 土師器皿A・皿A・皿C・壺、須恵器皿B・皿B・皿C・杯ヶ皿蓋・壺・甕、製塙土器、丸瓦、平瓦。	SD 28-2
S E 503	円形	径1.0	1.3	抜き取り	底に0.1～0.3mの大なる自然石が部分的に残る。当初はこの上に井戸枠が据えられていたとされる。枠の抜取坑理	14世紀 後半～15世紀 前半	(枠抜取坑) 8世紀 軒丸瓦(6301B、6235種別不明)、軒平瓦(6761A)、丸瓦、平瓦、面戸瓦、文字平瓦、13・14～15世紀 瓦器、瓦器鉢、14世紀後半～15世紀前半 土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢、壺鉢、國產陶器鉢(瀬戸、美濃産)、11世紀以降 軒丸瓦(西大寺164A、右谷巴紋)、軒平瓦(西大寺350C、392型式不明)、格子平瓦、文字平瓦	SD 28-2	

では灰色粗砂が堆積する。掘形埋土からは8世紀後半の土器、瓦が少量出土した。枠内埋土からは8世紀後半の土器、瓦壺、木製品、桃核、ひょうたんが出土した。

S E 503 (SD第28-2次調査) 発掘区西半南端で検出した井戸で、掘形の平面形は円形で、枠は抜き取られて残存しない。掘形底には円形に敷かれていたとみられる0.1～0.3mの大なる自然石が部分的に残る。当初はこの上に井戸枠が据えられていたと考えられる。枠の抜取坑理土からは、8世紀の瓦、13～15世紀の土器、国産陶器、11世紀以降の軒瓦・文字平瓦等が出土した。

S K 601 (SD第28-2次調査) 発掘区中央で検出した土坑。埋土中からは13～14世紀後半の土器、11世紀以降の軒瓦、文字平瓦等が出土した。

平安時代以降の河川 (SD第28-2次調査) 発掘区北端で南岸から幅5.7m分検出した。調査地北西隣において県1985年調査で検出している河川の下流部分にあたる。南岸はX=-144,883m付近をほぼ一直線に東へ続いている。川底はほぼ平坦で北に向かって緩やかに下がっている。深さ約0.7mあり、埋土は3層に分かれ、上から青黄灰色粘土ブロックと灰色粘土ブロック混合土(土層図第1層)、灰色粘土と灰色細砂混合土(第2層)、灰色粘土と青灰色シルト混合土(第3層)の順に堆積している。埋土の堆積状況から人為的に一気に埋め立てられたものとみられる。埋土中からは8～9世紀の土師器、杯A・杯B・皿A・甕、須恵器皿B・杯または皿の蓋・壺・甕、製塙土器、軒丸瓦(6235種別不明)、丸瓦、平瓦、9～10世紀の縁軸陶器・灰軸陶器、12～13世

紀の瓦器、須恵器鉢(束縛産)、輸入陶磁器(青磁碗・白磁碗)、14～17世紀初頭の土師器皿・羽釜、瓦質土器浅鉢・壺鉢、国産陶器鉢(備前産)・皿(瀬戸・美濃産)・碗(肥前産)、土管、赤塗繪木挽、曲物、11世紀以降の軒丸瓦(巴紋)、軒平瓦(唐草紋・連珠紋)、丸瓦、平瓦等が出土した。

IV 出土遺物

8～9世紀の土師器、須恵器、黒色土器A類、製塙土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸瓦、文字瓦、壺、木製品、9～10世紀の縁軸陶器、灰軸陶器、12～13世紀の瓦器、須恵器、輸入陶磁器、14～17世紀初頭の土師器、瓦器、瓦質土器、国産陶器、木製品、11世紀以降の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、文字平瓦等があり、SD第28-1次調査で遺物整理箱4箱、SD 28-2次調査で29箱、合計33箱分が出土した。墨書・線刻土器と文字平瓦について記す。

墨書・線刻土器 井戸S E 502の枠内から墨書土器3点、線刻土器1点が出土した。墨書土器・線刻土器ともに土師器で、皿Aの底部外面に「一」(1)、「法皿」(2)、杯か皿の底部外面に「厨」(3)の墨書と皿Aの底部外面に「女」(記号カ)の線刻がある。いずれも口縁部外面から底部外面にかけてヘラケズリしており、8世紀後半頃のものとみられる。

この他、近代以降の複乱坑から、体部外面下端に「寧樂燒」と刻印のある陶器(4)が出土した。素焼きで灰白色に焼き上がる。明治以降のものと考えられるが、時期・产地とも不明である。



S D第28-2次調査 発掘区西半全景（南から）



S D第28-2次調査 発掘区東半全景（南から）



S D第28-2次調査 S E 502（南から）



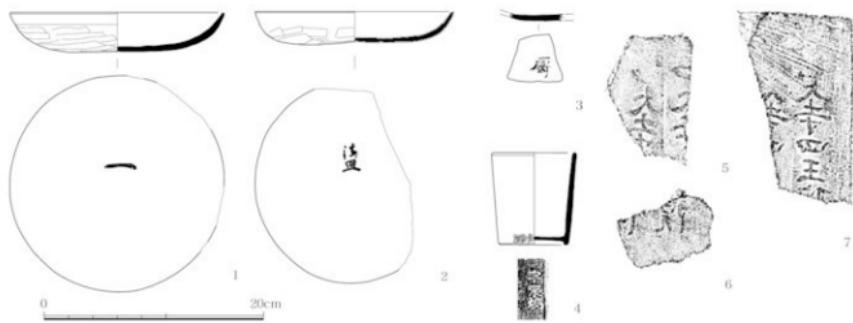
S D第28-2次調査 S E 503（南から）



S D第28-2次調査 S E 502 枠内（南から）



S D第28-2次調査 S K 601（左：東半・右：西半）（北から）



S D第28-2次調査 出土遺物 (1/4・4の拓本のみ1/2)

文字平瓦 井戸S E 503から10点、土坑S K 601から3点の計13点が出土し、いずれも破片である。

S E 503出土品には、8世紀の平瓦の端面に「矢」の押捺するもの、11世紀以降の平瓦の凹面に「李」の反転文字と「理」を押捺するもの、凸面に文字を押捺するものがある。凸面の文字は「西大寺四王院」の文字が反転したもの(5~7)が4点、判読不能のものが3点あり、いずれもタタキ板状のもので複数押捺する。S K 601出土品も、同様に凹面に「西大寺四王院」の文字を反転して押捺する。調査地西隣に位置する西大寺の伽藍の一つの四王院で用いられたものと考えられる。

V 調査所見

S D第28-1次調査では、奈良時代と断定できる遺構は検出することが出来なかつた。中世以降の水田造成時に遺構面が削平されて柱穴等が残っていないことも考えられるが、周辺の過去の調査でも建物が少ないことから、今回の調査地も遺構が希薄な地域であったとみられる。

S D第28-2次調査では、奈良時代の遺構は井戸が1基見つかったのみである。調査地は、平城京の条坊復原では一条条間路の南に隣接する右京一条三坊三坪の北西端にあたる。一条条間路は、調査地の東側約100mのH J第207次調査で南側溝が検出されている。この南側溝心の座標値(X = -144,871.36 m, Y = -19,803.30 m)と西大寺防災施設工事・発掘調査報告書で報告されている一条条間路心の想定上の振れ(W 0°27'11" S)を基に計算すると、調査地付近における条間路南側溝心はX = -144,873.005 m, Y = -20,011.30 mとなり、調査地北隣の現道路下に位置することがわかる。このことから、調査地は一条条間路に面する宅地端にあたり、建物は今回検出した井戸の南側にあったことが考えられる。

なお、調査地は、8世紀後半には西大寺の境内地とな



S D第28-2次調査地と条坊・河川との関係図 (1/4000)

る。今回、8世紀後半の井戸S E 502の枠内からは、「法皿」と墨書きされた土師器皿Aが出土しており、西大寺との関連がうかがえる。

平安時代以降については、調査地北端で河川を、その南側で室町時代の井戸と土坑を各1基ずつ検出した。河川は、調査地北西隣の一条条間路と西三坊間東小路との交差点東にあたる地点で上流部分が見つかっており、この地点では河川は北西から南東方向に流れが、下流にあたる調査地内では、東にまっすぐ流れている。

河川の南岸は一条条間路南側溝想定地点から南に約10mと近接した地点でほぼ一直線に東に続いていることから、平安時代以降に一条条間路を踏襲して河川が付け替えられたことが考えられる。北岸については、調査地北側、近鉄西大寺駅南隣接地の調査SD第27次調査では、河川を検出していないことから、SD第27次調査地の南側に位置してすると考えられる。河川は室町時代末頃には埋め立てられ、現在北側で暗渠となっている溝へ付け替えられたとみられ、この時期を境に調査地一帯の土地利用の変化があったことがうかがえる。

なお、調査地一帯にひろがる奈良時代の遺構面を形成する河川は、埋土中に含まれる流木の放射性炭素年代測定による分析結果から、縄文時代晚期頃に埋没していたことがわかった。

(久保清子)

(2) 平城京跡（右京一条二坊十三坪）の調査 第637次

I はじめに

調査地は平城京の条坊復原では右京一条二坊十三坪の北西端にあたり、西側には西二坊大路が想定される。十三坪では、これまでに坪の南西部において調査（HJ第578・587・625次）を実施しており、一条南大路、十三坪を南限する東西溝、奈良～平安時代の掘立柱建物・掘立柱列、井戸、土坑等の他、古墳時代の土坑、溝を検出している。このため、今回の調査は十三坪の様相並びに奈良時代以前の遺構についても確認することを目的として実施した。調査地南東部分は旧建物の基礎による遺構面の破壊が予想されたため、それ以外の箇所で発掘区を設定し、作業の都合上2回に分けて調査を実施した。

なお、今回報告の遺構番号は、十三坪内での通し番号を用いた。

II 基本層序

発掘区内の層序は、東半では造成土（0.4～0.5m）、その下に黒灰色土（耕土・0.2m）と続き、現地表下0.6mで橙灰色土、茶灰色砂上面に達する。西半では造成土（0.1～0.2m）の下に黒灰色土（耕土・0.1m）と続き、現地表下0.2mで黄灰色粘土上面に達する。

発掘区西端は、一段低く下げられており、造成土（0.6～0.8m）の下に黒灰色土（耕土・0.1～0.2m）、橙灰色粘土と灰褐色砂混合土（0.15m）と続き、現地表下1.0mで黄灰色シルト上面に達する。黄灰色粘土・黄灰色シルト以下は、弥生時代以前の河川の埋土で、遺構はすべてこの河川埋土上面で検出した。遺構面の標高は東端で71.2m、西端で70.2mである。

III 検出遺構

検出した遺構は、古墳時代の土坑1基（S K 08）、奈良時代の掘立柱建物3棟（S B 224～226）と井戸2基（S E 510・511）、土坑1基（S K 608）、土器埋納

遺構1基（S X 805）、鎌倉時代の溝1条（S D 108）、土坑1基（S K 609）、奈良時代以降の建物としてはまともらない小柱穴がある。遺構の詳細は一覧表に記す。

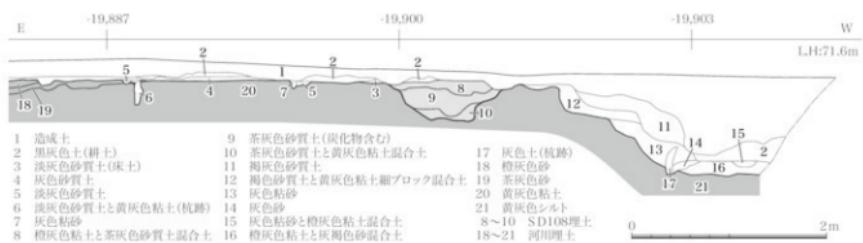
古墳時代の遺構

S K 08 挖形の平面形が円形で、径1.1～1.2m、深さ0.65mの土坑である。坑底は湧水層に達している。埋土は大きく2層に分かれ、上層の暗灰色粘土と少量の黄灰色粘土ブロック混合土、灰色細砂と淡黄灰色粘土細ブロック混合土から古墳時代前期後半頃の土師器甕・高杯の破片が少量出土した。下層の暗灰色粘土と灰色細砂混合土、灰色細砂と灰色粘土混合土からは古墳時代前期後半頃の土師器甕1個体分が出土した。

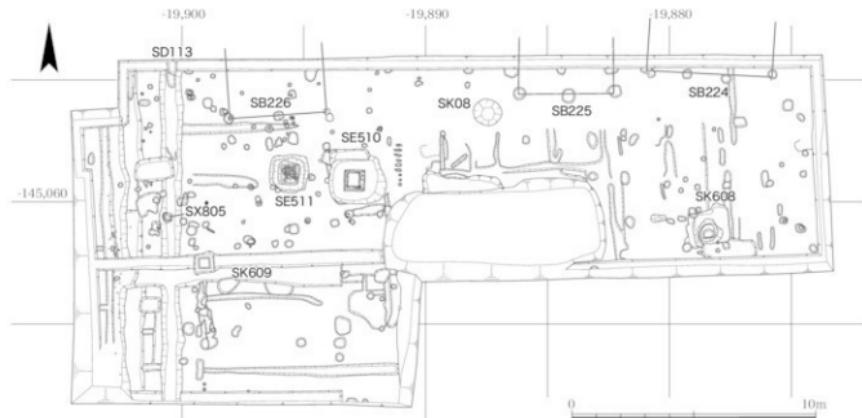
奈良時代の遺構

S B 224～226 発掘区北端で検出した掘立柱建物で、いずれも発掘区外へ続く。建物の主軸の振れは、S B 224は北で東にやや振れる。S B 225は国土方眼方位とほぼ同じ、S B 226は北でやや西に振れる。

S E 510・511 S E 510は挖形の平面形が隅丸長方形の井戸で、井戸枠の構造は内法が一辺0.7mの方形縦板組横枠留で、大半が抜き取られており、最下段横枠と縦板の一部のみ残る。その下には集水用に方形横板組が2段設けられている。その内法は東西0.5m、南北0.55mで、横板組の外側には横幅0.11～0.24m、厚さ0.03m前後、残存長0.24～0.62mの縦板を並べ、さらに四隅には幅0.025～0.07m、厚さ0.03m、長さ0.71～0.9mの板状の杭を5本打ち込んで横板が外側に倒れないよう固定している。また東面の裏込め上面には縦板の外側に5～15cm大的な自然石を高さを揃えて敷いている。掘形埋土からは、8世紀中頃～後半の土器、瓦、埠の小片が少量出土した。横板組枠内埋土からは8世紀中頃～後半の土器、瓦の小片及び桃核が、縦板組枠



H J 第637次調査 発掘区南壁土層図 (1/50)



H J 第637次調査 発掘区遺構平面図 (1/200)

H J 第637次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	細形			柱 内法 (m)	通過装置等 (m)	時期	主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)					
S E 510	隅丸長方形	東西2.4×南北1.9	1.6	方形縦板 組横棟留	一辺 0.7 方形横板組 2段 (東西0.50×南北0.55)・ 縦板	8世紀 中頃～後半 不明サメイド溝片	(柱抜取坑) 古墳時代後期 円筒埴輪、8世紀後半 土 師器皿A・杯B・丸瓦・高杯・甕・須恵器杯A・縫A・ 杯B・縫B・杯・縫蓋・甕・壺・鉢・製埴土器・軒丸瓦(瓦 当欠損)・軒平瓦(6666A)・丸瓦・平瓦・道具瓦・時期 不明サメイド溝片 (縦板組枠内) 8世紀中頃～後半 土師器杯A・縫A・ 高杯・甕・須恵器杯B・縫B・杯・縫蓋・甕・製埴土器・ 平瓦・桃核 (縦板組枠内) 8世紀中頃～後半 土師器杯A・縫A・甕・ 須恵器杯B・縫B・甕・壺・丸瓦・平瓦・桃核 (縫形) 8世紀中頃～後半 土師器杯・甕・壺・製埴土器・ 丸瓦・平瓦・壺・縫蓋・甕・壺・甕・丸瓦・壺	縦板組枠 上部は抜き取られ ている。 最下段横 板と縦板 の一部残 存。
S E 511	隅丸方形	東西1.6×南北1.6	1.0	抜き取り	方形横板組 1段 (東西0.63×南北0.68)・ 縦板	8世紀	(柱抜取坑) 8世紀 土師器杯・甕・壺・須恵器・丸瓦・ 平瓦 (縫形) 8世紀 土師器杯・甕・壺・丸瓦	S A 204 より古 い。

遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
S K 08	円形	径1.1～1.2	0.65	古墳前期	古墳時代前期後半 土師器甕・壺・高杯	湧水層に達している。
S D 113	南北溝	幅1.2m、長さ14m以上	0.4	13世紀	古墳時代前期後半 土師器高杯、8世紀 土師器杯A・縫A・ 杯B・縫B・甕・壺・須恵器皿A・杯B・縫B・杯・ 縫蓋・甕・壺・製埴土器・平瓦。13世紀 瓦器皿	S X 805 より新しい。
S K 608	不整形	東西1.4～1.6×南北1.8	0.6	8世紀	古墳時代前期 土師器甕・壺・高杯、8世紀 土師器 杯・縫・甕・須恵器杯・壺・瓦片	
S K 609	不整形	東西0.9×南北0.8	0.2	13世紀	8世紀 須恵器片・平瓦。13世紀 土師器羽釜・甕・ 瓦器皿	
S X 805	隅丸方形	東西0.43×南北0.43	0.8	8世紀	8世紀 土師器甕C	S D 113 より古い。

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法 (m)		柱穴の深さ (m)	備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行		
S B 224	不明	3以上×1以上	4.65		西から 1.5-1.5-1.65		0.2～0.4	
S B 225	不明	2以上×1以上	3.9		1.95等間		0.2	
S B 226	不明	2以上×1以上	3.9		1.95等間		0.1～0.2	



H J 第637次調査 発掘区西半全景（東から）

内埋土からは、8世紀中頃～後半の土器、瓦の小片及び桃核がそれぞれ少量出土した。井戸枠の抜取坑埋土からは8世紀後半の土器、瓦等が出土した。

S E 511 は掘形の平面形が一辺 1.6 m の隅丸方形の井戸である。枠は抜き取られており、井戸底に基盤枠とみられる方形横板組1段の痕跡とその中の礫敷だけが残っていた。当初この上に一辺 0.7 m 前後の方形組の井戸枠が据えられていたものとみられる。井戸枠の抜取坑埋土と礫敷内からは、8世紀の土器、瓦の小片が少量出土した。

S K 608 掘形の平面形が不整形の土坑である。埋土は上層の暗灰色粘土と下層の暗灰色粘土と黄灰色粘土混合土に分かれ、古墳時代前期の土師器、8世紀の土器、瓦片が少量出土した。

S X 805 S D 108 溝底で検出した掘形の平面形が隅丸方形の土坑で、坑底には完存する8世紀の土師器椀C 1点が伏せた状態で埋置されていた。椀内は土が充満しており、他に内容物はなかった。

鎌倉時代の遺構

S D 108 発掘区西端付近で検出した南北方向の素掘りの溝である。埋土は3層に分かれ、上から橙灰色粘土と茶灰色砂質土混合土（土層図第8層）、炭化物を含む茶灰色砂質土（第9層）、茶灰色砂質土と黄灰色粘土混合土（第10層）の順に堆積している。埋土中からは8世紀の土器、瓦、13世紀の瓦器皿が少量出土した。

S K 609 掘形の平面形が不整形の土坑である。埋土は炭化物を含む茶灰色土と黄灰色粘土ブロック混合土



H J 第637次調査 発掘区東半全景（東から）

で8世紀の土器、瓦、13世紀の土器小片が少量出土した。

この他、建物としてまとめられない小柱穴の中には13世紀頃の土器が出土するものがある。

IV 出土遺物

古墳時代の土師器、円筒埴輪、8世紀の土師器、須恵器、製塙土器、土製品、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、壇、木製品、13世紀の瓦器、土師器、時期不明サマカイト剥片等が遺物整理箱10箱分出土した。大半が8世紀中頃～後半のものである。

V 調査所見

今回の調査では、南隣接地の調査（H J 第625次）同様、古墳時代前期の土坑を検出した。このことから調査地の北側一帯においても古墳時代の遺構が存在しているとみられる。

奈良時代については、建物や井戸を検出したことから、坪の北西端も宅地内の一画にあたることがわかった。建物は発掘区外に続いたため、全体の規模はわからないが、その配置から2時期以上の変遷があったことが伺える。建物の南側に位置する井戸と土器埋納遺構は、十三坪の南北にある一条南大路北側溝心と推定一条条間南小路南側溝心を基準とした場合の坪の南北9/16ライン付近に位置しており、坪内の宅地利用を示すものとみられる。

鎌倉時代については、南北溝の東側で土坑の他小柱穴を複数検出しておらず、建物配置は不明であるが溝の東側が宅地の一画であったと考えられる。

（久保清子）



H J 第637次調査発掘区 重直モザイク写真（左が北）



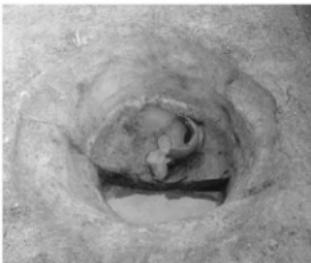
S E 510（南から）



S E 511（北から）



S X 805（東から）



S K08（西から）

3. 平城京跡（右京二条二坊九坪）の調査 第632次

事業名 共同住宅新築	調査期間 平成22年7月26日～8月23日
届出者名 日本政策金融公庫	調査面積 330m ²
調査地 奈良市西大寺国見町1丁目2162-5	調査担当者 池田裕英

I はじめに

調査地は平城京の条坊復原では右京二条二坊九坪の中央北端に位置する。この調査地の北隣接地で行われたHJ第485次調査では一条南大路と北側溝の検出が想定されたが、それらの遺構は検出されなかった。そのため、一条南大路は第485次調査地の南にあるのではないかと推定されており、本調査ではこの遺構の検出を主眼とした。また、過去に周辺で実施した発掘調査で古墳時代や平安～鎌倉時代の遺構も検出しており、この時期の遺構の存在も想定された。しかし、調査に先立つ既存建物解体時の工事立会で遺構面が壊されている部分があることがわかったり、その部分を避けて発掘区を設けることとした。さらに調査を進める中で、発掘区北半の約2/3が以前の建物の基礎で遺構が壊されていることがわかつたため、発掘区を一部縮小して調査を行った。

II 基本層序

発掘区内の層序は、上から造成土、灰黒色土（耕土）、淡褐色砂質土（床土）、橙茶色土、灰褐色砂質土と続き、現地表下約0.7mで褐茶色砂の地山にいたる。地山は西から東へと緩やかに下る。地山上面の標高は70.2～70.4mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

III 検出遺構

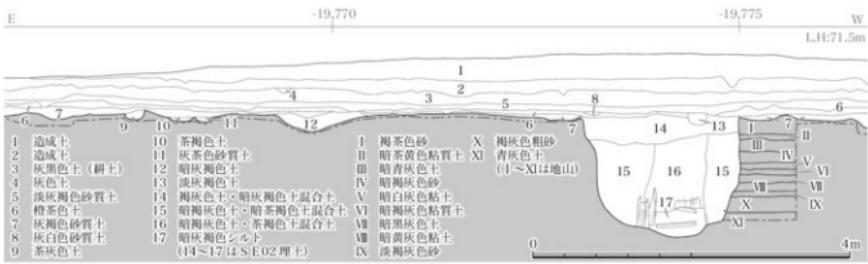
検出した遺構には、奈良時代の溝、井戸、土坑、柱穴、平安時代の土坑、小柱穴がある。

奈良時代の遺構 溝1条（S D 01）、井戸1基（S E 02）、土坑3基（S K 03～05）を検出した。S D

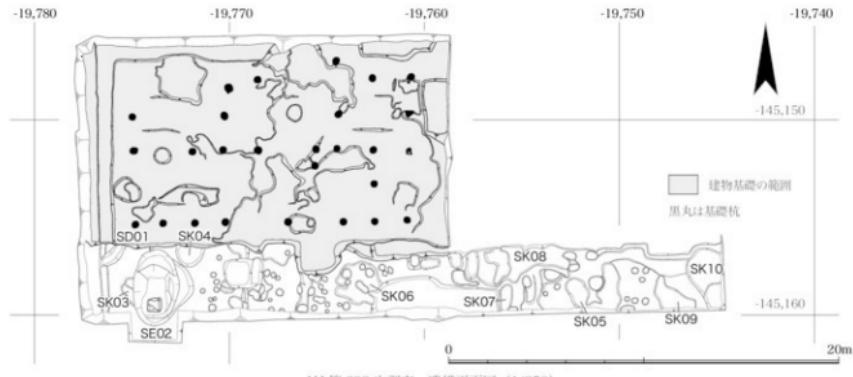


HJ第632次調査 発掘区位置図(1/5,000)

01は東北～西南方向の斜行溝である。幅0.6m、深さ1.4mである。検出範囲が狭く斜行してはいるが、埋土から奈良時代の遺物が出土しており、奈良時代の遺構と考えておきたい。S E 02は南北4.1m、東西3.1mの平面梢円形の掘形内に一辺0.7mの方形縦板組柱留横桟留の枠を据えた井戸に復原できる。枠は掘形の南側に寄せてつくられており、枠材の多くは壊して残存しない。掘形から出土した土師器には奈良時代中頃のものがみられ、枠内からは8世紀後半の土師器・須恵器の他、軒平瓦（6721H）が1点出土しており、奈良時代中頃に作られ、後に使われなくなったとみられる。S K 03は東西0.6m以上、南北1.4mの土坑である。重複関係からS E 02より古いことがわかり、奈良時代前半～中頃の遺構と考えられる。S K 04・05は、奈良時代の遺構ではあるが、出土した土器は少量で小片が多く、詳細な時期は不明である。柱穴もいくつか検出しているが、



HJ第632次調査 南壁土層図(1/60)



調査範囲が狭いこともあり、建物としてはまとまらない。

平安時代の遺構 11～12世紀の土坑（SK 06～10）はいずれも平面が不整形で、深さも0.1～0.2mである。各土坑からは11世紀末～12世紀初頭にかけての土師器皿片や瓦器軸・皿片が奈良時代の須恵器・土師器とともに出土している。土坑の他にもこの時期の遺物が出土する小柱穴が多数あるが、性格は不明である。

IV 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は遺物整理箱で13箱分あるが、その多くは包含層から出土しており、遺構面が削られていることが推測される。主な出土遺物には8世紀の土師器・須恵器・製塙土器・土馬や甕・瓶などの土製品、軒平瓦（6721H）、熨斗瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘、時期不明の灰釉陶器体部、11世紀末～12世紀の土師器・瓦器がある。SK 07からは平安時代の土器に混じって奈良時代の東海地方産とみられる須恵器甕が出土しており、口縁部内側には「中」の線刻がある。遺物包含層からは埴輪片や古墳時代後期から飛鳥時代にかけての土師器高杯・須恵器杯身・輸入磁器として12～13世紀の華南產とみられる白磁が出土している。

V 調査所見

今回の調査では、発掘区の北半約2/3が以前の建物基礎によって大きく掘削され、遺構が全く残存していないかった。このため、先に述べたように本調査地の北で行ったHJ第485次調査の結果から検出が想定された一条南大路に関する遺構は確認できなかった。削平されたために遺構がなかったのか、道路が両調査区の間を通っているのかは不明である。また、奈良時代の井戸や柱穴、土坑を検出してはいるものの、遺構が残存していた範囲



が狭いこともあり、周辺での調査例と同様に建物としてまとまるものが少なく、建物や井戸の宅地内での配置や変遷もよくわからない。

本調査の北隣接地で行った第485次調査では遺構が検出されていないものの古墳時代の遺物が出土し、第617次調査では古墳時代前期の溝、土坑が検出されている。本調査でも古墳時代の遺構がないものの同時代の遺物が出土しており、古墳時代の遺構は削平されてしまったのではないかと思われる。

(池田裕英)

4. 平城京跡（左京六条一坊十一坪）の調査 第633次

事業名 宅地造成	調査期間 平成22年8月30日～9月18日
届出者名 株式会社 ホクシン	調査面積 181m ²
調査地 奈良市柏木町395-6他	調査担当者 安井宣也

I はじめに

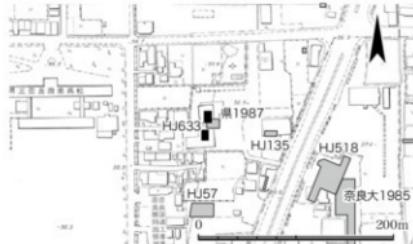
調査地は、平城京の条坊復原では左京六条一坊十一坪の東南部にある。地形的には、北西から南東に下る秋篠川の沖積面と北から南に下る佐保川の沖積面とか接する場所にあたる。現状は宅地であるが、旧状は湿润な水田で、付近一帯で条坊の遺存地割がみられた。

調査地内では、昭和62年度に奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿原研）が発掘調査を実施している（以下、県1987年調査）。¹⁾それによれば、水田下面0.5mの青灰色砂質土及び淡青灰色砂質土上面（標高54.8m）で時期不明の東西方向の掘立柱列（S A-01）、大型の柱穴2基と南北方向の小河道（S D-01）を検出している。発掘区南寄りは自然河道で、前述の小河道が最終埋没時の東西方向の流路（S D-02）に注ぎ込むことを確認している（平面図参照）。小河道・流路の埋土や遺物包含層から、弥生時代後期の弥生土器、古墳時代の古式土師器、奈良時代の土器・軒瓦が出土している。検出遺構や出土遺物が非常に少ないことから、調査地内は奈良時代まで河川が流れしており、日常的な生活空間に伴う遺構は尋ねられなかったと推察している。

佐保川の沖積面にあたる調査地のすぐ東方で実施したH J第135次調査（昭和62年度）²⁾・H J第518次調査（平成16年度）³⁾や、すぐ南方で実施したH J第57次調査（昭和58年度）⁴⁾・H J第376次調査（平成9年度）⁵⁾で、暗褐色や茶褐色の粘土の地山上面（標高54.5～55.0m）で奈良時代の掘立柱建物・堀・井戸などを検出しており、H J 518次調査では同じ面で室町時代後半頃に埋没する北東から南西に流れる河川も検出している。

また、秋篠川の沖積面にあたる調査地の西方約200mの奈良朱雀高校内で平成17・18年度に橿原研が実施した調査⁶⁾では、黄褐色粘土や黄灰色砂の地山上面（標高55.1～55.3m）で奈良時代の条坊遺構や宅地に関連する掘立柱建物・堀などの遺構を検出している。

今回の調査は、十一坪東南部の様相の確認を主な目的として、道路予定地に北発掘区（107.5m²）、調整池予定地に南発掘区（73.5m²）を設定して実施した。なお、北発掘区の南寄り約3mは、遺構面の検証を目的として、



H J第633次調査 発掘区位置図(1/5,000)
県1987年調査の発掘区を再検出した。

II 基本層序

北発掘区 造成土（厚さ1.5～1.6m）、耕土の灰色シルト（厚さ0.3m）、水田床土の灰色砂質シルト（厚さ0.2m）、青灰色シルトブロック土（厚さ0.2～0.3m）の下で、西側ではオリーブ灰色砂質シルトの地山になるが、東側では地山上面が0.2m低くなり、この部分に8世紀の土器片を含む青灰色シルトブロック土がみられる。地山の様相は西方の調査地と似ている。

水田床土のうち、上層の灰色砂質シルトは湿地の泥層と似ており、乾裂痕はみられない。また、同下層の青灰色シルトブロック土は細根の孔隙や斑鉄が多い。8世紀の土器片を含む青灰色シルトブロック層は、後述する古墳時代の土坑SK 02上を覆い、掘立柱塀S A 03・04の柱穴が上面から掘削されていることから、奈良時代の宅地に伴う整地層と判断した。

奈良時代の遺構面は地山及び整地層上面で、その標高は55.0mである。また、地山上面は古墳時代の遺構面で、その標高は54.8～55.0mである。

南発掘区 造成土（厚さ1.6m）、耕土の灰色砂質シルト（厚さ0.3m）、水田床土の黄灰色砂質シルト（厚さ0.2m）、氾濫堆積層の青灰色砂質シルト～粘土（厚さ0.2～0.3m）の下で、南東隅では氾濫堆積層の青灰色砂質シルト～粘土（厚さ0.1～0.3m）をはさんで黒褐色砂質シルトの地山となるが、他の部分では暗灰黄色シルト質粘土（厚さ0.1m）をはさんで南流する河川の埋土となる。地山の様相は東方の調査地と似ている。

河川の埋土は上から灰黄色砂質シルト、灰色シルト質砂

と灰黄色砂の互層となる。その直上の暗灰黄色シルト質粘土は下層との層界が波状に変形した埋没土壤で、東壁断面において河川の岸に沿う駐畔を確認したことから、地盤が軟弱で潤湿な旧水田の耕土と判断した。

水田床土の黄灰色砂質シルトから18世紀以降の土器片、氾濫堆積層の青灰色砂質シルトへ粘土から13～14世紀の土器片や8世紀の瓦片が出土した。

奈良時代の遺構面は地山上面と考えられる。その標高は54.5mで、北発掘区に比べて0.3～0.5m低い。

III 検出遺構

(1) 北発掘区

地山上面で古墳時代以前の溝S D 01と古墳時代後期の土坑S K 02を、地山及び整地土上面で奈良時代の掘立柱塀S A 03・04を検出した。検出遺構の概要は一覧表に示すとおりである。

S D 01 発掘区西辺部で検出した南北方向の溝で、県1987年発掘区の再検出箇所でも検出した。埋土は暗灰黄色砂質シルトで地山ブロックを含む。重複関係から、後述の掘立柱塀S A 03より古い。

S K 02 発掘区北東部で検出した土坑。埋土は水成堆積層で、上から灰色砂質シルト（厚さ0.2m）、灰色砂（厚さ0.1m）である。灰色砂質シルトから古墳時代中期後半～後期の土器片が出土した。西肩中央部では外側への侵食がみられ、前述したS D 01の東辺の埋土まで及ぶことから、S D 01の埋没後に形成されたことがうかがえる。重複関係から、掘立柱塀S A 03・04より古い。

S A 03・04 発掘区南東部で検出した掘立柱列で、県1987年調査の遺構の検出状態から、塀と判断した。S A 03は南北方向の塀で、北側の2つの柱穴に柱痕跡が残り、北から3番目の柱は掘形より大きな柱抜取穴が掘削されて抜き取られている。北から2番目の柱穴の埋土から8世紀の平瓦が出土した。S A 04はS A 03の北端から東に延びる東西方向の塀である。

(2) 南発掘区

地山上面と、南流する河川上を覆う旧水田耕土の暗灰

黄色シルト質粘土上面で遺構検出を行った。

地山上面では、時期不明の柱根が残る柱穴1基を検出した。掘形は平面が一辺0.5mの方形で、深さは0.1m。埋土は地山ブロックで、出土遺物はない。

旧水田耕土の暗灰黄色シルト質粘土上面では、ウシやヒトの足跡が数多くみられた。また、一辺0.4～0.6mの平面方形で深さ0.3～0.4mの小土坑7基と幅0.2m、深さ0.1mの南北方向の耕作溝1条を検出した。埋土は青灰色砂質シルトである。

なお、河川の川幅は10m以上とみられる。

III 出土遺物

遺物整理箱1箱分あり、主なものに古墳時代中期後半～後期の土器、8世紀の土器・瓦、13～14世紀の土器がある。全て細～小片で、器種が把握できるものは少ない。

古墳時代中期後半～後期の土器には、土師器甕・瓶・杯、須恵器蓋杯がある。土師器は布留式の最新段階かそれより新しい。須恵器蓋杯は体部の一部が残るのみで、型式は不明。大半が北発掘区で検出したS K 02の埋土の灰砂質シルトから出土した。

8世紀の土器には須恵器甕・杯蓋があり、北発掘区の宅地に伴う整地層から出土した。また瓦には丸・平瓦があり、北発掘区の宅地に伴う整地土や掘立柱塀S A 03の柱穴埋土から出土した。

13～14世紀の土器には瓦器椀・皿、土師器羽釜があり、南発掘区の氾濫堆積層の青灰色砂質シルトへ粘土から出土した。瓦器椀には、底部内面のミガキ調整がらせん状で体部と別に施す13世紀頃のものと矮小化して内面全体に一連のミガキ調整を施す14世紀頃のものがある。

IV 調査成果

北発掘区では、地山上面で古墳時代以前の溝S D 01と古墳時代後期の土坑S K 02、奈良時代の整地層上面で掘立柱塀S A 03・04を確認したことから、古墳時代後期以前に開発された場所を奈良時代に整地したうえ宅地として利用していたことがわかった。古墳時代以前

H J 第633次調査 検出遺構一覧表

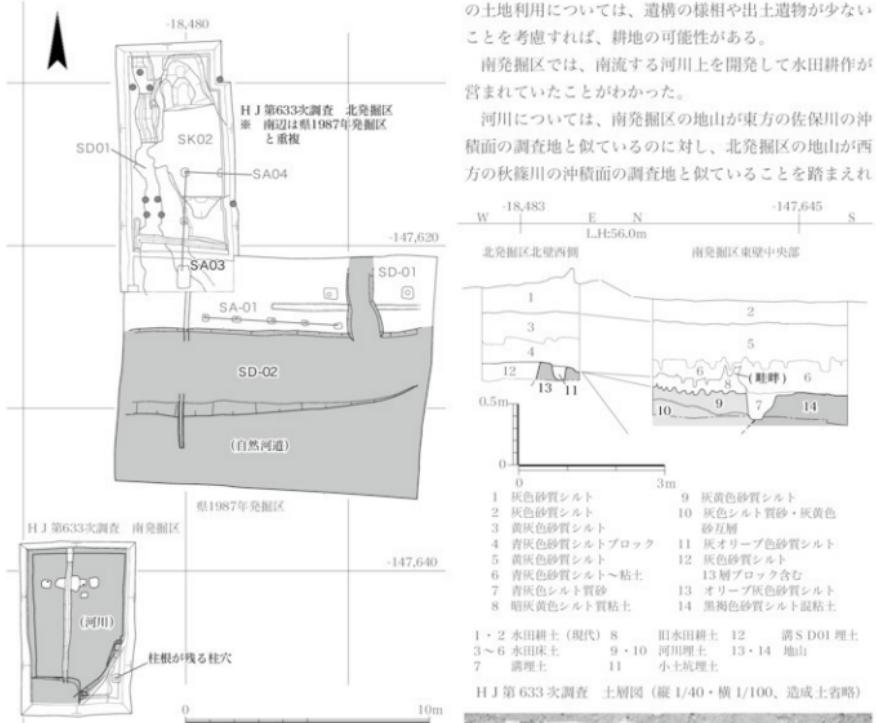
遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
SD01	南北溝	長さ16以上×幅0.7～1.0	0.3			発掘区南北に続く
SK02	楕円形	東西4.0×南北10.0	0.2	古墳時代中期後半～後期	土師器（甕か鍋、瓶、杯）、須恵器（蓋杯）	土器は灰砂質粘土混じりシルトの埋土から出土

遺構番号	方向	規模 (間)	全長 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
S A 03	南北	2	6.0	3.0	0.1～0.2	北端と中央の柱穴は一辺0.5m程度で、柱痕跡が残る。南端は柱抜取穴。
S A 04	東西	1以上	2.1以上	2.1	0.1～0.2	S A 03の北端に接続し発掘区外東へ続く。柱穴は一辺0.5m程度。

の土地利用については、遺構の様相や出土遺物が少ないことを考慮すれば、耕地の可能性がある。

南発掘区では、南流する河川上を開発して水田耕作が営まれていたことがわかった。

河川については、南発掘区の地山が東方の佐保川の沖積面の調査地と似ているのに対し、北発掘区の地山が西方の秋篠川の沖積面の調査地と似ていることを踏まえれ





HJ第633次調査 北発掘区全景（南東から）

ば、調査地付近では佐保川の沖積面の西縁部を北東から南西に流れていたことが推察できる。

河川上を開発して水田耕作が営まれた時期は、直上に堆積する青灰色砂質シルト～粘土の出土遺物の時期を勘案すれば、鎌倉時代末～室町時代初頭の可能性があり、河川の埋没時期の下限は鎌倉時代と考える。

今回の調査成果から、県1987年調査の所見について、以下の修正すべき点が指摘できる。

まず、奈良時代に埋没する自然河道や小河道S-D-01)については、今回の調査の南発掘区で確認した河川や南・北発掘区の土層の様相を勘案すれば、南発掘区でみられた13～14世紀の土器片を含む青灰色砂質シルト～粘土と対応する氾濫堆積層の堆積範囲を誤認している可能性が高い。

次に、掘立柱列S-A-01や大型の柱穴2基を時期不明としていたが、これらの柱穴の形状は奈良時代の特徴があり、今回の調査の北発掘区における遺構の検出状態、土層の層序・層相も勘案すれば、奈良時代のものとみて

差し支えない。

したがって、奈良時代まで河川が流れしており、日常的な生活空間ではなかったとの推察は妥当でなく、奈良時代には河川に隣接するが日常的な生活空間であったとみるのが妥当と考える。
(安井宣也)

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所「奈良市柏木町398-399番地（平城京左京六条一坊十一・十六坪）の調査」『奈良県遺跡調査概報 1987年（第2分冊）』1990
- 2) 奈良市教育委員会「平城京左京六条一坊十四坪の調査 第135次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』1988
- 3) 奈良市教育委員会「平城京跡（左京六条一坊十三坪）の調査 第518次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成16年度』2007
- 4) 奈良市教育委員会「平城京左京六条一坊十二坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984
- 5) 奈良市教育委員会「平城京左京六条一坊十三坪の調査 第376次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成9年度（第2分冊）』1998
- 6) 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京六条一坊三～六坪」『奈良県遺跡調査概報 2005年（第1分冊）』2006
奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京六条一坊四坪」『奈良県遺跡調査概報 2006年（第1分冊）』2007

5. 平城京跡（左京五条六坊五坪）の調査 第634次

事業名 都市計画道路六条奈良阪線事業
届出者名 奈良市長
調査地 奈良市南京終町地内

調査期間 平成22年10月5日～平成23年2月3日
調査面積 535m²
調査担当者 宮崎正裕

I はじめに

調査地は、J R桜井線の北側に位置する南北約200mの細長い敷地で、平城京の条坊復原によると調査地中央に五条大路が、北半部分が左京五条六坊五坪に、南半部分が平城京外にあたる。

調査は、北側から順に第1～4発掘区を設定して実施した。第1・2発掘区は五坪内に相当し、第3発掘区の北半に五条大路が想定される。第3発掘区南半および第4発掘区は平城京外に相当する。調査は五条大路の検出を主目的とし、五条五坊の南側の様相を把握することも視野に入れて実施した。

II 基本層序

第1発掘区 発掘区内の基本層序は、上から造成土(0.5m)、暗灰色砂質土(耕土、0.15m)、灰茶色砂質土(0.1m)、灰茶色粘砂(0.1m)と続き、現地表下0.8m前後で黄橙色粘砂の地山に達する。地山の標高は概ね74.4mである。

第2発掘区 発掘区北半の基本層序は、上から造成土(0.2～0.5m)、黒灰色砂質土(0.2m)、灰茶色砂質土(0.2m)と続き、現地表下0.75m前後で黄橙色粘砂の地山に達する。地山の標高は概ね74.4mである。発掘区北半の地山上面には灰橙色粘砂(厚さ～0.15m)が堆積しており、この層の上面が奈良時代の遺構面である。

第3発掘区 発掘区北半の基本層序は、上から造成



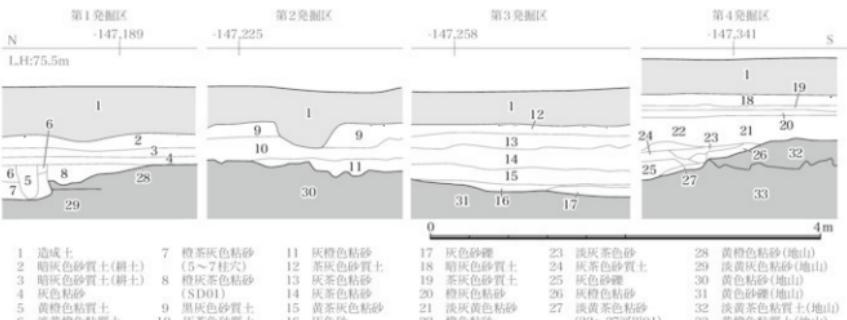
HJ第634次調査 発掘区位置図(1/5,000)

土(0.3～0.5m)、灰茶色砂質土(0.1～0.2m)、茶灰色粘砂(0.2m)、灰茶色粘砂(0.2m)と続き、現地表下0.8m前後で黄色粘砂または黄色砂石礫の地山に達する。地山の標高は概ね74.4mである。発掘区南端の地山は橙黄色粘砂で、北側に比べ約0.2m高く、標高は74.6mである。

第4発掘区 発掘区南端の基本層序は、上から造成土(0.4m)、暗灰色砂質土(0.1m)、灰茶色砂質土(0.05m)、橙灰色粘砂(0.05m)、淡灰黄色粘砂(0.3m)と続き、現地表下0.9m前後で黄橙色粘質土の地山に達する。地山の標高は概ね74.6mである。

III 検出遺構

第1～4発掘区あわせて、古墳～室町時代の各時期の溝・土坑などの遺構を約22基検出しているが、全体的



HJ第634次調査 発掘区土層図(1/50・第1～3発掘区は東壁、第4発掘区は西壁を反転)

に遺構密度が低く、出土遺物量も少ない。各遺構の詳細は一覧表に記し、主要なものを発掘区ごとに記す。

第1発掘区 S D 01 は、幅 4.5 ~ 6.0 m、深さ 0.85 m の溝で、ほぼ直線的に東西方向にはしる。茶褐色系の砂質土・粘質土で埋まっており、下層の淡暗灰色粘土層以下（土層図 24 ~ 30）からは、古墳時代中期の埴輪の小片が出土した。遺構の形態と出土遺物から、埴丘を削平された方墳の南側の周濠と考えられる。大部分が発掘調査範囲北側に統くため、古墳の形態・規模は不明である。溝内からは少量の拳大以下の石が出土するが、葺石を想定できるだけの量ではない。また円筒埴輪列やその抜取痕跡もなく、埴丘盛土も確認していない。

溝の上層埋土（土層図 8 ~ 23）からは、7 ~ 8世紀の土器が出土しており、平城京造営時に古墳が削平され、周濠も埋められたと考えられる。

その他、発掘区東壁際で一辺約 0.4 m の小柱穴を検出しが、建物としてはまとまらない。

第2発掘区 S A 03 は南北 1間（1.8 m）の掘立柱列で、発掘区外北に統く。掘立柱建物の南西隅部の可能性もある。

S K 06 は南北・東西ともに 1.8 m、深さ 1.2 m で、8世紀代の土師器片が少量出土した。上層の埋土には、こぶし大の石が大量に含まれる。湧水層に達しており、枠か抜き取られた井戸の可能性が考えられる。

S D 05 は幅 1.5 m で、深さ 0.2 m のやや蛇行する東西溝で、溝底は東から西に向かって下る。西端は掻乱で壊され、東端は発掘区外東に延びる。古墳時代後期の土師器片・須恵器片、7世紀代の須恵器片が出土した。

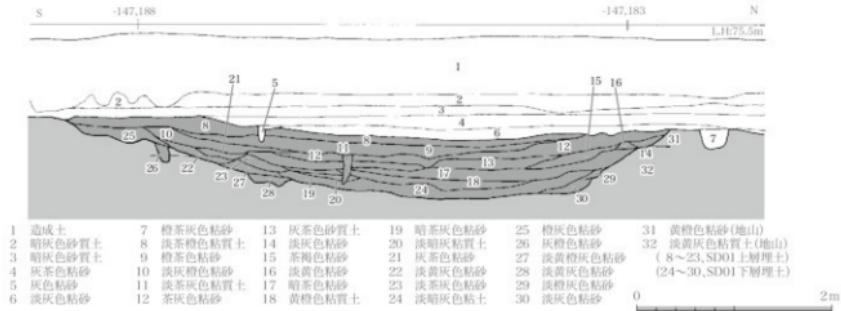
S D 07 は幅 3.4 m、深さ 0.25 m の東西溝で、溝の主軸は西でやや北に振れる。西端は掻乱で削平され、東側は発掘区外に統き、長さは 11 m 以上ある。暗茶褐色粘土で埋まり、流水の痕跡は確認できない。5世紀後半～8世紀初頭の土師器片・須恵器片が出土するが、7世紀代のものが主体を成す。



HJ 第634次調査 第1発掘区全景（北から）



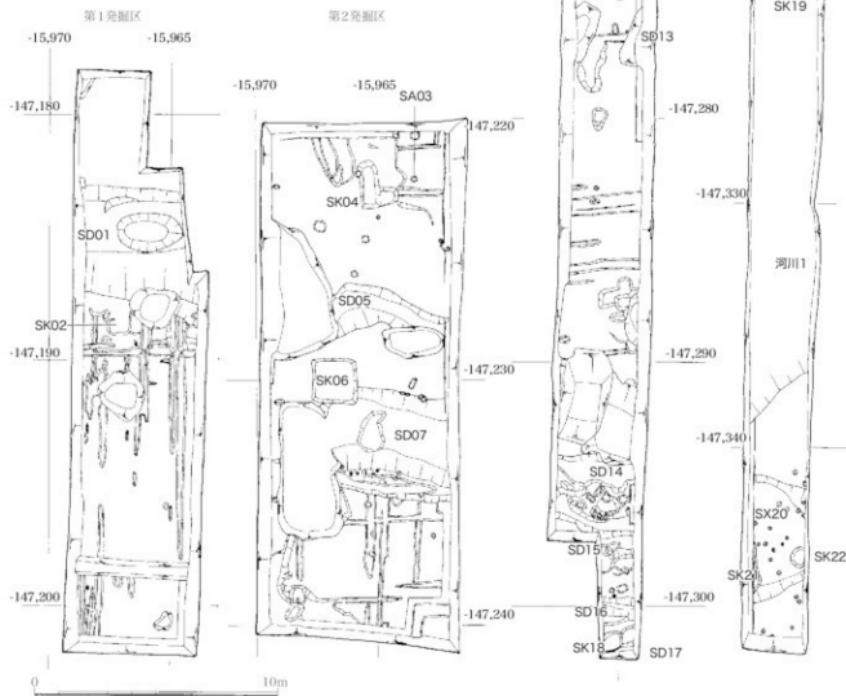
HJ 第634次調査 第1発掘区 SD01（東から）



HJ 第634次調査 SD01 土層図 (1/50)



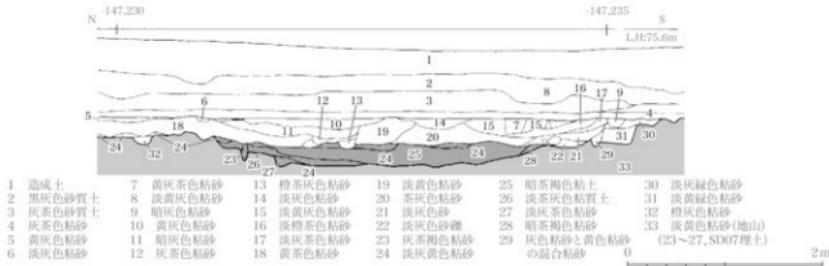
HJ 第634次調査 第2発掘区全景（北から）



HJ第634次調査 遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
SD01	東西	幅4.5~6×長さ4以上	0.85	古墳時代中期	円筒埴輪・形象埴輪・土師器甕・須恵器甕・杯身	8世紀に埋没
SK02	梢円形	南北1.4×東西0.8	0.1	8世紀後半	土師器甕・皿・須恵器甕・軒平瓦 (型式不明)・丸瓦・平瓦	
SK04	不整長方形	南北1.9×東西0.8	0.55	8世紀	土師器甕・皿・須恵器杯身 (7世紀)・甕	
SD05	東西	幅1.5×長さ5以上	0.2	古墳～飛鳥時代	土師器甕・高杯・瓶・須恵器甕 (7世紀)	8世紀に埋没
SK06	方形	南北・東西ともに1.8	1.2	8世紀	土師器甕・杯・須恵器甕・甕	
SD07	東西	幅3.4×長さ11以上	0.25	古墳～飛鳥時代	土師器甕・皿・甕・須恵器甕・甕・杯・杯蓋	8世紀に埋没
SD08	東西	幅4~5×長さ3以上	0.1~0.2	8世紀後半～末	土師器甕・皿・甕・須恵器甕・甕・鉢・甕・黑色土器A類瓶・皿	
SD09	東西	幅0.55×長さ3以上	0.2	8世紀後半以降	土師器甕・皿・碗・甕・須恵器甕・皿・鉢・甕	
SD10	東西	幅0.7×長さ4以上	0.2	8世紀以降	土師器甕・皿・須恵器甕	
SD11	東西	幅0.4×長さ5以上	0.2	8世紀以降	土師器片・須恵器片	
SD12	東西	幅0.95×長さ6以上	0.2	8世紀以降	土師器甕・椀・甕	
SD13	東西	幅0.95×長さ6以上	0.2	8世紀以降	土師器甕・椀・甕	
SD14	東西	幅1.7~2.5×長さ3以上	0.5	8世紀後半～未以降	土師器甕・皿・高杯・甕・甕・鉢・須恵器甕・甕・杯・甕・蓋・鉢・製塙土器・土馬・ミニチュア土器	
SD15	東西	幅3.5×長さ3以上	0.1~0.45	9世紀以降	土師器甕・皿・甕・須恵器甕・甕・杯・高杯・黑色土器A類瓶・B類瓶・製塙土器・土馬・ミニチュア土器	
SD16	東西	幅0.4×長さ1.5以上	0.2	12世紀以降	土師器甕・須恵器甕・皿・黑色土器A類・椀・製塙土器・瓦器柄 (12世紀)	
SD17	東西	幅0.4以上×長さ1.5以上	0.15	12世紀以降	土師器甕・羽釜・須恵器甕	
SK18	不整方形?	南北0.7以上×東西0.9以上	0.2	時期不明	無し	
SK19	方形?	南北0.5以上×東西1.9	0.7	14世紀以降	土師器皿・須恵器皿・瓦器甕 (13世紀)・土師器皿 (14世紀)	
SK20	不明	南北10.5以上×東西2以上	0.05~0.1	時期不明	土師器片・壁土片	
SK21	不明	南北0.65×東西0.5以上	0.1	時期不明	土師器片	
SK22	梢円形	南北5.5以上×東西0.5以上	0.2	時期不明	土師器片	

遺構番号	棟方向	規模 (間)	桁行全長	柱間寸法 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
		(間)	(m)	桁行		
S A 03	南北	1間以上	1.8以上	1.8	北が0.2、南が0.1	



HJ第634次調査 第2発掘区SD07 土層図(1/50)

S D 05 と S D 07 の上には、灰橙色粘砂が堆積し、この上面で奈良時代の土坑 S K 06 を検出していることから、いずれも平城京造営時に埋められたと考えられる。

第3発掘区 S D 08 は幅4~5 m、深さ0.1~0.2 mの東西溝で、長さ3 m分を検出し、発掘区外東西に続く。埋土は灰色砂・灰色砂礫で、奈良時代後半～末の

土師器・須恵器・瓦が出土した。溝心の座標値は、X=-147,259.82 m、Y=-16,963.00 mである。

S D 08 の南側では、多数の東西方向の溝を確認している。形態は、幅約0.5 m、深さ約0.2 mで、断面形は浅いU字形状で、奈良時代の土器を少量出土するものが多い。詳細な時期は不明であるが、形態等から中世以降の



HJ第634次調査 第3発掘区全景（北から）



HJ第634次調査 第4発掘区全景（北から）



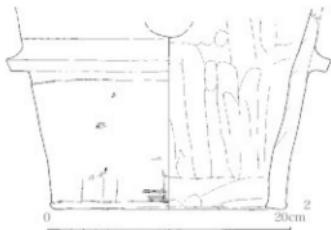
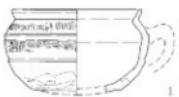
HJ第634次調査 第3発掘区南半（南から）



HJ第634次調査 第4発掘区全景（南から）



HJ第634次調査 第3発掘区 SD08（東から）



HJ第634次調査 SD01出土遺物(1/4)

素掘小溝と考えられる。

なお、SD 14・15は他の溝と比べ規模が大きく、遺構の性格は異なるものと考えられる。いずれも茶灰色系の砂質土で埋まる。出土遺物が少なく、9世紀以降のものとしか判明しない。出土量に比較して土馬、ミニチュア土器、製塙土器の出土が目立つ。

第4発掘区 河川1は、北東から南西方向に流れる河川で、発掘区の中央で南岸を確認した。北岸は発掘区外北側になる。幅は15m以上あるが、堆積状態から大きさ3時期に分かれることがわかる。最も古い河川は、深さ1.4m以上あり、その埋没後に深さ0.6~0.7mの河川が2回形成される。いずれも灰色砂を主体として堆積している。最も新しい時期の河川からは、古墳時代前期の土師器甕が出土したが、それより古い時期の河川からは出土遺物は無かった。

IV 出土遺物

遺物整理箱で9箱分の遺物が出土した。弥生時代以前のサクカイト製石器、古墳時代の土師器、須恵器、埴輪、飛鳥時代の須恵器、奈良～平安時代の土師器、須恵器、黒色土器A類、製塙土器、土馬、ミニチュア土器、軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸戸、鎌倉時代の瓦器、輸入陶磁器（白磁碗）、室町時代の瓦質土器などがある。

以下、SD 01出土遺物について記す。7~8世紀の土師器片・須恵器片とともに古墳時代中期の埴輪と須恵器1点が出土している。埴輪は小片が多く、すべて無黒斑で、円筒埴輪と形象埴輪（蓋形埴輪のほか不明）がある。図示できた円筒埴輪底部（2）は復原底径19.5cm・底部高12.3cmで、外面にB c種ヨコハケ調整を行う。須恵器碗（1）は復原口径10.6cm・復原高約7.0cmである。全体の約1/3が残存し、把手が欠失する。底部

外面をヘラケズリする。底部の破断面に葉脈の圧痕が残る体正面があり、体部と底部を別に作って貼り合わせたとみられる。

V 調査所見

これまでの発掘調査では、五条大路に関わる遺構を検出した例がなく、四条大路から五条大路を復原して今回の検出遺構と比較検討してみたい。

四条大路は、左京四坊部分で南北の両側溝が検出され、位置が確定している（H J第631次調査他）。道路幅は溝心々距離で約16.2mで、道路心の座標値は、X=146,730.873m、Y=-16,850mである。四条大路の振れを入倉徳裕が算出した¹⁾0°10'02"とし¹⁾、この値を調査地と同じY座標値のY=-15,965mの地点で求め、これに一条分南側の値（1800小尺=531m）を加えると、五条大路の道路心のX座標値は、X=147,259.820mとなる。この値は、SD 08の溝心の値X=147,259.820mとほぼ重なり、SD 08は推定される五条大路路面上にあることがわかる。大路の路面幅を四条大路と同様の約16mとすると、南側溝の位置にはSD 09以下の溝が存在するが、条坊側溝とするには規模等から決定しがたい。五条大路の遺構は今回の調査でも確認できなかつた。

また、調査地の西約200mの調査（H J第195次調査）では、五条大路の位置に幅17m以上の東西方向の大溝を確認しており、平城京の南辺に沿った濠と推定していた。今回の発掘区は、同調査の東の延長線上にあたるが、同位置に同様の大溝を確認していない。両調査区間で方向が変化するか、途切れると想定できる。

また、平城京以前の遺構を確認し、平城遷都以前の土地利用を知る手がかりが得られた。第1発掘区では、規模は不明ながら、古墳時代中期の埴輪をもつ方墳と考えられる周濠を検出した。さらに、第3発掘区では、7世紀後半の土器が遺構に伴って出土した。

調査地西側の西木辻町周辺では、これまでの調査で古墳時代中期～後期の遺構・遺物が発見されている（H J第148次調査他）。今回の調査で同時期の古墳が発見されたことから、西木辻町内に広がる古墳時代の遺跡を考える上で貴重な資料となろう。また、調査地の西約200mの発掘調査（H J第77次調査）では、7世紀後半の掘立柱建物を検出している。同時期の遺構・遺物の発見は未だ少ないものの、平城遷都直前の遺跡の広がりを知る資料が得られた。（宮崎正裕・鐘方正樹・中島和彦）

1) 入倉徳裕 2008「平城京条坊の精度—左京域を中心に—」

『平城京左京三条三坊五・十二坪 奈良県文化財調査報告書 第131集』奈良県立橿原考古学研究所 2008年参照

6. 平城京跡（左京五条五坊十坪）の調査 HJ 第 635 次

事業名 児童福祉施設建設
届出者名 個人
調査地 奈良市西木辻町 36-1

調査期間 平成 22 年 10 月 4 日～11 月 4 日
調査面積 270m²
調査担当者 池田裕英

I はじめに

調査地は平城京の条坊復原では左京五条五坊十坪のほぼ中央に位置する。十坪内ではこれまでに数度の発掘調査が行われており、奈良時代の条坊造構や建物、井戸、土器埋納遺構などの他、古墳時代中期の溝や土坑も検出されている。当該地には以前に建物があり、基礎の深さからみてその部分には遺構が残存しないと思われたため、その場所を避けて発掘区を設定した。

II 基本層序

発掘区内の層序は、上から造成土（厚さ 1.0～1.2m）、耕土、床土、暗灰茶色土、暗褐灰色粘質土（遺物包含層）と続き、現地表下約 1.3m で奈良時代の遺構面となる。この遺構面は発掘区北半では黄茶色土の地山であるが、発掘区南半では後述する古墳時代中期～後期の溝 SD03 を人為的に埋めて造成されており、奈良時代の遺物を含んでいる（土層図 15～17）。遺構面の標高は概ね 67.1～67.3m で、遺構はすべてこの上面で検出した。

III 検出構造

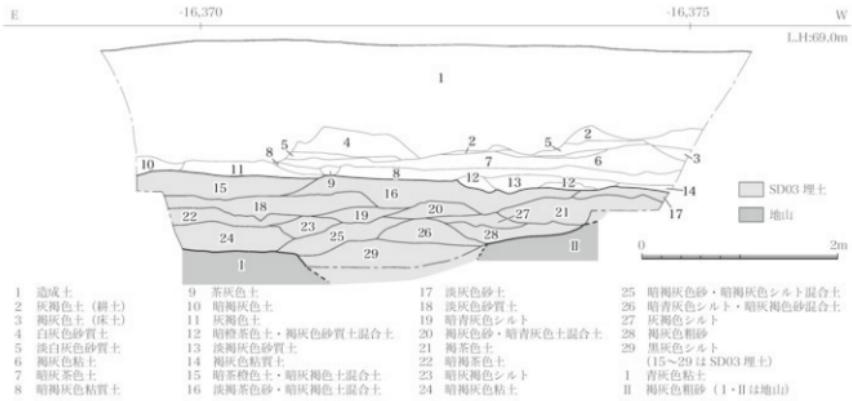
古墳時代中期～後期の土坑、溝、奈良時代の掘立柱建物、鎌倉時代の土坑、室町時代の土坑を検出した。

古墳時代の遺構 溝 3 条（S D 01～03）、土坑（S K 04～06）がある。溝はいずれも北西から南東方向



HJ 第 635 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

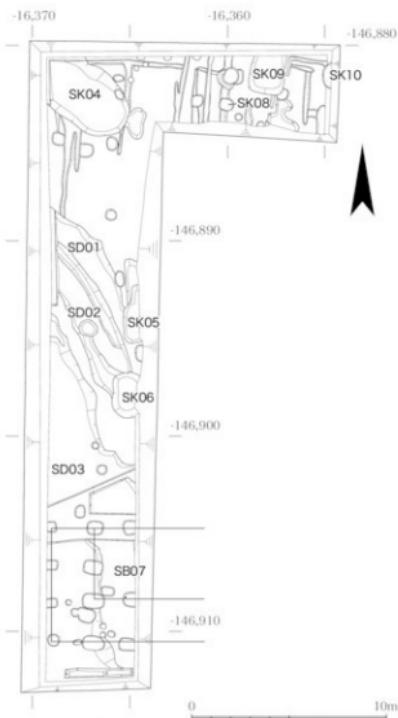
である。S D 01・02 はいずれも幅 1.5 m、深さ 0.1～0.3m で、古墳時代中期～後期の土師器・須恵器（TK 47～TK 217 型式）が出土した。S D 03 は幅 4.5m 以上、深さ 0.9 m 以上で、長さ 9.4 m 分を検出した。古墳時代中期～後期の土師器・須恵器（TK 47～TK 217 型式）とともに弥生時代の石鐵 1 点が出土した。S D 01～03 は方向や出土遺物の時期が概ね同じで、本来は一つの遺構であったと思われる。S K 04 は上記の溝と傾きが同じの土坑で、深さは 0.5 m である。出土遺物も S D 01～03 と同様のものである。S K 05・06 は S D 01・02 と重複して検出されたが、古墳時代中頃～後半の土器しか出土せず、古墳時代の遺構と考えておく。



HJ 第 635 次調査 発掘区南壁土層図 (1/50)

HJ 第 635 次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）		桁行長 (m)	梁行長 (m)	柱間寸法（m）		廻の出 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
		桁行×梁行	桁行			柱行	梁行			
SB07	梢円形	2以上×2	1.8以上	3.6	1.8	1.8	1.8	南1.8西2.1	0.3～0.5	西・南に廻が付く。
遺構番号	平面形	平面規模（m）	深さ（m）			時期		主要出土遺物		備考
SD01	斜行溝	幅1.5×長さ7.5以上	0.1～0.3			古墳時代中期～後期		土師器・須恵器		SD01～03は本来同一か
SD02	斜行溝	幅1.3～1.5×長さ7.5以上	0.1～0.3			古墳時代中期～後期		土師器・須恵器		弥生時代石鐵1点出土
SD03	斜行溝	幅4.5以上×長さ9.4以上	0.9以上			古墳時代中期～後期		土師器・須恵器		
SK04	梢円形	長辺5.2以上×短辺3.2	0.5			古墳時代中期～後期		土師器・須恵器		
SK05	長円形	東西0.8以上×南北4.3以上	0.5			古墳時代中期～後期		土師器・須恵器		SD01より新しい
SK06	円形	東西1.3以上×南北2.3	0.4			古墳時代中期～後期		土師器・須恵器		SD02より新しい
SK08	隅丸方形	径0.8	0.3			13世紀中頃		瓦器		
SK09	隅丸方形	東西1.8×南北1.9以上	0.8			13世紀中頃～後半		土師器		粘土探掘坑の可能性がある
SK10	円形	東西0.4×南北1.3以上	0.5			14世紀中頃～後半		土師器		



HJ 第 635 次調査 遺構平面図 (1/250)

奈良時代の遺構 捏立柱建物 S B 07 は南と西とに廻が付く東西棟建物である。母屋の柱穴は一辺約 0.8 m、西側の柱穴は一辺約 0.5 m である。柱間は母屋が 1.8 m (6 尺) 等間で、廻の出は南側が 1.8 m、西側が 2.1 m である。

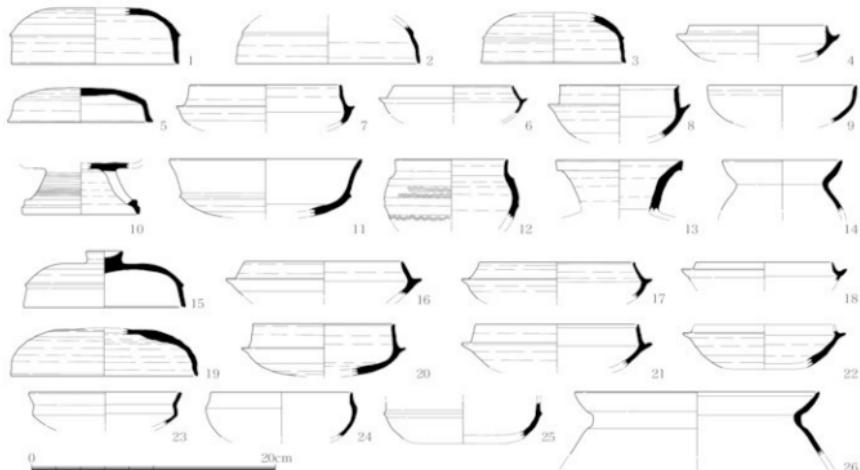
鎌倉・室町時代の遺構 S K 08 は径 0.8m の円形の

土坑で、深さは 0.3m である。埋土から 13 世紀中頃の瓦器が出土した。S K 09 は東西 1.8m、南北 1.9m 以上の隅丸方形の土坑で、深さは 0.8m である。埋土には灰褐色土と地山の茶黄色土が混ざり、人為的に埋められたものと判断され、粘土探掘坑の可能性も考えられる。13 世紀中頃～後半の土師器が出土した。S K 10 は東西 0.4m 以上、南北 1.3m 以上の円形の土坑で、深さは 0.5m である。14 世紀中頃～後半の土師器が出土した。

IV 出土遺物

本調査では遺物整理箱にして 12 箱の遺物が出土した。出土した遺物には、弥生時代の石鐵、古墳時代中期～後期の土師器、須恵器、製塙土器、奈良時代の土師器、須恵器、製塙土器、丸瓦、平瓦、鎌倉時代～室町時代の土師器、瓦器がある。ここでは S D 01～03 出土の古墳時代の土師器・須恵器について述べる。

1～4 は S D 01 から出土した。1～3 の杯蓋は頂部上半を、4 の杯身は体部下半をクロクロケズリしている。1 は口縁端部をまるく収めるが、2・3 は小さい段をつくっている。5～14 は S D 02 から出土した。5 の杯蓋は口縁端部を平坦につくる。杯身は口径や口縁部の立ち上がりの長さなどから時期に幅があると考えられる。10 は短脚の有蓋高杯で、脚部の長方形透かしは三方向に穿たれている。11 は無蓋高杯である。受け部から下の調整は上部がクロクロケズリ、下半がカキ目である。12 は椀である。体部に波状文があり、内外面に灰緑色の自然釉が付着している。9・14 は土師器で、9 が椀、14 が甕である。いずれも摩滅のため調整は不明である。15～26 は S D 03 から出土した。15 は有蓋高杯の蓋で、調整は内外面ともロクロナデである。口縁端部は小さい段をつくっている。19 は杯蓋。体部に稜ではなく、口縁端部を丸く収める。16～18・20～22 は杯身。調整や立ち上がり部の長さ、傾き具合からいくつかの型式のものが混在しているようである。23～26 は土師器



HJ 第 635 次調査 SD01 (1~4)・SD02 (5~14)・SD03 (15~26) 出土土器 (1/4)

で、23～25 が椀、26 は甌である。23 は口縁部が「く」字状に屈曲する形態、24 はゆるやかな曲線を描きながら直立する形態である。25 は須恵器を模倣したもので、高杯としたが、杯蓋の可能性もある。須恵器杯身の形態や調整からみると、TK 47～TK 217までの各型式のものが出土している。

V 調査所見

今回の調査では、古墳時代中期～後期の溝や土坑を検出した。SD 01～03 は本来一つの溝であったと思われるが、出土遺物をみると 7 世紀中頃以降の飛鳥時代の遺物は出土していない。最上層の埋土の観察や出土遺物から溝は人為的に埋められたとみられる。平城京の造営が埋立の契機と思われるが、この間の周辺の様子はよくわからない。西南約 250 m の奈良市立春日中学校の校舎建設の事前の調査では 7 世紀末から 8 世紀初頭の土器が出土しているが、本調査地付近にあったとみられる集落が 7 世紀中頃以降どうなっていくのかは興味深い。

奈良時代の遺構は発掘区南半で掘立柱建物 1 棟を検出したのみである。本調査地が坪のほぼ中央に位置することを勘案すれば、坪の中央から北に空閑地があった可能性が考えられるが、遺構密度は高くなく、あまり利用されなかった土地であったのかもしれない。

中世には発掘区南半の堆積砂が地山となっている場所を避け、北側の粘土の地山の部分が土を採掘する場所として利用されたようである。

(池田裕英)



HJ 第 635 次調査 発掘区全景（南から）



HJ 第 635 次調査 発掘区北半部（東から）

7. 平城京跡（三条大路）の調査 第636次

事業名	三条音原線街路改良事業	調査期間	平成22年11月2日
届出者名	奈良市長	調査面積	3m ²
調査地	奈良市大宮町二丁目地内	調査担当者	三好美穂 武田和哉

Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京の三条大路（東四坊付近）に該当している。周辺では過去に調査事例が複数あり、平成元年度には調査地の東約50mの地点で三条大路北側溝を、また平成6年度には調査地の南東約120mの地点で、三条大路南側溝をそれぞれ検出している¹⁾。これらの成果から、調査地は三条大路の路面上であることが確実視されていたので、路面の検出と堆積土層の様相把握を目的として3m²の発掘区を設定した。

II 基本層序

基本層序は、アスファルト・クラッシャー、造成土以下、明黄褐色粘土、淡灰色粘砂、茶灰色粘砂、灰色粘土と続き、現地表下約1.0mで黄褐色粘土の地山に達する。道構は地山上面で検出した。標高は約65.0mである。

III 検出遺構

溝2条と土坑1基を検出した。SD01は発掘区東端で検出した南北方向の素掘溝。幅約0.25m、深さ約0.1mで、12～13世紀の土師器小片が出土。SD02は、中央やや南寄りで検出した東西方向の素掘溝。幅約0.5m、西側は搅乱で削平されており、東側は徐々に浅くなり途切れる。遺物は須恵器小片が出土。SK03は、発掘区南辺付近で検出した土坑。北端部分を検出し、幅は約0.8mで、発掘区外南側へ続く。土師器小片が出土。

IV 出土遺物

遺物は、整理箱1箱が出土。その内訳は鎌倉時代の土師器、および時期不明の土師器・須恵器である。いずれも摩滅した小片であり、詳細な時期は特定できない。

V 調査所見

過去の調査成果からみて、本調査の発掘区は三条大路の路面上に位置していると推測されるが、路面の整地などの痕跡は確認できなかった。また、断面では耕土と思しき層は確認できない。三条大路が平城京廃絶以降も機能し続け、路面部分が水田化しないまま現代に至っていることを示唆する。

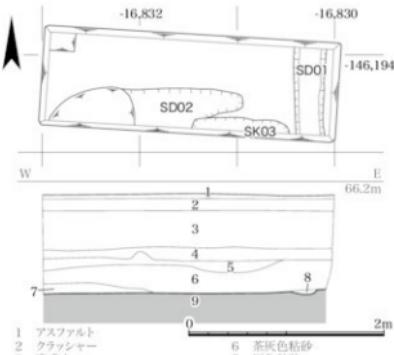
（武田和哉）



HJ第636次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



HJ第636次調査 発掘区全景 (南西から)



HJ第636次調査 遺構平面図・北壁上層図 (1/50)

1) 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京三条四坊十三坪発掘調査概報」『奈良県道路調査調査概報1989年度』1990、

奈良市教育委員会「平城京左京（外京）四條五坊一坪の調査」

『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成7年度』1996

8. 平城京跡（左京八条二坊四坪）の調査 第639次

事業名 第11号（杏中）市営住宅建替事業
届出者名 奈良市長
調査地 奈良市杏町83-1他

調査期間 平成23年1月17日～3月24日
調査面積 480m²
調査担当者 原田香織・大原瞳

I はじめに

調査地は平城京の条坊復原によると、左京八条二坊四坪の南西部に当たる。調査地付近では平安時代以降に東市から続く辰市が営まれ、中世には東九条郷・西九条郷・八条郷と共に、辰市郷を構成する杏郷が形成された。

同坪内では、これまでに奈良市教育委員会が3件の発掘調査（H J第14・305・417次調査）を実施し、奈良～平安時代初頭と平安時代末～鎌倉時代初頭の掘立柱建物・井戸・溝、奈良～鎌倉時代の河川などを検出した。

調査は平城京の宅地内の様相と、平安時代以降の土地利用状況の確認を目的に、3ヵ所の建設予定部分に、北・中・南の3つの発掘区を設定して実施した。各発掘区は、南北10m、東西16m、面積160m²である。

II 基本層序

各発掘区内の層序は、基盤となる地山や河川の上面が、発掘区西半部では約0.1～0.4m地下げされており、東西で層序がやや異なる。各発掘区とも上から造成土（厚さ0.7～0.8m）、耕土（0.1m）、2～3層の淡灰色の粘質土・粘土（0.2～0.25m）と続き、西半部では、さらにも茶灰色粘質土（0.2～0.3m）が堆積し、現地表下約1.3～1.4mで、黄茶色砂質シルトの河川の埋土や黄灰色粘質土・淡黄灰色シルトなどの地山となる。

一方、各発掘区の東半部は、西半部にある河川・地山直上の茶灰色粘質土が、南発掘区だけ河川埋土直上に厚さ約0.15m分存在し、北・中発掘区ではない。また北発掘区では、河川埋土直上に暗灰色土（0.1～0.2m）が堆積する。重複関係や埋土の状況から、東側のH J第14次調査で検出した平安時代末の落ち込み遺構S X 19と同様の遺構の埋土である可能性がある。なお、河川は、各発掘区東側で検出し、西岸を確認したが、出土遺物がなく時期は不明である。遺構検出は、地山上面と河川埋土上面で行った。

基盤面の標高は、3つの発掘区内では中発掘区の東半部が最も高く、標高約52.3mで、各発掘区の西半部が標高約51.9mと最も低くなる。

III 検出遺構

主な検出遺構には、奈良時代・平安時代・鎌倉時代のものがある。このほかに時期不明の土坑、鎌倉時代以降



H J第639次調査 発掘区位置図(1/5,000)

の耕作に伴う多數の素掘小溝がある。

遺構の詳細は一覧表のとおりである。遺構番号は、時代・重複関係の古い順に付した。以下時代順に主要な遺構を記す。

奈良時代の遺構 溝1条（S D 03）・井戸1基（S E 04）・土坑1（S K 02）がある。

土坑S K 02（南発掘区）は、掘形の壁面がほぼ直立し、底面は南側が深くなる。8世紀中頃の土器が出土した。

溝S D 03（北発掘区）は、南北方向の溝で、北に対し東に向かって開口するが、中発掘区には続かない。8世紀の土器が出土した。

井戸S E 04（南発掘区）は、掘形が平面隅丸方形とみられるが、平安時代の井戸S E 07と重複するため詳細は不明である。掘形の埋土から8世紀後半、枠抜取坑の埋土から8世紀末～9世紀初頭の土器が出土した。

平安時代の遺構 掘立柱廻4条（S A 11・15・17・18）・掘立柱建物5棟（S B 05・06・12・14・16）・溝3条（S D 08・22・23）・井戸3基（S E 07・10・19）・土坑3（S K 09・20・21）・理窯遺構1（S X 13）がある。

南発掘区のS B 05とS B 06は、ほぼ南北角を合わせて重複しており、S B 05からは9世紀前半の土器が、S B 06からは10世紀の土器が出土した。

中発掘区のS A 11・17・S B 12・16と南発掘区のS A 15・18・S B 14は、重複関係から3時期以上あることがわかる。S B 12・14からは11世紀後半～12世紀初頭、S A 15からは11世紀後半～12世紀前半、

S A 17・18からは12世紀の土器が出土した。S A 11からは遺物が出土しなかったが、位置・重複関係から S B 12・S A 17と近接する時期と判断した。S B 16からは詳細な時期不明の瓦器が出土したが、S A 17と柱筋が揃うことや、埋土の状態が同時期の柱穴と似ていることから12世紀のものと判断した。

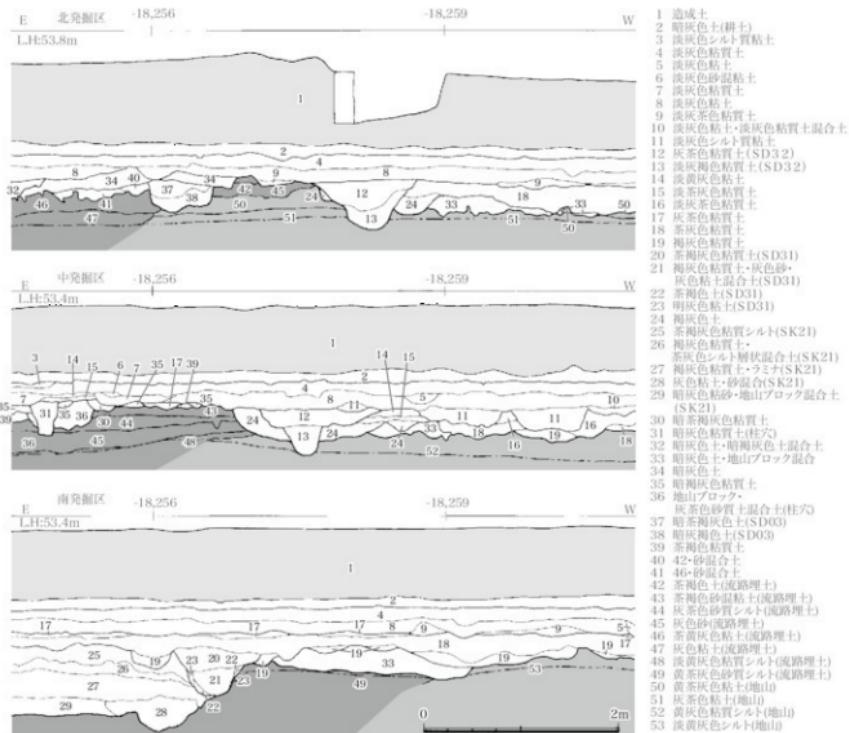
埋甕遺構 S X 13（中発掘区）は、断面形が捕鉢状の土坑が東西に3つ並んでおり、その形状から埋甕の抜取坑とみられる。位置関係からS B 12に伴うものと考えられる。11世紀後半～12世紀初頭の土器が出土した。

井戸 S E 07（南発掘区）は、掘形の平面形がほぼ隅丸方形である。井戸枠は、北東隅の縦板1本、土居枠、敷板および浄水施設を除いて抜き取られているが、方形縦板組と考えられる。残存する縦板は槽を切断したもののが使用され、井戸底には、底をはずした樋が据えられて

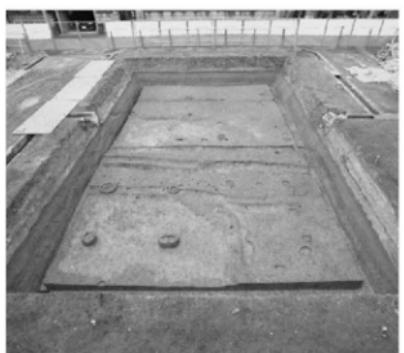
いる。樋の底には拳大の石が、その上に木炭が敷かれており、浄水施設と考えられる。掘形および枠内埋土からは9世紀後半～10世紀前半の土器が、枠抜取坑埋土からは10世紀後半～末の土器が出土した。他に、浄水施設内埋土から富壽神寶（初鈔818年）1点、浄水施設裏込め土から和同開珎（初鈔708年）1点が出土した。

井戸 S E 10（南発掘区）は、方形縦板組隅柱横桟留の井戸枠である。浄水施設として、底面中央部に曲物を4段据える。曲物内底面には密に、縦板組底面にはまばらに拳大の石を敷く。井戸枠の外側には別の隅柱が4本あり、北側縦板の裏には、竹を横1列に立てて並べていることから、縦板部分は改修が行われたと考えられる。枠内埋土から11世紀前半～末の土器が出土した。

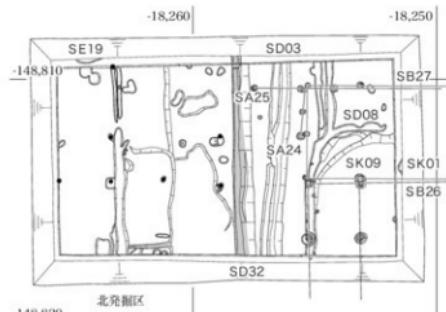
井戸 S E 19（北発掘区）は、大半が発掘区外のため詳細は不明である。12世紀中頃以降の土器が出土した。



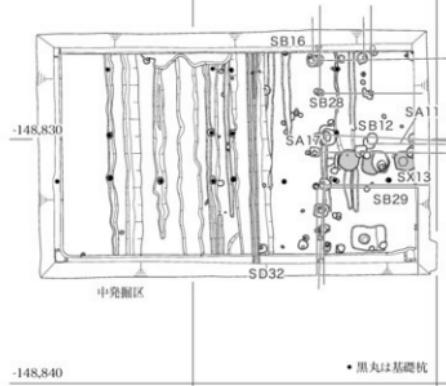
H J 第639次調査 北発掘区北壁（上、東西反転）・中発掘区南壁（中）・南発掘区南壁（下）土層図（1/50）



H J 第639次調査 北発掘区全景（東から）



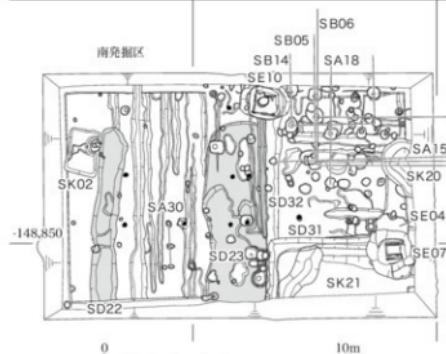
H J 第639次調査 中発掘区全景（東から）



● 黒丸は基礎杭



H J 第639次調査 南発掘区全景（東から）



H J 第639次調査 遺構平面図 (1/200)

土坑 S K 09（北発掘区）は、平面形が隅丸方形とみられる。埋土は灰色粘土で、底面には人が動物の足跡と考えられるような穴が多数あり、凹凸がはげしい。10世紀前半頃の土器が出土した。また馬の上顎骨9本分が出土したが、これに付着した土に微量の海綿骨が含まれており、頭骨に付随した状態で埋没した可能性がある。

土坑 S K 21（南発掘区）は、平面形が方形の土坑と考えられる。掘形は二段で、北側がテラス状の段になる。底面は平坦である。埋土は大きく上下2層に分かれる。

下層は一段深い部分の埋土で、地山のブロックが多く含まれていたことから、人為的に埋め戻したとみられる。その後、西端に下層埋土上面から深さ0.4mの溝状の土坑が掘られる。上層の埋土は褐灰色粘質土で、その中に白色砂の薄層が数層みられることから、流水と滞水を繰り返す溜池のような性格のものと考えられる。底付近から12世紀末～13世紀初頭の土器が出土した。

溝 S D 08（北発掘区）は、S K 09の縁に沿って弧状に掘られた素掘りの溝である。底は南に向かい深くな

H J 第639次調査 遺構一覧表 I

遺構番号	棟方向	規模		軒行全長		梁行全長		柱間寸法(m)		廻の出 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
		軒行	梁行	(m)	(m)	軒行	梁行	軒行	梁行			
SB05	南北	1以上×1以上	2.7以上	2.1以上		2.7	2.1			0.3～0.4	S B 06・S A 15より古。	
SB06	東西	1以上×2以上		3.8以上				西から1.6-2.2	南2.0	0.3～0.6	S B 05より新、S A 15より古。	
SA11	東西	1以上		2.0以上				2.0		0.5	S A 12・17より古。	
SB12	南北？	2以上×2以上	3.8以上	3.6以上	1.9-1.9	1.8-1.8				0.5～0.55	S A 11より新、S B 29より古。	
SB14	南北	1以上×2	1.3以上	3.4	1.3	1.7-1.7				0.3～0.45	S A 18より古。	
SA15	東西	2以上		3.2以上	1.6-1.6					0.3～0.4	S B 05・06より新。	
SB16	南北	1以上×2		4.2				2.1-2.1		0.15～0.2		
SA17	東西	2以上		4.0以上	2.0-2.0					0.4～0.5	S A 11・S X 13より新。	
SA18	南北	2以上		4.0以上	2.0-2.0					0.2～0.3	S B 14より新。	
SA24	南北	2		1.9		北から0.9-1.0				0.05～0.14	S A 25より古。	
SA25	東西	3以上		4.75以上	西から1.9-1.35-1.5					0.08～0.15	S A 24より新。	
SB26	南北？	1以上×1以上	2.25以上	2.1以上	2.25	2.1				0.2～0.25	範柱建物？、S K 09より新、S B 27より古。	
SB27	東西	1以上×2	2.25以上	3.8	2.25	北から2.0-1.8				0.1～0.2	S B 26・S K 09より新。	
SB28	南北？	1以上×2以上	1.85以上	2.1以上	1.85	2.1				0.1～0.2	範柱建物？	
SB29	南北	1以上×2	1.8以上	4.2	1.8	2.1等間				0.1～0.2	S B 12より新。	
SA30	南北	2		1.9	0.85等間					0.13～0.2		

遺構番号	掘形等	戸口枠				時期	主な出土遺物			備考	
		平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造		内法(m)	遮通装置等			
S E 04	隅丸方 形?	東西1.9以 上×南北 2.0以上		2.35		(掘形) 8世紀後半 (抜取) 8世紀初頭			(掘形) 土師器杯A・碗A・杯C・甕、須 恵器杯B・碗A・杯蓋・甕・壺、製塗土器, 輪羽口、平丸、桃核		戸口枠はすべて抜 き取られている。 重複関係からS E 07より古。
S E 07	隅丸方 形(棒抜 取穴によ る歪みあ り)	東西2.0× 南北2.0		2.1	方形板 組?	掘定: 東西0.7× 南北0.75	瓢 (内東西0.63m ×南北0.37m 高さ0.55m) 體内底面 下解手大石 上解木灰敷、 土居筋と板上端 間は板敷	(掘形) 土師器杯・皿・杯・盤・甕・壺、 須恵器杯・皿・杯・蓋・甕、黒色土器類、 製塗土器、丸瓦、平丸、削鉢(和同開跡)、部材 (枠内) 土師器杯・皿・杯・盤・甕・杯・ 甕・甕・蓋、須恵器杯A・杯B・杯蓋・ 甕・甕・蓋、黒色土器A類、黒土器・甕・ 壺・盤、輪羽口、平丸、削鉢(富壽神寶)、柄杓 (抜取) 土師器皿・甕・羽釜・須恵器皿・ 杯・杯蓋・甕・蓋M・甕・壺・黑色土器A・ B類、縫縫陶器類・甕・壺・灰陶陶器 瓢・甕・蓋・輪羽口、輸入磁器(白磁碗V型)、 円筒瓶、転用瓶、漆付土器、製塗土器、土馬、 輪羽口、丸瓦(式不明)、丸瓦・平丸、 铁钉・銅鏡、鉢石、造作か、木製部材 (抜取) 土師器皿・甕・羽釜、須恵器皿・ 杯・杯蓋・甕・蓋M・甕・壺・黑色土器A・ B類、縫縫陶器類・甕・壺・灰陶陶器 瓢・甕・蓋・輪羽口、輸入磁器(白磁碗II型)、 縫縫土器(土師器皿・甕・大), 製塗土器, 丸瓦・平丸、甕・蓋、桃核	戸口枠はほぼ抜 き取られており、土 居筋外周窓に機 転用板1枚残存。 浄化施設には底板 を外した瓢を転用。 重複関係からS E 04より新、S K 21より古。		
S E 10	隅丸方 形	東西1.85× 南北1.3以 上		1.95	方形板 組・圓柱構 成留	復原: 東西0.9×	曲物4段 (約0.38～ 0.45m×高さ 0.16～0.27m), 曲物内底面 上端面拡大石敷	11世紀前半 ～末	(掘形) 土師器皿・羽釜、須恵器皿・ 甕・甕	改修により各個柱 は2点ずつ残存。 北側圓柱間に竹一 列立てる。	
S E 19			0.9以 上					12世紀中頃 ～	(掘形) 瓦罈 (瓦罈) 瓦罈	掘形の一部のみ検 出。	

る。位置と形からSK 09とほぼ同時期の遺構と考える。

溝S D 22・23（南発掘区）は、西半部で検出した南北方向の溝である。埋土は暗灰色粘質土とブロック状の地山が混合したもので、人為的に埋められたとみられる。北・中発掘区の西半部の地山直上にも、同様の埋土が所々にみられたが、ごく浅く、遺構として形にならなかった。12世紀後半～13世紀初頭の遺物が出土しており、地下げの時期を知る上で重要な遺構である。

鎌倉時代の遺構 挖立柱塀3条（S A 24・25・30）・挖立柱建物4棟（S B 26～29）・溝1条（S D 31・32）がある。北発掘区では暗灰色土上面から削除される。

溝S D 31（南発掘区）は土坑SK 21が埋まつた後、その縁に重複して掘られた平面L字形の溝である。14世紀初頭の土器が出土した。溝の埋没後に、西半部の地下げ部分を埋める茶灰色粘質土が堆積する。

溝S D 32（北・中・南発掘区）は、西半部の地下げ部分を埋める茶灰色粘質土上面から削除された南北方向の溝である。北発掘区から南発掘区へとつなぐ、SD 31の北側で途切れる。地下げ部分の肩部に位置しており、平安時代の土地区画の名残を残している。

時期不明の遺構 土坑SK 01（北発掘区）は、掘形が2段で、暗紫灰色粘質土のブロックで埋まり、下層に

は少量の地山ブロックが混じる。埋土はかなり固く締まる。出土遺物はないが、重複関係では一番古く、埋土の状態から奈良時代より古い遺構の可能性がある。

IV 出土遺物

土器類・瓦類が遺物整理箱35箱分ある他、井戸枠軸用の櫃などの木製品、錢貨（和同開珎・富壽神寶）2点、銅鋳・鉄釘、鋳造関連遺物、砥石などの石製品、サヌカイト片岩、桃種がある。各遺構から出土した遺物は一覧表に示したとおりである。表には混入遺物として明記しないが、各時代の遺構や包含層からは奈良時代の土器類の出土が多い。（原田香織）

以下、SE 07・10出土土器について報告する。

S E 07 出土土器 遺物整理箱1箱分ある。掘形（7・9）と枠内埋土（8）からの出土は少量で、大半は枠抜取埋土（1～6）から出土した。いずれも小片で完存するものはない。土師器食器類は口縁形態から、「て」の字状口縁を持つもの（1～3）、口縁端部の内側が小さく肥厚する厚手のもの（4・5）と薄手のもの（7・8）、口縁端部を外に折り曲げて丸くおさめるもの（6）に分けられる。いずれも口縁部内外面をヨコナデ調整し、口縁部下半にユビオサエの痕跡が残る。9は黒色土器A類鉢で、口縁部外面に粗いヘラミガキを施す。掘形・枠

H J 第639次調査 遺構一覧表2

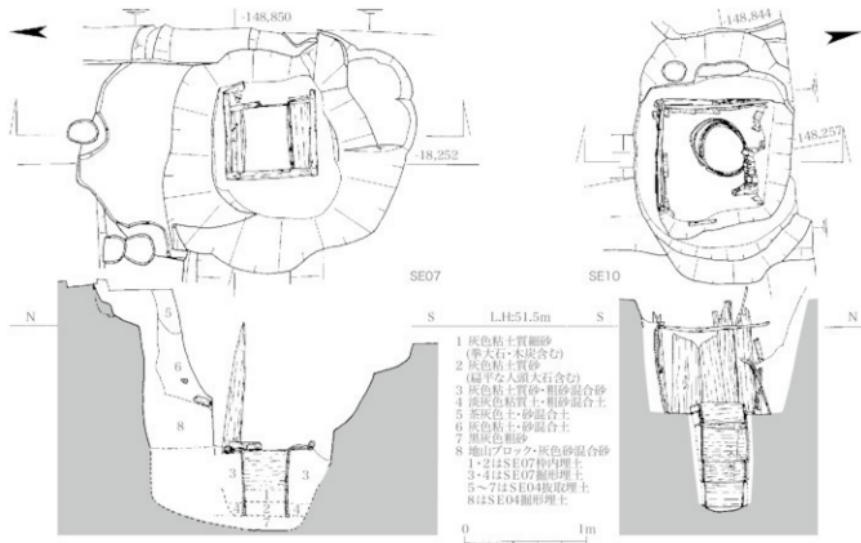
遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
SK 01	不明	東西0.1以上×南北0.7以上	0.62	不明	出土遺物なし	重複関係からSK 09より古。
SK 02	長方形	東西1.3×南北1.8	0.4～0.6	8世紀中頃	土師器杯A・皿C・杯C・杯小皿・高杯・甕A・甕B・甕B・須恵器杯B・皿A・杯蓋・壺・甕・鉢A・墨書き土器（須恵器杯B「口墨」）・漆付土器・罐・製瓶土器・土馬・円盤形土製品・丸瓦・平瓦	北に対しやや東へ振れる。
SD 03	南北方向	長さ8.5以上×幅0.5～0.6	0.3～0.4	8世紀	土師器杯か皿A・杯C・甕・須恵器壺・壺・鉢A	北に対しやや東へ振れる。
SD 08	弧状	長さ8.0以上×幅0.4	0.02～0.16	8世紀（10世紀？）	土師器杯か皿A・甕C・甕・須恵器杯A・杯小皿B・甕	重複関係からSK 09より古。
SK 09	隅丸方向	東西3.7以上×南北6.3以上	0.15	10世紀前半	土師器杯A・皿A・椀A・杯小皿・羽釜・甕・高杯・須恵器杯か皿・杯土器・甕・壺・黑色土器A類壺・甕・軒輪陶器皿・製瓶土器・丸瓦・平瓦・鉄釘・馬ぬ	重複関係からSK 01・SD 08より新。
S X 13	東西土坑列	直径0.85～0.95	0.55	11世紀後半～12世紀初頭	土師器皿	平面円形の土坑が東西に3つ以上並ぶ。S B 12に付属する埋遺構か？
SK 20	円形	東西1.2以上×南北2.7	0.7	12世紀後半	土師器皿・羽釜・須恵器鉢・瓦器皿・輸入陶器（萬能型）・ミニチュア罐・縫糸土器（瓦器皿「x」）・製瓶土器・丸瓦・平瓦	重複関係からSB 05・06・SA 15より新。
SK 21	方形	東西0.6以上×南北2.5以上	0.6	12世紀末～13世紀初頭	土師器皿・羽釜・回転台盤・須恵器鉢A・瓦器皿・皿・輸入磁器（越州窯系青磁碗）・鍛削土器（土師器「x」）・壺・製瓶土器・輪引1・埴輪・軒丸（6134H・6316）・新平瓦（6721H）・丸瓦・平瓦・鉄釘・砾石	重複関係からSE 07より新、SD 31より古。
SD 22	南北方向	長さ7.5以上×幅1.1	0.05～0.1	12世紀後半～13世紀前半	土師器皿・羽釜・高台付皿・須恵器鉢・器皿・瓦器皿・輸入磁器（白磁碗IV類・VIIからVIII類）・土馬・鉄釘・軒丸瓦（型式不明）・丸瓦・平瓦・砾石	
SD 23	南北方向	長さ7.5以上×幅2.2	0.1～0.2	11世紀後半～13世紀初頭	土師器皿・羽釜・高台付皿・須恵器鉢・器皿・輸入磁器（龍泉窯系青磁碗II～III類）・丸瓦・平瓦	
SD 31	L字形	東西6.0以上・南北2.5以上・幅0.5	0.4	14世紀初頭	土師器皿・羽釜・瓦器皿・輸入磁器（白磁碗）・墨書き土器・土馬・鉄釘	重複関係からSE 07・SK 21より新、SD 32より古
SD 32	南北方向	長さ4.4以上×幅0.4～1.2	0.05～0.5	14世紀初頭	土師器皿・羽釜・瓦器皿・輸入磁器（白磁碗）	重複関係からSD 31より新



H J 第639次調査 井戸 SE07（北から）



H J 第639次調査 井戸 SE10（東から）

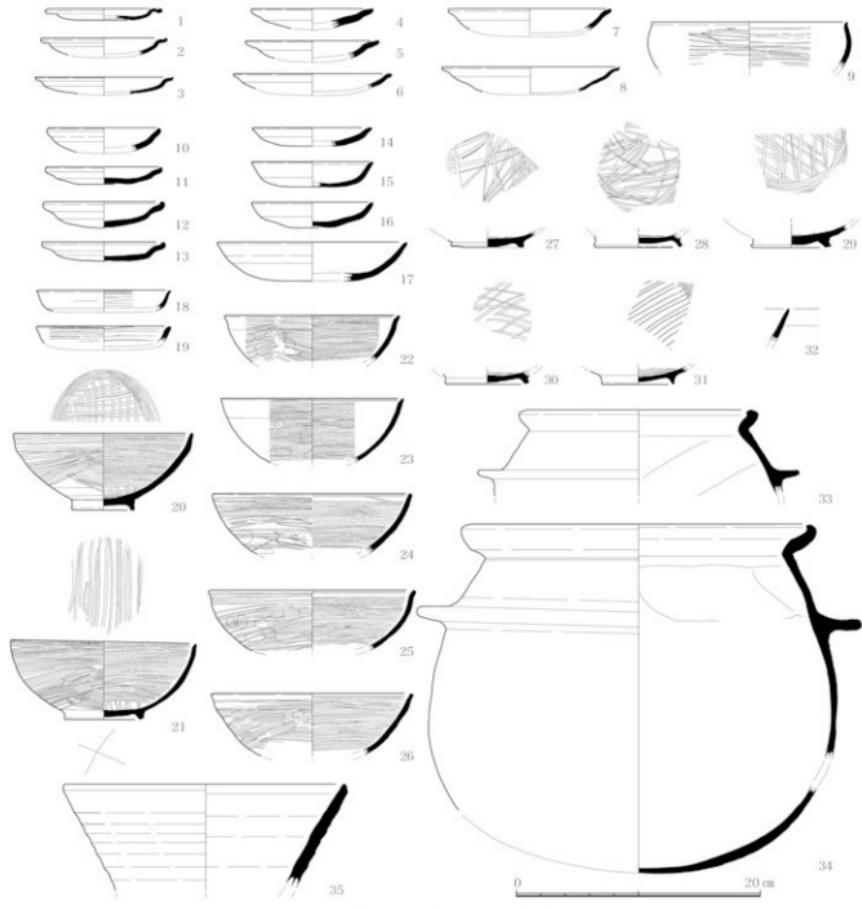


H J 第639次調査 井戸 SE07・10 平面・立面図(40)

内埋土が9世紀後半～10世紀前半、抜取埋土が10世紀後半～末頃と考えられる。

SE 10枠内出土土器 遺物整理箱2箱分ある。土器小皿は、口径が9.4～10.2cm、器高が1.4～2.1cm、器壁が約0.5cmである。口縁形態から、「て」の字状口縁のもの（10～13）と、外反する口縁のもの（14～16）があり、前者の方が多い。大皿は口径約15.5cm、器高約3.2cmのものがあり、17は外反する口縁部で、口縁部外面を2段にヨコナデ調整する。瓦器皿18・19は口縁部外面にヘラミガキを施す。瓦器椀は口径が

15.0～16.0cm台のものが最も多い。多くは体部外面に3分割の密なヘラミガキ調整を高台部付近にまで施すが、体部の上位3分の2までしか施さないものもごく少量ある。見込み部にはジグザグ状の暗文（21・31）が最も多く、ほかに不定方向（27・28）、格子または斜格子状（20・29・30）の暗文がある。白磁碗32は、胎土が黄白色で細かな黑色粒を含む。釉色は黄白色を呈し、釉の厚さは薄く全体に細かな貫入が見られる。土器瓶羽釜33・34は音原分類の大和B型で、体部内面には成形時の當て具痕跡が残る。須恵器小鉢35は束縛系のもの



HJ第639次調査 出土土器(1/4)

である。11世紀後半のものと考えられる。(大原 瞳)

V 調査所見

今回の調査では、奈良～鎌倉時代の各時期の遺構を検出した。奈良時代は、後世の地下げのためか遺構は少ないものの、出土した土器類に奈良時代後半～末のものが多いことから、調査地周辺は奈良時代後半以降に宅地としての画期があったと類推できる。平安時代には3時期以上の建物変遷がみられること、各時期の井戸の存在などから、遺構の多少はあるものの、遷都後も集落の居住地として継続的に利用されていたと考えられる。しか

し、平安時代末頃までには、調査地西側が地下げされ、溝S D 22・23の埋土上面で南北方向の素掘小溝を多く検出していることから、耕作地として利用されたことが分かる。北・中発掘区では、地下げ部分の東端と建物S B 26～29の間に一定の空閑地(約2.0 m)が設けられており、耕作地と居住地とが明瞭に区分され、計画的な土地利用の様子がうかがえる。周辺の調査を含め、鎌倉時代後半以降には遺構が減少し、居住地が他へ移動したと考えられる。以上のように、中世の辰市郷の変遷を考える上で手掛かりを得ることができた。(原田香織)

9. 平城京跡（左京四条四坊八・九坪）の調査 第640次

事業名 校舎建替
届出者名 学校法人 白藤学園
調査地 奈良市三条宮前町 51-2他

調査期間 平成23年1月5日～2月3日
調査面積 302m²
調査担当者 武田和哉

Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条四坊の八・九坪にまたがり、敷地の北隣には三条大路の南側溝が想定される。周辺地においていくつか調査事例があり、昭和57年度には南東側約30mの地点で校舎建設に伴い、国141-9次調査が実施され、奈良時代の四条条間路の両側溝および建物跡や井戸などを検出している¹⁾。また、発掘区の北東約100mの地点で実施した市HJ第413次調査では、鎌倉時代の粘土探柵坑を検出している²⁾。

こうした成果を踏まえ、三条大路に近い部分での遺構の様相の把握を目的として調査を実施した。

II 基本層序

発掘区の基本層序は、造成土以下、暗褐色土（耕土）、暗茶灰色土（底土）、茶灰色土と続き、現地表下0.7～0.8mで、黄灰色シルトまたは明茶灰色シルト層に到達する。奈良時代以降の遺構はこのシルト層の上面で検出した。その標高は62.8～62.9mである。

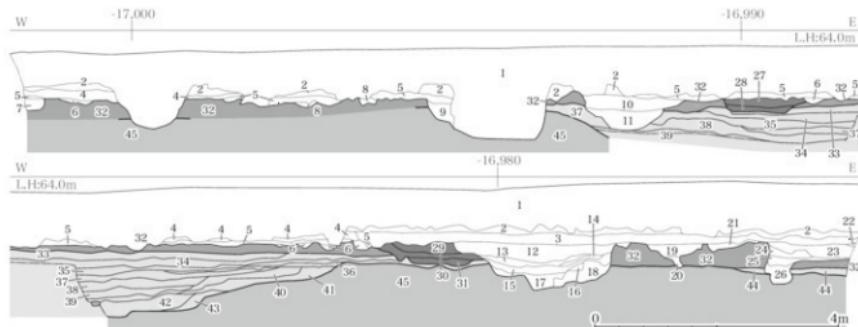


HJ第640次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

さらにこの下に茶灰色細砂、明茶灰色粘土の各層が続き、現地表下約0.9～1.0mで黒褐色粘土に達する。この面では、後述する縄文時代晚期頃の河川跡を検出した。その標高は62.6～62.7mである。

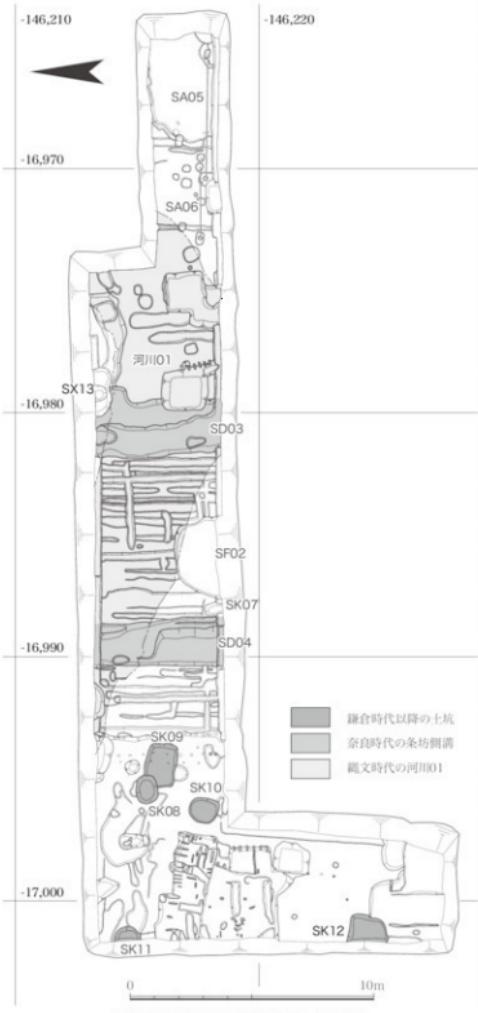
III 検出遺構

検出した主要な遺構は、縄文時代晚期頃の河川跡、奈良時代の条坊道路と側溝、掘立柱列、土坑、平安時代末



1 造成土	13 暗茶灰色粘質土(SX13埋土)	25 暗褐色粘質土(SX13埋土)	36 黒色粘土
2 黒褐色粘土(耕土)	14 灰色粗砂(SX13埋土)	26 青灰色シルト+黒褐色粘土	37 黑褐色土+暗茶褐色腐殖土の混合土
3 暗茶灰色土(底土)	15 暗褐色粘土+砂(SX13埋土)	27 暗茶色土+砂(SD04埋土)	38 黑褐色土+暗茶褐色腐殖土の混合土
4 暗茶灰色土	16 剥離粘質土(SX13埋土)	28 暗茶色粘質土(SD04埋土)	39 暗茶褐色腐殖土と灰色砂の混合土
5 茶灰色土	17 灰色砂+暗褐色粘土(SX13埋土)	29 暗茶色粘質土(DG03埋土)	40 暗茶褐色腐殖土
6 暗茶灰色粘土(素掘小溝埋土)	18 青灰色シルト(SX13埋土)	30 暗茶色粘質土+砂(SX03埋土)	41 暗茶褐色腐殖土
7 暗茶褐色粘土	19 暗茶灰色粘質土(溝埋土)	31 茶褐色粘質土(SD04埋土)	42 暗茶褐色腐殖土(しまる)
8 剥離粘土	20 各色粘土(溝埋土)	32 黄褐色シルト	43 暗茶褐色粘土
9 暗茶灰色土	21 暗茶灰色粘土(溝埋土)	(縄文時代晚期遺物包含層)	44 灰色粘土
10 暗茶褐色土(土坑埋土)	22 剥離粘土	33 茶褐色細砂	33～44(河原01埋土)
11 暗茶褐色土(土坑埋土)	23 暗茶褐色粘土(SX13埋土)	34 明茶灰色粘土	45 黑褐色粘土(地山)
12 暗茶灰色粘土(SX13埋土)	24 暗茶褐色粘土(SX13埋土)	35 淡茶灰色砂	

HJ第640次調査 発掘区北壁上断面図 (1/80)



～鎌倉時代頃の土坑などである。以下にその概要を記す。
詳細は後段の検出遺構一覧表を参照されたい。

河川01は、発掘区の中央で検出した。本流は発掘区の北西から南東へと流れおり、これに北東からの支流が合流して、発掘区外南へと流れる状況である。今回の調査では本流部分を約25m、支流部分を約5m分検出



HJ第640次調査 垂直写真 (左が北)

した。本流部分の幅は約3m、検出面からの深さは約1mで、断面形はU字状を呈する。土器や石器等の遺物は出土しなかったが、種実や流木などが大量に出土した。木材1点について年代測定を実施したところ、縄文時代晚期中葉にあたるBC1020～840年の年代値を得た。

S F 02は、発掘区中央付近で検出した平城京の条坊

HJ第640次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
河川01	北西より南東方 向・合流あり	本流 幅3.0×長さ25.0以上 支流 幅3.0×長さ5.0以上	本流 1.0 支流 0.4以上	縄文時代晚期	須恵器、流木	放射性炭素による年代測定による
S F 02	南北方向	路前幅6.8～7.7× 長さ5.0以上	—	8世紀		溝心間距離は8.8m
S D 03	南北方向	幅2.2～2.8×長さ5.0以上	0.35	8世紀	土師器、須恵器、丸瓦、平瓦	X=146,215.00 Y=16,980.70
S D 04	南北方向	幅1.3～1.8×長さ5.0以上	0.3	8世紀	土師器、須恵器、製塙土器、線刻 土器、丸瓦、平瓦、埴	X=146,215.00 Y=16,989.50
S K 07	楕円形？	東西0.2×南北0.3以上	0.5	8世紀	土師器壇、須恵器、銅錢3(和同 開珎1、銭文不明)	土器埋納土坑の可能性あり
S K 08	楕円形	東西1.5×南北1.0	0.6	17世紀初め	土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、犬 形土製品、ミニチュア土器(竈か)、 銅錢(時期不明)	S K 09より新しい
S K 09	隅丸方形	東西2×南北1.5	0.3	13世紀以降	土師器、須恵器、銅錢(紹聖元寶)	紹聖元寶・初鉢 1094年
S K 10	楕円形	東西1×南北1.3	0.2	9世紀以降	土師器、須恵器	
S K 11	円形か	東西0.5以上×南北1.0	0.4	12世紀前半	土師器、須恵器、瓦器壇、丸瓦、 平瓦	瓦器壇は完形で出土
S K 12	隅丸方形	東西1.0以上×南北1.7	0.7	9世紀以降	土師器、須恵器	
S X 13	不整形	幅0.5～1.8×6.0以上	0.8	不明	土師器、須恵器、滑石瓦	S D 03より新しい

遺構番号	極方向	規模 (間)	柱間全長 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
S A 05	東西	4	5.4	1.35 等間		
S A 06	東西	2	3.0	1.5 等間		柱根残存・土器出土

道路・東四坊坊間路であり、東側溝であるS D 03と西側溝であるS D 04を両側に伴っている。双方とも発掘区内では約5m分を検出し、奈良時代の土器・瓦が出土した。両側溝の心間の距離は約8.8mである。

S A 05・06は、発掘区の南東部分で検出した東西方向の掘立柱列である。いずれも一部が発掘区外へと延びており、建物跡である可能性もある。S A 05は東西4間分、S A 06は東西2間分をそれぞれ検出した。

S K 07はS F 02の路面西端で検出した。奈良時代後半の土師器甕が2個体以上とともに、銅錢が3点（和同開珎1、銭文不明2）重なって出土した。土器埋納遺構の可能性がある。

S K 08～12は発掘区の西側で検出した土坑で、出土遺物が少なく時期の確定が難しい。S K 09からは銅錢（紹聖元寶・初鉢 1094年）が、S K 11からは瓦器壇が完形で、S K 08からは犬形土製品が出土しており、およそ中世～近世初頭のものと考えられる。

S X 13は、発掘区の北辺中央付近で検出した性格不明の遺構である。遺構の重複関係からみて、前述のS D 03（東四坊坊間路東側溝）より新しい。

IV 出土遺物

縄文時代後期～晚期頃の土器、弥生時代以前の石鎌、楔形石器、石核、石器剥片、奈良～平安時代前半頃の須恵器、土師器、製塙土器、線刻土器（須恵器「×」印）、ミニチュア土器（竈か）、丸瓦、平瓦、埴、銅錢、平安時代末～鎌倉時代の土師器、瓦器、漆碗、銅錢、江戸時代の犬形土製品が、遺物整理箱約13箱分出土した。

V 調査所見

本調査で検出した縄文時代晚期頃とみられる河川01からは、多くの植物遺体が出土した。これらの科学分析を行うことで、当時の環境を知る重要な手掛かりが得られる可能性があり、貴重な資料である。

また、条坊関連遺構については、南隣での調査で検出した規模と大きく変わらない状況で、北隣に想定される三条大路南側溝などの影響はみられない。

このほか、発掘区内で検出した土坑S K 08～12はその形状や掘削深度などからみて、鎌倉時代以降にこの近辺でさかんに実施された粘土採掘坑ではないかとみられる。ただし、本調査地北東で検出されている粘土採掘跡の事例（市HJ第413次調査）では発掘区全面に採掘坑が及んでいるの対して、本調査地の様相は明らかに異なり、一部にみられるのみである。

本調査地の下層面には前述の縄文時代の河川01があり、その上面に堆積した土の中には比較的多く細かな砂礫が含まれている。その土質が当時の粘土採掘の目的に合致していないと判断され、全面的な粘土採掘が避けられた可能性があるものと考えられる。このように判断できるのであれば、これらの土坑S K 08～12は粘土採掘前の試掘坑であると推測される。（武田和哉）

- 1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告書』1983
- 2) 奈良市教育委員会「平城京左京三条四坊十二坪の調査 第413次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度』2000



HJ第640次調査 発掘区西端部（南から）



HJ第640次調査 発掘区中央部西・SD 04（南から）



HJ第640次調査 発掘区中央部東・SD 03（南から）



HJ第640次調査 発掘区東端部（南から）



HJ第640次調査 発掘区東端部（北から）



HJ第640次調査 河川01（北東から）



HJ第640次調査 河川01（南から）



HJ第640次調査 河川01 土層断面（南東から）

10. 平城京跡（左京八条二坊一坪）・杏遺跡の調査 第641次

事業名	第11号（杏中）市営住宅建替事業	調査期間	平成23年1月17日～3月11日
届出者名	奈良市長	調査面積	420 m ²
調査地	奈良市杏町393-1他	調査担当者	秋山成人

Iはじめに

調査地は左京八条二坊一坪の北東に位置する。今回の調査地のすぐ南側で市HJ第98・134次調査、南へ約200mの地点で市HJ第337・340次調査を実施しており、奈良時代の掘立柱建物、弥生時代の土坑・溝、古墳時代の方墳などを検出した。調査は奈良時代の遺構と弥生・古墳時代の遺構の拠がり（杏遺跡）を確認する目的で行った。住宅建設箇所に従って、調査地内に北発掘区と南発掘区を設けて実施した。

II 基本層序

発掘区の基本層序は上から造成土、黒灰色土、淡黄灰色土、淡灰色土、褐灰色土、灰褐色土の順で堆積し、現地表下1.4mで黄灰色土（地山）に至る。遺構検出は地山上面で行った。遺構検出面の標高は54.0mである。

III 検出遺構

遺構には弥生時代の土坑4基・溝2条、古墳時代の方墳2基、奈良時代の掘立柱建物4棟・掘立柱列6条・土坑3基・井戸3基がある。なお、近接する2基の古墳を古墳群の一部として認識し、調査地の字名をとって杏尻広古墳群と称する。各遺構の概要は一覧表にまとめた。

弥生時代の遺構

S X 01は北発掘区北西隅で検出した土坑又は溝の一部で、発掘区外へ広がる。S X 01・S K 02～04・S D 05～06から弥生時代前期の土器や石器が出土した。

古墳時代の遺構

S T 07は南発掘区で検出した方墳（杏尻広1号墳）である。墳丘の東辺に台形の突出部がある。墳丘は一辺約14mに復原でき、突出部は長さ3m、幅8m前後である。墳丘の周縁に幅0.5～1.2mのテラスがつく。盛土及び主体部は削平され残っていない。墳丘の主軸は北で西に75°振れる。墳丘の周囲には周溝SD 09（南発掘区）、周溝SD 10（北発掘区）がめぐり、外周に沿つて幅0.4～1.0mのテラスがつく。埋土は上から地山ブロック混じり黒灰色土、黒灰色土、暗灰色砂質土の順で堆積する。地山ブロック混じり黒灰色土から奈良時代の遺物、黒灰色土から埴輪が出土した。また、溝底において土師器高杯1個体、須恵器杯身・杯蓋3組が掘えられた状態で出土した。突出部南側で、蓋形埴輪が一個体出



HJ第641次調査 発掘区位置図(1/5,000)

土した。

S T 08は北発掘区東側で検出した方墳（杏尻広2号墳）である。墳丘は一辺約11mで、盛土は削平され主体部は残っていない。墳丘の主軸方向は北で東へ45°振れる。墳丘の周囲には周溝SD 11がめぐる。

いずれも出土遺物から、古墳時代中期末の5世紀後半頃のものである。

奈良時代の遺構

古墳を削平し、周溝を埋め立てて整地した上に奈良時代の遺構が構築される。S B 13とS A 16の重複関係からみて、少なくとも2時期の遺構変遷が想定できる。

S E 25～27は、いずれも深さが0.7m以上あるため井戸と考えるが、住宅基礎工事の関係で完掘しておらず、井戸枠の有無などは不明である。

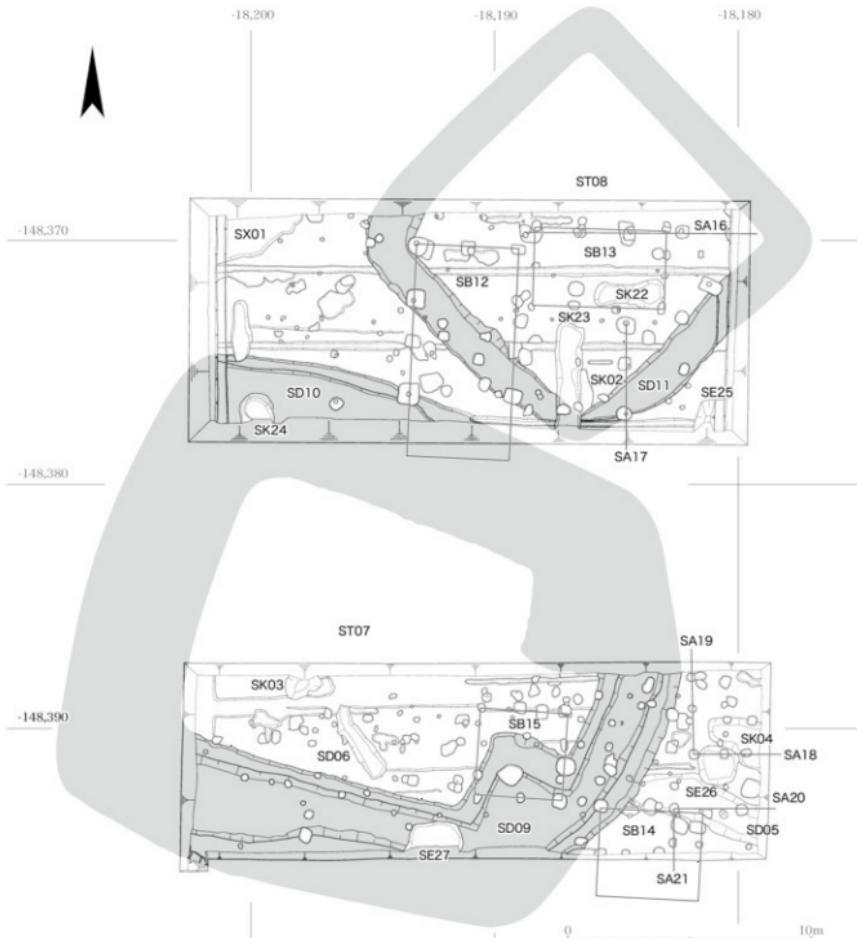
IV 出土遺物

遺物整理箱46箱分が出土した。土器には、繩文時代晩期の鉢、弥生時代前期の壺・甕、古墳時代中期末頃の土師器高杯・甕・瓶、須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯蓋・甕、8世紀後半の土師器碗・皿・杯・高杯・鉢・甕・鍋・瓶、須恵器杯・杯蓋・鉢・壺・甕・平瓶、瓦には平瓦・丸瓦などがある。また、石器74点（石包丁・石鎌・石錐・楔形石器・石核・剥片・細片）、トンボ玉1点がある。

杏尻広1・2号墳周溝出土埴輪・土器、S E 27出土土器・トンボ玉について概要を以下に述べる。

1. 杏尻広1・2号墳周溝出土遺物

埴輪は1号墳周溝からのみ出土し、円筒埴輪・朝顔形埴輪の他に蓋形埴輪・盾形埴輪・人物形埴輪などの形象埴輪を確認できる。



HJ第641次調査 遺構平面図(1/200)

円筒埴輪 底部から口縁部まで接合復原できる個体がないものの、断片的な資料から3条突帯4段構成であったと推定できる。底部高は、計測できた10個体のうち9個体が11.5cm～12.5cmの間に収まり。残り1個体は11cm前後である。突帯間隔と口縁部高が判明するのは1個体しかなく、いずれも9～9.5cmである。突帯間隔設定技法の痕跡を確認できないが、全体的な規格性をまだ保持しているように見受けられる。わずかな資料から

全形を推定すると、底部高12cm前後・突帯間隔9cm前後・口縁部高9cm前後と考えて、器高39cm程度の底部高が少し高い器形になると思われる。対向する二つの円形透孔を2段目と3段目で直交する位置に穿孔する。底径は14～17.5cmの間でバラツキがある。底部調整は認められない。

外面はタテハケ調整を基本とするが、上半部のみユビナデ調整に変わる例が1点（6）あり、口縁部に「印」

のヘラ記号がある。また、一部の個体に突帯押圧成形時の板の圧痕が認められる。内面はタテ方向のユビナデを基本とする。

朝顔形埴輪 上半部のおおよそを復原できた例が 1 点（5）あり、口縁部復原径 42.2cm、突帯間隔 7.0cm である。

蓋形埴輪 立飾り（1）は無紋で、飾板と鰐の区別がなく、形状が大きく変容している。立飾り外縁はほとんど切り取られず、成形時のヨコナデ調整が認められる。また、飾板受部をキノコ形につくる点や軸部が中実

となる点が大きな特徴である。蓋（2）の軸受部は、高さ 11.5cm で高い。笠部の下半に 1 段の布張り表現紋様を刻む例（2・3）が多く、それがない無紋の例は少ない。前者の笠部にのみ 2 次調整の B 種ヨコハケが認められる。2 の軸受部復元径 12.6cm・笠部復元径 37.4cm、3 の笠部復元径 37.2cm。

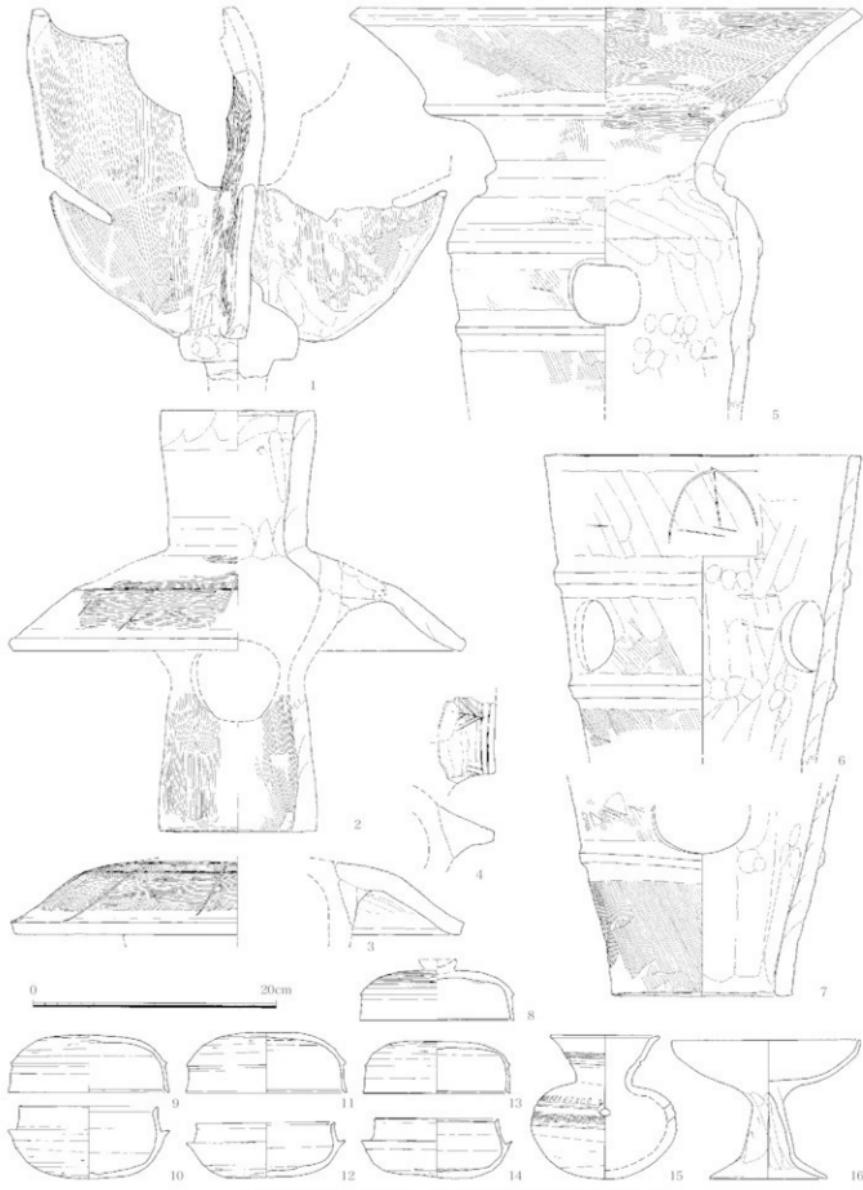
盾形埴輪 平行する 2 条の沈線で縁取りし、その内部に綾杉紋を刻む例（4）がある。線刻後にタテナデを再度行い、文様の一部が消されている。

検出遺構一覧表

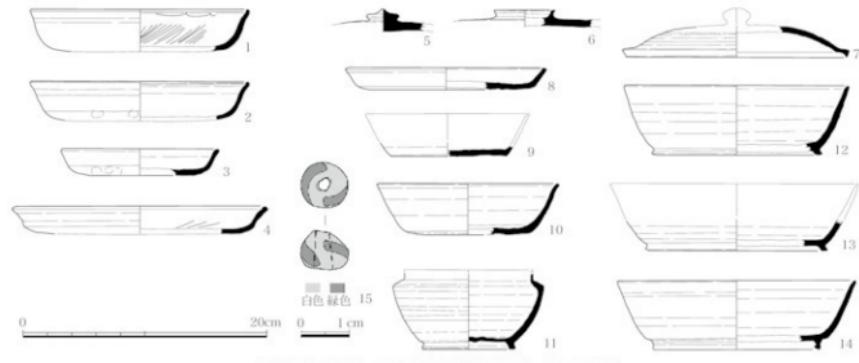
遺構番号	棟方向	規模 (間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法 (m)	軸の出	柱穴の深さ	備考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	
S B 12	南北	4 以上 × 2	6.0 以上	4.2	2.1-1.8-2.1	2.1 等間	0.4 ~ 0.7	
S B 13	東西	3 × 2	5.4	3.2	1.8 等間	1.6 等間	0.1 ~ 0.3	
S B 14	南北	1 以上 × 2	1.8 以上	4.2	1.8	2.1 等間	0.2	
S B 15	南北	3 × 2	3.8	3.4	1.4-1.4-1.0	1.7 等間	0.15 ~ 0.3	
S A 16	東西	4 以上	8.4 以上		2.1 等間		0.1 ~ 0.5	
S A 17	南北	2 以上	3.9 以上		1.8-2.1		0.2 ~ 0.5	
S A 18	東西	2 以上	2.1 以上		1.3-0.9		0.15 ~ 0.4	
S A 19	南北	2 以上	3.2 以上		1.9-1.3		0.15	
S A 20	東西	1 以上	2.8 以上		2.8		0.2 ~ 0.3	
S A 21	南北	1 以上	1.4 以上		1.4		0.2 ~ 0.3	

遺構番号	方向・形状	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
ST07	突出部付方埴輪	一辺約 14 m 突出部長さ 3 m・ 幅 8 m 前後		5世紀後半		杏尻広1号墳埴丘
ST08	方墳	一辺約 11 m		5世紀後半		杏尻広2号墳埴丘
S D 05	東西	長さ 5.6 以上 × 幅 1.6	0.46	弥生時代前期	弥生土器	
S D 06	北西・南東	長さ 3.4 × 幅 0.9	0.17	弥生時代前期	弥生土器・石器調片	
S D 09	方形溝（一部）	幅 3.2 ~ 5.0 m	0.6	5世紀後半	弥生土器・埴輪・土師器婆・壺・瓶、 須恵器・杯・蓋・盤・平瓦・製塙土器・ 土製円盤・石包丁・楔形石器・石核・ 調片	杏尻広1号墳周溝
S D 10	方形溝（一部）	幅 2.8 m 以上	0.6	5世紀後半	埴輪・土師器高杯・須恵器杯・杯身（古 墳時代・土師器・須恵器（奈良時代）	杏尻広1号墳周溝
S D 11	方形溝（一部）	幅 1.8	0.4	5世紀後半	弥生土器・土師器壺・高杯・須恵器有 蓋高脚杯・盤・石核・石器調片	杏尻広2号墳周溝
S K 02	方形	東西 0.5 × 南北 1.9 以上	0.3	弥生時代前期	弥生土器	
S K 03	不整形	東西 1.5 × 南北 1.0 以上	0.5	弥生時代前期	弥生土器・石器調片・細片	
S K 04	不整形	東西 2.2 以上 × 南北 1.9	0.6	弥生時代前期	弥生土器	
S K 22	方形	東西 2.8 × 南北 1.0 ~ 1.2	0.4	8世紀	土師器杯・皿・壺・須恵器杯 A・B・ 杯蓋・盤・壺 L・丸瓦・平瓦・カマド	
S K 23	方形	東西 1.0 ~ 1.2 × 南北 4.2 以上	0.4	8世紀	弥生土器・土師器杯・高杯・壺・須恵 器杯蓋・丸瓦	
S K 24	不整円形	東西 1.3 × 南北 1.0 以上	0.5	8世紀	弥生土器・土師器杯・皿・壺・須恵器杯 A・ B・壺・壺	

遺構番号	掘形		構造	内法 (m)	通過装置等	時期	主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)						
S E 25	隅丸方形	東西 1.4 以上 × 南北 1.3 以上	0.8 以上			8世紀	土師器杯・皿・壺・須恵器杯 B・ 壺・壺・製塙土器・丸瓦・平瓦	未完胎
S E 26	隅丸方形	東西 1.6 × 南北 1.6	0.7 以上			8世紀	弥生土器・土師器杯・皿・壺・ 須恵器杯	未完胎
S E 27	隅丸方形	東西 2.3 × 南北 1.1 以上	0.7 以上			8世紀 中頃	埴輪・土師器杯 A・B・皿 A・ 碗 A・高杯・説・壺 A・壺 B・壺・ 瓶・須恵器杯 A・B・皿 A・C・ 杯(瓶)蓋・説・壺 A・壺 E・平壺・ 黒色土器 A 壺・製塙土器・土 製有孔円盤・砾石・トンボ玉	未完胎
S X 01	不整形	東西 3.1 以上 × 南北 1.7 以上	0.15 以 上			弥生時代 前期	圓文土器・弥生土器・石罐・ 楔形石器・石核・石器調片	



SD 09・10 (1号埴周溝)・SD 11 (2号埴周溝) 出土遺物 (1/4)



人物形埴輪 腕の破片が1点ある。

須恵器 1号墳周溝出土品には、杯3点(10・12・14)、杯蓋3点(9・11・13)がある。9は口径13.2cm・器高4.8cm、10は口径11.5cm・器高5.9cm、11は口径13.2cm・器高5.0cm、12は口径11.3cm・器高4.65cm、13は口径12.3cm・器高4.3cm、14は口径10.2cm・器高4.95cm。13の内面には、茶褐色の油脂分が付着する。2号墳出土品には、有蓋高杯蓋1点(8)、驥1点(15)がある。8は口径12.6cmで、摘みを欠失する。15は口径9.1cm・器高11.75cmで、口縁部に波状紋、体部に刺突紋、波状紋をいれる。

土師器 土師器高杯が2点ある。ほぼ完形の1点(16)は、口径15.5cm・器高11.45cmで、脚部外面を縱方向にケズリ調整する。1号墳周溝から出土した。

2. S E 27出土遺物

土器 土師器には杯A(1・2)・B、皿A(3・4)、椀A、高杯、鉢、壺A・B、甕、鍋、甑が、須恵器には杯A(9・10)・B(12～14)、皿A(8)・C、杯(皿)蓋(5～7)、鉢A、壺E(11)、平瓶、甕がある。出土量の内訳は、破片点数で土師器459点、須恵器166点である。この他に、黒色土器A類1点、製塙土器58点、円筒埴輪10点、形象埴輪1点がある。

土師器杯・皿類は口縁部だけをヨコナデ調整し、暗文が施された資料(1・4)が多い。須恵器杯類には、底部外面をロクロケズリで調整する(10)や杯Bの高台の位置がやや内側に付くもの(14)がある。また、杯・皿類の底部外面や内面は、摩耗により調整が消え手触りが滑らかなものが多い。硯などに転用された可能性がある。壺E(11)は口縁部を欠くが、復原口径に比して器高が低くどっしりした形態である。これらは、形態的

特徴や調整技法、法量からみて8世紀中頃の特徴を持つもので、一括投棄されたと考える。

トンボ玉 直径0.95cm・高さ0.75cmのガラス玉(15)1点があり、緑色の丸玉を素地とし、その上に白色のガラス棒を巻きつけて縞模様をつけている。

V 調査所見

平城京造営時に削平された方墳2基(杏尻広古墳群)を確認した。今回の調査地から南へ約200mの地点(H J 337・340次調査)でも古墳時代後期の方墳3基(杏近衛古墳群)が見つかっており、杏遺跡の南北に古墳群が存在することが判明した。両古墳群ともに方墳で構成され、突出部のある古墳が一回り大きいのが特徴である。出土遺物からみて、杏尻広古墳群(5世紀後半)から杏近衛古墳群(6世紀前半)へ古墳の築造場所が移動した可能性が考えられる。埴輪はS T 07(1号墳)からのみ出土し、円筒埴輪には全体的な規格性をまだ保持するなど中期的特徴をとどめる。一方、蓋形埴輪の立飾りは、飾板受部を皿状につくる一般的な例とは異なり、飾り板形状の変容を含めて特異なつくり方である。杏近衛古墳群で埴輪が認められない点から考えると、1号墳の埴輪製作集団はその後途絶えた可能性が高い。5世紀後葉～末頃に進行した埴輪製作集団の再編成と製作技術の継承に間に合ひなかつたのがその要因と想定できる。

また、S E 27出土のトンボ玉は奈良時代中頃と推定できる数少ない出土例として貴重である。類例としては、正倉院中食に伝わる518点以上と元興寺塔跡出土土鏡鏡具中の4点が知られている。緑地に白色の縞模様をつける点で元興寺塔跡出土例と共通するが、本例はそれより一回り小さく、細かな縞模様が表されているなどの違いがある。

(鐘方正樹・三好美穂)



HJ第641次調査 北発掘区全景（西から）



HJ第641次調査 南発掘区全景（東から）



HJ第641次調査 方墳S T 08（杏尻広2号墳 南西から）



HJ第641次調査 北発掘区S D 10遺物出土状態（北から）



HJ第641次調査 方墳S T 07（杏尻広1号墳 南から）

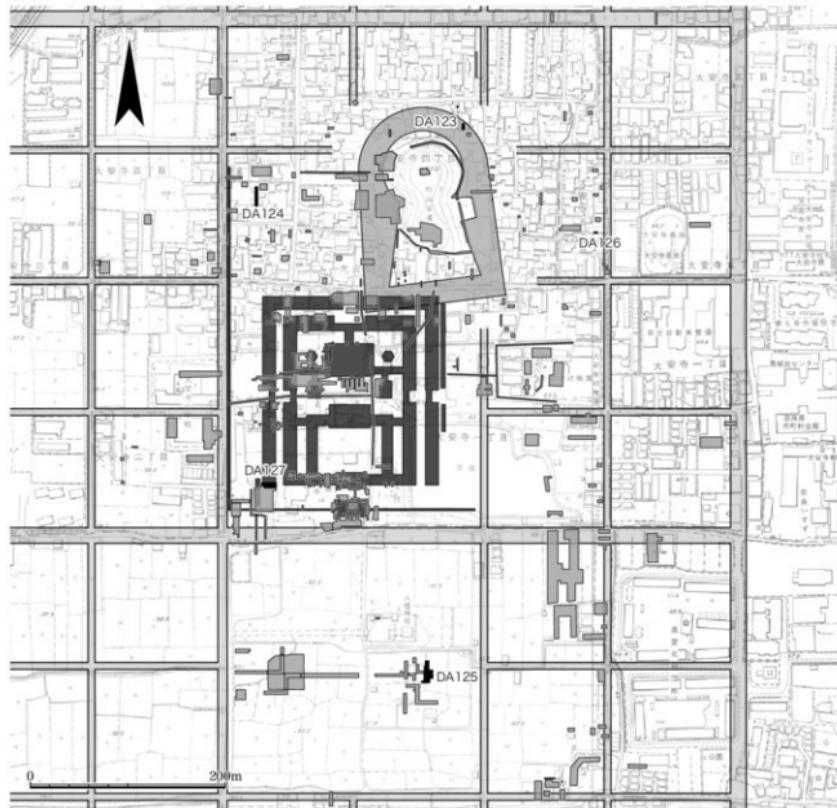
11. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 22 年度に史跡大安寺旧境内において計 5 件の調査を実施した。第 125 次調査は、東院地区の保存整備事業によるもので、東塔の東側を調査した。その他は建築に伴う調査で、第 123 次調

査が池井岳推定地の杉山古墳周濠部分、第 124 次調査が食堂并大衆院推定地、第 126 次調査が倉垣院推定地の東面築地部分、第 127 次調査が西面中房の調査である。

平成 22 年度 史跡大安寺旧境内 発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積 (m ²)	調査担当者
DA 第 123 次	離れ棟の改築、門新築	大安寺四丁目 1083 番地-1	H22.5.17 ~ H22.5.22・1.27	19.1	安井
DA 第 124 次	住宅の除去及び新築	大安寺四丁目 4-5	H22.6.21 ~ H22.7.9	40	安井
DA 第 125 次	史跡大安寺旧境内保存整備事業	東九条町 1321 番地他	H22.7.20 ~ H22.9.8	120	原田憲
DA 第 126 次	個人住宅除去・新築	大安寺五丁目 7-47	H22.8.2 ~ H22.8.4	4	武田
DA 第 127 次	護摩堂の改築	大安寺二丁目 1299 番 1	H22.11.29 ~ H22.12.8・H23.2.28 ~ H23.3.18	103.5	武田



史跡大安寺旧境内の調査 発掘調査位置図 (1/5,000)

(1) 西面中房の調査 第127次

I はじめに

本調査地は、史跡大安寺旧境内の伽藍復原では、西面中房南列の南端部に相当する。本調査地の近隣での調査例は、昭和61年度に南隣で実施した市D A第28次調査¹⁾がある。この調査では、10世紀前半を下限とする井戸、小子房の礎石据付穴などが確認されている。ただし、西面中房南列の南端部は検出できず、また掘込地業等の痕跡も確認できなかった。よって、後世の削平等による遺構の消滅も推測されたので、本調査ではまず遺構の残存状況の把握を第一の目的として実施した。

その結果、後段で述べるように、西面中房の礎石の据付穴または抜取り痕跡を検出したので、さらにその周辺部分の様相を把握すべく時期を改めて第2回目の調査を実施した。その際には南隣の市D A第28次調査の発掘区北端部分も検出し、過去の調査成果との整合性についても確認した。二度にわたる調査で設定した発掘区の総面積は103.5m²である。

II 基本層序

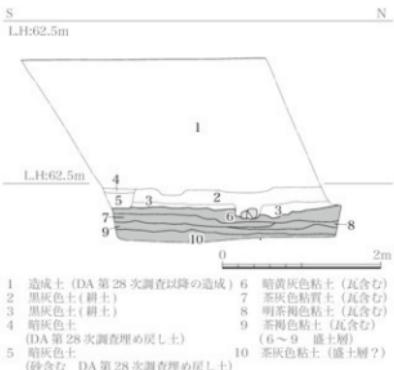
発掘区内の基本層序は、造成土(1.55~1.65m)の下に、黒灰色土(耕土、0.15~0.2m)、暗褐色土(床土、0.05m)と続いて、現地表下約1.7~1.75mで暗黄灰色土(0.1m)に到達する。この層は発掘区内全域に広がつておらず、奈良時代の瓦の破片を包含している。遺構検出作業はこの層の上面で実施した。

この層の下には、場所によりやや異なっているが、茶

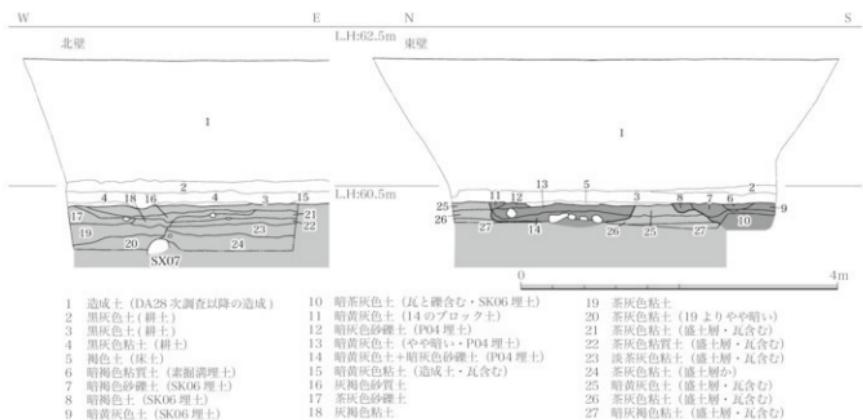
灰色系粘土層や暗灰褐色系粘土層が0.05~0.2m程度の厚さで堆積しており、断削り調査の断面で確認した限りでは少なくとも5層程度が確認できた。いずれの層にも奈良時代の瓦の破片が含まれている。こうした様相から見て、暗黄灰色土およびその下層の各堆積土は、盛土をした層である可能性が高い。なお、暗黄灰色土上面の標高は60.2~60.3mである。

III 検出遺構

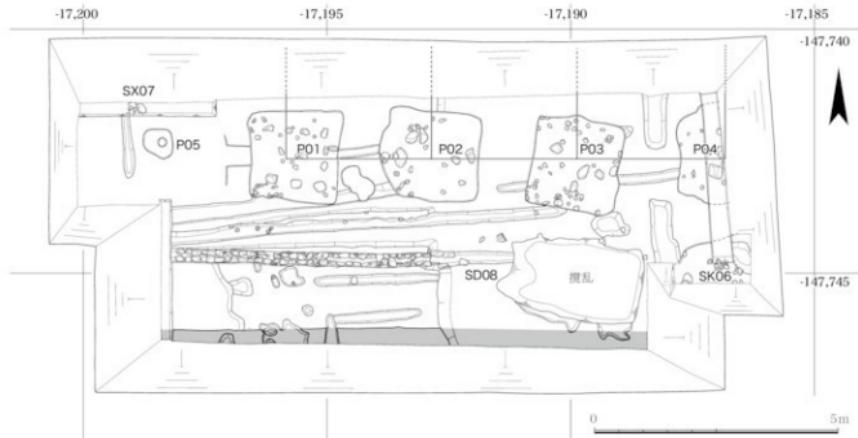
検出遺構は礎石の据付穴または抜取り痕跡と土坑、溝



DA 127次調査 発掘区北壁・東壁上層図 (1/60)



DA 127次調査 発掘区北壁・東壁上層図 (1/60)



DA第127次調査 道構平面図(1/100 トーン部分はDA第28次調査発掘区の再発掘部分)

DA第127次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	形		時期	主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)			
P 01	隅丸方形	東西約2.0×南北約1.8	不明	奈良時代 土師器、須恵器、丸瓦、平瓦	
P 02	隅丸方形	東西約2.0×南北約1.8	不明	奈良時代 土師器、須恵器、瓦器、平瓦	
P 03	隅丸方形	東西約1.8×南北約1.9	不明	奈良時代 土師器、須恵器、国産陶器(18世紀)、丸瓦、平瓦	西面中房礎石の据付穴または抜き取りの痕跡
P 04	隅丸方形	東西約1.8×南北約0.8以上	0.2～0.3	奈良時代 土師器、須恵器、丸瓦、平瓦	
P 05	楕円丸方形	近約0.6	不明	奈良時代 土師器、須恵器、丸瓦、平瓦	
S K 06	円形か	東西約1.5×南北約0.8以上	不明	奈良時代 土師器、須恵器、丸瓦、平瓦	
S X 07	南北方向	幅約0.3×長さ約3.3以上	0.15以上	奈良時代 土師器、須恵器、丸瓦、平瓦	石組道構
S D 08	東西方向	幅約0.2×長さ7.0以上	約0.2	江戸時代以降 土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、刻印瓦、棟瓦	

である。以下、主要遺構の概要を記す。また遺構に関する詳細なデータは、遺構一覧表にまとめてある。

P 01は、発掘区中央より西北寄りの場所で検出した礎石の据付穴または抜き取りの痕跡である。中には拳大～径30cm程度の川原石があり、礎石の根石とみられる。その中でも径20cm前後以上のものが、東西方向に2条の列をなすような形で、ほぼ等間隔で並べられているよう見受けられる。P 02は、発掘区中央や北寄りの場所で検出した礎石の据付穴または抜き取りの痕跡である。P 01同様に、P 02の中には拳大～径30cm程度の川原石の根石があるが、こちらはP 01とは異なり、並べられたような形跡は見えない。埋土の上面からは12世紀中頃の土師器・瓦器が出土した。P 03は、発掘区中央や北東寄りの場所で検出した礎石の据付穴または抜き取りの痕跡である。中にはやはり川原石の根石が見えるが、その様相は概ねP 02の如くである。埋土の上

面から18世紀の国産陶器の小片が出土した。P 04は、発掘区東端で検出した礎石の据付穴または抜き取りの痕跡である。東半は発掘区外へと続く。中には、P 01～03同様に、拳大～径30cm程度の川原石の根石がある。東壁の断面で確認した限りでは、検出面からの深さが0.2～0.3mしかない。なお、P 01～04の中心間の間隔は約3.0m(奈良時代の小尺で換算して10尺分に相当)である。

P 05は、発掘区の北西端付近で検出した柱穴である。発掘区の中では、このP 05と組み合うとみられる他の柱穴は確認できなかった。S K 06は発掘区東南隅で検出した土坑で、遺構の一部は、発掘区東側および南側へと延びている。埋土には奈良時代の瓦の破片が含まれている。S X 07は発掘区北西の断割りで確認した石組道構。拳大～径30cm程度の石で構成されており、南北方向に延びるとみられる。北壁の土層断面を観察したとこ

ろ、この石組遺構を境として、東側と西側では堆積の様相が異なっていることが判明した。すなわち、東側は発掘区全体で確認されている前述の暗黄灰色土以下、0.05～0.2m程度の厚さで奈良時代の瓦片を含む人為的な造成土が縦状に数層堆積しているが、西側では、暗黄灰色土以下、灰褐色砂質土や茶褐色砂礫土などがあり、その下には茶灰色系の粘土の堆積が確認できる。石組遺構は、堆積が変化する法面状の部分の下部に積まれているようにも見受けられる。また、発掘区の全体に広がる暗黄灰色土の堆積は、発掘区の西端では途切れ消滅していることもあわせて確認した。SD 08は発掘区の中央南寄りで検出した東西方向の溝。出土遺物はほとんどない。埋土には耕土が含まれており、時期的には新しい遺構とみられる。瓦や石を使って護岸した部分がある。この他、発掘区南東隅付近には東西約3m、南北約1.5mの搅乱があり、大量の木枝とともに現代の廃棄物が出土した。

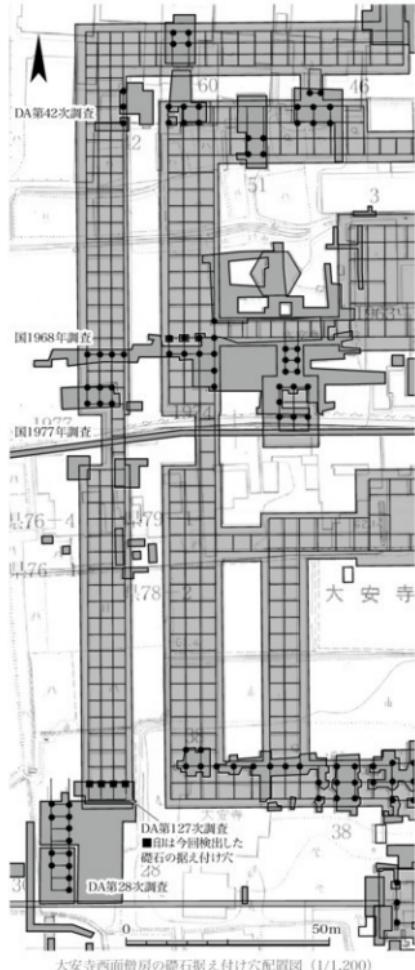
IV 出土遺物

遺物整理箱8箱分が出土した。その大半を奈良～平安時代の瓦類が占めている。奈良～平安時代前半の軒丸瓦1点（小片で型式不明）、軒平瓦3点（いずれも小片で型式不明）、駿斗瓦・面戸瓦・刻印瓦（「○」印）・丸瓦・平瓦・穿孔平瓦、土師器・須恵器・綠釉陶器・円面鏡、鎌倉時代の土師器・瓦器、江戸時代の国産陶器、棟瓦、時期不明の鉄釘・鉄洋・炭などがある。

V 調査所見

本調査では、西面中房の礎石の据付穴または抜き取りの痕跡を4基検出した。過去に大安寺の西面中房推定地内で同様の遺構を検出した例としては、西面中房の北列の一柱において、奈良国立文化財研究所が昭和38年度と52年度に実施した調査2例²⁾、および奈良市教育委員会が平成2年度に実施した調査例³⁾の計3例がある。これらの3例の調査成果から、西面中房の建物の寸法は、基本的には東西の梁行方向が10尺（約3.0m）、また南北の桁行方向が13.5尺（約4.0m）であることが判明している。本調査で検出した礎石の据付穴または抜き取りの痕跡P 01・02・03・04は、東西方向に並び規模や埋土の様相も酷似し、その中心間の距離は約3.0mで、これまでの調査成果とも概ね一致している。

さらに、P 01・02・03・04の南側には同様の礎石の据付穴または抜き取りの痕跡が検出できなかつた。よって、本調査で検出したP 01・02・03・04が西面中房南列の南端の柱列であるとみなしうる。この結果、西面中房とその東側に位置する西面太房の南端とは、東西方向に揃わない位置関係となる可能性が高くなつた。



大安寺西面僧房の礎石据え付け穴配置図 (1/1,200)

また、西面中房の北端で検出した礎石の据付穴または抜き取りの痕跡（市DA第42次調査）と、本調査で検出した礎石の据付穴または抜き取り痕跡について、同じ柱筋に属するとみられる遺構同士の位置関係を国土方眼上で計算上比較すると、双方を結んだ線は国土方眼方位に対しても北に約0°27'23"振れるという算出値を得た。この値は、朱雀大路の側溝遺構の振れの値（約0°15'）⁴⁾に比べればやや大きいものの、平城京内で検出された条

坊遺構の振れの値と近似している。

加えて、当該遺構の周囲には、西面中房基壇と関係があるとみられる造成土の堆積が確認された。ただし、東壁の土層断面の観察による限りでは、前述のP 01・02・03・04の遺存状況はわずかに0.2～0.3m程度とみられるので、かつての西面中房の基壇上面からは相当程度の削平を受けた状態であると推測できる。本調査で確認し得た人為的な造成土の中で最上層の暗黄灰色土についても、かつての西面中房の基壇の中では比較的下部の積み土、あるいは掘込み地業の一部である可能性がある。また、これらの堆積は本調査発掘区の南に隣接する市DA 28次調査発掘区へと拡がっていくことが、土層観察より確認された。

発掘区の西端で確認したSX 07に関しては、検出面に広がる暗黄灰色粘土よりもさらに下層で確認していることからみて、西面中房と直接関連する遺構かどうかは本調査の成果だけでは判明しない。むしろ、その下層に

ある何らかの遺構の一部、もしくは寺域内の造成の作業に関わる遺構である可能性が高いようにも考えられる。

なお、西面中房推定地付近では、過去の調査でも同様の堆積層の存在が確認されている。大安寺周辺は、東から西へ緩やかに下る地形であり、主要伽藍部分でも元の地形が比較的低かったとみられる西側部分では、伽藍建立の際に大規模な造成作業を行っていたと推測される。

この他、P 01～04とその西側で検出した柱穴P 05の関係については不明である。（武田和哉）

1) 奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内 第28次の調査」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和61年度』 1987

2) 奈良国立文化財研究所「大安寺西中房」「平城京左京六条三坊十四坪発掘調査概報」
奈良市教育委員会 1978。
奈良国立文化財研究所「大安寺旧境内の調査」『奈良文化財研究所三十年史』 1982

3) 奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内 第42次の調査」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成2年度』 1991

4) 奈良国立文化財研究所編「平城京朱雀大路発掘調査報告」
奈良市教育委員会 1982



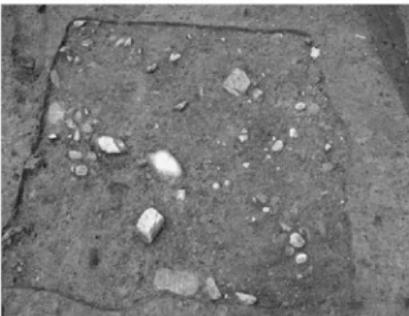
DA第127次調査 発掘区全景（第1回目 西から）



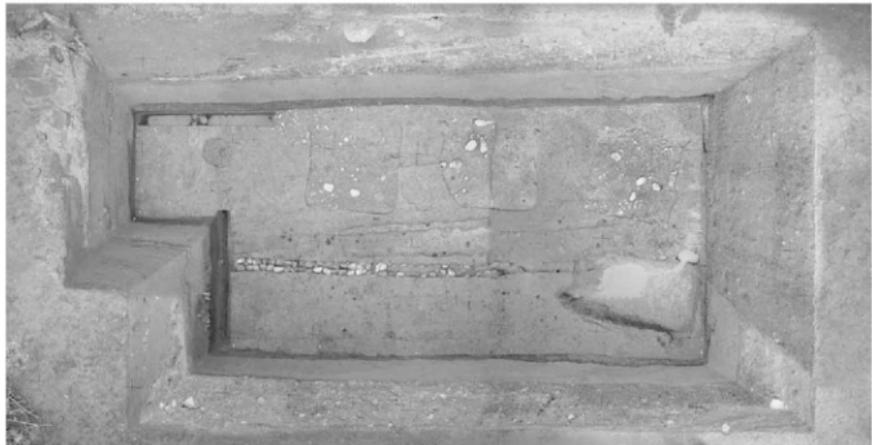
DA第127次調査 発掘区全景（第1回目 北から）



DA第127次調査 発掘区全景（第1回目 南から）



DA第127次調査 P03全景（東から）



DA 第127次調査 発掘区垂直モザイク写真（第2回目 ポール撮影）
(第1回目調査で検出したP04やSK06など東側の遺構は再検出していない)



DA 第127次調査 発掘区全景（第2回目 西から）



DA 第127次調査 SX07 全景（南から）



DA 第127次調査 発掘区南西隅土層（第2回目 東から）

(2) 食堂并大衆院推定地の調査 第124次

Iはじめに

調査地は大安寺旧境内の北西部で、伽藍復原では食堂并大衆院の推定地にあたる。地形的には能登川扇状地の扇端部付近に位置する。現状は宅地である。

調査地の北隣接地で実施したDA第57次調査(平成5年度)¹⁾では、地山上面で奈良時代の掘立柱塀・井戸・土坑、平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑と室町時代の溝・土坑を検出した。また、東隣接地で実施したDA第84次調査(平成11年度)²⁾では、地山上面で奈良時代に埋められた北東から南西に斜行する溝、平安時代の掘立柱建物・掘立柱列・土坑と室町時代の土坑を検出した。

今回の調査は、大安寺旧境内に関連する遺構面及び遺構の様相の把握を主な目的として、建物予定地の北寄りに発掘区を設定して実施した。

II 基本層序

発掘区の北側では、裏庭の表土である黒褐色礫混じりシルト質砂(厚さ0.2m)、宅地の整地土である暗灰黃色礫混じりシルト質砂層(厚さ0.2m)の下で灰色砂質粘土混じりシルトの地山となり、それより南では造成土(厚さ0.2m)、宅地の整地土である地山のシルトブロック層(厚さ0.1~0.2m)の下で地山となる。

奈良時代の遺構面は地山上面で、その標高は発掘区の北側が60.8m、南側が60.6mである。

III 検出遺構

遺構検出は地山上面で行った。主な検出遺構は、DA第84次調査で検出された溝の西延長部分と平安時代以降の土坑である。

S D 01 幅0.7mの東西方向の溝で、発掘区外東西に続く。深さ0.6m。南肩は後世の改変により北肩よりも0.2m低くなっている。埋土は上位が地山のシルトブロック、下位が黄灰色砂質シルトで、埋められたことがうかがえる。出土遺物はない。位置と形状から、DA第84次調査で検出された北東から南西に斜行する溝(S D 01)の西延長部分とみて間違いない。

S K 02~05 発掘区の南側と北側で検出した。S K 02・03は地山上面、他は宅地の整地土上面から掘削されている。

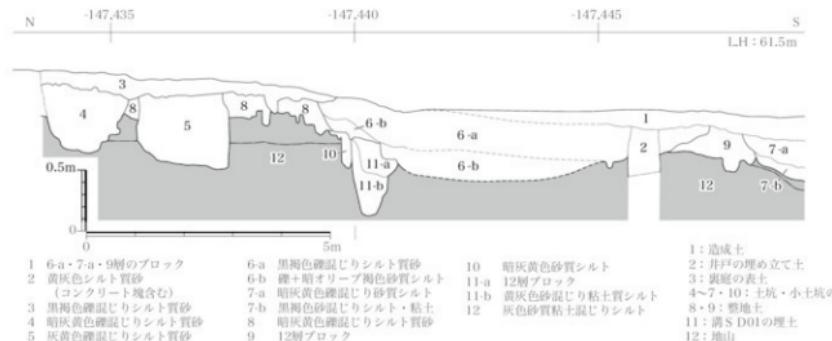
S K 02は、東西1.1m以上、南北0.6mの平面隅丸方形の土坑で、深さ0.3m。S K 03は、東西0.4m以上、南北1.1mの平面不整円形の土坑で、深さ0.3m。とともに埋土は黄灰色砂質シルトで、前者から時期不明の土師器・須恵器の小片、後者から時期不明の土師器・須恵器小片と平安時代以降の瓦(巴紋軒丸瓦、丸・平瓦)が出土した。

宅地の整地土上面から掘削されている土坑のうち、S K 04・05から18世紀以降の国産陶磁器が出土した。

IV 出土遺物

土器と瓦が遺物整理箱3箱分あり、瓦が大半を占める。ほとんどが遺構面直上や土坑から出土している。

土器 すべて小片である。器種がわかるものには、8世紀の土師器壺・須恵器杯、10世紀頃の土師器皿、12世紀前半の瓦器碗、14~15世紀頃の土師器皿・羽釜・鍋、15~16世紀の瓦質土器捕鉢、17世紀以降の肥前産磁器碗、信楽産陶器捕鉢がある。

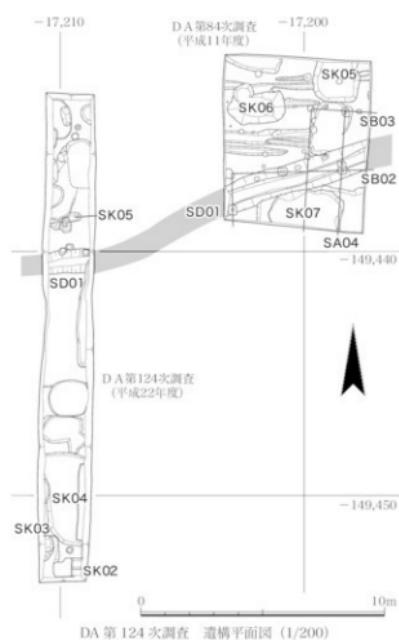




DA第124次調査 発掘区全景（北東から）



DA第124次調査 発掘区全景（南東から）



DA第124次調査 溝SD01（西から）

瓦 軒丸瓦3点(6138型式Ca、大安寺91・107型式)、軒平瓦2点(6712A、型式不明)、道具瓦、丸瓦、平瓦がある。平瓦が大半を占める。

V 調査成果

DA第84次調査で検出された溝S D 01の西延長部分を確認した。位置と形状から、さらに西方に延びるとみられる。土坑SK 02・03は、出土遺物から平安～室町時代のものと考えられる。

なお、大安寺に関連する遺構は、後世の改変により残存していないかった。
(安井宣也)

- 1) 奈良市教育委員会「食堂并大衆院推定地の調査 第57次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994
- 2) 奈良市教育委員会「食堂并大衆院推定地の調査 第84次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成11年度』2000

(3) 杉山古墳周濠（池井岳推定地）の調査 第123次

Iはじめに

調査地は、奈良時代の大安寺の寺域の北端で、古墳時代中期中頃の前方後円墳である杉山古墳の後円部北東の周濠及び外堤が想定できる位置にある。敷地南側の離れ棟改築箇所に第1発掘区、敷地北端の門新築箇所に第2発掘区を設定して発掘調査を実施した。

II 基本層序

第1発掘区 表土（厚さ0.2m）、土間の整地土である潤黄色のシルトブロック層（厚さ0.2m）、水田床土である黄灰色のシルト層（上下2層あり、厚さ0.5m）の下に、主に黄灰色や黒褐色のシルト層からなる杉山古墳の周濠埋土（厚さ0.8m）があり、その下で周濠の底面（標高60.9m）となることを確認した。水田床土の上層（図中4層）から16世紀頃の土師器羽釜片、下層（同5層）から14世紀頃の土師器羽釜片が出土した。

第2発掘区 厚さ約0.2mのコンクリートの下に旧表土の暗灰褐色土（厚さ0.15m前後）、近世以降の桟瓦片や15世紀頃の土師器羽釜片を包含する黄茶灰色土（0.25m前後）が堆積して明黄褐色砂礫あるいは明黄褐色粘土の地山に至る。地山上面が奈良時代の遺構面と推定でき、その標高は62.05～62.1mである。

III 検出遺構

第1発掘区 奈良時代の遺構面である杉山古墳の周濠埋土上面で遺構検出を行ったが、遺構はなかった。そのため、周濠埋土を一部掘り下げて周濠底を確認した。

第2発掘区 地山上面で検出遺構は、発掘区北東隅で検出した小土坑（直径0.3m・深さ0.2m）1基のみで、出土遺物がないため時期は不明である。杉山古墳及び大安寺に関する遺構は認められなかった。

IV 出土遺物

遺物整理箱1箱分が出土した。第1発掘区の出土遺物の内訳は、古墳時代中期中頃の円筒埴輪、8世紀の土師器、須恵器、軒丸瓦（6138Ca II）、道具瓦、丸瓦、平瓦、14・16世紀頃の土師器羽釜である。第2発掘区からは、古墳時代中期中頃の円筒埴輪、15世紀頃の土師器羽釜、近世以降の桟瓦等が少量出土したのみである。

V 調査成果

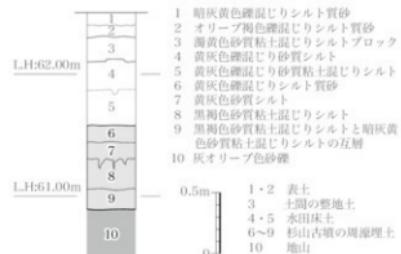
調査地南半部は杉山古墳の周濠内に相当し、鎌倉時代までに埋没が進んで室町時代に水田化した後、江戸時代に集落の一画になったことが推察できる。発掘区の位置関係からみて、周濠は從来の復原案よりも若干北側へ広がることが予測される。（安井宣也）



DA第123次調査 第1発掘区全景(北東から) 奥の林は杉山古墳



DA第123次調査 第2発掘区全景(南から)



DA第123次調査 第1発掘区土層柱状模式図(1/400)

(4) 東面築地（倉垣院推定地）の調査

第 126 次

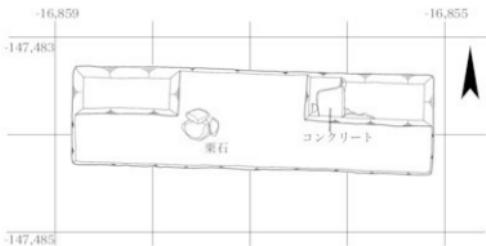
I はじめに

本調査地は、史跡大安寺旧境内の東辺部に該当し、敷地内には東面築地および東四坊坊間東小路が想定されている。近隣では過去にいくつかの調査例があり、北側で実施した DA 第 85・86 次調査¹⁾では、奈良時代の東西方向の溝、室町時代の南北方向の溝などを検出している。

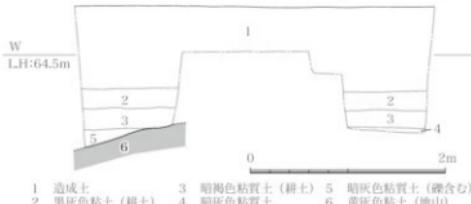
本調査では、計画されている建築建物の基礎の深さが現況から 0.5 m 程度下までしか及ばず、近隣調査の状況などから、遺構面まで工事の掘削が達しないことが予測された。よって、東西 4 m、南北 1 m の規模で発掘区を設定し、まずは基礎工事のおよぶ深度まで掘削を行い、発掘区の北東隅と北西隅部分をさらに掘り下げ、遺構面の確認を行った。

II 基本層序

発掘区内の基本層序は、厚さ 0.8 m の造成土の下に、黒灰色粘土、暗褐色粘質土などの耕土を確認した。北東隅では、その下層に暗灰色粘質土の堆積を確認したが、この層には江戸時代や近代以降の陶磁器・瓦の破片やビニールなどが含まれていた。一方、北西隅では、耕土の下層に、暗灰色粘質土が堆積していたが、前述の堆積とは異なり、礫を含んでいる。類似した土色ながら、土質は異なっており、別個の堆積層とみられる。この層は、発掘区の中央寄りから西に向かって厚く堆積していた。



DA 第 126 次調査 発掘区全景 (南から)



DA 第 126 次調査 遺構平面図・北壁土層図 (1/50)

その下層には黄灰色粘土の地山層を確認した。地山上層の標高は、最も高い部分で 63.75 m 前後である。

III 検出遺構

発掘区の面積が狭く、遺構面の確認を目的とした調査のため、地山層を検出することができたに過ぎず、明確に遺構として確認したものはない。ただし、発掘区の北西隅で確認した地山層の上に堆積する暗灰色粘質土は、その様相から見て、何らかの遺構の埋土である可能性がある。この層から奈良時代の瓦片とともに、江戸時代後半以降の国産陶磁器が出土した。一方の北東隅で確認した暗灰色粘質土の堆積は、現代の搅乱埋土とみられる。

IV 出土遺物

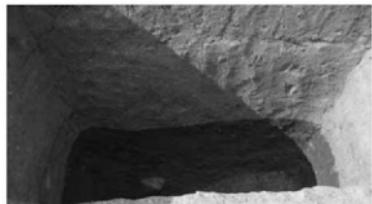
奈良時代の須恵器、室町時代以降の瓦質土器、江戸時代以降の国産陶磁器・瓦の各破片が、遺物整理箱 1 箱分出土した。

V 調査所見

本調査では、限られた面積ながら、地山層およびその標高を確認した。建築工事の基礎掘削が造成土内に収まるため、遺跡に与える影響は極めて少ないと判断できる。

このほか、近隣地で確認された遺構と関連のある遺構は、発掘区の制約もあり確認できなかった。(武田和哉)

1) 奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内 第東面築地の調査 第 85 次・第 86 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 11 年度』2001



DA 第 126 次調査 北西隅の堆積土層 (南から)

(5) 東塔の調査 第125次

I はじめに

この調査は、平成13年から継続して行っている史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る塔院地区の調査である。本事業に係る東塔周辺の調査は、平成18年から実施しており、平成18年度のDA第114次調査は、東塔基壇規模およびその残存状況の確認を主眼とし、北・南・西3方の基壇周辺に調査区を設定して実施した。その結果、基壇の規模や構造が判明した。平成21年度のDA第122次調査では塔本体の規模を確認する為、基壇上面に、東西南北に長い発掘区を設定して実施した。調査の結果、礎石やその抜き取り穴の配置から、東塔は、初重は3間四方で、平面規模は一辺長約12m(40尺)で、基壇の高さは、南側柱の礎石の柱座基底部の高さから、基壇高は約1.8m(6尺)と判明した。

以上の成果を受けて、本年度は基壇東側の状況と塔周囲の開統施設の確認を目的として調査を行った。

II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から黒灰色土(耕土)、淡灰色粘土、淡黃灰色土、茶灰色土、黄橙色土、淡茶灰色粘土、黄褐色砂質土と続き、明黄色粘土の地山に至る。ただし、発掘区東端では淡黃灰色土直下で地山となる。

り、東側階段部では茶灰色土直下で地山に至る。

黄橙色土、淡茶灰色粘土、黄褐色砂質土には焼土・炭は入っておらず、黄橙色土上面は地覆石の上面近くまで及んでいる。これらの層は後世の整地土と考える。整地土は最も厚いところで、約0.5mある。整地土からは鎌倉時代の13世紀中頃以降の軒瓦は出土しなかった。このことは整地が行われた時期を示唆するものである。

遺構検出はまず、整地土上面である黄橙色土上面で行った。その後、基壇北東隅部と、発掘区中央にはサブトレレンチを設け、この箇所では整地土を除去して、地山直上で2度目の遺構検出を行った。

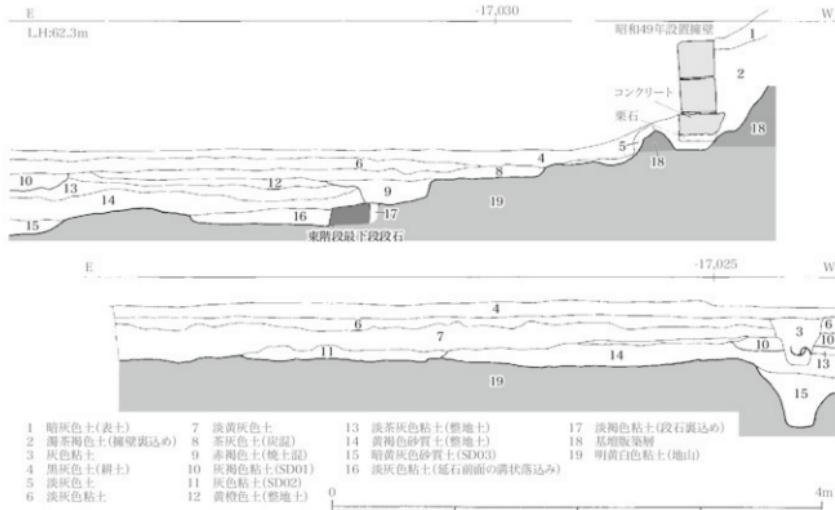
III 検出遺構

整地土の黄橙色土上面で溝(SD01・02)と溝状土坑を検出した。

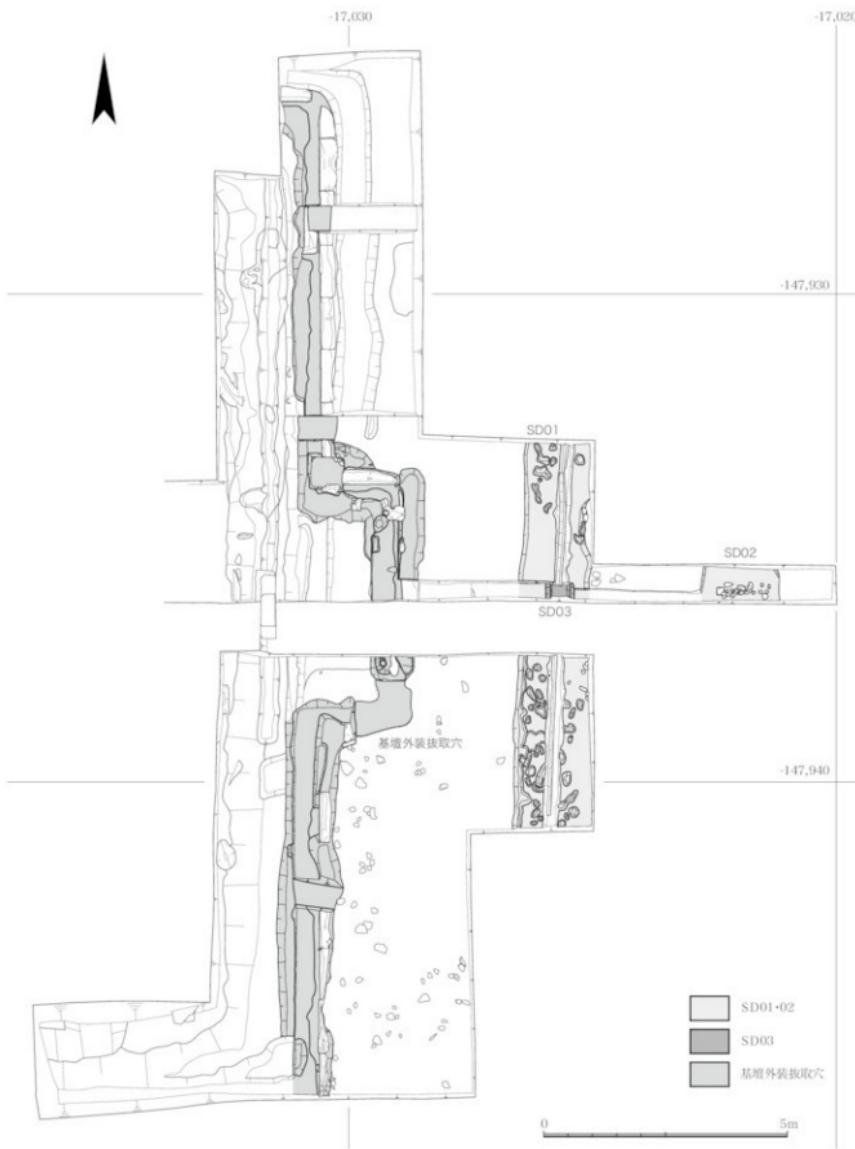
また整地土を除去した基壇北東隅部では基壇外装を、発掘区中央では東階段最下段の段石と溝(SD03)を検出した。以下、東塔に関連する遺構について述べる。

東塔基壇

整地土上面で溝状土坑を確認した。幅約1.0m、深さ約2.0mで、基壇周囲をめぐるように掘削されており、基壇外装の抜き取り穴と考える。これにより基壇外装の



DA第125次調査 中央セクション北壁土層図(1/40)



DA第125次調査 遺構平面図(1/100)

ほとんどは抜き取られていた。ただし、整地土で覆われていた延石は、その大半が抜き取り穴の底面で残存していることを確認した。Iヶ所のみであるが地覆石も残っていた。地覆石・延石は凝灰岩製切石である。

整地層を除去し、全貌を明らかにした基壇北東隅での基壇外装は、地覆石が長さ0.96m、残存幅0.35m、残存高0.25mである。延石は長さ1.05m、幅は0.35m、高さ0.2m程度のものが多いが、北東隅部では寸法合わせの為、長さ約0.6mの短い延石を設置する。

東階段については、最下段の段石を確認でき、南階段と同様に、延石外幅で5.4m、出が1.6mであることがわかった。

延石の前面1m程度は、深さ約0.1m浅く窪んでおり、雨落溝のようになっていたが、玉石や切石による護岸施設は無かった。この底部には淡灰色の粘土が堆積しており、滲水した時期があったとみられる。なおこの窪みからは多数の軒瓦が出土し、基壇北東隅では隅木蓋瓦も出土していることからみて、被災により軒先の瓦が落下したものか、あるいは整地直前の修理時に、不要な軒先の瓦を落として廃棄したものと考えられる。

基壇築成土については、残存する基壇東端の状況を確認できた。基壇の裾部分、特に階段部分では、地山を削り出して段を形作っており、基壇底部付近では少なくとも0.4m以上は地山を削って基壇を築いていることがわかった。この地山上に約1.2mの厚さの築成土が残っていた。最下段の築成土は、しまりのない暗褐色砂質土で、厚さも約0.3mと厚い。この上は0.05~0.15mの厚さで突き固められていた。

なお、基壇上面を調査したD A第122次調査第2発掘区の西壁面に凝灰岩製切石の一部が露出していたため、今回の調査で取り上げて観察したところ、敷石と判明した。敷石は南西の四天柱礎石の抜き取り穴に放り込まれていたことも明らかになった。一辺は上面が約0.56m、下面は約0.5mの正方形で、断面が逆台形を呈する。下面には成形時の盤による加工痕跡が明晰に残る。厚さ約0.12mである。

東塔周辺の遺構

東階段最下段の段石から、東へ約2.1mと約5.8m離れた整地土直上で、並行して南北に流れる溝2条（S D 01・02）を検出した。西側の溝は幅約1.4mで、東側の溝は幅約1.7mである。両溝とも深さ約0.1mで、溝底は拳大的凹凸が残り、一部溝底に河原石が敷かれた箇所が残存していたことから、石敷溝であったと考えられる。この2条の溝は約2.1m離れて、南北に並行して

おり、敷石という共通点をもつ。これらのことから、両溝間の空閑地2.1m間に築地塀などの遮蔽施設の存在が想定され、両溝はその雨落溝であったと考える。

東階段最下段の段石から、東へ約2.6m離れた地山直上では、南北方向の溝S D 03を検出した。幅約0.6mで、深さ約0.45mである。長さは約0.3m分を確認し、北・南側ともに発掘区外へと続く。西塔で確認されているような基壇周囲を巡る溝になると考える。

IV 出土遺物

出土遺物は遺物整理箱で306箱分出土した。遺物には8~9世紀にかけての土師器・須恵器・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・斐斗瓦・隅木蓋瓦、13世紀の瓦器椀・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦、14世紀の軒丸瓦、17世紀の国産磁器があり、出土遺物の大半は瓦類である。

瓦類

ここではD A第114・122・125次の3次にわたる史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る東塔周辺での発掘調査と、昭和49年に東塔土壇擁壁工事に際して行われた小規模調査で出土した軒瓦を集めし報告する。

4次にわたる東塔周辺の調査で出土した軒瓦は851点あり、その出土点数の内訳は別表のとおりである¹⁾。以下、種まで特定できた軒瓦と、道具瓦の一部について述べる。なお、複数出土している軒瓦については、主として図示した軒瓦についての製作・調整技法を記述した。

軒丸瓦

6091 Aは中房蓮子を1+4に配置する無子葉單弁8弁蓮華紋で、外区内線に珠紋を、外区外線に唐草紋をめぐらす。瓦当裏面はヨコナデ、瓦当下半部側面はタテケズリのちヨコナデを施す。瓦当下半部側面の瓦当付近に深さ約0.7cmの範端痕が残る。

6135 Aは断面形半球状の中房に、蓮子を1+6に配置する有子葉單弁12弁蓮華紋である。弁は長く、楔状の間弁をもつのが特徴的である。外区内線に珠紋を、外区外線に線鋸歯紋を密にめぐらす。瓦当裏面に接合溝を設け先端部無加工の丸瓦を接合する。瓦当裏面下半部はヨコケズリ、接合部はタテナデのちヨコナデし、接合線は半円形。瓦当下半部側面はタテケズリのちヨコナデ。平城宮出土品より、瓦当厚が1.5cm程度である。

6137 Aは小型品。中房蓮子を1+6に配置する有子葉單弁8弁蓮華紋で、間弁は水滴形。弁・間弁とも短めである。外区内線に珠紋を、外区外線に線鋸歯紋をめぐらす。凸面はタテケズリを施す。瓦当裏面下半部はヨコナデを施す。接合部はタテナデし、内面接合部の側面寄りを縱方向にヘラケズリし、接合線は浦鉢形に仕上げる。

瓦下半部側面はタテケズリのちナデを施す。

6138 C は中房蓮子を 1 + 5 に配置する有子葉單弁 12弁蓮華紋で、楔状の間弁をもつ。外区内縁に珠紋を、外区外縁に線鋸齒紋をめぐらす。6138 C には瓦当紋様をトレースするように彫り直したものがあり、彫り直し前が 6138 C a、彫り直し後が 6138 C b とされている。

6138 C a は凸面にタテケズリを施す。瓦当裏面下半部はヨコケズリを施す。接合部はタテナデし、内面接合部の側面寄りをタテケズリし、接合線は蒲鉾形に仕上げる。瓦下半部側面はタテケズリを施す。

6138 C b は凸面にタテケズリを施す。瓦当裏面下半部はヨコケズリを施す。接合部はタテナデ、のち接合円弧に沿ってナデつけ、接合線は半円形に仕上げる。瓦当下半部側面はタテケズリのちナデを施す。なお、DA第125次出土 6138 C b の中に 2 点のみ、6138 C a と同様に、瓦当裏面の内面接合線を蒲鉾形に仕上げるものを見た。このことは、6138 C a・C b 各々の製作時期について、近接した時期に継続生産されていたことをうかがわせる。

6138 E は中房蓮子を 1 + 6 に配置する有子葉單弁 12弁蓮華紋で、水滴形間弁を配する。外区内縁に珠紋を、外区外縁に線鋸齒紋をめぐらす。凸面はタテケズリのちタテナデを施す。瓦当裏面下半部はヨコケズリを施す。接合部はタテナデし、内面接合部の側面寄りを縱方向にヘラケズリし、接合線は蒲鉾形に仕上げる。瓦当側面下半部はタテケズリのちヨコナデを施す。瓦当下半部側面の瓦当付近に深さ約 0.9cm の範端痕が残る。

6138 J は中房蓮子を 1 + 6 に配置し、平板状の有子葉單弁 12弁蓮華紋を飾る。外区内縁は珠紋をめぐらすが、外区外縁は素紋である。瓦当裏面はヨコナデし、周縁に沿ってケズリを加える。瓦当側面下半部はタテケズリのちヨコナデを施す。

6291 A は中房蓮子を 1 + 6 に配置する複弁 8弁蓮華紋で、間弁は連続する。間弁の外側には楔形を配する。外区内縁に珠紋を、外区外縁に線鋸齒紋をめぐらす。

6291 A には彫り直し前の A a と、2箇所の間弁を彫り直した A b が知られるが、本例は彫り直しの当該部位を欠失しており、いずれの段階のものかは不明である。瓦当裏面はヨコナデし、接合部は接合円弧に沿ってナデつけて接合線を半円形に仕上げる。瓦当側面下半部はタテケズリのちヨコナデを施す。

6301 B は突出した中房に蓮子を 1 + 5 + 9 に配置する複弁 8弁蓮華紋で、中房圓輪が無い点は特徴的である。外区内縁は珠紋、外区外縁は線鋸齒紋をめぐらす。外縁

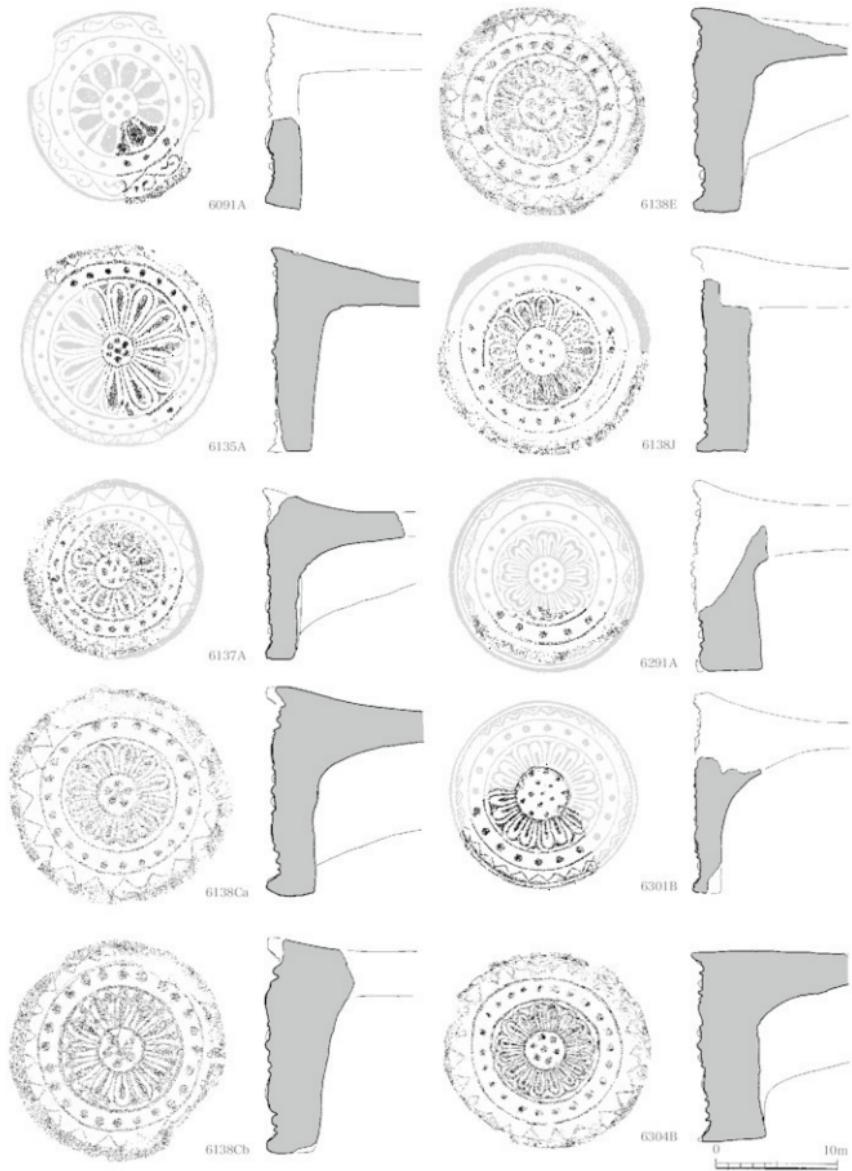
東塔地区 発掘調査出土軒瓦型式一覧表

時代	型式	軒丸瓦						軒平瓦					
		S49 立 合 金	114 次 次	122 次 次	125 次 次	全体 合計	時代	型式	S49 立 合 金	114 次 次	122 次 次	125 次 次	全体 合計
6091 A			2	2		4	6572		1	3	2	6	6
6135 A			1	1		2	6647 B		1		1		1
6137 A			2	2		4	6661		1		1		1
6138 C a	1	4	1	8	14	35	6663 B		1		1		1
6138 C b	18	2	22	42		82	6664 A		2	2	4		4
6138 E	7		8	15		20	6664 H			1	1		1
6138 J	3		3			6	6667 A		1	2	3		3
6291 A		1	1	1		3	6690 A		1		1		1
6225		1		1		2	6712 A	4	48	3	41	96	96
6391 B		1	1	1		3	6712 B	2	30	4	25	61	61
6304 D		5	5			10	6716 C		2		2		2
6308 A a		1	1			2	6716 E			3	3		3
6308 C		1	1			2	6716 F	2	1	1	4		4
型式不明	37	19	56			102	6717 A	9	1	15	25		25
						145	型式不明	20	8	28	38		38
												238	
15 A		1		1		2	239 A	2		2		2	
51 A a		1		1		2							
51 A b	13		6	19		38							
平 安	51 A c	9		9	18	36							
51 A d	17	3	19	39	安	105							
51 A	19			19		19							
型式不明	9	10	19			48							
						116						2	
108 A	3	3	1	7		17	249 A	7	5	2	14		
173 A	4	12	6	10	32	50	254 C	4	2	3	9		
174 A	1	23	11	21	56	69	274 A		6	6	6		
食	型式不明	6	32	19	41	98	274 B	3	45	31	33	112	
							型式不明	1	3	10	14		
						193						155	
室 町	88 A			1	1	2							
江 戸	型式不明		1		1	2							
合計	12	210	45	189	456	635	合計	11	176	60	148	395	

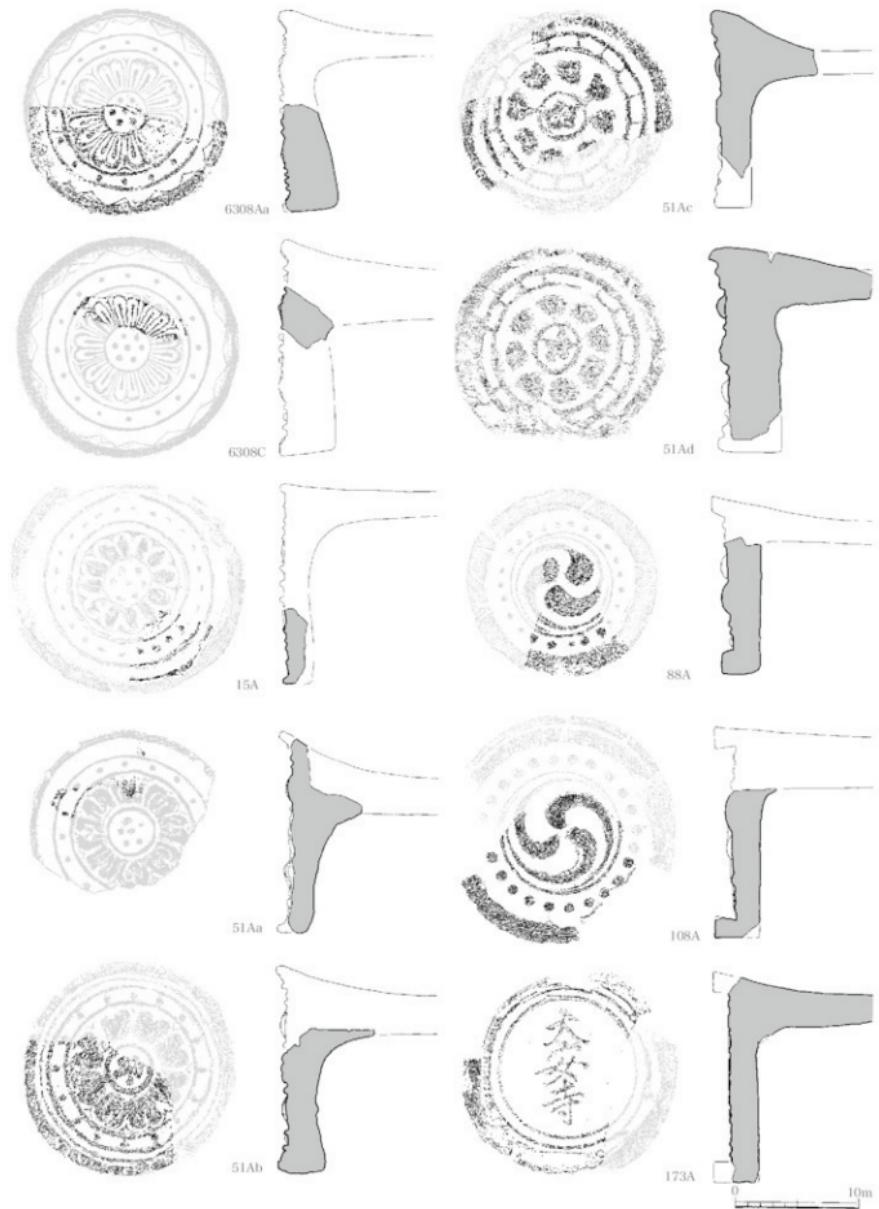
* 型式欄中で、別種が記載されないものは、種別不明である。

頂部には平坦面をもち、そこに 1 条の沈線をめぐらす。平城宮・京系の「興福寺式」軒丸瓦である。瓦当裏面下半部は丁寧にヨコケズリされ、「興福寺式」軒瓦にみられる「布目押圧技法」に特徴的な布目痕は無いが、周縁に沿ってケズリを施していることから、「布目押圧技法」による製作の可能性が考えられる。接合部はタテナデを施し、接合線の形状は半円形である。

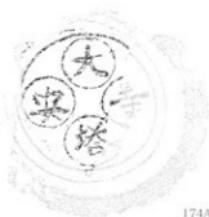
6304 D は突出した中房に蓮子を 1 + 6 に配置した複弁 8弁蓮華紋で、間弁は連続する。外区内縁は珠紋、外区外縁に線鋸齒紋をめぐらす。凸面はタテケズリのちタテナデ。接合部から瓦当裏面にかけてタテナデし、接合線半円形に仕上げる。瓦当裏面周縁に沿ってユビナデを施す。瓦当下半部側面はタテナデ。範型彫り直し前の雛類²⁾で、瓦当厚は約 5.5cm と厚手であることと、胎土・



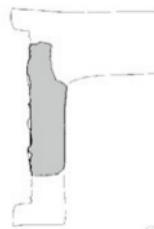
大安寺東塔周辺出土軒瓦 I (1/4)



大安寺東塔周辺出土軒瓦2 (1/4)



174A



重弧紋



6647B



6663B



6664A



6664H



6667A



6690A

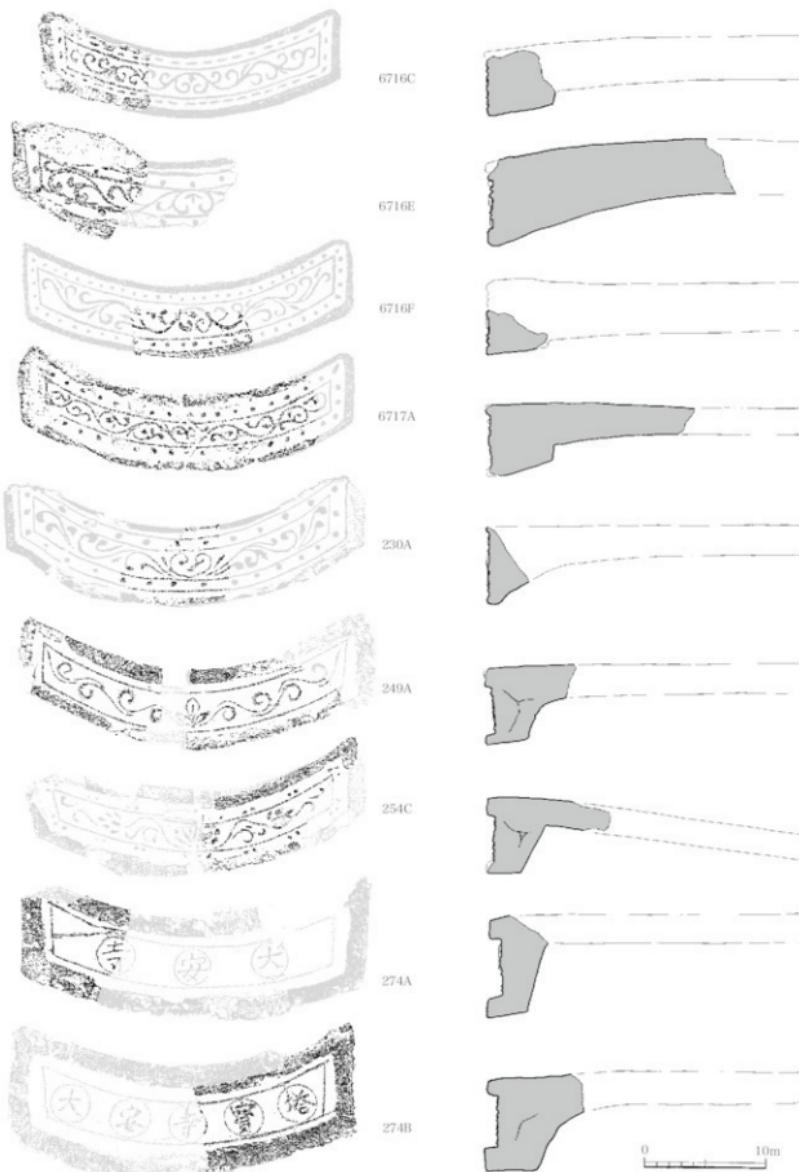


6712B



0 10m

大安寺東塔周辺出土軒瓦 3 (1/4)



大安寺東塔周辺出土軒瓦4 (1/4)

焼成・色調から京都府井手町の石橋瓦窯産とみられる。

6308 A は中房蓮子を 1 + 6 に配置する複弁 8 弁蓮華紋である。外区内線に珠紋、外区外線に幅広の線鋸歯紋をめぐらす。6308 A には彫り直し前の A a と中房圓線を彫り直した A b が知られるが、本例は 6308 A a である。瓦当面を横断する危傷が確認できる。瓦当裏面下半部はヨコナデ、瓦当側面下半部はタテケズリのちナデを施す。

6308 C は紋様構成が A に似るが、弁区全体が盛り上がる点が異なる。大安寺では 2 例目の出土品である³⁾。15 A は中房に蓮子を 1 + 6 に配置し、梢円形の無子葉單弁 12 弁蓮華紋を飾る。外区内線珠紋、外区外線は素紋である。法隆寺で同范品が確認されている。

51 A は中房に蓮子を 1 + 5 に配置し、ハート形の子葉を持つ複弁 8 弁蓮華紋を飾る。3 回の彫り直しが確認でき、彫り直し前は 51 A a、彫り直し後のものは、古いものから順に 51 A b、51 A c・51 A d である。

51 A a は接合部から瓦当裏面にかけてヨコナデを施す。瓦当側面下半部はタテケズリのちナデを施す。

51 A b は蓮子・中房圓線・外区外線を彫り直し、それぞれ太く高くなる。筐型の摩耗により子葉が不鮮明になり、無子葉單弁蓮華紋にみえるものがある。接合部から瓦当裏面にかけてタテナデし、接合線の形状を半円形にする。瓦当側面下半部は、瓦当裏面側はタテケズリのちヨコナデ、瓦当側はヨコケズリをおこなう。瓦当側面下半部の瓦当付近に、深さ約 0.7cm の危端痕が残る。

51 A c は蓮子・中房圓線・蓮弁を彫り直し、子葉が無くなる。凸面はタテケズリのちナデ。接合部から瓦当裏面にかけてタテナデし、接合線の形状を半円形にする。

51 A d は中房以外を全て彫り直しており、特に蓮弁は球状の無子葉單弁と化している。凸面はタテケズリのちタテナデ。瓦当裏面はナデ、接合部は接合円弧に沿つてナデつけ、接合線は半円形に仕上げる。

88 A は左巻きの三巴紋で、巴頭部は円形。内圓線のみで、外圓線は無い。内圓線の外側に珠紋をめぐらす。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。瓦当裏面と瓦当側面下半部はヨコナデ。外緑頂部は無調整である。

108 A は右巻きの三巴紋で、巴頭部はわずかに尖る。内圓線のみで、外圓線は無い。内圓線の外側に珠紋をめぐらす。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。丸瓦は深く挿し込まれ、瓦当面のベースから丸瓦先端までの間隔は 0.7cm。瓦当裏面下半部はヨコナデ、接合部は接合円弧に沿つてナデつけ、接合線は半円形に仕上げる。瓦当下半部側面はヨコナデ。外緑頂部は無調整である。

173 A は内区に「大安寺」の 3 文字を縦書きした文字紋で、内区と外区を 2 条の圓線で分ける。凸面はタテケズリのちタテナデ。瓦当裏面に接合溝を設け、先端無加工の丸瓦を接合する。瓦当裏面下半部はヨコナデ、接合部は接合円弧に沿つてナデつけ、接合線は半円形に仕上げる。瓦当下半部側面はヨコナデ。外緑頂部は無調整。

174 A は内区にそれぞれ圓線で囲んだ「大安寺塔」の 4 文字を飾る文字紋で、内区と外区を 2 条の圓線で分ける。瓦当裏面に浅めの接合溝を設け、丸瓦を接合する。瓦当裏面下半部はヨコナデをほどこす。

以上の型式・種別が判明した軒丸瓦のうち、6091 A・6137 A・6138 C・6138 E・6138 J・6304 D は造大安寺司所管の瓦屋で奈良時代に製作されたとみられる大安寺所用瓦である。なお、6135 A・6291 A・6301 B・6308 A a は大安寺旧境内では初めての出土例となる。

軒平瓦

重弧紋軒平瓦は 6 点出土しているが、弧数がわかるのは、図示した四重弧紋 1 点だけである。

6647 B は右から左に偏行する 5 回反転変形忍冬唐草紋で、上外区に珠紋を 27、下外区に線鋸歯紋を 29 めぐらす。推定和泉産の「藤原宮式」軒平瓦。凹面瓦当付近と顎面はヨコナデ、顎段部の面はヨコケズリのちヨコナデ。顎の長さが瓦当厚より大きい段顎である。

6663 B は花頭形の中心飾りをもつ 3 回反転均整唐草紋で、外区に 2 重の郭線をめぐらす。左右唐草第 2・3 単位近くに各 1 個の珠紋を配する点が特徴である。顎形態は顎面の無い曲線顎である。

6664 A は花頭形の中心飾りをもつ 3 回反転均整唐草紋で、上・下外区に珠紋を 21、左右の脇区に各 3 を配置する。A は花頭形基部がやや開き、界線に付かない。石橋瓦窯産で、6304 D と組む大安寺創建瓦である。顎の長さが瓦当厚より大きい段顎。凹面瓦当付近をヨコナデ。顎面はタテケズリのちヨコナデ。顎段部にはヨコナデを加える。

6664 H は花頭形の中心飾りをもつ 3 回反転均整唐草紋で、上・下外区に珠紋を 21、左右の脇区に各 3 を配置する。花頭形基部は直線的で界線に付かない。左右第 2 単位主葉の巻き込みが大きい点は特徴的である。顎の長さが瓦当厚より大きい段顎である。凹面はヨコケズリを施す。顎面はヨコナデを施す。顎段部にはヨコナデを加える。凸面平瓦部は横方向の繩タタキ目を残す。

6667 A は花頭形の中心飾りをもつ 4 回反転均整唐草紋で、上・下外区に珠紋を 21、左右の脇区に各 3 を配置する。顎の長さが瓦当厚とほぼ同じの段顎である。凹

面瓦当付近はナメナデを施す。顎面はヨコナデを施す。凸面平瓦部は縦方向の繩タキ目を残す。

6690 A は花頭形の中心飾りをもつ4回反転均整唐草紋で、右第1・第2単位間と、左第2・第3単位間以外では、唐草の主葉は連続する。上外区に珠紋を24、下外区に珠紋を21、左右の脇区に各3を配置する。顎の長さが瓦当厚とほぼ同じの段顎。大安寺では6138 Eと組む⁴⁾。

6712 A は牛頭形の中心飾りをもつ5回反転均整唐草紋で、唐草の主葉は連続する。外区は小粒の珠紋を上外区31、下外区は30、左右の脇区に各4を配置する。顎の長さが瓦当厚とほぼ同じの段顎である。凹面瓦当付近をヨコケズリ。顎面はヨコナデを施す。凸面平瓦部はヨコナデを施す。6712 Aについてばらは連続する。外区は小粒の珠紋を上外区31、下外区は30、左右の脇区に各4を配置する。顎の長さが瓦当厚とほぼ同じの段顎である。凹面瓦当付近をヨコケズリ。顎面はヨコナデを施す。凸面平瓦部はヨコナデを施す。古いものから順にI・II-1・II-2・II-3段階の4区分されている⁵⁾が、今回集計した東塔出土の6712 Aのうち、段階がわかるもの47点の内訳は、II-3段階が16点、II段階とだけ分かれるもの31点であり、I段階は無かった。このことから東塔には6712 Aの比較的後発の生産品が多いと判断できる。大安寺では6138 Cと組む。

6712 B は唐草の主葉が連続する5回反転均整唐草紋で、牛頭形の中心飾りが唐草に接続する。外区は珠紋を上外区24、下外区は25、左右の脇区に各5を配置する。唐草支葉がすべて主葉に接続する点は特徴的である。曲線顎。凹面瓦当付近はヨコケズリ、凸面はタテケズリを施す。範型の左下隅部に傷みが生じた後の生産品である。

6716 C は三葉形の重飾りを配した中心飾りをもつ均整唐草紋で唐草は連続する。杏仁形珠紋を上外区に18、下外区に19、左右脇区に各4配置する。顎の長さが瓦当厚とほぼ同じの段顎。顎面はタテケズリのちナデ。小型の軒平瓦で、大安寺では同じく小型の6137 Aと組み合う。

6716 E は6716 Cと紋様構成が似るが、中心飾りは界線に接続する。外区には珠紋をめぐらす。曲線顎。断面観察から、2枚の粘土板を貼り合わせて成形されたことがわかる。凹面瓦当付近はヨコケズリ。凸面はタテケズリ。

6716 F は6716 C・Eと紋様構成が似るが、唐草主葉は1箇所が連続せず、支葉は主葉に接続しない点が異なる。珠紋を上外区に26、下外区に21、左右脇区に各5配置する。顎面はヨコナデを施す。

6717 A は水滴形重飾りを配した中心飾りをもつ4回反転均整唐草紋。上・下外区に珠紋を17、左右の脇区

に各3を配置する。大安寺では軒丸瓦6091 Aと組み、6138 C-6712 Aと同じく、僧房主要瓦の一つである。

230 A は太いV字形垂れ飾りを配した中心飾りをもつ3回反転均整唐草紋で、主葉先端が球状に丸くなる点が特徴的である。外区には珠紋をめぐらす。大安寺西塔で同范品が出土している。

249 A は上向きの三葉紋を中心飾りとする5回反転均整唐草紋で、外区は素紋である。断面観察から、顎裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法により造られたとわかる。凹面瓦当付近はヨコケズリ。顎面と顎裏面はヨコナデ。外縁頂部は無調整である。

254 C は中心に横視した蓮華紋を配した均整唐草紋で、唐草左右に雷状の蓮華紋を配する。外区は2ないし3の珠紋を1単位として配した「吹き寄せ珠紋帯」。断面観察から、顎裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法により造られたとわかる。凹面瓦当付近はヨコケズリ。顎面と顎裏面はヨコナデ。凸面平瓦部はタテケズリのちヨコナデ。外縁頂部は無調整である。

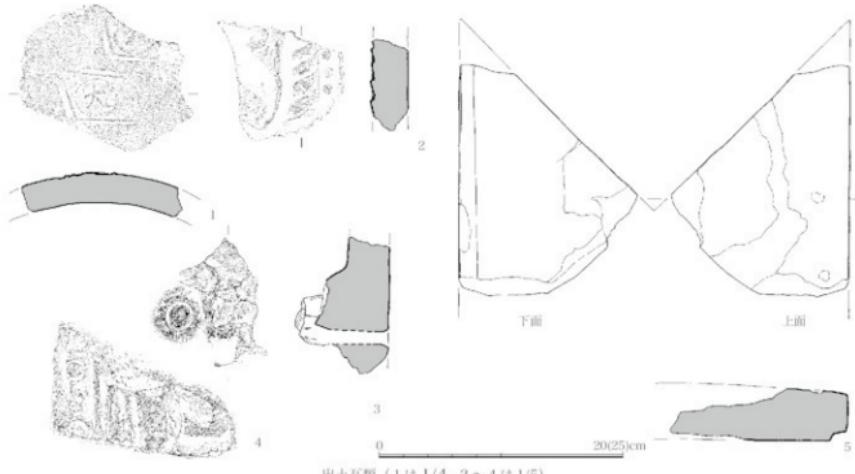
274 A は内区に「大安寺」の3文字を右から左に配した文字紋で、外区は素紋。瓦当貼り付け技法。凹面瓦当付近はヨコケズリ。顎面はヨコナデ。顎裏面はタテケズリ。外縁頂部は無調整。内区左端部と外区左下部の2箇所に范傷が確認できる。大安寺では173 Aと組む。

274 B は内区に「大安寺寶塔」の5文字を左から右に配した文字紋で、外区は素紋。断面観察から、顎裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法により造られたとわかる。凹面瓦当付近はヨコケズリ。顎面と顎裏面はヨコナデ。外縁頂部は無調整である。外区左下隅に范傷が確認できる。大安寺では174 Aと組む。

以上の型式・種別が判明した奈良時代の軒平瓦のうち、6664 A・6690 A・6712 A・6716 C・6716 E・6716 F・6717 Aは造大安寺司所管の瓦屋で製作されたとみられる大安寺所用瓦である。なお、6647 B・6663 Bは大安寺旧境内では初めての出土例となる。また、表中の6572種別不明は、顎形態が凸面瓦当沿いに幅の狭い顎面をもつ曲線顎であり、この顎形態の平城京出土二重郭文軒平瓦は6572 Eしか知られていない。

平瓦・鬼瓦・隅木蓋瓦

1は平瓦で、凸面側に軒平瓦274 Bの範型を押捺する。274 Bの外区左下隅にある范傷が確認でき、同范と判断できる。この平瓦の存在や、瓦当側面に范端が確認できる軒平瓦274 Bはみつかっていないことから、274 Bの範型は外縁まで被るものではなく、外縁の内側までの範型であったと考えられる。凹面は丁寧なナデを施す。



2は内区に獣面紋を飾り、外区に珠紋をめぐらした獣面紋鬼瓦で、南都七寺大1式B⁶⁾である。裏面と側面はヨコケズリを施す。DA第114次調査で2点、DA第122次調査で1点の計3点出土した。

3は地板の上に粘土塊を置き、手とヘラで成形した手づくりの鬼面紋鬼瓦。左眼から鼻部にかけての破片である。眼球が蟹目状に突出しているのが特徴的である。鼻孔部付近に径約1.3cmの釘穴が貫通する。裏面はナデで調整を。同様の胎土・焼成・色調の手づくりによる鬼瓦片がこの他に4点出土している。うち1点(4)は図示した左牙から外区にかけての破片である。胎土・焼成・色調の共通性から、鎌倉時代の軒丸瓦173 A・174 Aや軒平瓦274 A・Bと同じ頃の製作と考える。

4は隅木蓋瓦で、茅負があるたる燕尾状部の破片である。上面は中央部側から側縁側へ向かって低くなるようにタテケズリを施す。下面是タテケズリで平坦にし、側縁には段を設ける。側縁部はタテケズリ。DA第125次調査区の東塔基壇北東隅から1点出土した。

V 調査所見

東塔については、以下のことことが明らかになった。

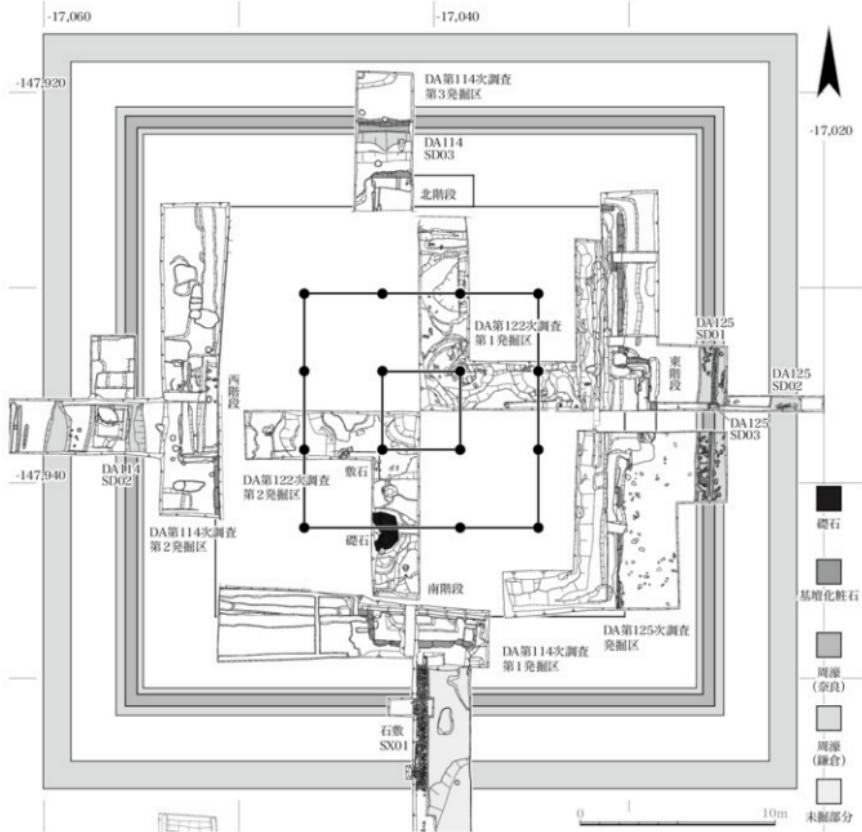
①基壇の平面規模については、東北隅の様相が明らかになったことにより、基壇一辺長は両端の延石間で21m(70尺)と推認できた。東塔は、初重は3間四方、平面規模は一辺長約12m(40尺)、基壇高は約1.8m(6尺)と判明している。これらの規模は西塔と一致しており、大安寺には東西に同規模の七重塔が建っていたとみ

ることができる。また凝灰岩製敷石を確認し、これは東塔の基壇上面が凝灰岩製敷石で覆われていたことを示すもので、東塔基壇を復元する上で貴重な資料といえる。

②東塔東側で検出した南北溝S D 03と同様に、基壇端から約4.2m離れた箇所で、基壇辺に平行して延びる溝は、東塔西側のDA第114次第2発掘区での南北溝S D 02、東塔北側のDA第114次第3発掘区での東西溝S D 03がある。これらを一連の溝とみて、塔四周を巡る溝の可能性を考える。この場合、溝の一辺長は約30mと復元できる。これは西塔で確認されている塔周回の溝と近似値を示し、塔本体の規模だけではなく、塔周回を巡る溝も同様に配置していたと考えられる。

③一方、東塔と西塔では基壇築成方法に関しては違いもある。西塔の基壇は四面の階段よりも広い一体的な版築を施し、その後で階段と基壇部分を削り出していた。ところが、東塔では基壇底部付近では地山を削って、逆に塔周回を一段低くして基壇を築いていた。このような基壇築成方法の違いの一つとしては、東から西へ下る塔院地区の地形のなかで、両塔の地盤高ができるだけ抑えようと思案したとも考えられる。

④東塔が初めて史料に見えるのは、天平神護2年(766)の落雷に遭った記事⁷⁾で、この頃には建立されていたとみられる。東塔出土の奈良時代の軒瓦では、6138 Cと6712 Aの多さが目立つ。6138 Ca - 6712 Aについて、天平勝宝年間(749~757)が主体的な生産時期の僧房主要瓦で、6138 C bは天平勝宝9年



東塔主要構造模式図 (1/250)

(757) 以降とみられており⁸⁾、東塔では6138 C a より、改築された6138 C b の方が出土量は顕著であり、6138 C b の生産時期が、史料からうかがえる創建年代と近接することから、東塔創建瓦は6138 C b - 6712 A の可能性が高いと考える。

⑤平安時代の軒瓦は、軒丸瓦51 A が96点と多いことが目立つ。ところが平安時代の軒平瓦は230 A 2点だけと少ない。大安寺西塔の創建瓦の組合せは51 A - 6712 B で、西塔創建は平安時代の初め頃とする指摘⁹⁾があり、この考えに従えば、東塔でも軒平瓦6712 B は軒丸瓦51 A と一緒に、平安時代に使用されたものとみられる。

では東塔に51 A や6712 B が使用された契機はいつであったのか。9 ~ 10世紀代にかけての、東塔に関する修理記事は見当たらないが、11世紀では大安寺は寛仁元年(1017)に、大火災に遭っており、東塔のみが残ったこととする史料¹⁰⁾がある。東塔は火災を免れたのではあるが、後の寛治4年(1090)までに再興が成った堂舎の記録には、被災を免れた東塔までも含まれている¹¹⁾。このような史料から、寛仁火災後の復興時に、東塔に軒丸瓦51 A や軒平瓦6712 B が使用されたと考えられる。しかし、軒丸瓦51 A や軒平瓦6712 B が11世紀まで生産されていたとは考え難く、寛仁火災後の復興時には、焼け跡の中から、使用に耐えうる瓦をかき集

6138Cb-6712A
(東塔創建瓦)174A-274B
(鎌倉時代の塔修理工用のJ)173A-274A
(鎌倉時代の塔四面の大垣用のJ) 10cm

大安寺東塔出土軒瓦の組合せ

め、それらを用いて東塔の瓦の葺き替えが行なわれた可能性が考えられる。

⑥東塔東側、後世の整地土上面で検出した、2条並行して流れ、築地塀の雨落溝とみられる南北溝 S D 01・02と同様に、基壇端から約3.7mと約7.4m離れた箇所で確認された溝は、東塔西側のD A第114次第2発掘区でみつかっている。これらの溝が一連のものであったとする。東塔の周囲には、一辺長約35mの築地塀が巡らされていたと考えることができる。史料によると、鎌倉時代に大安寺では、東大寺僧である宗性(1202~1278)が、1253年からの1度目の大安寺別当時に東塔の修理を、1266年からの2度目の大安寺別当時に金堂の瓦葺き替え、南大門修理、東西南北面の大垣と塔四面の大垣を築いたことが知られる¹²⁾。史料と遺構の年代から、東塔東側で検出した雨落溝と想定できる2条の並行する溝 S D 01・02は、宗性による塔四面の大垣の雨落溝と考える。また整地土下では宗性が修理を行なった13世紀中頃以降の軒瓦は出土しておらず、塔周辺の整地も宗性によるものと考えられる。

出土した鎌倉時代の軒瓦は製作技法の特徴から、宗性による修理時と同時期のものとみてよく、「大安寺塔」・「大安寺寶塔」の文字紋軒瓦である174 A - 274 Bが、宗性が1度目の別当時の塔修理工用で、「大安寺」銘の文字紋軒瓦 173 A - 274 Aは宗性が2度目の別当時の塔四面の大垣用と考える。なお、鎌倉時代の巴紋軒瓦 108 Aについては、その製作時期と出土数から、軒平瓦 249 A - 254 Cと組み合う可能性が考えられる。軒平瓦 249 A - 254 Cとも頭裏面はヨコナデ調整するという共通性があり、これは274 Aにはみられず、274 Bの一部にみられる手法である。このことから 108 A - 249 A - 254 Cは、塔修理工用 174 A - 274 Bの補足瓦であった可能性が考えられる。また、史料では宗性の修理に

先立つ、元久元年(1204)年に塔修理の勧進が行なわれたことが記録に見える¹³⁾が、この時期に特徴的な軒平瓦の造瓦技法である顎貼り付け技法による軒平瓦は全く出土しておらず、元久の勧進は行なわれたであろうか、実際に修理まで行なえたかは疑問が残る。

⑦東塔は、宗性修理後半世紀経たない承仁4年(1296)に雷火で焼失したという史料がある¹⁴⁾。この後、東塔に関する再建・廃絶に関する史料は見当たらず、これが東塔の廃絶時期を示すものとみられている。軒瓦の分析では、室町時代以降とわかる軒瓦は、室町時代と江戸時代の軒瓦各1点しか出土しておらず、出土軒瓦の分析結果は、この史料を裏付けるものである。(原田 憲二郎)

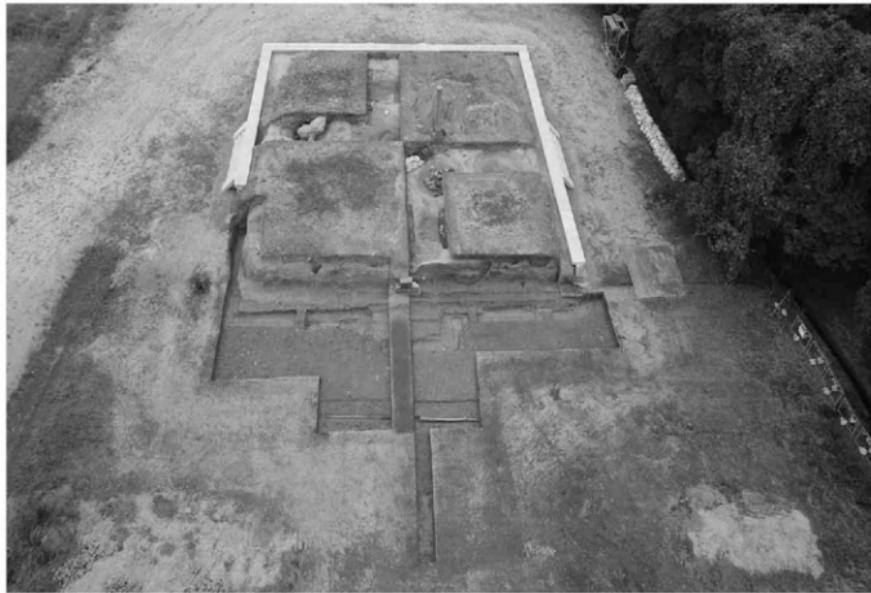
- 1) なお、2桁あるいは3桁の数字と大文字のアルファベットからなる軒瓦の型式番号は、大安寺旧境内で出土する平安時代以降の軒瓦について設定したものである。(原田憲二郎「大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成18(2006)年度』2009)
- 2) 6304 Dの細分については、原田憲二郎「大安寺式」軒瓦の成立『奈良市埋蔵文化財調査年報平成20(2008)年度』2011に掲げる。
- 3) 6308 Cは東三坊大路と六条糸間路が交差する地点の、西北面門推定地の調査で1点出土している。(奈良市教育委員会「27. 史跡大安寺旧境内の調査83-1次調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和58年度』1984)
- 4) 訂2と同じ
- 5) 中井公「大安寺式」軒瓦の年代『堅田直先生古稀記念論文集』同論文集刊行会1997
- 6) 鬼瓦の型式名は毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦・8世紀を中心として」『研究論集』奈良国立文化財研究所1980に掲げる。
- 7) 『続日本紀』天平神護2年12月己酉(28)条
- 8) 訂5と同じ
- 9) 中井公「軒瓦からみた大安寺西塔の創建をめぐって」『考古学論究一小笠原好彦先生退任記念論集』2007
- 10) 「七大寺巡礼私記」および『扶桑略記』寛仁元年3月1日条
- 11) 「官宣旨文」京都御所東山御文庫記録』乙53 寛治8年5月29日(『平安道文』4)
- 12) 『法勝寺御八講問答記』紙背文書 文永10年7月27日
- 13) 「大安寺勧進状」春華秋月抄』元久元年4月(『鎌倉道文』3)
- 14) 黒田昇義が「大安寺塔」「大和の古塔」天理時報社 1943に引用する『和漢春秋』



DA第122・125次調査 発掘区垂直写真（上が北）



DA第122・125次調査 発掘区全景（南から）



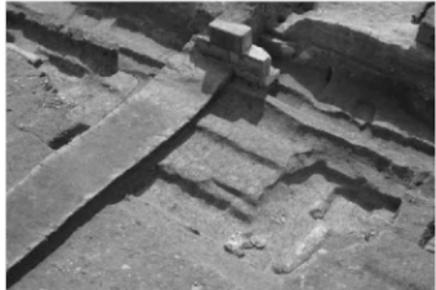
DA第122・125次調査 発掘区全景（東から）



DA第125次調査 発掘区全景（南から）



DA第125次調査 東塔基壇北東隅（北から）



DA 第125次調査 東塔断段部 (北東から)



DA 第125次調査 基壇築成土の状況 (北東から)



DA 第125次調査 基壇南西隅 (南東から)



凝灰岩製敷石



瓦当裏面接合線の形状が蒲鉾形の軒丸瓦 6138 型式C b種



軒平瓦 274 型式B種と平瓦の凸面の向き目にみえる範型



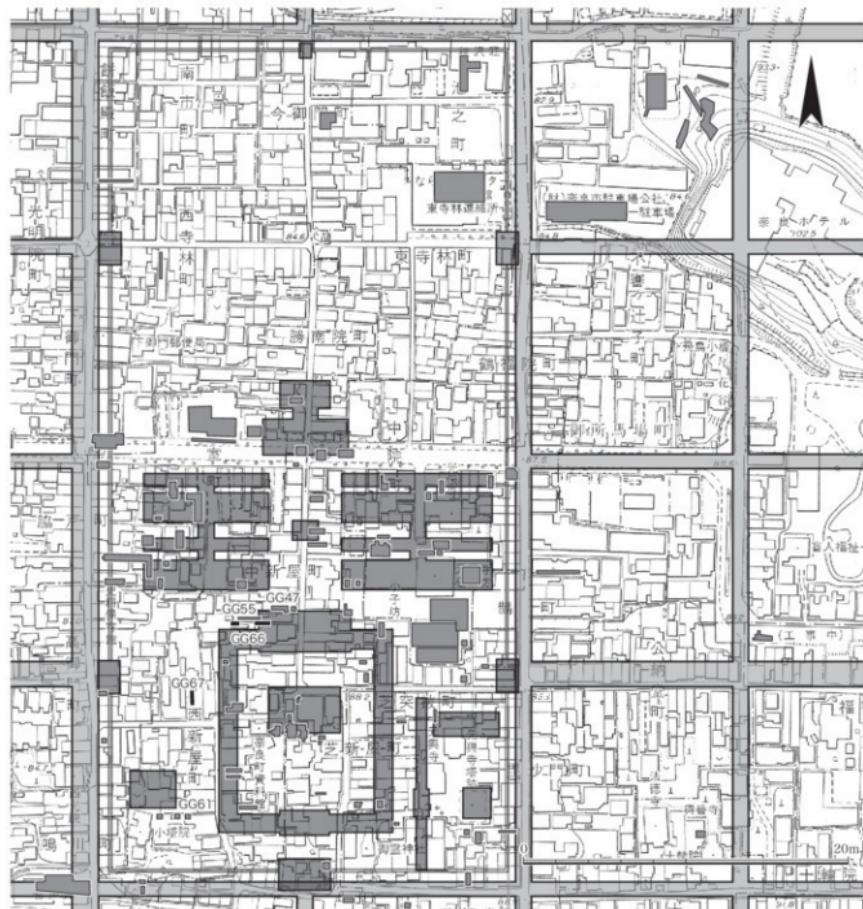
12. 元興寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 22 年度に元興寺旧境内において 2 件の調査を実施した。いずれも住宅建設に係る調査で、第 66 次調査は元興寺の講堂、第 67 次調査は小塔院の閉塞施設の確認を目的として行った。

いずれの調査も、奈良時代の元興寺の遺構は確認できず中近世の遺構のみである。しかしながら、第 66 次調査では、後世に動かされているものの講堂の礎石を発見し、講堂の変遷を知る資料が得られている。

平成 22 年度 元興寺旧境内 発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積 (m ²)	調査担当者
GG 第 66 次	自己住宅新築	中新屋町 11	H22.6.28 ~ H22.7.21	27	池田裕
GG 第 67 次	店舗付共同住宅新築	西新屋町 241 他	H22.8.23 ~ H22.8.27	16	武田



元興寺旧境内の調査 発掘調査位置図 (1/3,000)

(1) 講堂跡推定地・奈良町遺跡の調査 第66次

I はじめに

調査地は講堂跡推定地に該当し、講堂西端と回廊とが取り付く位置に推定される。元興寺の講堂は創建後、鎌倉時代前半では存在したことが史料から窺えるが、室町時代後半の元興寺の絵図には講堂が描かれておらず、建物がいつまで存続していたのかについては不明である。本調査地の周辺では平成10年度に市GG第47次調査¹⁾、平成13年度に市GG第55次調査²⁾が行われている。第47次調査では、17世紀初頭に動かされてはいたが東西に3つ並んだ講堂の礎石を検出している。近世初頭の奈良町の整備に伴い、基壇を削平・整地した際に動かされたものと考えられている。第55次調査では近世の溝、土坑を検出している。いずれの調査でも講堂の基壇は検出できなかった。本調査では從来よくわかつてない講堂と回廊の取り付け部の遺構を検出することを目的に発掘区を設定した。遺構面までが深かったため、排土の量を考慮して東・西2つの発掘区に分けて調査を実施した。

II 基本層序

西発掘区 発掘区内の基本的な層序は上から黒灰色土(1)、淡褐灰色土(4)、茶褐色土(6)、褐茶色砂質土(8)、暗褐灰色土(10)、暗灰褐色土(11)、褐灰色土・茶黃色土混合土(13)と続き、現地表下1.3mで黄茶色土の地山にいたる。遺構検出は地山上面でおこなった。地山上面の標高は86.7mである。

東発掘区 近世・近代の土坑等が重複し複雑であるが、大きく近代以降の造成土（土層図2～9）、江戸時

代後半の整地土（土層図13～17）、室町時代の整地土（土層図44～48）があり、現地表下1.3～1.5mで黄茶色土の地山にいたる。遺構検出は室町時代の整地土(44)上面と地山上面とで2回行った。地山上面の標高は87.5～87.3mである。

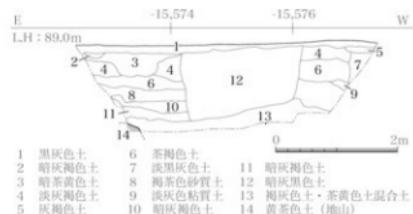
III 検出遺構

西発掘区 近世～近代の土坑を数基検出したが、発掘区が狭く一部を確認するにとどめたため、規模等は不明である。SK04は地山上面で検出した東西1.7m、南北0.4m以上の土坑である。18世紀後半の土師器、肥前産陶磁器が出土した。

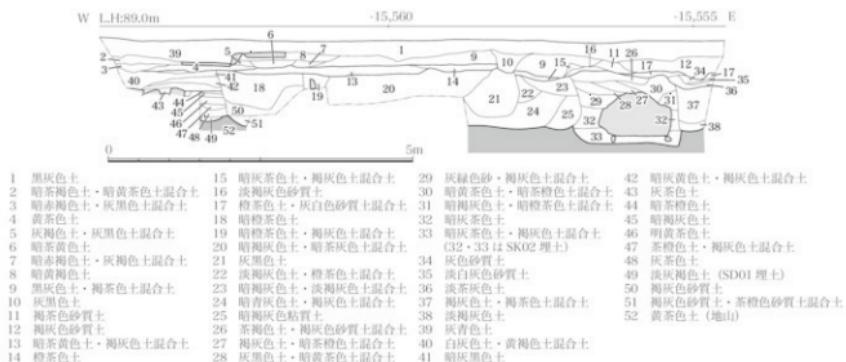
東発掘区 室町時代～近代までの各時代の遺構を検出した。

時期不明の遺構 SD01は地山上面で検出した南北方向の素掘りの溝である。幅0.3m、深さ0.1mである。遺物が出土しなかつたため時期は不明である。

室町時代後半の遺構 SX02は東西1.6m、南北0.8m

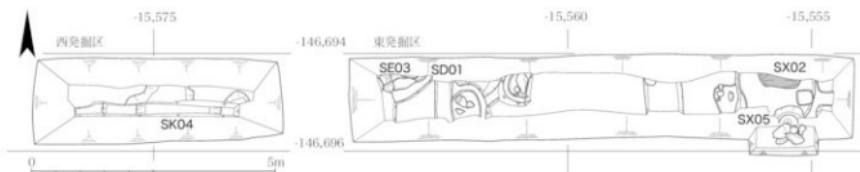


GG 66次調査 西発掘区南壁土層図(1/80)



GG 66次調査 東発掘区北壁土層図(1/80)

元興寺旧境内（講堂跡推定地）・奈良町遺跡の調査 第66次



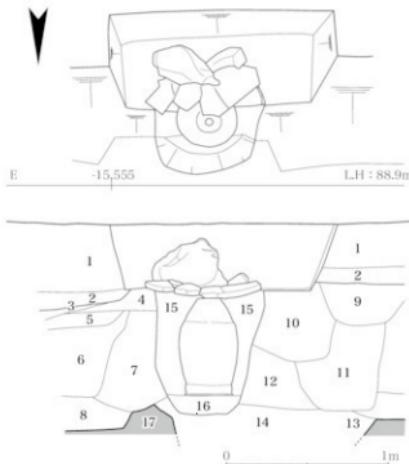
GG第66次調査 遺構平面図 (1/100)



GG第66次調査 西発掘区全景（東から）



GG第66次調査 東発掘区全景（東から）



GG第66次調査 SX05平面・立面図 (1/30)



GG第66次調査 SX05（北から）



GG第66次調査 SX02(南から)

以上、深さ1.2mの土坑で、その中には東西1.2m以上、南北0.3m以上、厚さ0.7mの巨大な三笠安山岩があつた。土坑の埋土は上から暗灰茶色土(32)、暗灰茶色土・褐灰色土混合土(33)である。土坑上部は他の土坑により壊されている。埋土から16世紀後半～末頃の土師器皿や瓦質土器鉢が出土した。調査位置が講堂推定地であることや石材、GG第47次調査の成果からみてこの三笠安山岩は講堂に使われていた礎石で、SX02はそれを落としこむために掘られた土坑と思われる。この石の下には拳大の石があり、落としこんだ石を安定させるためのものであったとみられる。

江戸時代の遺構 S E 03は部分的に検出したのみだが、石組井戸と思われる。遺物が出土しなかつたため詳細な時期は不明であるが、層位からみて江戸時代中頃～後半の遺構であろう。この他、土坑や柱穴をいくつか検出している。

近代の遺構 S X 05は直径0.65m、深さ0.75mの土坑に口径0.3m、胴部径0.4m、器高0.6mの信楽産陶器の甕が逆さまに伏せられて置かれており、構造からみて水琴窟と考えられる。土坑の埋土は底部が灰色粗砂で、その上に甕が置かれ、甕の四方を灰褐色土や茶褐色土で埋めている。埋土中からは遺物があまり出土しなかつた。甕の底部には径約5cmの孔が穿たれている。甕の上には厚さ3cmのモルタル片が置かれていたが、甕の底部に穿たれた孔の径にあわせて打ち欠きを行なっている。モルタルの周囲には石が立てて置かれていた。甕の胎土や外面の釉調からみてこの甕は明治時代以降のものと考えられ、水琴窟が作られたのもその頃と思われる。

IV 出土遺物

本調査で出土した遺物は遺物整理箱で1箱分である。奈良時代の須恵器甕、鎌倉時代から室町時代の瓦器椀、

室町後半から江戸時代の土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢・捕鉢、肥前産陶器椀・皿、肥前産磁器碗・皿、輸入陶磁器(龍泉窯系の青磁盤、漳州窯の青花碗・皿、产地不明の白磁皿・青花碗)、丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棟瓦・格子瓦・土管、近代の土師器皿・信楽産陶器鍋・甕、肥前産磁器碗・丸瓦・平瓦・棟瓦がある。

V 調査所見

今回の調査では元興寺の講堂と回廊に関わる遺構を検出することはできなかつた。東西両発掘区の土層の堆積状況や周辺での調査事例からみると、調査地周辺では室町時代後半以降に造成を繰り返しているようである。旧地形は東から西に向かって下つており、平坦面を作るための作業であったと思われる。本調査では、室町時代中頃以前の遺構はなかつたが、講堂の存続時期と係るものと思われる。最後に東発掘区で検出したSX02とSX04についてふれておきたい。

S X 02は検出した石の材質・大きさからみて、GG第47次調査と同様に講堂の礎石を落とし込んだ土坑と考えられる。礎石は南半しか検出できず、天地が逆転している可能性もあり、GG第47次調査の礎石にみられた柱座の有無は未確認である。動かされた礎石と考えた場合、その位置がGG第47次調査検出の西端の礎石よりもさらに約2m西にあり、埋土から出土した遺物の時期からみても、動かされた時期は異なるとみられる。

S X 04は奈良町遺跡の発掘調査で検出した3例目の水琴窟である³⁾。水琴窟は基本的には排水施設の一部であるが、地中に甕を伏せて置いて、水が溜まるように施工し、滴る水が甕の中で反響して奏でる水音を聴くための庭などにおかれた施設である。本調査地でも、検出された場所は以前に建っていた建物の中庭であった場所である。これまでの調査例などからみて、奈良で作られるようになったのは明治時代以降のようであり、町衆の生活を覗える遺構としても興味深い。

元興寺旧境内では、金堂跡や鐘楼跡、僧坊跡でも町屋の造成に伴うと考えられる整地によって動かされたとみられる礎石がみつかっている。室町時代後半から江戸時代初頭に元興寺の堂塔の基壇は削られ、町のかたちが整えられていったことを示す遺構といえよう。

(池田裕英)

- 1) 奈良市教育委員会「元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査 第47次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度」 2001
- 2) 奈良市教育委員会「元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査 第55次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成13年度」 2004
- 3) 奈良市教育委員会「元興寺旧境内 第37次調査」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度」 1995

(2) 小塔院推定地・奈良町遺跡の調査

I はじめに

調査地は、元興寺旧境内の伽藍復原では、小塔院の北辺を限る築地の推定地に該当する。小塔院推定地内での調査例は少なく、平成18年度に調査地の南方約80mの場所で実施した市G G第61次調査のみである。江戸時代の井戸を検出し、中世以降の土器・瓦や近世の鋳造関連遺物に混じって奈良時代の丸・平瓦も出土した。本調査では、築地等閉塞施設の有無確認を目的とした。

II 基本層序

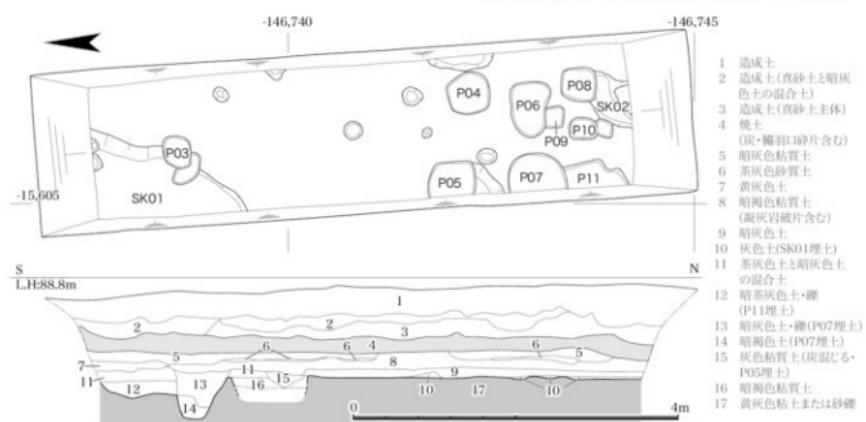
上から造成土（厚さ0.5～0.6m）、焼土（約0.2m炭や鰐羽口の碎片を含む）、暗灰色粘土質・茶灰色砂質土、茶褐色粘土質、暗灰色土（凝灰岩片含む）と続き、現地表下約1.1m付近で、黄灰色粘土もしくは砂礫の地山に到達する。地山上面の標高は約87.4mである。

III 検出遺構

検出遺構は少なく、土坑と小柱穴のみである。

S K 01は、発掘区北西隅で検出した土坑。深さは約0.1mで、一部は発掘区外へと続く。遺物は出土しなかった。S K 02は、発掘区南端で検出した土坑。後述のP 06より古い。16世紀頃の土器小片がわずかに出土した。

P 03は、発掘区北側で検出した。埋土から16世紀頃の土師器や国産陶器が出土した。P 04～11は、発掘区の中央～南側にかけて検出した。いずれも16世紀頃の土器が出土した。径0.3～0.7m、深さ0.3～0.6mと一様でなく、明確に建物としてはまとまらない。



第67次

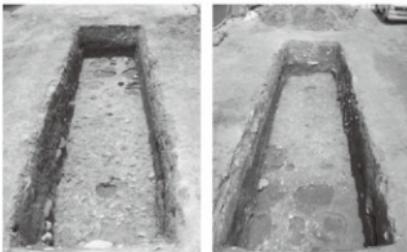
IV 出土遺物

遺物整理箱3箱分が出土。奈良時代の丸・平瓦、室町時代後期の土師器・国産陶器、江戸時代前期の土師器・国産陶器、時期不明の円盤形土製品・鉄釘などがある。

V 調査所見

本調査では、当初想定していた元興寺小塔院の北辺築地、あるいは奈良時代の遺構は一切確認されなかった。ただし、奈良時代の瓦片が出土している点や、地山上に堆積する層に凝灰岩片が含まれている点から、近隣地に奈良時代の遺構が残存している可能性もある。

また、発掘区内では焼土層の堆積が確認された。焼土は概ね均整に堆積しており、鋳造関係の遺物片が含まれる。調査地付近の西新屋町には、17世紀以降に鍛冶屋が集中していたことが知られ、江戸時代中頃以降に何らかの事由により造成を行った跡とみられる。(武田和哉)



GG 第67次調査 発掘区全景 (左 北から 右 南から)

-146,745

-146,740

-15,605

S

N

LH88.8m

1 造成土

2 造成土(真砂土と焼灰

色土の混合土)

3 造成土(真砂土主体)

4 焼土

(炭・鰐羽口砂片含む)

5 暗灰色粘土質

6 茶灰色砂質土

7 黄灰色土

8 茶褐色粘土質

(凝灰岩破片含む)

9 焼灰土色

10 灰色土(SK01埋土)

11 茶灰色土と焼灰土色

の混合土

12 烧灰土色土・礫

(P11埋土)

13 焼灰土色土・礫(P07埋土)

14 灰色粘土質土(P07埋土)

15 灰色粘土質土(炭混じる・

P05埋土)

16 灰褐色粘土質土

17 黄灰色粘土または砂礫

13. 菩原寺跡（喜光寺跡）の調査 第6次

事業名（仮称）首原公園整備事業
届出者名 奈良市長
調査地 菩原町134-1、134-2、134-3、135

調査期間 平成22年6月22日～7月16日
調査面積 約190m²
調査担当者 原田憲二郎

I はじめに

本調査地は、平城京の条坊復原では、右京三条三坊九坪の中央部北辺に相当し、九坪は菩原寺旧境内の一画に推定されている。

菩原寺の草創について、安元元年（1175年）に撰された『行基年譜』では、『行基菩薩伝』を引用して、養老5年（721年）に寺史乙丸が己の居宅を行基に施し、菩原寺と号したのに始まるとする。

菩原寺の寺域については、『行基年譜』には養老6年（721年）に、菩原寺が右京三条三坊の九、十、十四、十五、十六の5町を占めたことが記されている。この記事から、本調査地の九坪は菩原寺の寺域と想定されている。しかし、この『行基年譜』の記事については5町を占めたとする典拠が示されていないこと等から、創建当初は一町程度の大きさで、後に寺院地を拡張したものとの指摘があり¹⁾、さらには『行基年譜』が引用する史料の一つに、「延暦廿四年三月十九日所司記」があること等から、5町の寺域は延暦頃の拡大整備された時期の寺域とみる意見²⁾もある。他にも菩原寺の寺域に関する史料としては、長承3（1134年）の「大和国南寺敷地図帳案」（西大寺文書）や13世紀の「大和国添下郡京北条里図」（東京大学文学部蔵）があり、前者には「菩原寺四丁六段敷地」と寺域4町との記載があり、後者は右京三条三坊七・九・十・十四・十五・十六坪と、右京三条四坊一・二・七坪の9町にわたる寺域を示す。前者については長承当時の4町をどこに求めるか問題があり³⁾、後者については9町にわたる広大な寺域を疑問視する意見もある⁴⁾。

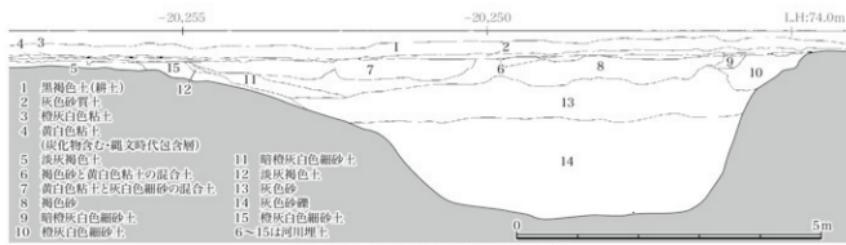
菩原寺跡の発掘調査は今まで6件行われているが、



九坪では奈良市教育委員会によるKK第1次調査⁵⁾に次ぐ調査となる。KK第1次調査は九坪南西で行われたが、発掘区全体が近世以前の河川の中であり、菩原寺に関わる遺構・遺物は確認されていない。

本調査地は、西ノ丘京陵東縁の中位段丘の東側に形成された緩傾斜扇状地上にあたり、発掘区の南側は1m程低くなっている。ここはKK第1次調査や、今回の発掘区東南のH J第237-2次調査⁶⁾により、近世以前の河川跡であったことが判明している。一方、発掘区の北側には現在、大池川が東流しているが、これは、江戸時代以降に人為的に掘削されたものと考えられている⁷⁾。

調査は九坪中央部北辺に、東西35m、南北4mで面積約140m²の西発掘区と、その東南に東西12.5m、南北4mで面積約50m²の東発掘区の2箇所の発掘区を設定し、特に菩原寺に関係する遺構や遺物の確認を主目的とした。なお、東に接する八坪の調査では、古墳時代の堅穴住居・溝・土坑も確認されている⁸⁾ことから、こうした古墳時代以前の遺構の確認も目的とした。



KK第6次調査 西発掘区南壁土壘図 (1/80)

II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、東西両発掘区とも同じで、黒褐色土（耕土）、灰色砂質土（床土）、橙灰白色粘土と続き、現地表下約0.25mで黄白色粘土となる。黄白色粘土上面の標高は両発掘区ともに約73.6mで、この面で検出した遺構は16世紀の溝1条のみである。

この黄白色粘土層は炭化物を包含していた。この為、黄白色粘土上面での遺構検出作業後、厚さ0.05m程度の黄白色粘土を除去したところ、この直下で淡灰褐色土を確認した。その標高は約73.55mである。ただし西発掘区中央部では黄白色粘土直下で上から順に黄白色粘土と灰白色細砂の混合土、褐色砂、灰色砂、灰色砂礫の堆積が認められ、北西から南東へ流れる河川があるとわかった。河川は幅約11mで、長さ約4.5m分を検出した。深さは約2.7mである。褐色砂層から、縄文時代後期末から晩期にかけての埴文土器深跡が出土した。なお、黄白色粘土に包含されていた炭化物については、河川の埋没時期を明らかにする為、放射性炭素年代測定を行った。結果、炭化物は補正¹⁴C年代3491±20(Y.B.P)(B.C.1890~1740)の年代値が得られた。これらのことから、黄白色粘土は縄文時代の包含層と考える。

さらに厚さ0.05~0.25mの淡灰褐色土を除去し、この直下で橙白色粘土の地山を確認した。地山上面の標高は73.3~73.5mで、西から東へと緩やかに下る。橙白色粘土上面では縄文時代以前の土坑・小柱穴を検出した。

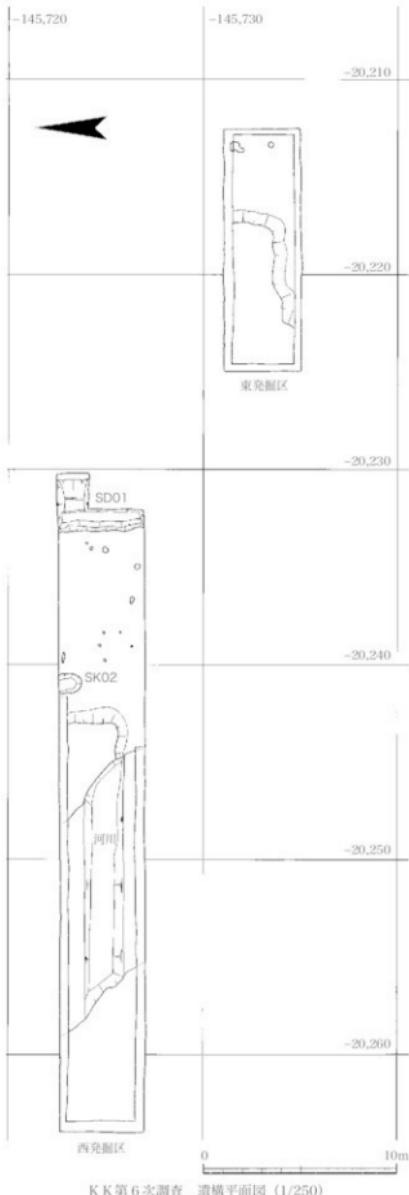
III 検出遺構

検出遺構には、溝、土坑、小柱穴がある。

溝SD01は、黄白色粘土層上面で検出した南北方向の素掘溝である。幅約2.7mで、長さ約4.5m分を検出した。深さは0.8~1.0mで、断面形状は逆台形状を呈し、溝底は北から南へと緩やかに下る。溝埋土は下から順に淡青灰色粘土、淡褐灰色砂質土、淡灰白色砂質土、褐灰色砂質土である。最上層の褐灰色砂質土には黄白色粘土ブロックがモザイク状に含まれており、最終的には人為的に埋められたとみられる。溝底から16世紀後半の土師器羽釜が出土した。

土坑SK02は、橙白色粘土上面で検出した。東西約0.9m、南北は約1.2m分を検出し、発掘区北側に続く。深さは約0.05mで、埋土は暗灰褐色土である。土層観察から縄文時代以前の遺構とわかるが、遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。

小柱穴は西発掘区東部で10個、東発掘区東部で2個検出した。いずれも径1.0~2.0mで、深さは0.1mで



KK第6次調査 遺構平面図 (1/250)

ある。埋土はいずれも淡灰褐色土である。土層観察から縄文時代以前の遺構とわかるが、遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。

IV 出土遺物

出土遺物は、遺物整理箱で1箱分に過ぎない。出土遺物には、縄文時代後期から晩期にかけての縄文土器深鉢、奈良時代の土師器杯・須恵器甕、室町時代の土師器（皿・羽釜）・瓦質土器（深鉢・擂鉢）・軒平瓦・丸瓦・平瓦、鉄釘がある。

出土遺物の大半は、溝 S D 01 から出土した。

軒平瓦は13世紀中頃から14世紀前半とみられる連珠紋軒平瓦が1点ある。これまでの菅原寺跡の調査では初例である。

V 調査所見

今回の調査では、奈良時代の菅原寺に関係するとみられる遺構は無く、遺物も出土しなかった。ただし土層観察や周辺の調査例^①から、奈良時代の遺構は後世の水田造成によって、著しい削平を受けたと考えられ、九坪に位置する今回の調査地周辺が直ちに菅原寺の寺域ではなかったとはいえない。

溝 S D 01 は北から南に流れ、遺存地割から想定される調査地南側の河川に流す排水路と考えられる。出土した土器は16世紀後半で、河川の埋没時期をも示すものともなる。このことは江戸時代の大池川掘削が河川の付け替え工事であったとの考えを示唆するものである。

下層では縄文時代の河川や遺構を確認した。今後周辺の調査では下層遺構の確認も必要である。（原田憲二郎）



KK 第6次調査 東発掘区全景（東から）



KK 第6次調査 西発掘区全景（東から）

- 1) 喜田貞吉「平城京及大内裏考評論」「歴史地理」第13巻第4号
- 2) 福山敏男「奈良朝寺院の研究」菅原寺（喜光寺）の項 1948
なお、佐藤興治「解説 生涯と事跡」菅原寺の項「没1250年記念特別展 行基一生誕・事跡と菩薩信仰—」図録 市博物館 1998では延暦24（805）年頃の寺域とする。
- 3) 1の文献で喜田貞吉は、三条三坊十五・十六坪と、三条四坊の一・二坪の町を挙げ、註2の文献で福山敏男は、三条三坊九・十・十五・十六坪の4町の可能性も挙げながらも、にわかには決し難いと記す。
- 4) 註2の福山敏男の文献。
- 5) 奈良市教育委員会「菅原寺旧境内（第1次）の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』1987
- 6) 奈良市教育委員会「平城京右京三条三坊八坪・菅原東遺跡の調査 第257－1次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994
- 7) 奈良市教育委員会「平城京右京三条三坊八坪の調査 第237-1次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』1992
- 8) 安井宣一「菅原町・青野町地域の古地理に関する基礎的の考察」「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1998g 1999
- 9) 奈良国立文化財研究所「右京二条三坊十二坪の調査 第156-10次」「昭和59年度平城宮発掘調査部発掘調査概報」1985



KK 第6次調査 溝 S D 01（北から）

14. ヒシャゲ古墳の調査 第1次

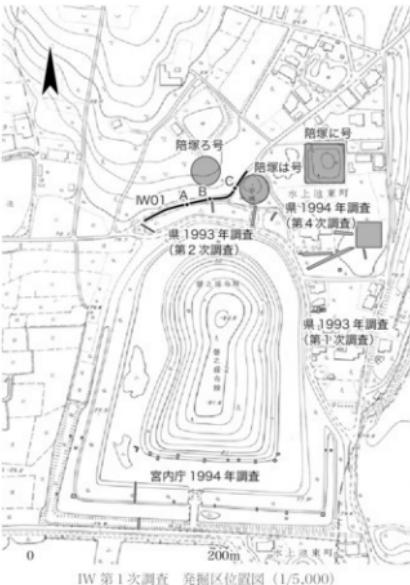
事業名	公共下水道築造工事	調査期間	平成22年12月7日～12月24日
届出者名	奈良市長	調査面積	約140 m ²
調査地	佐紀町地内	調査担当者	秋山成人

Iはじめに

調査地は、県道木津平城線と国道24号線を繋ぐ市道北部草唄佐紀線の道路上に位置し、5世紀後半に築造されたヒシャゲ古墳後円部北側の外堤が想定されているところである。ヒシャゲ古墳後円部外濠の調査は、1993年度に奈良県教育委員会が実施¹⁾しており、濠状の遺構と内堤もしくは外堤の葺石や内堤埴輪列を検出している。発掘調査は、外堤想定地からヒシャゲ古墳北側の陪塚は号と陪塚ろ号の間の道路部分に、幅1.0m、長さ134.7mの発掘区を設定して行った。

II 基本層序

発掘区西端から北東40m(A地点)付近までの層序は、アスファルト・クラッシャーラン(0.05～0.2m)の下に、黄灰色砂質土(0.05～0.15m)、暗茶褐色土(約0.2m)の盛土、暗灰色土(0.1m)の旧地表土、淡黄灰砂礫(0.15m)があり、地表下約0.6～0.8mで暗褐色砂礫～赤褐色礫の地山(標高約78.1～78.6m)に至る。発掘区西端から北東40m～96m(A～C地点)付近は、アスファルト下に造成土が約1.2mあり、その下が黄白色粘砂の地山(標高約78.5m)となる。発掘区西端から北東96m(C地点)付近から北東端にかけては、地山が徐々に高くなり、アスファルト・造成土(0.05～0.6m)の下が赤褐色砂礫の地山(標高約79.9～81.5m)となる。



IW第1次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



IW第1次調査 発掘区北半部 (北東から)



IW第1次調査 発掘区北半部 (南西から)

III 検出遺構

発掘区西端から北東 68 m 地点（B 地点）の地山上面で、南北方向の暗渠を 1 条検出しただけで、ヒャゲ古墳および陪塚に関わる遺構はなかった。暗渠は幅 0.2 m、深さ 0.7 m で、溝底には瓦質製の土管が 3 本以上据えられる。

IV 出土遺物

遺物は、造成土および淡黄灰砂礫から 5 世紀後半の円筒埴輪片が遺物整理箱 1 箱分、18 世紀末から 19 世紀代頃の国産陶器鉢（信楽産）1 点、寛永通宝 1 点、暗渠から瓦質土管が出土した。



IW 第1次調査 発掘区中央部（南西から）

V 調査所見

今回の調査では、近世の暗渠を 1 条検出したが、外堤に関わる盛土等は検出することはできなかつた。また、陪塚は号の西側においても、造成土の下がすぐに地山になり、古墳に関わるものは検出できなかつた。市道築造時の盛土から円筒埴輪片が多く見られることや 19 世紀代の遺物が含まれていることからみて、市道部分については、少なくとも近世には遺構面が削平されたと考えられる。
 (三好美穂)

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所『磐之媛陵古墳後内外濠の調査』
『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1993 年度』1994



IW 第1次調査 発掘区中央部（北東から）



IW 第1次調査 発掘区西半部（南西から）



IW 第1次調査 発掘区西半部（北東から）

15. 赤田横穴墓群の調査 第02・03次

事業内容	2次：病院新築 3次：重要遺跡範囲確認調査	調査期間	2次：平成23年1月7日～3月24日 3次：平成23年9月9日～9月16日
届出者名	医療法人 平和会	調査面積	2次：1050 m ² 、3次：60m ²
調査地	奈良市西大寺赤田町一丁目556-1の一部他	調査担当者	池田裕英・安井宣也・奥井智子

Iはじめに

赤田横穴墓群は、奈良盆地北部の西縁に沿う西ノ京丘陵の北東部に位置する。古墳時代後期後半から飛鳥時代前半にかけて秋篠川支流の赤田川の左岸にある尾根の南斜面に築かれた複数の横穴墓の総称で、現在は病院敷地の南辺部になっている。

昭和58年度に敷地の南東隅で切土工事を行っていた際に2基の横穴墓(西から1・2号墓と命名)が発見され、本市教委が第1次調査を実施した。1号墓の墓室内には土師質亀甲形陶棺1基が認められ、墓室内及び玄門付近で土器(土師器・須恵器)、玄門付近で鉄鏃が出土した。土器には副葬品である6世紀後半～7世紀前半のものと祭祀に伴う8世紀後半のものがある。2号墓の墓室は完掘できなかったが、墓道内から陶棺片が出土しており、墓室内に陶棺が認められたと推察されている¹⁾。

平成22年度には病院整備事業に伴い、敷地南辺部の東寄りで病棟増築、西寄りで駐車場造成が計画されたため、本市教委が遺構の有無の確認を目的として試掘調査(市2010-4次)を実施したところ、病棟予定地内で6基、駐車場予定地内で6基の計12基の横穴墓の墓道を確認した。対応について病院側と協議した結果、病棟計画地内の横穴墓の全容把握を目的として、平成22年度に第2次調査、同23年度に第3次調査を実施した。

なお、前述の1・2号墓も病棟計画地内にあり、2号墓の一部が未発掘であることや新たに確認した横穴墓との位置関係を把握する必要があつたため、第2次調査で再調査を行った。

II 基本層序

発掘区内で最も高い中央部北寄りでは、旧病棟に伴う造成土層(厚さ1m程度)の直下が丘陵の基盤層である大阪層群(以下、「地山」とする)のシルト層となる。

その南側に続く南落ちの斜面では、基本的には造成土層(厚さ1m程度)、丘陵の崩落土層(厚さ0.6～1.4m)の下で地山のシルト層や砂礫層となるが、発掘区の西辺部では丘陵の崩落土層と地山の間に暗灰黄色の埋没土層(厚さ0.1～0.3m)があり、同南西隅では造成土層と埋没土層の間に水田の耕作土層(厚さ0.2m)と同床土



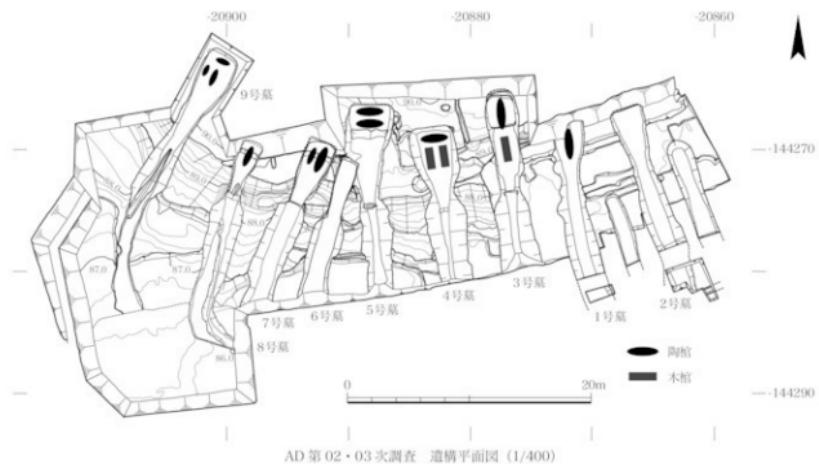
AD第02・03次調査 発掘区位置図(1/5,000)



AD第01次調査 1・2号(南から)



AD第02次調査 発掘区北西部の土層断面(南東から)





AD第02次調査 4号墓の墓道～玄門部の埋没状態（左 墓道内 南西から・右 玄門部 南西から）



AD第02次調査 墓室の埋没状態（左 層（厚さ1.0m）がある。

発掘区の南西隅では、造成土層（厚さ0.5m）、水田の耕作土層（厚さ0.2m）の下に、丘陵の崩落土層の末端を侵食して東流する埋没流路（幅1m以上、深さ1m程度）があり、その下に暗灰黄色の埋没土壤（厚さ0.4m）、湿地のシルト層（厚さ0.4m）と統いて地山のシルト層となる。埋没流路内には砂と礫の互層が堆積する。

横穴墓が築かれた古墳時代後期後半から飛鳥時代前半の構造面は地山上面で、その標高は中央部北寄りが最も高く90.9m、南西隅が最も低く85.0mである。

Ⅲ 調査の概要

1 3～9号墓

病棟計画地で実施した第2・3次調査では、地山上面で古墳時代後期後半から飛鳥時代前半にかけての横穴墓を新たに7基検出し、東から3～9号墓と命名した。いずれも南に開口する墓室とその南側に延びる墓道で構成されており、その概要は一覧表に示すとおりである。

墓道は検出面から埋土を掘り下げて完掘した。墓室は天井部が崩落する危険を避けるため、重機で天井部を除去し、残った部分の埋土を掘り下げて完掘した。



5号墓 西から・右 8号墓 北東から

（1）遺存状態と埋土

3・4・8・9号墓は過去に盜掘されており、玄門の天井部付近に盜掘坑が残っていた。また、第5号墓の墓室上の地面に凹地がみられた。

3～8号墓の墓室・墓道内の埋土は、基本的に下から、

- ① 墓室・墓道内の床面の整地土層
 - ② 墓室の玄門部の閉塞土層
 - ③ 玄門部閉塞後の墓室内の流入土層や崩落土層
 - ④ 玄門部閉塞後の墓道内の流入土層や埋没土壌
- の4つに大別でき、9号墓でも①・④が確認できた。④には、丘陵斜面と同じ崩落土層や埋没土壌がある。

3・4・7号墓では、追葬時に初葬時の閉塞土層を墓道側に崩して整地している。6号墓の墓室は5号墓の墓室の側壁と床面の一部を破壊して形成されており、両者の床面上は一連の流入土層で覆われている。

5・6・7号墓では墓室の大半が天井や壁面の崩落土で埋まっており、7号墓ではその直下の流入土層上面で8世紀末の銅鏡（隆平永宝）や9世紀後半の土師器が出土した。また、3号墓の墓室床面上の流入土層上面で8世紀の土器が、3・6・9号墓の墓道内の埋没土壌の最

赤田横穴墓群 1~9号墓一覧表

遺構番号	墓室		墓道		棺		主な出土遺物			
	規模(m)	形態	規模(m)	長さ	底部幅	上面幅	副葬品		埋葬後の祭祀関連	
							初葬	追葬	時期	内訳
1号墓	4.3	2.4	1.3	羽子板形	11.5以上	0.9	1.2~2.5	亀甲形陶棺	—	6C後~7C前 須恵器:壺・蓋杯・高杯、土師器:甕・碗
2号墓	4.5	2.8	1.2	羽子板形	12.4以上	0.8~1.3	1.3~2.5	亀甲形陶棺?	—	7C? 土師器:甕
3号墓	8.3	2.5	1.1	羽子板形	6.0以上	0.6~0.9	2.6~3.3	亀甲形陶棺	木棺	6C後半 須恵器:壺・壺・蓋杯・高杯、鉄鍔・耳環
4号墓	6.3	3.5	1.3	羽子板形	7.0以上	0.6~0.9	2.9~3.1	亀甲形陶棺	木棺2	6C後半 須恵器:壺・壺・蓋杯・高杯、土師器:甕、耳環
5号墓	8.2	2.8	1.3	羽子板形	7.5以上	0.6	1.9~2.7	亀甲形陶棺	亀甲形陶棺	6C後半 須恵器:壺・壺・蓋杯・高杯、土師器:甕・提瓶・壺・はそう・土師器:脚付壺、鉄刀・鉄鎌・管玉・ガラス玉・耳環等
6号墓	5.2	2.1	1.1	羽子板形	9.0以上	1.5~1.6	1.5~2.9	—	—	7C? 須恵器:甕(墓道)
7号墓	5.2	2.4	1.2	羽子板形	10.0以上	1.5~1.6	2.4~2.7	亀甲形陶棺	小型 陶棺	7C中頃 須恵器:壺・蓋杯・高杯、土師器:甕・刀子・董玉 高杯・土師器:甕・壺・蓋杯・提瓶・壺・はそう・土師器:脚付壺、鉄刀・鉄鎌・管玉・ガラス玉・耳環等
8号墓	4.0	1.8	1.2	羽子板形	10.5以上	1.2~1.5	2.4~2.7	亀甲形陶棺	—	7C? 須恵器:壺・壺・刀子
9号墓	5.7	2.5	1.3	羽子板形	19.0以上	0.6	2.2~2.5	砲弾形陶棺2	7C中頃 須恵器:壺・高杯・土師器:甕・壺・耳環	8C 須恵器:ミニチュア壺・土師器:甕・土馬

下位から8世紀の土器や土馬が出土した。

3・4・8・9号墓の盜掘坑は墓道内の埋没土壤上面から掘削されており、3・4号墓では盜掘直後の墓室の流入土層から14~15世紀の土師器片が出土した。

(2) 規模と形態

2~8号墓の墓室の平面形は全て羽子板形である。墓室の規模は、発掘区中央部で検出した3~5号墓が長さ6~8m、幅2.5~3.5mであるのに対し、その他の横穴墓はやや小さく、長さ3.5~5m、幅2~2.5mである。床面は水平に近く、標高は3~6号墓が概ね86.0m、2・7・8号墓が概ね87.0mである。玄門の幅はいずれも1.2m程度である。墓道は断面逆台形で、上面幅は最も広い部分で2.5~3m、底部幅は1~1.5m程度である。底面は北から南に下る。

(3) 墓室内の状態

2号墓 墓室内に陶棺は残っていなかった。床面上から土師器甕が1点出土した。

3~5号墓 3・4号墓では、墓室の奥に初葬の土師質亀甲形陶棺、玄門寄りに追葬の木棺が置かれていた。ともに土師質亀甲形陶棺は盜掘で破壊され、木棺は腐朽して鉄釘のみとなっている。4号墓には木棺の台座の石が残る。5号墓では、墓室の奥に土師質亀甲形陶棺が2基置かれており、ともに棺内に鉄刀・鉄鎌・耳環・玉類が納められていた。

いずれの横穴墓も棺の近くに須恵器を主とする副葬品の土器が良好な状態で残っていた。

6号墓 墓室内には陶棺や副葬品がなく、埋葬が行われた形跡は認められなかった。

7~9号墓 7号墓では、墓室の奥の中央部に初葬の土師質亀甲形陶棺、西壁寄りに追葬された土師質小型陶棺が置かれていた。玄門近くには副葬品の土器が良好な状態で残っていた。

8号墓では、墓室の奥に土師質亀甲形陶棺が1基置かれていた。9号墓では、墓室の中央に初葬の土師質小型陶棺、奥壁沿いと左側壁沿いに追葬の土師質砲弾形陶棺2基が置かれていた。

(4) 墓室の閉塞

3~5号墓の初葬時には板で玄門を閉塞し、床面にその痕跡が残る。3~5号墓の追葬時や7~9号墓の埋葬時には盛土で玄門を閉塞し、3・4・7号墓では追葬時に初葬時の閉塞土を墓道側にならして整地している。埋葬の形跡がない6号墓も盛土で玄門を閉塞する。



AD第02次調査 4号墓 玄門の板による閉塞の痕跡(南から)



AD第02次調査 3号墓 墓室内（南から）



AD第02次調査 3号墓 初葬時の陶棺と陪葬された土器（南から）



AD第02次調査 3号墓 墓室北西隅に陪葬された土器（東から）



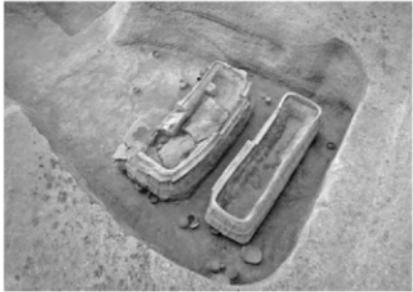
AD第02次調査 4号墓 墓室内（南から）



AD第02次調査 4号墓 西側追葬状態（南から）



AD第02次調査 4号墓 東側追葬状態（南から）



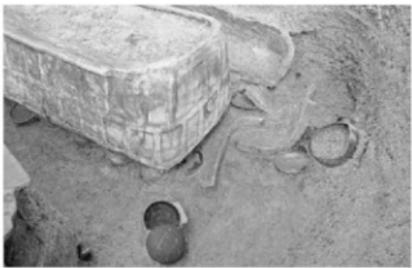
AD第02次調査 5号墓 墓室内（北東から）



AD第02次調査 5号墓 棺内の副葬品（東から）



AD第02次調査 5号墓 前棺に陪葬された土器（南から）



AD第02次調査 5号墓 奥棺に陪葬された土器（南から）



AD第02次調査 6号墓 墓室内（南から）



AD第02次調査 8号墓 墓室内（南から）



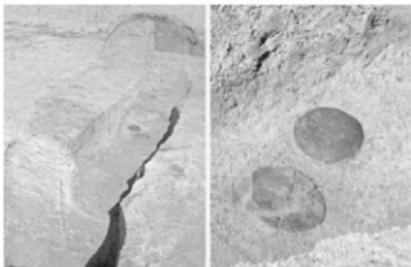
AD第02次調査 7号墓 墓室内（南から）



AD第02次調査 7号墓 陶棺（東から）



AD第02次調査 7号墓 葬葬された土器（北から）



AD第02次調査 7号墓 9世紀の土師器皿出土状態（南東から）



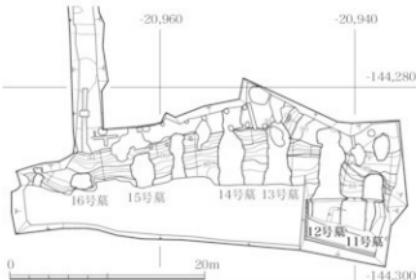
AD第03次調査 9号墓 墓室内（南西から）



AD第03次調査 9号墓 陶棺（北西から 左 亀甲形・右 砲弾形）



AD第03次調査 9号墓 陶棺（左 亀甲形・右 砲弾形）



試掘 2010-4 次調査 発掘区平面図 (1/500)



試掘 2010-4 次調査 発掘区全景 (南東から)

(5) 出土遺物

遺物整理箱で 150 箱分あり、その内訳は 6 世紀の円筒埴輪、6 世紀後半の陶棺、土器（須恵器・土師器）、金属製品（鉄刀・鉄鎌・刀子・鐵鍼・耳環）、玉類（管玉・ガラス玉）、7 世紀中頃の陶棺、土器（須恵器・土師器）、金属製品（刀子・鉄釘）、玉類（玉環）、8 世紀の土器・土製品（須恵器・土師器・土馬）、瓦類（丸瓦・平瓦・埠）、錢貨（隆平永宝）、9 世紀後半の土師器、14～15 世紀の土師器である。

土器 3～5 号墓から出土した須恵器の主な器種は壺・甕・蓋杯で、3・4 号墓は有蓋高杯、5 号墓では提瓶や謹を伴う。田辯編年の TK 43～200 型式の特徴を示すが、5 号墓は 3・4 号墓よりも古い様相がみられる。7～9 号墓から出土した土器は須恵器が多い。須恵器は田辯編年の TK 217 型式、飛鳥編年の I 段階のもので、主な器種は壺・蓋杯・高杯である。杯蓋に宝珠つまみが付くものがあり、高杯は小型化している。

4 号墓の墓室内、6・9 号墓の墓道内から出土した 8 世紀の須恵器壺は実用性のない小型品である。

3・4 号墓の墓室の流入土層から出土した 14～15 世紀の土師器羽釜は小片で、大和 H 型である。

陶棺 3～5 号墓の土師質亀甲形陶棺は、5 号墓の 2 基は長さ 2 m 以上で大きく、3 号墓は長さ 2 m 足らずである。いずれも棺身の脚部は 3 列である。第 3 号墓では緑色と赤色、第 5 号墓では赤色の顔料で彩色されている。

7・8 号墓の土師質亀甲形陶棺は長さ 1.8 m 程度で、棺身の脚部は 2 列である。8 号墓の陶棺は盜掘で破壊されている。7・9 号墓の土師質小型陶棺は長さ 1.1 m 程度で、棺身の脚部は 2 列である。棺身は 7 号墓では一体でつくられているが、9 号墓では 2 分割してつくられている。9 号墓の土師質砲弾形陶棺は鉢状の蓋と長胴の棺身とで構成されており、棺身の口縁部近くに蓋の縁を受

ける鈎が付く。

その他 7 号墓の小型陶棺の下に敷かれていた円筒埴輪片は、埴輪編年 V 期のものである。

2 10～16 号墓（試掘 2010-4 次調査他）

平成 22 年度の試掘調査（市 2010-4 次）の際に駐車場計画地内に設定した西発掘区では、横穴墓を新たに 6 基確認した。東隣接地で平成 12 年度に墓室の存在を確認した横穴墓が 1 基あり、これを 10 号墓とし、新たに確認した 6 基を東から 11～16 号墓と命名した。

11～16 号墓の墓道は南北方向で、幅 2.0～2.6 m、長さは 6 m 以上である。検出面からの深さは、一部を掘削した 11 号墓が 1 m、12 号墓が 0.5 m 以上である。11～14 号墓では墓道のすぐ北側に墓室の天井が崩落して生じた窟がある。11 号墓の墓道内から 6～7 世紀頃の須恵器壺と埴輪編年 V 期の円筒埴輪が出土した。

V 調査所見

病棟計画地内の横穴墓は、配置と出土遺物の時期から、1・2 号墓（東群）、3～5 号墓（中央群）、6～9 号墓（西群）に大別でき、古墳時代後期後半に中央群、飛鳥時代前半に東群と西群が造られ、後者の方が墓室の規模が小さい。規模の縮小化や副葬品の様相は、同時期の古墳の動向と軌を一にする。6 号墓は埋葬された形跡がなく、造り損なったため放棄されたものとみられる。

また、墓室内や墓道内から出土した 8～9 世紀の遺物の様相から、奈良時代から平安時代初頭頃にかけて祭祀が断続的に行われていたことが推察でき、被葬者の地縁の深さがうかがえる。

横穴墓の造営過程や規模・形状・葬送様式（棺・副葬品）の変遷及び埋葬後の祭祀について総合的に把握することができる良好な資料であるといえる。（安井宣也）

1) 奈良市教育委員会「赤田横穴群の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和 58 年度』1984

16. 平成 22 年度実施 小規模調査・試掘等一覧

調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	事業者 / 事業内容	届出受理番号
	奈良町遺跡	時塚178-14地先	H22.4.19	30m ²	奈良市民 / 道路建設	H21.3185
2010-1	調査結果・措置：敷地西端部の現地表下0.3～0.4mで地山上面を確認。敷地東端部は地盤が削平されていた。8世紀代の須恵器が数点出土したが、遺構は確認できなかった。					
2010-2	平城京跡（右京六条四坊・同三坊十坪、西三坊大路）	六条二丁目1167-1他	H22.7.8	55m ²	個人 / 宅地造成	H22.3033
2010-3	調査結果・措置：現地表下0.3～0.4mで（標高67.3m）地山上面を確認。地山上面で、江戸時代の素掘小溝と時期不明の南北溝を検出。近世の水田造成時に地山上面が削平されたと考えられる。工事着手。					
2010-4	平城京跡（七条大路、西三坊大路）七条西町一丁目1064-1他		H22.8.9	20m ²	㈱ヒラサワ / 宅地造成	H22.3161
	調査結果・措置：現地表下0.2～0.5mで（標高85.7～86.1m）地山上面を確認。遺構・遺物包含層は確認できず。宅地造成時に大きく切土が変更されている。工事着手。					
	赤田横穴墓群隣接地	西大寺赤田町一丁目556-1の一部他	H22.11.17～ 12.28	1,050m ²	医療法人 平和会 / 病院建設及び造成工事	H22.4002
	調査結果・措置：丘陵南斜面に位置する赤田横穴1・2号墓の西側部分に、2箇所の発掘区を設定して横穴墓の確認を行った。結果、南に開口する横穴墓12基を確認した。工事により破壊される6基について、発掘調査を実施した。（AD002次調査）					

17. 平成 22 年度実施 工事立会一覧

(1) 平成 21 年度文化財保護法第 93 条の 1、第 94 条の 1 の埋蔵文化財届出書および通知に伴う工事立会

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H21.3512	左京六条四坊十六坪	大安寺五丁目975-9、-11	個人	倉庫新築	宅地	H22.4.1	GL-0.6m まで掘削、地山確認
2	H21.3546	右京七条四坊八坪	六条三丁目1170番24	個人	個人住宅新築	宅地	H22.4.8	GL-0.2～0.5m まで掘削、地山確認
3	H21.3302	左京西条二坊十一坪 (田村第跡)	四条大路一丁目462-12	個人	個人住宅新築	宅地	H22.4.9	GL-1.0m まで掘削、盛土内
4	H21.3507	西大寺旧境内	西大寺新池町1736-2	個人	個人住宅新築	宅地	H22.4.14	GL-0.2～0.9m まで掘削、GL-0.8m で地山確認
5	H21.3471	左京一条四坊 一条渠間路	法蓮佐保町688-5、688-7	個人	個人住宅新築	宅地	H22.4.15	GL-0.4～1.2m まで掘削、地山確認
6	H21.3446	左京二条五坊十三坪 奈良町遺跡	北市町20番7、20番16	個人	個人住宅新築	宅地	H22.4.16	GL-0.4m まで掘削、整地土内
7	H21.3483	奈良町遺跡	高畠町1216-1～1218-1	大阪ガス㈱	ガス管敷設・撤去	道路	H22.4.19	GL-1.4m まで掘削、盛土内
8	H21.3517	朱雀大路	三条大路4丁目1-1	大阪ガス㈱	ガス管新設	道路	H22.4.19	GL-1.2m まで掘削、盛土内
9	H21.3527	左京四条四坊十六坪・ 四条五坊一坪、 四条大路	三条本町～大森町地内	奈良市水道 管理者	水道工事	道路	H22.4.19	GL-1.9m まで掘削、GL-1.25m 地山確認
10	H21.3557	奈良町遺跡	高畠町986-1	個人	店舗新築	宅地	H22.4.20	GL-1.0m まで掘削、遺構・出土遺物あり
11	H21.3509	左京四条五坊一・八坪	三条本町 地内	奈良市長	デッキ設置	駅前広場	H22.4.21 H22.5.20 H22.5.26	GL-1.0m まで掘削、盛土内 GL-2.0～2.3m まで掘削、GL-2.0m で地山確認 GL-2.5m まで掘削、GL-1.7m で地山確認
12	H21.3556	右京六条四坊十一坪	六条二丁目1126-8	ファースト 住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.4.22	GL-0.4m まで掘削、地山確認
13	H21.3457	左京九条四坊八坪	東九条町285番8	個人	個人住宅新築	宅地	H22.4.26	柱状改良上面で盛土内で収まることを確認
14	H21.3547	右京北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目382番1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.4.26	GL-0.7m まで掘削、GL-0.4m で地山確認
15	H21.3405	右京七条一坊十三坪	七条町	奈良市長	下水道工事	道路	H22.4.27	GL-2.3m まで掘削、GL-1.4m で地山確認
16	H21.3514	右京二条二坊一坪	二条町三丁目90-97、90-105の一部	分譲住宅新築	宅地	H22.4.30	工事先行、GL-0.2m まで掘削、盛土内	
17	H21.3552	左京六条三坊十六坪	大安寺三丁目97番4他	個人	賃貸住宅新築	水田	H22.4.30	GL-0.6m まで掘削、地山確認
18	H21.3555	左京三条五坊三・六坪	大宮町1丁目69-6	㈱アーネス トワン	分譲住宅新築	宅地	H22.4.30	GL-0.2m まで掘削、盛土内
19	H22.3007	右京二条四坊一坪	西大寺芝町二丁目2031-5、-7	オーエスハ ウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.4.30	GL-0.1m まで掘削、盛土内
20	H21.3398	右京六条四坊三・四坪	六条二丁目855-1	㈲京西ロビ ー・ビル	老人デイサービス センター	水田	H22.4.30	東側 GL-1.1m まで掘削、GL-0.6m で地山確認、西側 GL-1.3m まで掘削、尼河川の堆積土内
21	H21.3521 ～3524	左京五条六坊一・八坪 奈良町遺跡	南新町 15-10～13	一建設㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.4.30 H22.5.10 H22.5.17	GL-0.1～0.4m まで掘削、盛土内 GL-0.1m まで掘削、盛土内 工事状況確認

番号	届出受理番号	道跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
22	H21.3508	右京七条一坊二坪	柏木町 290-44	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.6	GL-0.2m まで掘削、盛土内 確認
23	H21.3531	今市城跡	今市町 394	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.6	GL-1.0m まで掘削、GL-0.8m で地山 確認
24	H21.3533	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90-100	㈱日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H22.5.6	GL-0.2m まで掘削、盛土内
25	H21.3532	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90-96	㈱日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H22.5.6	GL-0.2m まで掘削、盛土内
26	H21.3563	奈良町道跡	北京駅町 57-23	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.7	GL-0.4m まで掘削、旧住宅の整地土内
27	H21.3560	左京四条四坊七坪	三条宮町 4-37 ~ 三条御所町 9-10	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H22.5.7	GL-0.6m まで掘削、水田木土内
28	H21.3515	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90-104	㈱日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H22.5.7	GL-0.3m まで掘削、盛土内
29	H21.3475	右京北辺三坊三坪	西大寺本町 4-26	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.10	GL-1.2m まで掘削、GL-0.3m 付近で 暗褐色もしくは暗茶色の粘土層確認
							H22.5.11	GL-1.2m まで掘削、GL-0.8m で地山 確認
30	H21.3538	今市城跡	今市町 379-1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.11	GL-0.45m まで掘削、GL-0.4m で地山 確認
31	H21.3519	右京六条四坊十坪	六条二丁目 1460-1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.12	GL-2.1m まで掘削、GL-0.3m で地山 確認
32	H21.3551	古市城跡	古市町 2362-5	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.12	GL-1.3 ~ 2.1m まで掘削、GL-0.8 ~ 1.5m で地山確認
33	H22.3045	元興寺境内	中新屋町 11	㈱北条工務 店	個人住宅新築	宅地	H22.5.13	GL-0.5m まで掘削、盛土内、底面で草 良時代~近世の瓦が出土
34	H22.3006	左京三条三坊十六坪	芝辻町四丁目 5-1	石橋興産	カラオケボッ クス新築	駐車場	H22.5.13	GL-0.7m まで掘削、盛土内
							H22.6.1	GL-1.6m まで掘削、盛土内
35	H21.3516	元興寺境内 奈良町道跡	今御門町 32 番 1	個人	店舗新築	宅地	H22.5.13	東端部 GL-0.6m まで掘削、GL-0.4m で地山確認 中央部 GL-1.0m まで 掘削、GL-0.8m で地山?
36	H22.3020	奈良町道跡	紀寺町 992-12	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.14	GL-0.25m まで掘削、盛土内
37	H22.3005	左京二条四坊十五坪	法蓮町 341-3	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.18	GL-0.4m まで掘削、盛土内
38	H21.3520	右京六条四坊三坪	六条二丁目 440番 2	KDDI ㈱	携帯電話基 地局設置	宅地	H22.5.18	GL-0.9m まで掘削、GL-0.5m で地山 確認
39	H21.3506	右京三条四坊五坪	平松二丁目 194 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.18	柱状改良の剥離部分の土刷を観察
40	H22.3012	左京四条六坊五坪 奈良町道跡	北風呂町 37-2、37-3	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.19	GL-1.05m まで掘削、盛土内
41	H21.3550	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90-99	㈱日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H22.5.20	GL-1.0m まで掘削、盛土内
42	H21.3539	左京五条一坊六坪	柏木町 80 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.20	GL-0.45m まで掘削、盛土内
43	H22.3002	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90-103	㈱日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H22.5.20	GL-0.4m まで掘削、盛土内
44	H21.3534 ~ 3536	右京四条一坊十一坪	四条大路五丁目 200-7 他	USJ 建設 デザイン研究 所	分譲住宅新築	宅地	H22.5.21	GL-0.4m まで掘削、盛土内
45	H22.3047	左京四条六坊十二坪	南風呂町 7 番	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.24	GL-0.4m まで掘削、盛土内
46	H21.3362	左京三条一坊五・六坪	三条大路二・三丁目地内	奈良市長	道路工事	道路	H22.5.25	GL-0.75m まで掘削、盛土内
47	H21.3544	右京三条四坊九坪	七条二丁目 609 番 51	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.25	GL-0.3m まで掘削、盛土内
48	H21.3529	左京三条七坊四坪 奈良町道跡	半田柳町 8 番 9番合併、 半田西町 24 番	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.25	GL-0.4m まで掘削、盛土内
49	H22.3039	右京三坊七条大路	七条町一丁目 480-1	個人	共同住宅新築	水田	H22.5.25	GL-0.2m まで掘削、盛土内
50	H21.3350	左京七条一坊 東一坊大路	八条五丁目 437-11	社会福祉法 人 楽慈会	特別養護施設 増築	駐車場	H22.5.25	GL-2.1m まで掘削、盛土内 確認
51	H22.3009	左京五条五坊七坪	西木辺町 42-3 地先	ソフトバン クテレコム ㈱	電話地下埋設 工事	道路	H22.5.26	GL-1.6m まで掘削、盛土内
52	H22.3024	左京三条五坊十三坪	杉ヶ町 10-1	オーエック 工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.5.26	GL-0.2m まで掘削、盛土内
53	H21.3565	右京三条三坊 三条大路	宝来一丁目 7-8	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H22.5.26	GL-1.0m まで掘削、盛土内
54	H22.3054	右京六条四坊二坪	六条二丁目 451-4	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.27	GL-0.2m まで掘削、盛土内
55	H21.3336	右京二条四坊九坪	若葉町三丁目 1984 番 2、 1984 番 4	個人	共同住宅新築	宅地	H22.5.31	GL-2.8m まで掘削、灰土色粗粒砂層内
56	H22.3067	奈良町道跡	高麗町 730 番 3、730 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H22.5.31	GL-0.4m まで掘削、盛土内
57	H22.3058	左京三条六坊一坪	菖蒲池町 12・13・14 合併 1	個人	共同住宅新築	駐車場	H22.6.1	GL-0.7 ~ 1.05m まで掘削、湿地の堆 積層内
58	H22.3015	平城京跡	芝辻町一丁目 77 番 55	個人	賃貸住宅新築	宅地	H22.6.1	GL-0.4 ~ 0.8m まで掘削、淡灰褐色砂 質土内
59	H21.3315	奈良町道跡	高麗東大路町 793 ~ 高麗町 845	大阪ガス㈱	ガス管入替	道路	H22.6.1	GL-1.25m まで掘削、GL-1.05m 地山 確認

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
60	H22.3021	奈良町遺跡	高畠町 1457 の一部	黒住教奈良教会所	教会改築	宅地	H22.6.2	GL-0.25m まで掘削、盛土内
61	H22.3053	左京五条二坊一坪	四条大路南町 439-9	個人	分譲住宅新築	宅地	H22.6.3	GL-0.3m まで掘削、盛土内
62	H22.3049 ～3051	音原寺跡 西三坊大路	宝来二丁目 869 番 18 他 00	和アーネスト・ワーン	分譲住宅新築	宅地	H22.6.7	GL-0.2 ～ 0.3m まで掘削、盛土内
63	H21.3314	奈良県道跡地 5A-41	山棲町 969 の一部 他	楠木不動産㈱	宅地造成	水田	H22.6.9	GL-1.0 ～ 1.1m まで掘削、地山確認
64	H21.3545	右京五条三坊十坪	平松二丁目 264 番 97	個人	個人住宅新築	宅地	H22.6.9	GL-0.2m まで掘削、盛土内
65	H22.3034	阿弥陀山寺跡跡	敷島町一丁目 531-24, 531-28	個人	個人住宅新築	宅地	H22.6.14	GL-0.2m まで掘削、GL-0.05m 地山確認
66	H22.3041	左京七条四坊六坪	東九条 1014 番 14	個人	個人住宅新築	宅地	H22.6.14	GL-0.5m まで掘削、盛土内
67	H21.3492	興福寺旧境内 奈良町遺跡	元林院町 18 ～ 南市町 5	大阪ガス㈱	ガス管入替	道路	H22.6.16	GL-0.7 ～ 0.8m まで掘削、既存图形内
68	H22.3072	新楽師寺旧境内	高畠町 251-4	和 US 建築デザイン研究会	分譲住宅新築	宅地	H22.6.16	GL-0.5m まで掘削、盛土内
69	H22.3056	左京八条四坊十坪	東九条町 811 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H22.6.17	GL-0.25m まで掘削、盛土内
70	H22.3088	右京八条二坊一坪	七条町一丁目 506-1	個人	賃貸共同住宅 新築	宅地	H22.6.18	GL-0.3m まで掘削、盛土内
71	H21.3548	左京五条七坊十五坪 奈良町遺跡	紀寺町 934 他	個人	個人住宅新築	宅地	H22.6.21	GL-0.25m まで掘削、盛土内
72	H22.3038	古市城跡 古市庵慶跡	古市町 2352-63 ～ 2352-66	大阪ガス㈱	ガス管敷設・撤去	道路	H22.6.21	GL-0.8 ～ 1.1m まで掘削、GL-0.8m で地山確認
73	H22.3046	阿弥陀山寺跡跡	敷島町一丁目 509-10	個人	個人住宅新築	宅地	H22.6.22	GL-0.4m まで掘削、GL-0.15m で地山確認
74	H22.3079	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90-105	西日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H22.6.28	GL-0.2 ～ 0.4m まで掘削、盛土内
75	H22.3070	左京四条大路 東四坊坊間西小路	大森西町 206 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H22.6.29	GL-1.5m まで掘削、盛土内
76	H22.3068	南紀寺遺跡	白毫寺町 19 番 8	個人	個人住宅新築	宅地	H22.7.1	GL-1.4m まで掘削、淡黄灰色土の堆積土内
77	H22.3048	左京三条二坊十一 十二坪 二坊坊間路	三条大路一丁目 645 番 48	ファースト 住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.7.2	GL-0.15m まで掘削、盛土内
78	H22.3098	左京二条四坊六坪	法蓮町 189-3 の一部	オーエスハ ウジング㈱	賃貸住宅新築	宅地	H22.7.8	GL-0.3m まで掘削、盛土内
79	H22.3036	左京三条六坊四坪一 三条大路 奈良町遺跡	下三条町 44-3	個人	店舗新築	宅地	H22.7.8	GL-1.1m まで掘削、盛土内
80	H22.3030	左京七条一坊十六坪	八条五丁目 437-8	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H22.7.8	GL-1.3m まで掘削、茶色砂利内
81	H22.3029	朱雀大路	四条大路 3 丁目 962-1	個人	共同住宅新築	宅地	H22.7.13	GL-0.35m まで掘削、盛土内
82	H22.3044	左京二条四坊九・十坪 東四坊坊間北小路	近辺二丁目 177-1	個人	賃貸住宅新築	宅地	H22.7.15	GL-0.2 ～ 0.3m まで掘削、盛土内
83	H22.3106	右京二条三坊九坪	西大寺芝町一丁目 2495-11	オーエスハ ウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.7.16	GL-0.3m まで掘削、盛土内
84	H22.3104	南紀寺遺跡	南紀寺町三丁目 281 番地 5	個人	賃貸住宅新築	宅地	H22.7.16	GL-0.3m まで掘削、盛土内
85	H22.3102	五条大路	天安寺四丁目 896 番 3、 896 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H22.7.20	GL-0.35m まで掘削、盛土内
86	H22.3093	右京三条四坊五坪	平松三丁目 194-4, -6	-建設㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.7.21 H22.7.26	GL-0.2m まで掘削、盛土内
87	H22.3108	左京三条四坊七坪 東四坊坊間東小路	近辺町二丁目 184-1 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H22.7.26	GL-0.6m まで掘削、盛土内
88	H21.3525	右京一条二坊十四坪 一条条間路	西大寺栄町 2321-1	和中畠ビル	事務所新築	宅地	H22.7.27 H22.7.29 H22.8.11	GL-0.8m まで掘削、耕作土内
89	H22.3057	左京五条二坊十三坪	大安寺西一丁目 342 (大安寺西小学校)	余良市消防 局長	地下式防火水槽設置	小学校 校庭	H22.7.28	GL-2.4m まで掘削、地山確認
90	H22.3010	左京五条五坊十五坪	西木辻町 29-1, 29-7, 30-1	西商店	共同住宅新築	宅地	H22.7.30 H22.8.4 H22.8.5	GL-0.7m まで掘削、旧耕作土内 GL-0.5m まで掘削、盛土内 GL-0.5m まで掘削、盛土内
91	H22.3099	右京六条三坊十五坪	六条一丁目 794 番 1	個人	共同住宅新築	宅地	H22.8.2	GL-0.3 ～ 0.5m まで掘削、盛土内
92	H21.3264	左京三条一坊十二坪 三条大路	三条大路二丁目 555-1 他	コーナン商 事所	店舗新築	宅地	H22.8.2	GL-1.9m まで掘削、GL-1.3m で地山確認
93	H22.3092	左京三条四坊五坪	大宮町三丁目 180 番 11 の 一部、180 番 13	個人	個人住宅新築	宅地	H22.8.2	GL-0.2m まで掘削、盛土内
94	H21.3487	左京三条五坊五坪 奈良町遺跡	大宮町大字一丁目 1-10	個人	店舗新築	宅地	H22.8.2	GL-2.0m まで掘削、地山確認
95	H22.3121	右京四条四坊四坪	平松三丁目 208-7 他	個人	個人住宅新築	宅地	H22.8.5	工事先行、GL-0.2m まで掘削、盛土内
96	H21.3540	右京三条三坊四坪	宝来一丁目 65-2, 65-3, 65-101	個人	賃貸住宅新築	宅地	H22.8.9	GL-1.3m まで掘削、地山確認
97	H22.3439	左京二条六坊十六坪 一条南大路	法蓮町 1201-4	個人	個人住宅新築	宅地	H22.8.9 H22.8.10	GL-0.2m まで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	道跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
98	H22.3157	左京三条六坊十坪	高天市町 5-1 の一部	アーチ不動 座敷	モルタルム 新築	宅地	H22.8.17	GL-0.35 ~ 0.5m まで掘削、盛土内 確認
99	H22.3109	三陵東古墳埋蔵接地	都郡白石町 2208 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H22.8.17	GL-1.4m まで掘削、GL-1.05m で地山 確認
100	H22.3082	左京五条五坊七坪	西木辺町 地内	奈良市水道 局	水道管敷設	道路	H22.8.18	GL-1.8m まで掘削、盛土内
101	H22.3089	左京三条三坊十二坪	宝来一丁目 842 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.8.19	GL-0.3m まで掘削、盛土内
102	H22.3083	左京五条二坊一坪	大安寺町 564-14, -16, 566-10	個人	分譲住宅新築	宅地	H22.8.19	GL-1.6m まで掘削、GL-1.3m で地山 確認
103	H22.3101	左京二条三坊十坪	法華寺町 26 番地	㈱ヨシタ ム	長屋建住宅、 納戸、駐輪場 上屋新築	宅地	H22.8.23	GL-0.2m まで掘削、盛土内
104	H22.3127	左京三条四坊七坪	芝辻町二丁目 203-1 他	個人	個人住宅新築	駐車場	H22.8.25	GL-0.2m まで掘削、盛土内
105	H22.3163	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90-101	㈱日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H22.8.26	GL-0.3m まで掘削、盛土内
106	H22.3164	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90-94	㈱日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H22.8.26	GL-0.3m まで掘削、盛土内
107	H22.3052	左京五条二坊一坪	大安寺町 566-8	㈱アイビー ホーム	分譲住宅新築	宅地	H22.8.30	GL-1.6m まで掘削、GL-1.2m で地山 確認
108	H21.3543	右京五条三坊八坪	五条一丁目 17-22	個人	個人住宅新築	宅地	H22.9.1	GL-0.75m まで掘削、盛土内
109	H22.3156	左京二条二坊二坪	西九条一丁目 6-11	個人	長屋新築	駐車場	H22.9.2	GL-1.2m まで掘削、盛土内
110	H22.3096	左京九条二坊三坪	西九条町四丁目 2 番地 2	大和ハウス 工業㈱	駐車場整備工 事	宅地	H22.9.3	GL-0.9m まで掘削、盛土内
111	H22.3117	右京三条二坊三坪	三条大路五丁目 275 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.9.6	GL-0.35m まで掘削、盛土内
112	H22.3155	左京九条二坊十五坪	西九条町二丁目 10-9	個人	長屋新築	宅地	H22.9.14	掘削なし
113	H22.3174	左京一条四坊十二坪	法蓮町 623 番 2 及び 624 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H22.9.17	GL-1.5m まで掘削、GL-0.7m で地山 確認
114	H22.3189	奈良町遺跡	高畠町 964-3, 982-3	個人	店舗付個人住 宅新築	宅地	H22.9.17	GL-1.8m まで掘削、GL-1.3m で地山 確認
115	H22.3159	左京四条五坊十三坪 左京五条六坊四坪 東五条大路 奈良町遺跡	杉ヶ中町 11-1 ~ 大森町 299	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H22.9.27	GL-0.9m まで掘削、GL-0.5m で地山 確認
116	H22.3224	左京九条二坊十五坪	西九条町 278 番 1 の一部	西部建設㈱	道路建設・下 水道工事	宅地	H22.9.28	北入筋 GL-2.0m まで掘削、GL-0.8m で地山確認 南入筋 GL-0.8m まで掘削、旧水路内
117	H22.3211	ゼニヤクボ遺跡	都郡小山町 42 番・43 番 地	個人	個人住宅新築	頃地	H22.9.29	GL-0.9m まで掘削、GL-0.5m で地山 確認
118	H22.3169	奈良町遺跡	高畠町 1207 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.10.1	北寄り GL-0.2m まで掘削、表土内 南寄り GL-0.4m まで掘削、整地内
119	H22.3181	左京五条四坊十三坪	大安寺六丁目 4	大阪ガス㈱	ガス管新設	道路	H22.10.1	GL-0.8m まで掘削、GL-0.6m で地山 確認
120	H22.3313	左京七条四坊六坪	七条西町一丁目 627-295 他	個人	共同住宅新築	頃地	H22.10.15	GL-0.3m まで掘削、GL-0.2m で地山 確認
121	H21.3549	左京二条五坊十五 十六坪	法蓮町 975-10 ~ 986-2	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H22.10.20	GL-1.5m まで掘削、旧水田耕土内
122	H22.3204	右京三条三坊九坪	六条一丁目 676 番 3, 676 番 15	個人	個人住宅新築	宅地	H22.10.21	GL-1.5m まで掘削、GL-1.0 ~ 1.3m で地山確認
123	H22.3158	右京八条四坊四坪	七条西町一丁目 609 番 57	個人	個人住宅新築	宅地	H22.10.26	GL-0.4 ~ 1.0m まで掘削、地山確認
124	H22.3114	左京七条一坊十五坪	八条五丁目 489-1, 437-44 の一部	医療法人 宝山会	介護付有料老 人ホーム	宅地	H22.10.29	GL-1.3 ~ 1.5m まで掘削、盛土内
125	H22.3180	左京一条二坊二坪	二条町一丁目 35-2, 35-4	大阪ガス㈱	ガス管新設	道路	H22.11.2	GL-0.6m まで掘削、旧水田耕土内
126	H22.3261	古市遺跡	古市町 1657-7	㈱エグゼ ウジング	分譲住宅新築	宅地	H22.11.4	GL-0.9m まで掘削、水田床土内
127	H22.3219	左京六条二坊一坪	奈良市八条町 373 番地 奈良	モトレーン	店舗増築	宅地	H22.11.5	GL-3.1m まで掘削、GL-2.7m で地山 確認
128	H22.3167	左京四条四坊七坪	三条宮前町 233 番 3, 233 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H22.11.5	GL-0.2m まで掘削、盛土内
129	H22.3232	左京二条七坊北郊 一条三条路 多聞城跡	法蓮町 1416-9	個人	擁壁工事	山林	H22.11.5	工事先行
130	H22.3160	右京七条三坊十三坪 三松寺跡	七条一丁目 30-27 ~ 二丁目 670	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H22.11.8	GL-1.2m まで掘削、彫形理土内
131	H22.3234	左京二条七坊十二坪 奈良町遺跡	南平田中町 5 番	個人	個人住宅新築	宅地	H22.11.8	GL-0.8m まで掘削、地山確認
132	H22.3090	左京四条四坊八坪	三条宮前町 51-2 他	学校法人白 藤学園	学校改築	学校	H22.11.18	GL-1.0 ~ 1.1m まで掘削、地山確認
							H22.12.7	GL-1.9m まで掘削、GL-1.1m で地山 確認

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
133	H22.3195	左京五条四坊六坪	大安寺七丁目 699 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.11.15	GL-0.9m まで掘削、GL-0.7m 地山確認
134	H22.3251	右京七条二坊十五坪	七条一丁目 357-2 他	個人	個人住宅新築	宅地	H22.11.15	GL-0.1m まで掘削、盛土内
135	H22.3203	右京三条二坊四坪	三条大路南五丁目 4-21	本照寺	山門改築	寺院	H22.11.16	GL-0.2m まで掘削、盛土内
136	H22.3230	左京二条七坊北郊	多門町 22 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.11.17	GL-0.3m まで掘削、盛土内
137	H22.3264	左京四条三坊五坪	三条松町 635 番地 1	個人	広告塔建設	宅地	H22.11.18	GL-4.6m まで掘削、GL-1.75m で地山確認
138	H22.3136	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 274-3	個人	共同住宅新築	宅地	H22.11.19	GL-0.9m まで掘削、地山確認
							H22.11.29	GL-0.9m まで掘削、GL-0.8m 地山確認
139	H22.3275	右京三条四坊九坪	曾原町 641-3	個人	共同住宅新築	水田	H22.11.26	GL-1.2m まで掘削、GL-0.5 地山確認
140	H22.3248	左京四条三坊十二坪	三条松町 406-4	個人	事務所・作業所新築	宅地	H22.11.26	GL-0.9m まで掘削、盛土内
141	H22.3182	右京五条二坊三坪	五条町 292-1 他	社会福祉法人 育生会	保育所増築	宅地	H22.11.26	GL-1.1m まで掘削、盛土内
142	H22.3415	池田遺跡	池田町	奈良市長(道路建設課)	道路工事	水田	H22.11.30	GL-0.85m まで掘削、GL-0.4m 地山確認
143	H22.3283	右京三条三坊十二坪	宝来二丁目 847-12	個人	個人住宅新築	宅地	H22.12.1	GL-1.1m まで掘削、旧水田床土内
144	H22.3328	右京七条三坊七坪	西三坊境間小路	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.12.6	GL-0.1m まで掘削、旧水田耕土内
145	H22.3329	右京七条三坊六坪	七条一丁目 383-2	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.12.6	GL-0.3m まで掘削、盛土内
146	H22.3276	奈良町遺跡	財塙町 181-13	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.12.6	GL-0.2m まで掘削、整地土内
147	H22.3200	西隆寺跡境内	西大寺本町 8-15 ~ 8-6	大阪ガス㈱	ガス管設設	宅地	H22.12.10	GL-0.6m まで掘削、旧水田耕土内
148	H22.3313	左京三条五坊四坪	大宮町一丁目 81 番 19、81 番 20	個人	店舗新築	宅地	H22.12.14	GL-1.2m まで掘削、GL-0.75m で地山確認
149	H22.3256	西大寺旧境内	西大寺新田町 535 番 8	個人	個人住宅新築	宅地	H22.12.14	GL-1.6m まで掘削、GL-1.5m で地山確認
150	H22.3193	右京二条二坊十六坪	西大寺南町 4-10	大阪ガス㈱	ガス供給管引込工事	道路	H22.12.14	GL-1.4m まで掘削、旧水田床土内
151	H22.3272	右京五条三坊六坪	五条二丁目 601 番 31	個人	個人住宅新築	宅地	H22.12.16	GL-0.1m まで掘削、盛土内
152	H22.3559	四条大路 東七坊大路	福智院町 3 ~ 31	大阪ガス㈱	ガス管入替	道路	H22.12.17	GL-1.2m まで掘削、地山確認
153	H22.3423	五条条間路 左京五条一坊十一坪	柏木町 395-5 ~ 柏木町	大阪ガス㈱	ガス管設設	道路	H22.12.20	GL-1.1m まで掘削、盛土内
154	H22.3252	左京三条五坊三坪	東四坊大路	和セブン イレブン・ジャパン	店舗新築	駐車場	H22.12.21	GL-0.8m まで掘削、盛土内
155	H22.3324	阿弥陀山庵寺跡	敷島町一丁目 509-16 の一部	日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H22.12.22	GL-0.25 ~ 0.3m まで掘削、盛土内
156	H22.3325							
157	H22.3301	新薬師寺旧境内	高畠町 608-1、-5	個人	宅地造成	宅地	H22.12.24	GL-1.25m まで掘削、灰色粘質土の流路埋土内
							H23.2.21	GL-0.4m まで掘削、西側は盛土内、東側は GL-0.2m で堆山確認
158	H22.3311	右京三条三坊十三坪	宝来二丁目 829-7	個人	個人住宅新築	宅地	H23.1.6	GL-0.3m まで掘削、盛土内
159	H22.3377	右京七条二坊十四坪	七条一丁目 2-1	奈良市長	七条コミュニティスポーツ会館増築工事	宅地	H23.1.11	工事先行、GL-1.1m まで掘削、盛土内
160	H22.3235	南紀寺遺跡	百毫寺町	奈良市長	下水道工事	道路	H23.1.25	GL-2.0m まで掘削、GL-0.55m で地山確認
161	H22.3303	吉市城跡	吉市町 1841-7	個人	宅地造成	宅地	H23.1.14	GL-3.9m まで掘削、GL-1.9m で地山確認
162	H22.3334	右京五条三坊五坪	五条二丁目 613-8	個人	個人住宅新築	雑種地	H23.1.14	GL-0.3m まで掘削、盛土内
163	H22.3266	左京四条四坊八坪	三条本町 3-6	大阪ガス㈱	ガス管入替・新設	道路	H23.1.14	GL-0.6m まで掘削、盛土内
164	H22.3342	右京六条四坊一坪	六条二丁目 1129-1	個人	個人住宅新築	宅地	H23.1.17	GL-0.4m まで掘削、盛土内
165	H22.3236	東一坊大路	四条大路一丁目 ~ 柏木町	奈良市長	下水道工事	道路	H23.1.17	GL-1.4m まで掘削、盛土内
166	H22.3308	東九条平城跡	東九条町 222-27 ~ 219-12	大阪ガス㈱	ガス管の埋設	道路	H23.1.21	GL-1.9m まで掘削、盛土内
167	H22.3265	右京七条一坊九坪	六条町 65 番地一部	個人	資材置場造成	水田	H23.1.21	GL-0.25m まで掘削、地山確認
168	H22.3344	左京五条六坊十六坪	葛陽町 14-5	奈良市長	道路整備工事	道路	H23.1.27	GL-0.4m まで掘削、盛土内
169	H22.3387	今市遺跡	今市町 539 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H23.1.27	GL-0.2m まで掘削、盛土内
170	H22.3250	左京三条六坊十坪	西側門町 11-1 他	和舟子産業	立体駐車場新築	駐車場	H23.2.3	GL-0.6m まで掘削、灰褐色土内

番号	届出受理番号	道跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
171	H22.3396	右京三坊三条大路 (通仁陵駕塙い号近地)	宝来町 804-1	個人	個人住宅新築	畠地	H23.2.7	GL-1.65m まで掘削、地山確認
172	H22.1122	特別史跡・特別名勝 宮路延岡	三条大路一丁目	奈良市長	保存整備事業	庭園	H23.2.7	GL-0.3m まで掘削、盛土内
173	H22.3331	吉市城跡	吉市町 268 番地	奈良市長	バンビホーム 増築	学校用地	H23.2.8	GL-0.7m まで掘削、淡灰色粘土内
174	H21.3379	左京四条四坊六坪	三条大宮町 1 番 5 号	大和大宮自動車園	店舗新築	宅地	H23.2.15 ～ H23.2.25	GL-1.2m まで掘削、盛土内
175	H22.3375	左京九条四坊三～ 六・十・十二	東九条町 66 他	般 NIPPO	土壌調査	水田	H23.2.22	1回目 GL-0.8m まで掘削、GL-0.7m で地山確認 2回目 GL-1.0m まで掘削、GL-0.79m で地山確認
							H23.2.23	3回目 GL-0.75m まで掘削、GL-0.54m で地山確認 4回目 GL-0.55m まで掘削、GL-0.25m で地山確認
							H23.2.24	5回目 GL-0.75m まで掘削、旧流域埋土内
								GL-1.15m まで掘削、GL-0.4m で地山確認
176	H22.3304	左京三條四坊十五坪	大宮町五丁目 135-1	個人	事務所新築	宅地	H23.2.25	工事先行
177	H22.3345	右京五条三坊三坪	五条二丁目地内	奈良市長	池改修工事	水路	H23.2.24	
178	H22.3242	元興寺旧境内 奈良町遺跡	鶴仙院町 13 番地	搬車屋	店舗付共同住宅新築	宅地	H23.3.1	GL-0.7m まで掘削、盛土内
179	H22.3412	左京九条四坊十五坪	東九条町 232-9	有ダックス 訪夢	分譲住宅新築	宅地	H23.3.3	GL-0.6m まで掘削、旧耕作土内
180	H22.3413	右京六条四坊十一坪	六条二丁目 1126-7	ファースト 住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H23.3.3	GL-0.15m まで掘削、地山確認
181	H22.3364	右京五条三坊十三坪・ 四坊四坪 西三坊大路	五条三丁目 9-1	共栄社化学 ㈱	宿舎付新築	宅地	H23.3.7	GL-0.2 ～ 1.5m まで掘削、地山確認
182	H22.3398	右京六条四坊十一坪	六条二丁目 1129 番 16, 1129 番 17	個人	個人住宅新築	宅地	H23.3.8	GL-0.2m まで掘削、盛土内
183	H22.3416	右京二条五坊四坪 三条大路	芝町三丁目 71 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H23.3.9	GL-1.3m まで掘削、GL-0.5m で地山確認
184	H22.3369	左京三条四坊十五坪	芝町二丁目 167-5、157- 2	個人	賃貸住宅新築	宅地	H23.3.11	GL-0.4m まで掘削、盛土内
185	H22.3368	雍之庄城跡	雍之庄村 373-3、374	個人	個人住宅新築	宅地	H23.3.14	GL-0.7m まで掘削、GL-0.35m で地山確認
186	H22.3418	右京北辺二坊五坪	西大寺新町二丁目 105 番 31	個人	個人住宅新築	宅地	H23.3.15	GL-0.35m まで掘削、盛土内
187	H22.3401	左京九条二坊七坪	西九条町三丁目 3-16	有浜喜ホー ム	長屋新築	駐車場	H23.3.18	GL-1.5m まで掘削、GL-0.9m で地山確認
188	H22.3385	左京九条二坊十三坪	西九条町四丁目 2 番地 2 号	大和ハウス 工業㈱	雨水排水施設 改修工事	宅地	H23.3.25	GL-2.1m まで掘削、GL-1.5m で地山確認
189	H22.3392	左京三条三坊八坪	芝町四丁目 12-4、12-5	たかつじ商 事㈱	有料老人ホー ム新築	宅地	H23.3.25	GL-1.9m まで掘削、耕作土内
190	H22.3404	右京二条四坊八坪	西大寺芝町四丁目 2035- 1、3	個人	宅地造成	水田	H23.3.30	GL-1.2m まで掘削、GL-0.56m で地山確認
191	H22 奈教文 第 21 号	奈良市指定文化財 史跡水木古墳	大柳生町 5827	奈良市教育 委員会教育 長	文化財説明版 設置	公園	H23.3.31	GL-0.5m まで掘削、盛土内

(2) 平成 21 年度文化財保護法第 125 条の 1 の現状変更許可申請に伴う工事立会

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H21.1144	史跡東大寺旧境内	芝辻町 543-13	奈良市長	下水道工事	道路	H22.7.9	GL-0.85m まで掘削、茶褐色土刷内
2	H22.1036	史跡平城京朱雀大路跡	二条大路三丁目・南四丁目	1300 年記念事業協会	舗装改修工事	史跡公園	H22.7.26	GL-0.1 ~ 0.15m まで掘削、盛土内
3	H22.1180	史跡大安寺旧境内	東九条町 1384、1401-1、1400-4	関西電力㈱	電柱立替	道路	H22.7.26	GL-2.5m まで掘削、GL-0.75m で地山確認
4	H21.1146	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1083-1	個人	離れ棟の改築	宅地	H22.7.27	GL-2.5m まで掘削、粘質砂層内
5	H22.1020	史跡元興寺伽藍坊境内	中院町 10番 / 3 他	(宗) 元興寺	防犯カメラ増設	寺院	H22.8.9	GL-0.3 ~ 0.5m まで掘削、盛土内
6	H22.1031	史跡大安寺旧境内	雜司町 90番地(駿坂小学校)	奈良市長	倉庫の除去	学校	H22.8.10	GL-0.3 ~ 0.5m まで掘削、盛土内
7	H22.1073	史跡大安寺旧境内	東九条町	関西電力㈱	電柱の立替	塔院整備地内	H22.8.26	GL-0.3 ~ 0.5m まで掘削、盛土内
8	H22.1180	史跡大安寺旧境内	東九条町 1384 他	関西電力㈱	電柱の立替	道路隣接地	H22.11.22	GL-1.5m まで掘削、暗灰色粘土内
9	H22.1080	史跡大安寺旧境内	大安寺五丁目 967-8	個人	個人住宅新築	宅地	H22.12.9	GL-0.3m まで掘削、盛土内
10	H22.1123	史跡大安寺旧境内	東九条町 1326・1321	奈良市長	保存整備事業	水田	H22.12.10	GL-0.8m まで掘削、盛土内
							H23.1.25	
							H23.1.26	GL-0.15m まで掘削、耕作土内
							H23.2.1	
11	H22.1111	史跡東大寺旧境内	水門町他	奈良市長	仮設道設置	道路	H22.12.2	掘削なし
12	H22.1118	史跡大安寺旧境内 附石横丸跡	東九条 198-1	個人	水田の漏水防止	水田	H23.2.3	GL-2.2m まで掘削、耕作土内
13	H22.1157	史跡平城京朱雀大路跡	二条大路南三丁目 100番 11他	1300 年記念事業協会	入路整備工事	仮設道路	H23.1.18	GL-0.4m まで掘削、耕作土内
14	H22.1176 の2	史跡東大寺旧境内	雜司町 415番地 他	奈良市長	公共下水道渠工事	道路	H23.3.23	GL-2.2m まで掘削、GL-0.7m で地山確認

18. 平成 22 年度実施 踏査一覧

No	踏査地	事業者	事業内容	事業面積	届出受理番号	調査期間	踏査所見
1	押熊町・二名町内	近畿日本鉄道㈱	区画整理	約 212,439m ²	H19.4004	H22.4.7・14	事業地内に遺構が認められなかつたので、工事着手
2	西大寺赤田町・丁目 556-1 の一部他	医療法人 平和会	病院建設及び造成工事	17,736.05m ²	H22.4002	H22.10.22	現地表で遺跡の存在が確認できなかつたため、後日試掘調査を実施(試掘 2010-4 次調査)
3	秋篠町 1049-1 地～西大寺赤田町二丁目 863	奈良市長	都市計画道路大和中央道(敷島工区) 街路改良事業	約 21,600m ²	H22.4005	H22.11.24・H22.12.14	古墳時代の遺物包含地 1 国所と中世の墓地を確認

第2章 自然科学分析報告

奈良市教育委員会では、発掘調査の成果をより総合性の高い確実なものとするために、遺跡や遺物の肉眼観察では把握できない事象について、自然科学分析を活用している。

これまでに行ってきた主な自然科学分析は、下記の通りである。

- 1 環境の指標性が高く、生活資源となっている植物を主とした生物遺体の同定
- 2 年代の手がかりとなる遺物が含まれていない地層や遺構の年代を比定するために行う、試料の含有放射線量から年代値を求める年代測定（例：放射性炭素年代測定、T L 年代測定）や、年代の指標性が高い広城火山灰（例：A T 火山灰、A H 火山灰）の同定
- 3 遺物に付着したり土壤に含まれたりする有機物や化学物質、あるいは土器の胎土や地質に含まれる鉱物の成分を同定する理化学分析（例：蛍光X線分析）

平成 22 年度は、下記の自然科学分析を実施した。

- ① 平城京第 631 次調査 奈良時代の井戸 S E 513 の井戸枠に転用された樋部材の樹種同定、漆様膜状物質の成分分析・膜面観察、釘の材質分析、X線撮影
- ② 平城京第 640 次調査 河川 01 に含まれる流木の放射性炭素年代測定
- ③ 西大寺旧境内第 28 次調査 沖積層及び旧河川に含まれる流木の放射線炭素年代測定
- ④ 菅原寺旧境内第 6 次調査 沖積層に含まれる炭化物の放射性炭素年代測定

本書には、②～④と、前年度に実施したが未報告であった平城京第 623 次調査の下記の自然科学分析、及び平城京第 640 次調査で平成 23 年度に実施した下記の自然科学分析の各成果を合わせて報告する。なお、①は次年度の年報にて報告する予定である。

- 1) 平城京第 623 次調査 弥生時代の河川 2 と奈良時代の区画溝 S D 173・171、井戸 S E 516 の埋土の花粉分析、縄文時代の河川 1 と弥生時代の河川 2 に含まれる流木の樹種同定及び放射線炭素年代測定
- 2) 平城京第 640 次調査 河川 01 の埋土の花粉分析、種実同定、珪藻分析

I. 平城京跡第623次調査における自然科学分析

1. 花粉分析

1.はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、平城京跡（左京五条四坊十六坪）の井戸 S E 516 棟内最下層、宅地内区画溝の SD173 西壁と SD171 北壁で採取された3点（いずれも奈良時代）、大森遺跡の河川2（D発掘区）より採取された3層、4層の2点（いずれも弥生時代）の計5点である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cmを採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの筋で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封をしてプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、種類、属、種、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ科については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表皮断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ科とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの6、草本花粉23、シダ植物胞子2形態の計61である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果2分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複管束胚属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、センダン属、キハダ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ツバキ属、グミ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ノブドウ、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ナス科、ゴキヅル、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

鞭虫卵、異形吸虫類卵

(2) 花粉群集の特徴

1) 井戸 S E 516 棟内最下層

草本花粉の占める割合が高く、約60%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ミズアオイ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属、シイ属、マツ属複管束胚属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などが低率に出現する。鞭虫卵、異形吸虫類卵がわずかに出現する。

2) 区画溝 S D 173 西壁

草本花粉の占める割合が高く、約65%を占める。

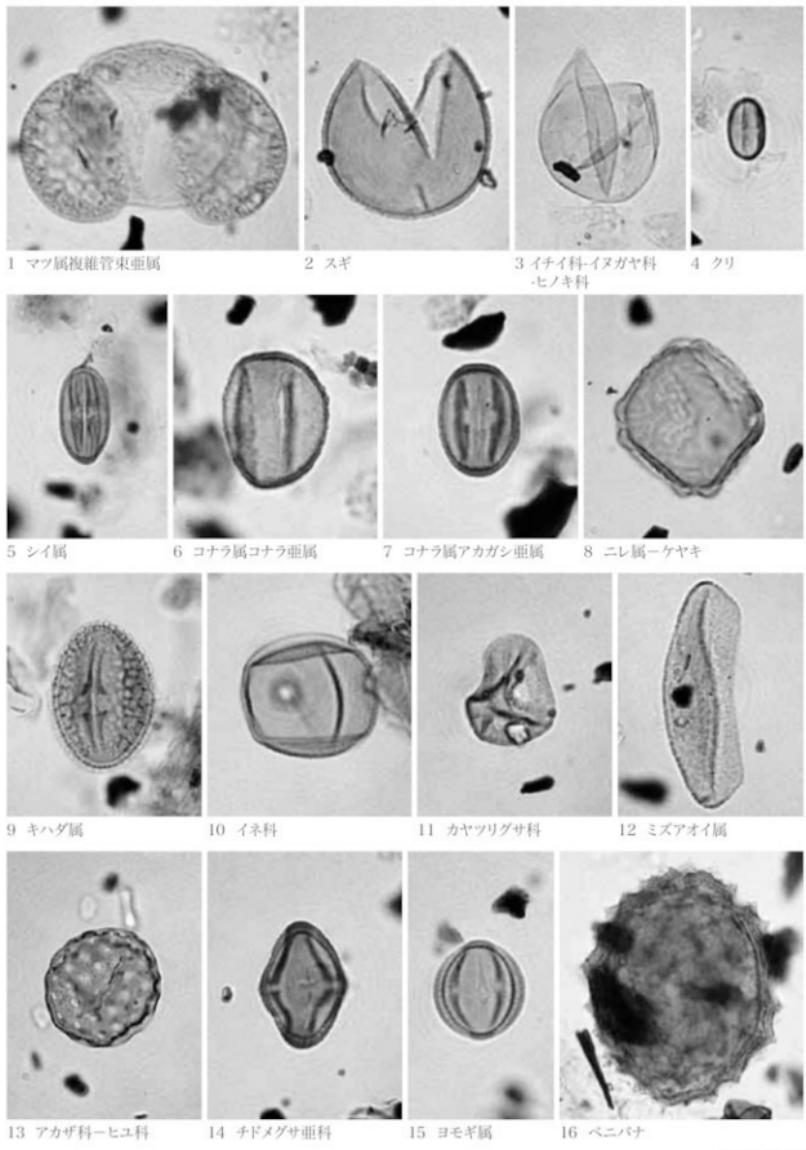


図1 H.J 第623次調査 花粉類微鏡写真

表1 HJ第623次調査 花粉分析結果

分類群	科名	SE156種内		SD173西壁	SD171北壁	河川2	
		最下層	3層			4層	
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Ficotcupus</i>	マキ属	1					
<i>Abies</i>	モミ属	3	6	2	4	2	
<i>Tsuga</i>	ツガ属	2	1	1	1	1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複離管束系属	13	10	6	2	7	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	24	21	13	26	26	
<i>Schizolopiptis verticillata</i>		1		2	2	2	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae							
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	イナイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	8	2	9	14	33	
<i>Alnus</i>	サワグルミ					1	1
<i>Betula</i>	ハンノキ属	2		2	2	1	1
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1		1			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシテ属—アサダ	1					
<i>Gustavia crenata</i>		1				5	9
<i>Gastonea</i>	シイ属	14	19	13	45	46	
<i>Fagus</i>	ブナ属	2	1		3		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidothamnus</i>	コナラ属コナラ系属	17	11	16	42	30	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ系属	41	43	33	231	414*	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属	1	3	4	5	1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属—ムクノキ		2		6	7	
<i>Melia</i>		1					
<i>Phellodendron</i>	センダン属						17
<i>Ilex</i>	キハダ属				7	5	5
<i>Acer</i>	モチノキ属			1	1		
<i>Aesculus turbinata</i>	カエデ属					4	11
<i>Sapindus</i>	エブキ属					2	
<i>Canella</i>	フタバキ属					1	
<i>Elaeagnus</i>	エゴノキ属					1	
<i>Syrinx</i>	モクセイ科	1				1	9
<i>Oleaceae</i>	トネリコ属						
<i>Prunus</i>							
ArboREAL · Nonarboreal pollen	樹木 · 草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科—イラクサ科	7	6	2	2	17	
Saxifragaceae	エキナシタ科			1	1	1	
Rosaceae	バラ科	2	1	2	4	5	
Leguminosae	マメ科					1	5
Araliaceae	ウコギ科						
<i>Sambucus-Illicium</i>	ニワトコ属—ガマズミ属	1		1		1	
Nonarboreal pollen	草本花粉						
<i>Typha-Spartanium</i>	ガマ属—ミクリ属			1	1	8	
<i>Sagittaria</i>	オモリキ属	1					
<i>Gramineae</i>	イネ科	104	102	256	18	14	
<i>Oryza type</i>	イネ属型	8	6	48	3		
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	11	18	5	2	1	
<i>Anemone keiskei</i>	イボクサ科				1		
<i>Monochoria</i>	ミアオイ属	3		2			
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		3	1		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	11	50	2		2	
Caryophyllaceae	ナシソ科		2	1		1	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属					3	3
Crociiferae	アブラナ科	3	1	2		4	
<i>Angelicus brevipedunculata</i>	チドメグサ属科	1	8	1		1	
Hydrocotyloideae	セリ属科	2	1	2	4	2	
Aipoideae	シソ科						
Labiatae	ナス科	1				1	
Solanaceae	ゴキブル						
<i>Actinostemma lobatum</i>	タンボポ科	1	1	1		1	
Lacustridene	キク科	2	4	3		2	
Asteridae	オナモモ属	1					
Xanthium		77	57	22	16	3	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属			1			
<i>Carthamus tinctorius</i>							
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolete type spore	単孔膜胞子	11	3	3	2	1	
Tritile type spore	二条膜胞子	3	4	2		2	
ArboREAL pollen	樹木 · 草本花粉						
ArboREAL · Nonarboreal pollen	樹木 · 草本花粉	133	120	110	408	628	
Nonarboreal pollen	草本花粉	10	7	6	9	29	
Total pollen	花粉總數	226	255	348	58	34	
Pollen frequencies of 1cm	試料1cm中の花粉密度	369	382	464	475	691	
Unknown pollen	未同定花粉	2.9	5.3	9.2	7.7	1.3	
Fern spore	シダ植物胞子	17	12	2	14	14	
Helmint eggs	寄生虫卵	3					
<i>Dichotomitus trichuraj</i>	鞭蟲卵						
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>	異形吸虫類卵	1					
Total		4	0	0	0	0	
Helmint eggs frequencies of 1cm	試料1cm中の寄生虫卵密度	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0	
Digestion rinses	明らかな消化残渣	(—)	(—)	(—)	(—)	(—)	
Charcoal fragments	黒褐色化物質	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	

*:集塊

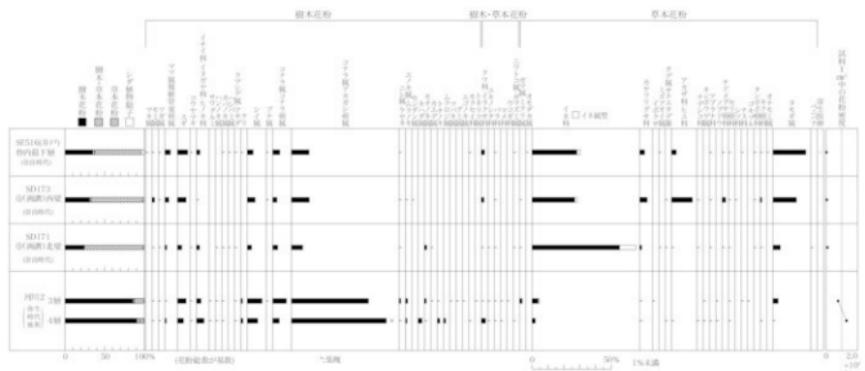


図2 HJ第623次調査 花粉ダイヤグラム

本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）を主にヨモギ属、アカザ科ヒュウ科が比較的多く、カヤツリグサ科、チドメグサ亞科などが出る。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属などが低率に出現する。

3) 区画溝SD 171 北壁

草本花粉の占める割合が高く、約75%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ベニバナがわずかに出現する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギ、シイ属などが低率に出現する。

4) 大森遺跡 河川2（D発掘区） 4層、3層

河川2の4層と3層では花粉構成、花粉組成ともに類似する。樹木花粉の占める割合が高く、約85～90%を占める。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が高率に出現し、次にコナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科などが出現する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などが低率に出現する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

1) 井戸S E 0516 枠内最下層

井戸S E 516の周囲には、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科ヒュウ科、ミズアオイ属などの人里植物や耕地雑草の性格を持つ草本が生育していたと考えられる。イネ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属は水生植物であり、ヨモギ属、アカザ科ヒュウ科は乾燥を好む。また、ミズアオイ属は水田雑草でもあること、イネ属型が出現することなどから、周辺に水田が分布してい

た可能性も示唆される。わずかに鞭虫卵、異形吸虫類卵が出現しており、SE 516は生活汚染の影響を受けていたとみなされる。近隣には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹と、コナラ属コナラ亜属などの落葉樹、スギ、マツ属複維管束亜属、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科などの針葉樹が分布していたと考えられる。

2) 区画溝SD 173 西壁

草本花粉が優勢であり、乾燥を好むヨモギ属、アカザ科ヒュウ科、多様な環境に生育し雜草類の多いイネ科が多い。これらがこの区画溝周囲に生育していたと考えられ、堆積地は乾燥した堆積環境であったと推定される。また花粉密度が低く、この区画溝は常時溜水する溝でなく乾燥した溝であったと考えられる。近隣には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹と、コナラ属コナラ亜属などの落葉樹、スギ、マツ属複維管束亜属などの針葉樹が生育していた。

3) 区画溝SD 171 北壁

イネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、堆積地周囲に水田が分布していたと考えられる。SD 171もSD 173同様乾燥した溝であったと推定される。

4) 大森遺跡 河川2（D発掘区） 4層、3層

4層、3層ともに類似した花粉構成と花粉組成を示す。コナラ属アカガシ亜属が高率に出現し集塊もみられるところから、堆積地周囲はカシ林の照葉樹林に覆われていたと推定される。コナラ属コナラ亜属、シイ属などの広葉樹、スギ、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科などの針葉樹も構成要素として分布していた。イネ科、ヨモギ属などの草本は林縁に生育していたとみなされる。

参考文献

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本
第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262,
鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物
館収蔵目録第5集、60p.,
中村純 (1967) 花粉分析、古今書院、p.82-102,
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)
を中心として、第四紀研究、13,p.187-193,
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、
p.21-30,
中村純 (1980) 日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第
13集、91p.

II. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体で
あり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能で

ある。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少
ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であ
り、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況
や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、河川1 (HJ第623A次発掘区) と河川2 (HJ
第623C次発掘区) 出土の流木の2点である。

3. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、
放射断面（粂目と同義）、接線断面（板目と同義）の基
本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～
1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生
標本との対比によって行った。

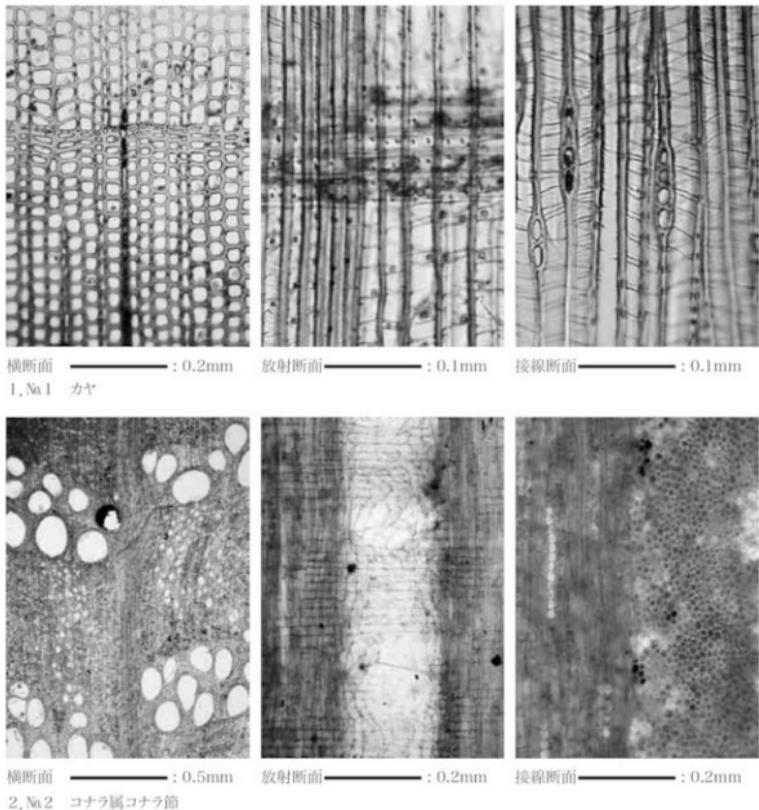


図3 H J 第623次調査 木材の断面顕微鏡写真

表2 HJ第623次調査(大森遺跡)における樹種同定結果

No.	発掘区	試料	遺構種別・番号	時代	採取・出土部位	結果(学名/和名)
1	A発掘区	下層流路	河川1	縄文以前	理土中	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc. カヤ
2	C発掘区	黒色腐植土	河川2	弥生後期	理土中	<i>Quercus sect. Primus</i> コナラ属コナラ節

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となつた特徴を記す。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 写真1
仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の济州島に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬であり、弾性が強く、水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Primus* ブナ科 写真2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

5. 所見

同定の結果、平城京跡第623次調査出土木材のうち、河川1出土の流木1点はカヤであった。カヤは、主に温帯下部の暖温帯に分布し、谷沿いなどや潤湿などに生育する常緑高木である。河川2出土の流木1点はコナラ属コナラ節であった。コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。暖温帯性のナラガシワや二次林要素でもあるコ

ナラなどが含まれる。いずれも当時遺跡周辺に分布していたと推定される。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48、
- 佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100、
- 鳥地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296
- 山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242

III. 放射性炭素年代測定

1.はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(¹⁴C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の¹⁴C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により¹⁴C年代から曆年代に較正する必要がある。

ここでは、平城京跡第623次調査において出土した流木を対象として、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、土層の堆積年代について検討した。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc. の協力を得た。

2. 試料と方法

測定試料は、A発掘区の河川1出土の流木とC発掘区の河川2黒色腐植土層出土の流木の計2点である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸(HCl)により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム(NaOH)により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸(HCl)で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で80°Cで乾燥前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。
- こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲッ

表3 H J 第623次調査 調定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	A発掘区 河川1	木材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	C発掘区 河川2 黒色腐植土層	木材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

表4 H J 第623次調査 測定結果

試料名	測定No.	^{14}C 年代 ¹⁾ (Beta-) (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年 BP)	曆年代(西暦) ⁴⁾
No.1	276932	4040±50	-25.1	4040±50	交点: cal BC 2570 1 σ : cal BC 2620 ~ 2480 2 σ : cal BC 2850 ~ 2810, cal BC 2740 ~ 2730, cal BC 2690 ~ 2470
No.2	276933	1930±50	-26.9	1900±50	交点: cal AD 90 1 σ : cal AD 60 ~ 140 2 σ : cal AD 10 ~ 230

1) ^{14}C 年代測定値

試料の ^{14}C / ^{12}C 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例により Libby の5568年を使用した(実際の半減期は5730年)。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 ^{14}C / ^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比(^{13}C / ^{12}C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 ^{14}C / ^{12}C の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

トホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデムトロン 加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表1にまとめた。

3. 結果

年代測定の結果を表2に示す。

4. 所見

平城京跡第623次調査で出土した木材(流木)2点について、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定を行った。その結果、A発掘区河川1より出土した木材では4040±50年BP(2σの曆年代でBC2850~2810年、BC2740~2730年、BC2690~2470年)C発掘区河川2黒色腐植土層より出土した木材では1900±50年BP(同AD10~230年)の年代値が得られた。

(株式会社 古環境研究所)

4) 曆年代 Calendar Age

^{14}C 年代測定値を実際の年代値(曆年代)に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正する必要がある。曆年較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24050年までの換算が可能である(樹木年輪データはBC10450年まで)。

曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の曆年代値を意味する。1σ(68%確率)と2σ(95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の幅の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

参考文献

- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
 尾崎大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ、学術創成研究費
 弥生農耕の起源と東アジア 3-炭素年代測定による高精度編年
 体系の構築-, p.14-15.
 中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、
 古今書院, p.1-36.

2. 平城京跡第640次調査における自然科学分析

I. 放射性炭素年代測定

表1 HJ第640次調査 測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No. I	河川01底面	流木	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

* AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

表2 HJ第640次調査 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 ⁽¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ⁽²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ⁽³⁾ (年BP)	曆年代(西暦) ⁽⁴⁾
No. I	294787	2820±40	-26.9	2790±40	交点: cal BC 920 1σ: cal BC 1000~900 2σ: cal BC 1020~840

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例により Libby の 5568 年を使用した(実際の半減期は 5730 年)。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表示。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

(4) 曆年代 Calendar Age

^{14}C 年代測定値を実際の年代値(曆年代)に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。曆年較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線である IntCal04 では BC24050 年までの換算が可能である(樹木年輪データは BC10450 年まで)。

曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の曆年代値を意味する。1σ(68%確率)と2σ(95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

II. 植物遺体分析

1. はじめに

平城京跡第640次調査(左京四条四坊八・九坪)では、奈良時代以降の遺構面より約0.3~0.4m下において、埋土中に大量の植物遺体(木質・種実)を含む绳文時代晩期の河川01が検出された。そこで、河川01より採取された堆積物を対象に、花粉分析、種実同定、珪藻分析を総合した環境考古学分析を行い、生業に関わる植生と環境の復原を行うことになった。

2. 試料

分析試料は、河川01より採取された堆積物である。花粉分析と珪藻分析は、このうちの上層(2層)、中層(4層)、下層(6層)の試料3点、種実同定は、発掘担当者によって水洗選別された試料(上層、中層、下層、サブトレチ)4点と堆積物(1000cm)1点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 花粉分析

(1) 原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植

生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥食(1973)および中村(1980)をア

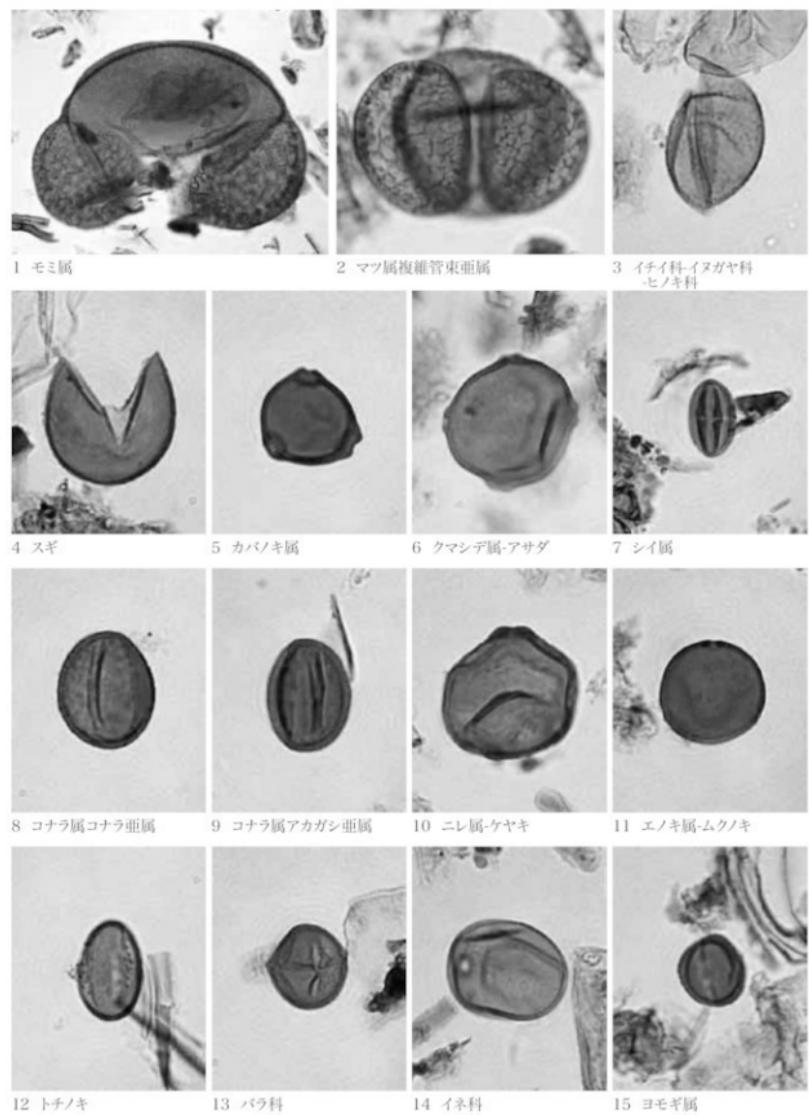


図1 HJ第640次調査 花粉顕微鏡写真

1 — 10 μ m、2-15 — 100 μ m

表3 H J 第640次調査 花粉分析結果

学名	分類群 和名	河川01		
		上層	中層	下層
ArboREAL pollen	樹木花粉			
<i>Podocarpus</i>	マキ属		2	1
<i>Abies</i>	モミ属	4	3	9
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	3	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属	1	2	3
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	11	5	19
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	1	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	16	9	14
<i>Juglans</i>	クルミ属	2	1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	1		1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	2	4
<i>Betula</i>	カバノキ属	5	3	2
<i>Corylus</i>	ハシバミ属		1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属—アサダ	4	10	3
<i>Castanea crenata</i>	クリ	3	1	6
<i>Castanopsis</i>	シイ属	42	27	53
<i>Fagus</i>	ブナ属	1		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	33	22	25
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	348*	367	392
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属—ケヤキ	1	1	1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属—ムクノキ	18	9	3
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ		1	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウウ属		1	
<i>Ilex</i>	モチノキ属	1		2
Celastraceae	ニシキギ科			2
<i>Acer</i>	カエデ属		5	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	4	4	3
<i>Sapindus</i>	ムクロジ属		9	2
<i>Vitis</i>	ブドウ属	1	1	
<i>Camellia</i>	ツバキ属		4	
<i>Clethra barbinervis</i>	リョウブ	1		
ArboREAL・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科—イラクサ科			1
Rosaceae	バラ科	7		3
Leguminosae	マメ科	5	1	2
Araliaceae	ウコギ科			1
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属—ガマズミ属	1	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科		6	7
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1		
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	2		
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ		2	
Apioidae	セリ植物科		1	2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1	4	8
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	單条溝胞子	4	6	14
Trilate type spore	三条溝胞子	1	1	2
ArboREAL pollen	樹木花粉	500	494	546
ArboREAL・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	13	2	7
Nonarboreal pollen	草本花粉	4	13	17
Total pollen	花粉總数	517	509	570
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	6.4 ×10 ⁴	4.5 ×10 ⁴	6.0 ×10 ⁴
Unknown pollen	未同定花粉	8	19	10
Fern spore	シダ植物胞子	5	7	16
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(-)	(-)

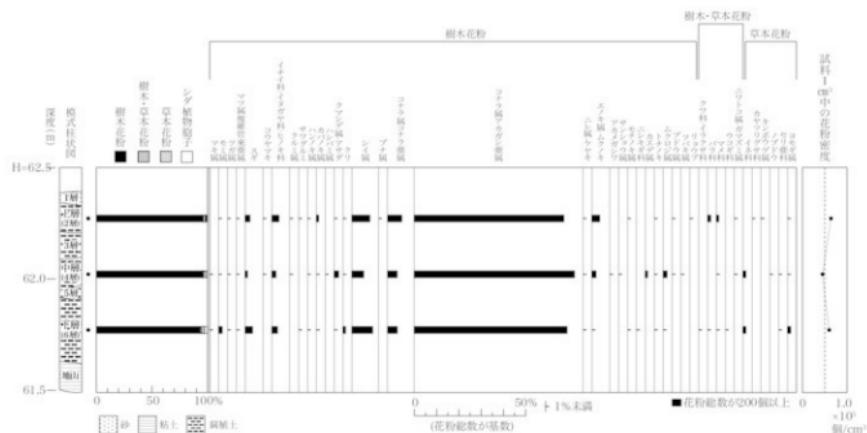


図2 H.J.第640次調査 花粉ダイアグラム

トランクとして、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(—)で結んで示す。イネ科については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定する。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

(3) 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草木花粉を含むもの5、草木花粉6、シダ植物胞子2形態の計43である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかつた。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、ツバキ属、リョウブ

[樹木花粉と草木花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属—ガマズミ属

[草木花粉]

イネ科、カヤツリグサ科、キンボウゲ属、ノブドウ、セリ亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

河川01の上層(2層)、中層(4層)、下層(6層)において、花粉構成と花粉組成の特徴を記載する(図1)。

3層準とも花粉構成、花粉組成とともに極めて類似した出現傾向を示す。樹木花粉が90%以上を占め、コナラ属アカガシ亜属が卓越し、シイ属、コナラ属コナラ亜属が伴われる。イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、スギが低率に出現し、他にエノキ属—ムクノキ、トチノキ、ムクロジ、クルミ属などが伴われる。草本はイネ科、ヨモギ属が低率に出現する。

(4) 花粉分析から推定される植生と環境

河川01周辺には、コナラ属アカガシ亜属を主要構成要素とする照葉樹林が分布していたとみなされ、他にシイ属、コナラ属コナラ亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科も構成要素として分布していた。また、エノキ属—ムクノキ、トチノキ、ムクロジ、クルミ属などは河辺の湿潤地や適調地に生育する樹木であり、これらが川沿いに分布していたと考えられる。草本は極めて少ないが、イネ科やヨモギ属が河川沿いの林縁などに分布していたと推定される。

4. 種実同定

(1) 原理

大型植物遺体の中心となる種子や果実は、比較的強靭なものが多く堆積物中に残存することが多い。そこで、堆積物などから種実等を検出し、その種類や構成を調べることで過去の植生や環境、さらに栽培植物を明らかにすることができます。また、出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができます。

(2) 方法

水洗・選別済の試料は、肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。堆積物については、以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

1) 試料 1000cm³に水を加え放置し、泥化

2) 搅拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、まず 1000 cm³を 2.0 mm の篩で水洗選別後、このうちの 200 cm³を 0.25 mm の篩で水洗選別

3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

(3) 結果

1) 分類群

樹木 13、樹木・草本を含むもの 1、草本 1 の計 15 分類群が同定された。学名、和名および粒数を表 2 に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴と写真に示したものとのサイズを記載する。

(樹木)

カヤ *Torreya nucifera* S. et Z. 種子(破片) イチイ科

茶褐色で長卵形を呈す。表面には縱方向の隆起が走る。断面は円形である。

ヤマモモ *Myrica rubra* S. et Z. 核 ヤマモモ科
長さ × 幅 : 8.25 mm × 7.24 mm

茶褐色で梢円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核(完形・半形・破片) クルミ科 長さ × 幅 : 32.68 mm × 24.62 mm

茶褐色で円形～梢円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinns* 肝斗 ブナ科
長さ × 幅 : 12.20 mm × 12.63 mm

肝斗は黒褐色で椀状を呈し、鱗片が覆瓦状に並ぶ。肝斗壁が上端ほど薄くなり、先端がやや内側に向く。

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 堅果(完形・破片)・

幼果・殻斗 ブナ科 長さ × 幅 : 17.83 mm × 11.90 mm、
16.93 mm × 10.96 mm

堅果は黒褐色で梢円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。花柱の先端は直上かやや内側に向き、肝斗壁が厚い。

肝斗は輪状紋をもち基部から先端に向かって直線的な椀状を呈する。

ブナ科 Fagaceae 堅果(破片)

黒褐色で梢円形を呈し、表面は平滑である。この分類群はつき部、肝斗が欠落し破片のため、科レベルの同定までである。

ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch. 核 ニレ科
長さ × 幅 : 6.57 mm × 5.97 mm

淡褐色で広倒卵形を呈し、一側面は狭倒卵形で厚く、他方は棱になって薄い。

サクラ属サクラ節 *Prunus sect. Pseudocerasus* 核
(完形・破片) バラ科 長さ × 幅 : 5.98 mm × 4.85 mm

黄褐色で梢円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

フジ *Wisteria floribunda* 豆果(破片) マメ科 長さ
× 幅 : 28.85 mm × 8.85 mm

狭倒卵形で偏平を呈す。ビロード状に短毛を密生し、果皮は厚い。破片が 2 個同定されているが、同一個体である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子(完形・破片)・果実(完形・破片)・幼果(破片) トチノキ科
長さ × 幅 : 34.58 mm × 37.82 mm (種子)、49.68 mm × 39.70 mm (果実)

種子は梢円形を呈し、黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

果実は茶褐色で三片に分かれる。表面はざらざらで、やや大きい丸い突起がまばらにあり、その間に小さく低い突起が分布する。

幼果は茶褐色で倒卵形を呈す。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 種子(破片)
ムクロジ科 長さ × 幅 × 厚さ : 13.47 mm × 15.33 mm × 13.25 mm

灰黒色で円球形を呈し、線形のヘソがみられる。全て破片である。

ヤツツバキ *Camellia japonica* L. 種子・果実(完形・破片) ツバキ科 長さ × 幅 : 36.19 mm × 23.43 mm

種子は黒色で三角状梢円形を呈し、一端に点状のヘソがある。

果実は三片に分かれたものである。黒色で梢円形を呈し、両端がややとがる。

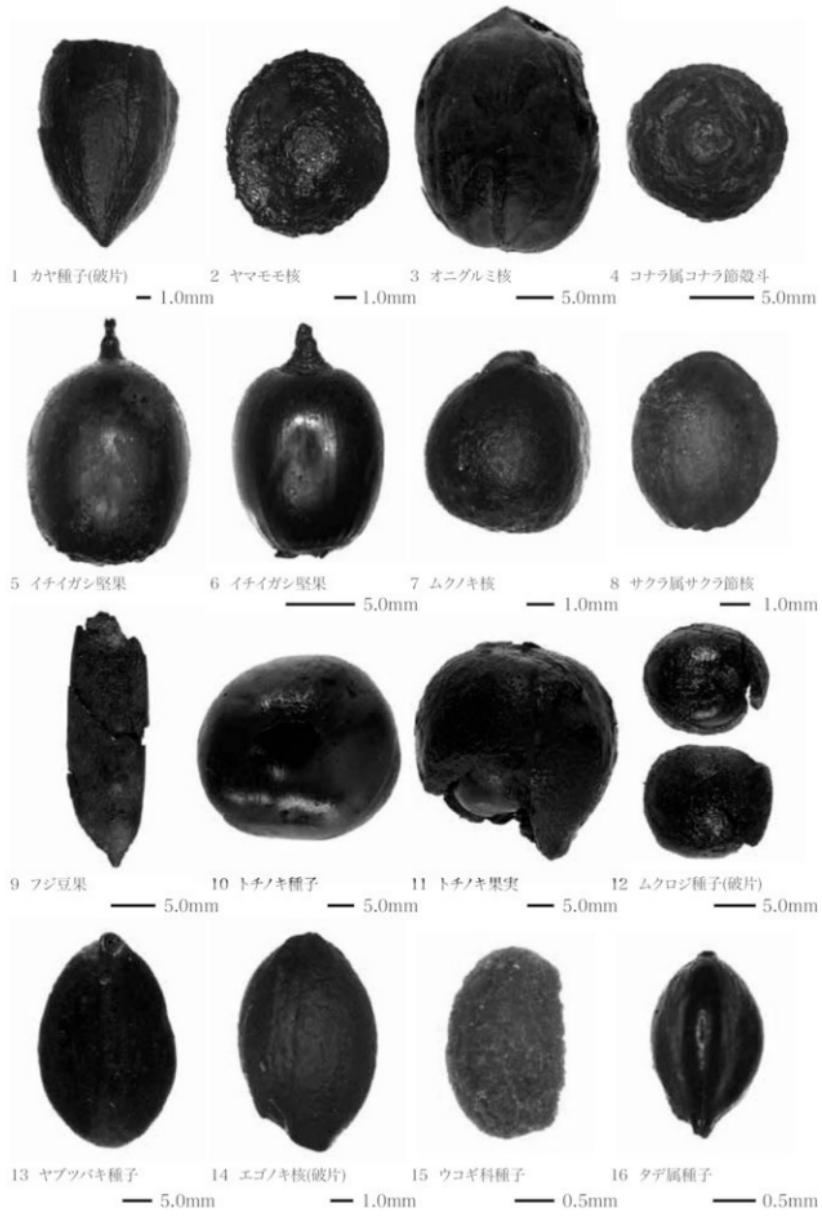


図3 HJ第640次調査 種実顕微鏡写真

表4 H J 第640次調査 種実同定結果

学名	和名	部位	河川01(水洗選別済み)				河川01(堆積物) 1000cm中 200cm中
			上層	中層	下層	サブトレンド	
Arbor	樹木						
<i>Torreya nucifera</i> S. et Z.	カヤ	種子(破片)				1	1
<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核					
<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr	オニグルミ	核 (半形) (破片)		1	1	6	
<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	殻斗	1				1
<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	堅果 (破片)	7	8	11	11	5
		幼果	16	25	18	17	11
		殻斗	3			2	8
		堅果(破片)	2	3	5	1	33
Fagaceae	ブナ科	堅果	1	4	2	1	1
<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ	核					4
<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>	サクラ属サクラ節	核 (破片)					1
<i>Wisteria floribunda</i>	フジ	豆果(破片)	2				
<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ	種子 (破片)	2	3	12	2	
		果実	15	10	41	17	2
		(破片)	1		1		
		幼果(破片)	9		31	12	
		種子(破片)	1		5	2	
<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ						
<i>Camellia japonica</i> L.	ヤツツバキ	種子				3	
		果実				1	
<i>Styrax japonica</i> S. et Z.	エゴノキ	核 (破片)	1	1			
Arbor-Herb	樹木・草本						1
Araliaceae	ウコギ科	種子					
Herb							
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実					1
Total	合計		59	57	129	79	68
Unknown	不明	幼果				2	
							(2.0mm目) (0.25mm目)

エゴノキ *Styrax japonica* S. et Z. 核(破片) エゴノキ科 長さ×幅: 9.53mm×6.06 mm

黒褐色で梢円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。

(樹木・草本を含むもの)

ウコギ科 Araliaceae 種子 長さ×幅: 2.43mm×1.53mm

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側にはほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が2~3本走る。表面はざらつく。

[草本]

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科 長さ×幅: 2.18mm×1.31mm

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

(4) 種実群集の特徴

1) 河川01(水洗選別済み)

・上層、中層、下層

下層では、トチノキが90点と最も多く、イチイガシ、オニグルミ、ブナ科が各2点、ムクロジ1点である。中層では、イチイガシが36点と多くなり、トチノキ14点、

ブナ科4点、コナラ属コナラ亜属、ムクロジ、エゴノキが各1点と続く。上層では、イチイガシが28点、トチノキが27点と多く、フジ2点、ブナ科、エゴノキ各1点である。

・サブトレンド

トチノキが33点と最も多く、次いでイチイガシ31点、オニグルミ8点、ヤツツバキ5点、カヤ、ブナ科各1点である。

2) 河川01(堆積物)

・2.0mm目篩(堆積物 1000cm水洗選別)

イチイガシが57点と最も多く、ムクノキ4点、サクラ属サクラ節2点、トチノキ2点、ヤマモモ、オニグルミ、ブナ科が各1点である。

・0.25mm目篩(堆積物 200cm水洗選別)

樹木・草本を含む種実のウコギ科1、草本種実のタデ属が1点検出された。

(5) 種実群集から推定される植生と環境

平城京跡第640次調査(左京四条八坊八・九坪)河川01(縄文時代晚期)において種実同定を行った。その結果、カヤ、ヤマモモ、オニグルミ、コナラ属コナラ亜属、イチイガシ、ブナ科、ムクノキ、サクラ属サクラ

節、フジ、トチノキ、ムクロジ、ヤブツバキ、エゴノキの樹木種実、ウコギ科、タデ属の草本ないし樹木・草本を含む分類群が検出・同定された。数量ではイチイガシ、トチノキが多い。

イチイガシは照葉樹林の主要構成要素であり、他にヤブツバキも照葉樹である。トチノキは河辺林や湿地林を形成し、オニグルミ、ムクロジ、フジ、エゴノキは河川沿いに生育し、ムクノキは適潤地を好む。こうしたことから、周囲にはイチイガシを主とする照葉樹林が分布し、河辺にはトチノキの河辺林が分布し、オニグルミなどが川沿いに生育していたと推定される。草本はほとんど検出されず、周囲は森林状態であったとみなされる。

下部の下層や河川 01（堆積物）ではイチイガシが多いのに対し、上部の中層や上層ではトチノキが多くなっている。このことに関しては、上部では低湿な環境となりトチノキ林が拡大したか、水流や人為的投棄によってトチノキが集積したことなどが考えられる。ただし、トチノキの種子や果実は大きくて目立つことから、試料採取の際に人為的影響が働いた可能性もある。なお、イチイガシ、トチノキ、オニグルミ、カヤは優良な食料になる。

5. 珪藻分析

（1）原理

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

（2）方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm³を採量
 - 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 暫放置
 - 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
 - 4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥
 - 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート製作
 - 6) 検鏡、計数
- 検鏡は、生物顕微鏡によって 600～1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

（3）結果

1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）84 分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端 2 個につき 1 個と数えた。表 3 に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図 2 に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe(1974) や渡辺 (2005) 等の記載による。陸生珪藻は小杉 (1986)、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉 (1988)、淡水生種は安藤 (1990) による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes brevipes, *Achnanthes exigua*, *Achnanthes lanceolata*, *Achnanthes rupestris*, *Amphora copulata*, *Amphora montana*, *Amphora pediculus*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella sinuata*, *Cymbella tumida*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia minor*, *Eunotia pectinalis*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema affine*, *Gomphonema augur*, *Gomphonema clevei*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema spp.*, *Navicula contenta*, *Navicula cryptotenella*, *Navicula elginensis*, *Navicula gallica*, *Navicula gallica v. perpusilla*, *Navicula goeppertiana*, *Navicula kotschy*, *Navicula laevissima*, *Navicula pupula*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia microstauron*, *Stauroneis smithii*, *Synedra ulna*

2) 珪藻群集の特徴

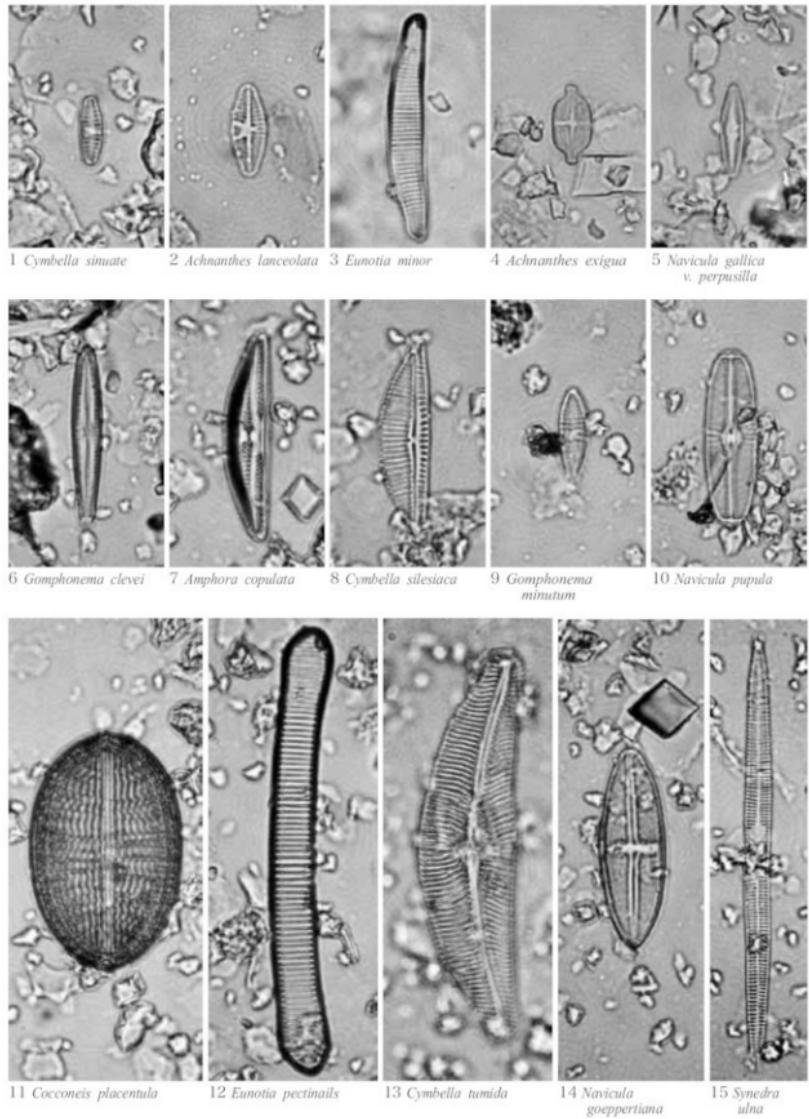
珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する（図 2）。

・下層（6 層）、中層（4 層）

珪藻構成・組成とも極めて類似した出現傾向を示す。真・好流水性種が約 30%～40% を占め、流水不定性種が約 40% を占める。真・好流水性種の *Achnanthes lanceolata*、沼澤湿地付着生環境指標種群でもある *Cocconeis placentula* が高率で、他に *Cymbella sinuata*、*Gomphonema parvulum* などのがやや多い。流水不定性種では、*Achnanthes exigua*、*Gomphonema minutum*、*Achnanthes rupestris*、*Amphora copulata* などが出現する。陸生珪藻では *Navicula gallica v. perpusilla*、真・好止水性種では *Eunotia minor* が比較的多い。

・上層（2 層）

真・好流水性種が半減し、真・好止水性種が約 35%



1-14 ————— 10 μ m, 15 ————— 10 μ m

圖4 H J 第640次調查 河川01 珪藻顯微鏡寫真

表5 HJ第640次調査 河川01 珪藻分析結果

分類群	河川01				
	上層	中層	下層		
自殖性種(淡水生種)					
<i>Achnanthus brevispes</i>	4	2	4		
<i>Achnanthus exigua</i>	18	25			
<i>Achnanthus hungarica</i>	2	1			
<i>Achnanthus inflata</i>	1	1	1		
<i>Achnanthus lanceolata</i>	43	39			
<i>Achnanthus levanderi</i>			4		
<i>Achnanthus minutissima</i>	4				
<i>Achnanthus rapensisoides</i>	5	13			
<i>Achnanthus spp.</i>	2	3			
<i>Amphipleura lindheimeri</i>	1	1	1		
<i>Amphora copulata</i>	9	9	6		
<i>Amphora montana</i>		6	5		
<i>Amphora ovalis</i>	3				
<i>Amphora pediculus</i>		2	5		
<i>Caloneis siliqua</i>		1			
<i>Cocconeis placentula</i>	34	43	36		
<i>Cymbella amphioxys</i>	2				
<i>Cymbella cuspidata</i>		1			
<i>Cymbella minuta</i>		1			
<i>Cymbella naviculiformis</i>		1	1		
<i>Cymbella silicula</i>	12	4	2		
<i>Cymbella sinuata</i>	1	19	9		
<i>Cymbella tumida</i>	14	5	6		
<i>Cymbella turgidula</i>		1			
<i>Diatomella baileyana</i>			2		
<i>Diplosira elliptica</i>			1		
<i>Diplosira finica</i>	1	1			
<i>Eunotia bilunaris</i>		2	7		
<i>Eunotia minor</i>	19	21	7		
<i>Eunotia monodonta</i>		2			
<i>Eunotia pectinialis</i>	12		1		
<i>Eunotia praeusta</i>	1				
<i>Eunotia serra</i>			1		
<i>Fragilaria brevistriata</i>			1		
<i>Fragilaria capucina</i>	2	11	3		
<i>Fragilaria vulgaris</i>		4	1		
<i>Gomphonema acuminatum</i>	1				
<i>Gomphonema affine</i>	16				
<i>Gomphonema angustum</i>		1	1		
<i>Gomphonema angustum</i>	4	3	1		
<i>Gomphonema elevatum</i>	14	9	2		
<i>Gomphonema consecutor</i>	3				
<i>Gomphonema gracile</i>		3	1		
	3	3			
<i>Gomphonema grovei</i>				3	1
<i>Gomphonema minutum</i>				10	9
<i>Gomphonema olivaceum</i>				3	2
<i>Gomphonema parvulum</i>				6	10
<i>Gomphonema punctatum</i>				5	1
<i>Gyrosigma spp.</i>				1	1
<i>Meridion circulare v. constrictum(M.C.C.)</i>					1
<i>Novicula confervacea</i>					1
<i>Novicula contenta</i>					3
<i>Novicula cryptostigma</i>					20
<i>Novicula cryptotenella</i>					4
<i>Novicula elginiensis</i>					5
<i>Novicula gallica</i>				3	6
<i>Novicula gallica v. purpurella</i>					18
<i>Novicula gosperiana</i>				43	7
<i>Novicula ignota v. ignota</i>					1
<i>Novicula jangii</i>					6
<i>Novicula kotschyii</i>					9
<i>Novicula laevissima</i>				1	1
<i>Novicula mutica</i>				1	2
<i>Novicula muticoides</i>					2
<i>Novicula placenta</i>					4
<i>Novicula pupula</i>					2
<i>Novicula seminudum</i>					10
<i>Novicula veneta</i>					2
<i>Novicula spp.</i>					4
<i>Neidium affine</i>					3
<i>Neidium amplifolium</i>					2
<i>Pinnularia appendiculata</i>					1
<i>Pinnularia gibba</i>				14	1
<i>Pinnularia microstauron</i>				5	1
<i>Pinnularia nodosa</i>					1
<i>Pinnularia schoederii</i>					1
<i>Pinnularia viridis</i>				3	3
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>				1	2
<i>Rhopalodia gibberula</i>					1
<i>Stauroteres phoenicenteron</i>					1
<i>Stauroteres smithii</i>					3
<i>Surrella tenera</i>					4
<i>Syndra ulna</i>				69	2
合計				330	336
未同定				7	11
破片				241	64
試料1 ml中の細胞密度				1.7	1.9
$\times 10^5$				$\times 10^5$	$\times 10^5$
形態頻発率(%)				58.3	84.4

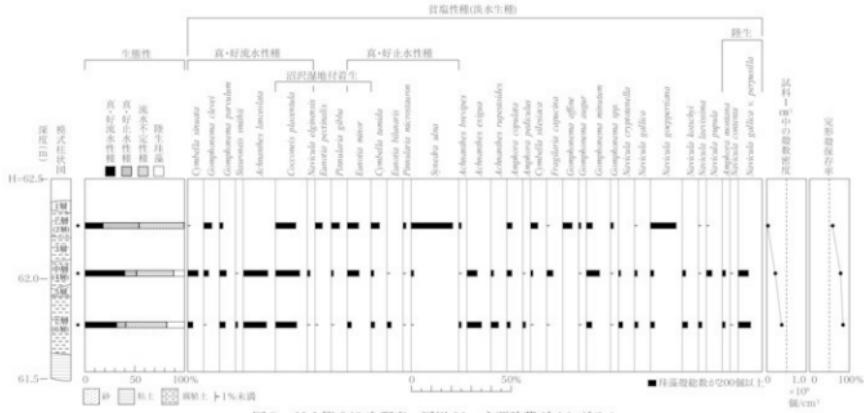


図5 HJ第640次調査 河川01 主要珪藻ダイヤグラム

を占めるようになる。好止水性種の *Synedra ulna* が優占し、*Eunotia minor*、*Cymbella tumida* が伴われる。沼沢湿地付着生環境指標種群でもある *Coccconeis placentula*、流水不定性種の *Navicula goeppertiana*、*Gomphonema affine*、*Cymbella silesiaca*、*Gomphonema minutum* などが出る。下位で優占した真・好流水性種の *Achnanthes lanceolata*、*Cymbella sinuata* はほとんどみられなくなる。

(4) 珪藻分析から推定される堆積環境

下部より下層（6層）、中層（4層）は、中下流域の小河川や湧水域の石などに付着して生育する *Achnanthes lanceolata*、河岸や湖岸の水草や石に付着して生育する *Coccconeis placentula* が多く、真・好流水性種と流水不定性種で占められる。*Coccconeis placentula* や *Eunotia minor* は、沼澤地付着生種群でもある。のことから、下層（6層）、中層（4層）は中下流域の小河川の河岸の環境が示唆され、浅い流水域を呈していた。

上層（2層）になると、好止水性種の *Synedra ulna* が優占し、止水性種が多くなり、沼沢湿地付着生環境指標種群も多くなり、中下層で高率であった *Achnanthes lanceolata* などはほとんどみられなくなる。のことから、河辺の浅い沼沢地の環境が示唆される。

6.まとめ

平城京跡第640次調査（左京四条四坊八・九坪）の下層において、花粉分析、珪藻分析、種実同定をあわせて行い、植生ならびに堆積環境について検討した。その結果、縄文時代晩期の河川01の時期は、周囲はイチイガシを主とする照葉樹林が分布し、照葉樹林に覆われていた。シイ属・ヤブツバキ、コナラ属・コナラ・垂柳、スギ、イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科も構成要素として分布していた。河川01治いにはトチノキやオニグルミ、ムクロジ、フジ属、エゴノキ、エノキ属・ムクノキが生育していた。トチノキは、種実が比較的目立って検出されるが、花粉は少ない。河川01治いにのみ生育し、風媒花であるイチイガシなどが照葉樹林の構成要素として圧倒的に多かったと考えられる。イチイガシ、トチノキ、オニグルミ、カヤは優良な食料になる。また、河川01の堆積環境は、下層（6層）と中層（4層）では中下流域の小河川の浅い河岸であり、上層（2層）になると河辺の浅い沼沢地の環境へと変化した。

参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本 第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262、
鳥倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。

- 中村純（1967）花粉分析、古今書院、p.82-102、
中村純（1980）日本花粉の標微、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p、
笠原安夫（1985）日本雜草圖說、養賢堂、494p、
南木體彦（1992）低湿地遺跡の種実、月刊考古学ジャーナルNo.355、ニューサイエンス社、p.18-22、
南木體彦（1993）策・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283、
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食、雄山閣、187p、
Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ologische Untersuchungen über die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Standa-Expedition. Arch.Hydrobiol.Suppl.15,p.131-506.
Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research.Center.
K. Krammer + H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae , 1 - 4.
Asai,K.& Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用、東北地理、42, p.73-88、
伊藤良永・塙内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用、珪藻学会誌、6,p.23-45、
小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—、植生史研究、第1号、植生史研究会、p.29-44、
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用、第四紀研究、27, p. 1-20.

3. 西大寺旧境内第28次調査における放射性炭素年代測定

I. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(¹⁴C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の¹⁴C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により¹⁴C年代から曆年代に較正する必要がある。

ここでは、西大寺旧境内第28-1次調査地、同第28-2次調査地において出土した流木を対象に、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、土層の堆積年代について検討した。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc. の協力を得た。

II. 試料と方法

測定試料は、西大寺旧境内第28-1次調査地で出土した流木2点(サンプルA、B)、同第28-2次調査地で出土した流木2点(ED-47サンプルA、EI-47サンプルB)の計4点である。試料は超音波洗浄、酸-アルカリ-酸洗浄(AAA処理)で調製後、加速器質量分析計を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分

別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

試料の詳細、調製データを表1に示す。

III. 結果

年代測定結果を表2に示す。

IV. 所見

西大寺旧境内第28-1次調査地、第28-2次調査地において出土した流木を対象に、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定を行った。その結果、第28-1次調査地のサンプルAは、2940±40年BP(2σの曆年代でBC 1280～1010年)、サンプルBは、3170±40年BP(同BC 1510～1390年)、第28-2次調査地のサンプルAは、2960±40年BP(同BC 1310～1040年)、サンプルBは、2960±40年BP(同BC 1310～1040年)の年代値が得られた。

参考文献

- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
 尼島大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ、学術創成研究費
 弥生農耕の起源と東アジア3-炭素年代測定による高精度編年
 体系の構築一、p.14-15.
 中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定入門、
 古今書院、p.1-36.

表1 SD第28次調査 測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SD28-1次、サンプルA	流木	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	SD28-1次、サンプルB	流木	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.3	SD28-2次、サンプルA	流木	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.4	SD28-2次、サンプルB	流木	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

* AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

表2 SD第28次調査 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C年代 ³⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}^{(2)}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 ³⁾ (年BP)	曆年代(西暦) ⁴⁾
No.1	294783	2960±40	-26.3	2940±40	交点: cal BC 1130 1 σ : cal BC 1250～1240 cal BC 1220～1080 2 σ : cal BC 1280～1010
No.2	294784	3190±40	-26.4	3170±40	交点: cal BC 1440 1 σ : cal BC 1490～1410 2 σ : cal BC 1510～1390
No.3	294785	2990±40	-27.0	2960±40	交点: cal BC 1200 1 σ : cal BC 1260～1120 2 σ : cal BC 1310～1040
No.4	294786	2970±40	-25.9	2960±40	交点: cal BC 1200 1 σ : cal BC 1260～1120 2 σ : cal BC 1310～1040

1) ¹⁴C年代測定値 本書P 137、註1)と同じ。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値 本書P 137、註2)と同じ。

3) 補正¹⁴C年代値 本書P 137、註3)と同じ。

4) 曆年代 Calendar Age 本書P 137、註4)と同じ。

4. 菅原寺跡第6次調査における放射性炭素年代測定

I.はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨・貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約6万年前までの年代測定が可能である。

菅原寺跡第6次調査では、縄文時代晩期の旧河川と縄文時代のものとみられる土坑や小土坑が検出された。ここでは、これら土坑や小土坑の時期を推定すること目的に、遺構上を覆う黄白色粘土層中の炭化物を対象に、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

II. 試料と方法

測定試料は、西発掘区北壁において黄白色粘土層より検出された炭化物1点である。試料の情報、調製データを表1に示す。試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

III. 測定結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行つために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

表1 K K K 第6次調査 測定試料及び処理

試料名	試料番号	対象物	前処理・調整	測定法
No.1	西トレ KQ-28	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

* AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

表2 K K K 第6次調査 測定結果

試料名	測定No (PED)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年 BP)	^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦) 1σ (68.2% 確率)	2σ (95.4% 確率)
No.1	17213	-29.18±0.14	3491±22	3490±20	BC1880-1760 (68.2%)	BC1890-1740 (95.4%)

BP: Before Physics (Present), BC: 紀元前

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出すことである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.1 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

IV. 所見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、喜光寺跡境内第6次調査の黄白色粘土層から出土した炭化物は、 3491 ± 20 年 BP (2σ の暦年代で BC1890 ~ 1740 年) の年代値が得られた。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Paul J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP, Radiocarbon 46,p.1029-1058.
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, p.3-20.

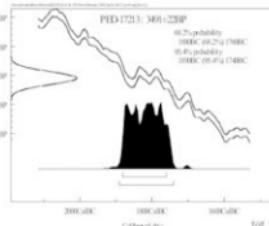


図1 暦年較正結果

第3章 平成22年度 保存活用事業報告

平成 22（2010）年度埋蔵文化財保存活用事業報告

I. 展示

A 常設展示	場 所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー
対 象：一般	内 容：平成 21 年度に実施した西大寺旧境内第 25 次調査の成果を紹介した。西大寺旧境内を区画したとみられる東西方向の溝埋土を洗浄し出土した遺物の展示を行った。
会 期：平成 22 年 4 月 1 日（木）～10 月 22 日（金） (147 日間)	観覧者数：525 名
場 所：埋蔵文化財調査センター展示室	そ の 他：・案内を「しみんだより」7 月号・奈良市役所のホームページに掲載。 ・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。 ・展示リーフレットの作成。 ・事前に報道機関に資料を配布。
趣 旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて理解する。	②春季速報展示
内 容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。	会 期：平成 23 年 3 月 1 日（火）～3 月 31 日（木） (23 日間)
観覧者数：1,529 名	内 容：平城京左京五条四坊十五・十六坪では、平成 22 年度までに坪内の調査が広範囲に実施され、坪全体の様子を知る上で様々な成果が得られた。それぞれの坪についてその成果を紹介。
B 平成 22 年度秋季特別展 平城遷都 1300 年記念 特別展「平城の瓦－平城京出土瓦展－」の開催	観覧者数：356 名
対 象：一般	そ の 他：・案内を「しみんだより」3 月号・奈良市役所のホームページに掲載。 ・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。 ・展示リーフレットの作成。 ・事前に報道機関に資料を配布。
会 期：平成 22 年 11 月 1 日（月）～12 月 28 日（火） (42 日間)	D 平城京の出土品展
場 所：埋蔵文化財調査センター展示室・ロビー	対 象：一般（市役所来庁者）
趣 旨：発掘調査で出土した瓦類を再整理し、平城遷都以前から江戸時代まで長い歴史を持つ瓦から奈良の歴史を概観する。	会 期：平城遷都 1300 年を記念し、市が保管する平城京からの出土品を、月ごとに展示品を替えて展示。平城京と埋蔵文化財について関心と理解を高めてもらう。
観覧者数：1,137 名	場 所：市庁舎 1 階ホール展示ケース
そ の 他：・案内を「しみんだより」11 月号・奈良市役所のホームページに掲載。 ・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。 ・展示解説用パンフレットの作成。 ・展示解説。 ・事前に報道機関に資料を配布。 ・埋蔵文化財講演会を実施。	内 容：4 月 宝相華のデザイン 5 月 文字と鏡 6 月 まじないの道具 7 月 鏡とアクセサリー 8 月 奈良時代の食器 9 月 井戸とつるべ 10 月 下駄 11 月 奈良時代の貨幣 12 月 海外との交流 1 月 奈良町を掘る I
平成 22 年 11 月 20 日（土）13:00 ～ 16:30 参加者 45 名	会 場：場 所：埋蔵文化財調査センター講座室 森 郁夫「宮の瓦と京の瓦」 原田憲二郎「平城京出土瓦あれこれ －列品解説」
C 発掘調査速報展示（2 回）の開催	会 期：平成 22 年 4 月 1 日（木）～ 平成 23 年 3 月 31 日（火）（250 日間）
対 象：一般	内 容：4 月 宝相華のデザイン 5 月 文字と鏡 6 月 まじないの道具 7 月 鏡とアクセサリー 8 月 奈良時代の食器 9 月 井戸とつるべ 10 月 下駄 11 月 奈良時代の貨幣 12 月 海外との交流 1 月 奈良町を掘る I
趣 旨：発掘調査の最新の成果を夏と春の 2 回に分けて、展示・紹介する。	①夏季速報展示
会 期：平成 22 年 7 月 5 日（月）～8 月 31 日（火） (合計 42 日間)	会 期：平成 22 年 7 月 5 日（月）～8 月 31 日（火） (合計 42 日間)

2月 奈良町を掘るII 3月 奈良町を掘るIII

その他：・案内を奈良市役所のホームページに掲載

E 年間観覧者数

3,574名(250日間)。累計22,143名。月平均297名。

月、男女、居住地、年齢別は表1のとおり。

表1 年間観覧者の内訳

月別：	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	225	182	101	205	322	261	287	792	345	237	261	356

居住地別：	N	奈良県内	近畿圏内	近畿圏外	男女別：	男	女
	132	61	44	40		2,483	1,091

年齢別：	～9歳	10～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳～	学生
	6	13	18	19	29	43	92	63	29

2. 発掘調査現地説明会の開催・施設見学の受け入れ

A 発掘調査現地説明会の開催

(1) 史跡大安寺旧境内 東塔の調査 (東九条町)

対象：地元住民及び一般

期日：平成22年8月28日(土)

会場：調査地現場

参加者数：100名

その他：・奈良市役所のホームページに掲載

・説明会資料の作成、配布

(2) 平城京左京五条四坊十六坪の調査 (大森町)

対象：地元住民及び一般

期日：平成22年10月17日(日)

会場：調査地現場

参加者数：200名

その他：・奈良市役所のホームページに掲載

・説明会資料の作成、配布

(3) 赤田横穴墓群の調査 (赤田町)

対象：地元住民及び一般

期日：平成23年3月13日(日)

会場：調査地現場

参加者数：1,000名

その他：・奈良市役所のホームページに掲載

・説明会資料の作成、配布

B 埋蔵文化財調査センター施設見学

(1)

対象：大安寺西小学校6年生 99名

期日：平成22年5月7日(金)

(2)

対象：小松市町内会連合会 20名

期日：平成22年7月15日(木)

(3)

対象：国学院大学学生及び院生 16名

期日：平成22年11月1日(月)

(4)

対象：京都大学大学院生 15名

期日：平成22年11月5日(金)

(5)

対象：愛知県岡崎市立福岡小学校6年生 36名

期日：平成22年11月24日(水)

(6)

対象：宮崎県教育委員会職員 1名

期日：平成22年12月3日(金)



赤田横穴墓群 発掘調査現地説明会



平城京左京五条四坊十六坪 発掘調査現地説明会

3. 講演会・教室の開催

A 「埋蔵文化財発掘調査報告会」の開催

対象：一般

期日：平成 22 年 3 月 19 日（土）

内容：平成 22 年度に埋蔵文化財調査センターが行った主な発掘調査の中から、春季速報展示にあわせて平城京左京五条四坊十五坪と十六坪について調査成果の報告を行った。

・宮崎正裕「平城京左京五条四坊十五坪の調査」

・中島和彦「平城京左京五条四坊十六坪の調査」

会場：埋蔵文化財調査センター講座室

趣旨：平成 22 年度に実施した調査について、職員が図や写真などを使用して報告する。

参加者数：48 名

その他：・募集案内を「しみんだより」2 月号・奈良市役所のホームページに掲載。
 ・春季速報展ポスター・チラシに掲載。
 ・事前に報道機関に資料を配布。

B 「夏休み親子考古学体験」の開催

対象：小学 4 年生以上の児童とその保護者

期日：平成 22 年 8 月 4 日（水）

4. 市民考古サポーター養成講座

A Stage 1 受講生の募集

対象：一般

期日：平成 22 年 7 月 8 日（木）～

平成 23 年 3 月 9 日（水）

毎月 1～2 回、全 13 回（表 2）

内容：埋蔵文化財調査センターがおこなう発掘調査、

表 2 市民考古サポータ養成講座 Stage1 の日程一覧

	日時	講座名
第1回	7月8日	開講式・オリエンテーション 考古学とは何か
第2回	7月21日	石器のはなし・縄文時代の基礎知識
第3回	8月11日	弥生時代のとらえ方・古墳のはなし
第4回	9月2日	佐紀古墳群を歩く（実習）
第5回	9月15日	平城京
第6回	10月13日	宮都の土器・古代の瓦
第7回	10月20日	平城宮跡をみる（実習）
第8回	11月11日	発掘作業の流れ
第9回	1月12日	発掘規範をみる（実習）
第10回	12月1日 8日	舞台裏をみる (出土品整理作業)
第11回	1月19日	拓本のとり方（実習）
第12回	2月9日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第13回	3月9日	土器類の分類整理（実習）・閉講式

内容：クイズに答えながら埋蔵文化財調査センターの展示室を見学後、瓦の拓本を体験する。

会場：埋蔵文化財調査センター展示室・講座室

趣旨：展示室を見学することで、奈良の歴史を知つてもらい、本物の遺物に触れることで、考古学に親しんでもらう。

参加者数：6 名

その他：・募集案内を「しみんだより」8 月号・奈良市役所のホームページに掲載。



夏休み親子考古学体験

出土遺物の整理、展示会などの活動支援ボランティアの養成講座。職員が講師をつとめる講座・実習のプログラムにより、将来の活動に必要な基本的知識・技術を身につける。

募集人員：25 名

その他：・案内を「しみんだより」6 月号・奈良市役所のホームページに掲載。

・募集用のチラシを作成・配布。



市民考古サポーター養成講座 Stage 1

B Stage 2 の活動

講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対 象：平成 21 年度の受講修了者 25 名

登録人員：22 名



市民考古サポーター養成講座 Stage 2

活動開始：平成 23 年 5 月～

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘現場作業補助などに参画。

月平均活動延べ人数：105 名



市民考古サポーター養成講座 Stage 2

5. 体験学習・実習の受け入れ

A 市立高校体験学習

(1)

対 象：一条高校人文科学科 2 年生 39 名

期 日：平成 22 年 8 月 19 日（火）～25 日（水）

場 所：平城京跡発掘調査現場（奈良市大森町）

内 容：発掘調査の体験実習

(2)

対 象：一条高校人文科学科 1 年生 40 名

期 日：平成 22 年 9 月 28 日（火）

場 所：奈良市埋蔵文化財調査センター

内 容：出土遺物の整理実習（洗浄・注記・拓本）

B 中学校職場体験学習

(1)

対 象：伏見中学校 2 年生 男子 2 名・女子 1 名

期 日：平成 22 年 7 月 28 日（水）～29 日（木）

場 所：埋蔵文化財調査センター・昔の暮らし館

内 容：障子の貼り替え・遺物洗浄

(2)

対 象：春日中学校 男子 3 名

期 日：平成 22 年 9 月 7 日（火）～9 日（木）

場 所：埋蔵文化財調査センター

内 容：遺物洗浄・注記・拓本

(3)

対 象：田原中学校 男子 2 名・女子 1 名

期 日：平成 22 年 10 月 6 日（水）～8 日（金）

場 所：埋蔵文化財調査センター

内 容：遺物洗浄・注記・拓本・ポスター・チラシ発送準備

(4)

対 象：京西中学校 男子 1 名

期 日：平成 23 年 1 月 18 日（火）～20 日（木）

場 所：埋蔵文化財調査センター

内 容：遺物洗浄・講座聴講・注記・拓本

(5)

対 象：不登校児童生徒交流事業 女子 1 名

期 日：平成 23 年 1 月 26 日（水）～28 日（金）

場 所：埋蔵文化財調査センター

内 容：遺物洗浄・拓本



市立高校体験学習・発掘現場実習

6. 文化財学習キット（ドキ土器キット）の貸出

- 対 象：奈良市内の小中学校 (2)
- 趣 旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校などへ貸し出し、社会学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらう。
- また、埋蔵文化財調査センターを見学する小中学生・自主活動グループに「触れることができる文化財」として使用した。
- 場 所：朱雀小学校
- 期 日：平成 22 年 5 月 10 日（月）～14 日（金）
- 資 料：④
- (3)
- 場 所：あやめ池小学校
- 期 日：平成 22 年 5 月 17 日（月）～21 日（金）
- 資 料：④・⑤・⑥
- (4)
- 場 所：青和小学校
- 期 日：平成 22 年 5 月 24 日（月）～28 日（金）
- 資 料：②・③・④

資料の内容

- ①縄文土器と弥生土器
- ②縄文時代の石鎚と弥生時代の石鎚・石包丁
- ③古墳時代の埴輪と須恵器
- ④-1 土器 A・④-2 土器 B 奈良時代の土器
- ⑤奈良時代の瓦 軒丸瓦・軒平瓦
- ⑥奈良時代の鏡と墨書き土器・和同開珎

(1)

場 所：佐保小学校
期 日：平成 22 年 4 月 9 日（金）～19 日（月）
資 料：①・②・③



ドキ土器キットで学習する小学生

7. 職員の講師など派遣

A 一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期 日：①平成 22 年 7 月 13 日（火）
②平成 22 年 9 月 14 日（火）

場 所：一条高校（奈良市法華寺町）

派遣人数：①②各 1 名

内 容：①発掘調査について
②考古学概論

B 河合町民大学歴史大学歴史セミナー

期 日：平成 22 年 6 月 18 日（金）

場 所：河合町中央公民館 2 階視聴覚室

派遣人数：1 名

内 容：大和川流域の歴史 I

C 大和を掘る 28 土曜講座

期 日：平成 22 年 9 月 4 日（土）

場 所：奈良県立橿原考古学研究所 講堂

派遣人数：1 名

内 容：西大寺旧境内第 25 次発掘調査概要

D 河合町民大学歴史大学歴史セミナー

期 日：平成 22 年 9 月 17 日（金）

場 所：河合町中央公民館 2 階視聴覚室

派遣人数：1 名

内 容：大和川流域の歴史 II

E 東登美ヶ丘 1・2・3 丁目自治会

期 日：平成 22 年 10 月 2 日（土）

場 所：とみの里地域ふれあい会館

派遣人数：1 名

内 容：平城京の歴史

F 葛城市歴史博物館第 11 回特別展講演会

期 日：平成 22 年 11 月 13 日（土）

場 所：葛城市歴史博物館 2 階 あかねホール

派遣人数：1 名

内 容：土器からみた平城京のくらし

G 河合町民大学歴史大学歴史セミナー

期 日：平成 22 年 11 月 26 日（金）

場 所：河合町中央公民館 2 階視聴覚室

派遣人数：1 名

内 容：大和川流域の歴史 IV

H せいぶ親子考古学体験

期 日：平成 23 年 2 月 27 日（日）

場 所：西部公民館

派遣人数：1 名

内 容：土器の考古学について

8. 埋蔵文化財調査センター保管遺物・写真などの貸出ほか

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

- A 遺物などの貸出 18件（表3の通り）
- B 写真などの貸出・提供・掲載許可 29件（表4の通り）
- C 学術研究に関する資料閲覧 10件（表5の通り）

表3 遺物などの貸出一覧

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 22.4.1 ~ H 23.3.31	平城京跡出土木簡（模造品）10点（鏽迹上木簡1点、月借鉄上木簡1点、夷皮分銭付1点）、波皮御田所鉄ぬき指標1点、北宮封緘木簡1点、衛府通塙付1点、禄布付丸1点、鶴花文上木簡1点、造酒司印1点、瓦進上木簡1点）、分銅（模造品）1点（平城京跡第167次調査出土）
2	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を掘る28~2009年度発掘調査速報版」に展示	H 22.6.29 ~ H 22.9.17	須恵器蓋2点、土師器漉水把手1点、柿原石（縛）1点（帶解黃金塗古墳出土）、丸瓦1点、斜瓦1点、大安寺寶塔軒平瓦1点、大安寺塔軒丸瓦2点（大安寺旧境内第114次出土）、斜瓦1点、斜瓦1点、鬼瓦1点、大安寺寶塔軒平瓦1点（大安寺旧境内第122次出土）
3	環境考古研究会	熱アルコール（トレハロース）合規法による施設遺物保存処理の技術向上に関する研究のため	H 22.7.22 ~ H 23.3.31	削片（墨痕のないもの）100点、削片（墨痕のあるもの）25点（西大寺旧境内第25次調査出土）
4	東北歴史博物館	特別史跡多賀城跡調査50周年記念特別展「多賀城・大字府と古代の都」に展示	H 22.8.26 ~ H 22.11.7	墨書き4点（大安寺旧境内第57・64次調査出土）、唐三彩陶枕2点（大安寺旧境内第68・92次調査出土）、奈良三重壺1点、淨瓶2点、躰1点、躰4点、火吹2点、獣耳1点、（大安寺旧境内第28・30・43・53・72・92次調査出土）、水晶玉1点（大安寺旧境内第72次調査出土）、第1点（大安寺旧境内第72次調査出土）、七輪5点、人形埴輪1点、人面埴輪書き上器1点、肅事4点、錢貢23点（東市跡第4次調査出土）、木製サイロ1点（平城京跡第151次調査出土）、三合一器、墨書き上器1点（平城京跡第127次調査出土）、イスラム陶頭1点（西大寺旧境内第25次調査出土）、並形分削1点（平城京跡第102次調査出土）、人面骨冠1点（平城京跡第506-1次調査出土）
5	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	第7回ミニ展示「劍～お金・大仏～」に展示	H 22.9.3 ~ H 22.10.15	無文銀鏡1点（平城京跡第378-2次調査出土）
6	上田市立信濃國分寺資料館	特別展覧会「平城京と東海道諸国（の図展）」に展示	H 22.9.6 ~ H 22.11.9	須恵器鏡蓋2点（平城京跡第276・283・327-5次調査出土）、須恵器長頸壺3点（平城京跡第276・283・327-5次調査出土）、短頸壺1点（平城京跡第283次調査出土）、須恵器鳥居壺1点（平城京跡第283次調査出土）、須恵器「眞老」錐刺壺1点（第86-23次調査出土）、須恵器「美造」錐刺杯（平城京跡第180次調査出土）、人面墨書き上器1点（平城京跡第52次調査出土）、土師器甲斐型壺1点（平城京跡第180次調査出土）、十馬1点（東市跡第6次調査出土）、信濃國分寺同窓平瓦（平城京跡第504次調査出土）
7	岡山市立オリエンタル美術館・財団法人中近東文化センター財團博物館	特別展「ペルシアの宝物～至高のガラスと銀の世界」に展示	H 22.9.10 ~ H 23.3.4	イスラム陶器5点（西大寺旧境内第25次調査出土）
8	京都府立山城郷土資料館	特別展「平城の北・恭仁京・木津川流域の奈良時代」に展示	H 22.9.16 ~ H 22.12.10	イスラム陶器14点、唐木本瓦1点、墨書き土器11点（西大寺旧境内第25次調査出土）、柱根1点（平城京跡第231次調査出土）、丹井移材2点（平城京跡第1次調査出土）、須恵器山形土器3点（東大寺旧境内第54・134・135次調査出土）、美濃造須恵器高杯脚壺1点（平城京跡第73・93・137・138・203・293次調査出土）、人面墨書き高杯脚壺1点（平城京跡第257次調査出土）、土師器半變型杯（平城京跡第180次調査出土）、十馬1点（東市跡第5次調査出土）、中国製白磁盤1点、中国製青磁盤1点、美濃燒1点、土師器小皿4点、信楽焼船鉢1点、瓦質搖籃1点、火鉢4点、錢貨4点（多聞閣出土）
9	四條畷市立歴史民俗資料館	平成22年度特別展「田原城とその菩提寺」に展示	H 22.10.1 ~ H 22.12.22	軒瓦1点、軒平瓦4点、軒彫瓦1点、中國製白磁盤1点、中國製青磁盤1点、美濃燒1点、土師器小皿4点、信楽焼船鉢1点、瓦質搖籃1点、火鉢4点、錢貨4点（多聞閣出土）
10	葛城市歴史博物館	葛城市歴史博物館第11回特別展「華の都の南西で－葛城と平城京－」に展示	H 22.10.5 ~ H 22.12.2	木柱2点（平城京跡第2次調査出土）、丹井幹7点、舟形槽内土器10点（平城京跡第283次調査出土）、ドキ土器キャ1点、軒平瓦2点、朝服（レプリカ）1式、腰帶金具8点（平城京跡第180・283・325-2・347-1・459-2次調査出土）、横櫛2点（平城京跡第1次調査出土）、烟花六瓣碗1点（平城京跡第266次調査出土）、櫛眉5点（平城京跡第1次調査出土）、ガラス小玉16点（平城京跡第310次調査出土）、ガラス小玉跨型（平城京跡第20・366次調査出土）、食器セッタ（折敷付）9点（平城京跡第1・11・24・73・236・286-2・327-5次、東市跡第5次調査出土）、須恵器長頸壺4点（平城京跡第54・134・327-3次、東市跡第4次調査出土）、食器セッタ（レプリカ）1式、こしき1点、躰1点（東市跡第26次調査出土）、躰3点（平城京跡第1・236次調査出土）、かまと1点（平城京跡第506次調査出土）、墨書き土器7点（平城京跡第28・157・180・253-3・331次調査、東市跡第12次調査出土）、ものさし1点（平城京跡第563次調査出土）、「四合」墨書き1点（平城京跡第459-2次調査出土）、並形分削（レプリカ）（平城京跡第167次調査）、錢貨3点（東市跡第4次調査出土）、和同開脚鉢身鉢身鉢足1点（平城京第413次調査出土）、神功開寶院跡遺物8点（平城京跡第405次調査出土）、等1点（平城京跡第317次調査出土）、等柱1点（平城京跡第273-1次調査出土）、ココヤニ1点（平城京跡第484次調査出土）、削人形1点（平城京跡第378-5次調査出土）、人形木製品1点（平城京跡第431-1次調査出土）、人形3点（平城京跡第440次調査出土）、大型人形1点（平城京跡第506次調査出土）、ミニニア土器19点（平城京跡第80・106・151・157・173・180・236・283・292-1・310-2・355・378-4・486・506・526次調査出土）、陶器2点

10			(平城京跡第1次調査出土)、奈良三彩5点(平城京跡第1・307・622次、東市跡第26次調査出土)、唐三彩1点(平城京跡第578次調査出土)、新羅土器3点(平城京跡第459・538次、東市跡第4次調査出土)
11	財团法人元興寺文化財研究所	秋季特別展「元興寺之七不思議」に展示	H22.10.12～H22.11.30 七輪器羽筆1点、羽口4点、鍋3点、スラグ11点(元興寺境内第45次調査出土)、土坑出土土器(元興寺境内第47次調査出土)、井戸出土土器、石鍋加工品1点(平城京跡第269次調査出土)
12	財团法人奈良市生涯学習財團	「せいぶ親子考古学体験」に使用	H23. 2.24～H23. 3. 1 分類キット6箱
13	鳥根県立古代出雲歴史博物館	企画展「古代出雲の壮大なる交流―神々の国を往来した人と物語」に展示	H23. 2.25～H23. 6.10 緑色凝灰岩未成品1点、土師器鉢1点、小型丸底壺1点、甕3点、器台1点、高杯1点(平城京跡第257・3次調査出土)
14	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所飛鳥資料館	平成23年度春期特別展「星々と日月の考古学」に展示	H23. 3.25～H23. 6.15 平城宮佐紀池南出土兜形木胸レプリカ1点

奈良市管内

15	なら奈良館	常設展示	H22. 4. 1～H23. 3.31 土師器9点(平城京跡第52・314次、東市跡第4・6次調査出土)、須恵器14点(平城京跡第52・157次、東市跡第4次調査出土)、本製品2点(平城京跡第174次調査出土物1点、第257・3次調査出土へら1点)、バネル1点(貴族の食卓風景)
16	奈良市水道局	常設展示	H22. 4. 1～H23. 3.31 軒丸瓦2点、軒平瓦1点(平城京跡第28次調査出土)
17	近市人蔵文化センター	常設展示	H22. 4. 1～H23. 3.31 埠1点(平城京跡第14次調査出土)
18	富雄公民館	常設展示	H22. 4. 1～H23. 3.31 弥生土器2点(赤道縫出士)、古墳時代の須恵器2点(赤道跡)、平城京跡第162次調査出土)、奈良時代の土師器1点、須恵器5点(平城京跡第52・92・133・157・222次調査出土)、瓦器1点(奈良町遺跡、元興寺境内第4・13・13次調査出土)、江戸時代の土師器・陶磁器(奈良町遺跡、元興寺境内第15次、菅原東遺跡出土)、バネル12点

表4 写真などの貸出・提供・掲載許可

申請日	申請機関	目的	内容	その他
1 H22. 3.31	奈良県立橿原考古学研究所	橿原考古学研究所ホームページ「平城遷都100の瞬間」に掲載	平城京左京二条二坊「相撲」墨書き土器集合写真 (橿原考古学研究所付属博物館特別陳列図録第15冊「平城京发掘―これまでわかった奈良の都」掲載写真の転載)	転載許可
2 H22. 4. 7	柏書房株式会社	『平城京千三百年「全般証」奈良の都を木簡から読み解く』に掲載	①西大寺境内第25次調査出土「石上朝臣」ほか、木簡写真2点 ②「奈良市埋蔵文化財調査年報」平成18年度30頁掲載木簡写真2点	掲載許可
3 H22. 4.30	雅楽協議会	雅楽協議会発行「雅楽だより」第22号に掲載	西大寺境内第25次調査出土「皇帝東朝」墨書き土器写真1点	貸出・掲載許可
4 H22. 4.30	財团法人日本相撲協会	相撲博物館企画展「相撲と歴史と漫話」の解説写真展示パネルに使用	平城京跡第28次調査出土「相撲」「左相撲」墨書き土器各1点	貸出・掲載許可
5 H22. 5.10	平凡社「別冊太陽」	別冊太陽「世阿弥入門」に掲載	西大寺境内第25次調査出土「草野東朝」墨書き土器写真1点 (奈良県立橿原考古学研究所付属博物館撮影、所蔵写真を使用)	奈良市所蔵の資料であることを明示
6 H22. 5.17	山梨日日新聞社	山梨日日新聞文化面「古代史の恋」に掲載	西大寺境内第25次調査出土「東海道」国名木簡写真1点	貸出・掲載許可
7 H22. 6. 1	上田市立信濃国分寺資料館	特別展覧会「平城京と東海道諸国との国分寺」の図録など関連印刷物に掲載	①平成20年度秋冬季特別展パンフレット「東海地寶」掲載、尾張國須恵器合1点、須恵器「美濃」劍柄杯1点、七輪器甲斐型杯合1点、須恵器長颈瓶合1点、東堀河出土人面墨書き土器1点 ②平成21年度秋冬季特別展パンフレット「奈良のやさもの暮らし」掲載、須恵器短頸瓶合1点 ③奈良市埋蔵文化財調査センター常設展示図録「出土品が語る奈良の歴史」掲載、土器1点 ④平城京跡第26・283次調査出土須恵器「夷老」線彌字写真1点、バネル写真1点 ⑤平城京跡第86・23次調査出土須恵器「夷老」線彌字写真1点 ⑥平城京跡第504次調査出土信濃国分寺瓦瓶軒平瓦、平城京跡第504次調査瓦瓶区全品、信濃国分寺瓦瓶軒平瓦が出土した井戸(南から)	①～④ 貸出・掲載許可 ⑤・⑥ 転載許可
8 H22. 6.10	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	速報展「大和を握る28」～2009年度発掘調査速報展～に展示、図録・ホームページに掲載	①黄土垣古墳第2次調査A～C発掘区全景各1点 ②黄土垣古墳全景1点 ③大安寺境内第114次調査大安寺東塔西階段1点、大安寺東塔南階段延長1点 ④大安寺境内第122次調査大安寺東塔襖石1点、発掘区全景1点 ⑤西大寺境内第25次調査発掘区全景1点、木くす削断面写真1点	貸出・掲載許可

9	H 22. 6.17	株式会社雄山閣	『季刊考古学』第 11 号「特集 平城京研究の現在」に掲載	①西大寺境内第 25 次調査出土イスラム陶器写真 1 点 ②西大寺境内第 25 次調査出土「皇甫東朝」墨書き土器写真 1 点 ③平城京出土内三彩集合 1 点 ④『奈良市理賃文化財調査年報』平成 17 年度 卷首誌版 1 揭載 史跡大安寺境内第 110 次調査西塔基壇全景航空写真 1 点	貸出・掲載許可
10	H 22. 6.25	東北歴史博物館	特別展史跡多賀城調査 50 周年記念特別展「多賀城・大宰府と古代の都」に関する図録、展示パネル等に掲載	①理賃文化財調査センター常設展示図録「出土品が語る奈良の歴史」掲載 墨書き土器「大寺」大安寺左右酒「東院」各 1 点、奈良三彩集合 1 点、唐三彩陶枕 1 点、佐渡理署・水晶玉 1 点、人形・蓋串 1 点、土馬 1 点、人面墨書き土器 1 点、裁貯集合 1 点、肅形分削 1 点、艶形分削 1 点、束繩の横 1 点 ②リーフレット掲載 西大寺境内第 25 次調査出土イスラム陶器 1 点 ③平成 20 年度秋季特別展パンフレット「奈良地寶」掲載 人面付祝脚はか 1 点、「三分一・三分二」ほか墨書き土器集合 1 点 ④『奈良市理賃文化財調査概要報告書』平成 5 年度園版 63 揭載「大安寺」墨書き土器 1 点 ⑤平城京跡第 151 次調査出土木製サイコロ 1 点	貸出・掲載許可
11	H 22. 6.25	葛城市歴史博物館	葛城市歴史博物館第 11 回特別展の図録に掲載	①平城京跡第 283 次調査 井戸検出状況 1 点 ②平城京跡第 328 次調査出土 ベンガラ着付軒平瓦 1 点 ③平城京跡第 1 次調査精錬 1 点 ④平城京跡第 266 次調査出土 琉璃六花鏡片 1 点 ⑤平成 20 年度秋季特別展パンフレット「奈良地寶」掲載 金銅鉗 1 点、ガラス小玉と筒 1 点、長頸罐集合 1 点、副製人形 1 点、煮炊具集合 1 点、ミニチュア土器集合 1 点、新羅土器 1 点 ⑥平成 21 年度秋季特別展パンフレット「奈良のやきものと暮らし」掲載 食器具（粗陶・庶民）各 1 点 ⑦平城京跡第 563 次調査出土ものとし 1 点 ⑧平城京跡第 413 次調査出土と同様瓦跡放鉄 1 点 ⑨平城京跡第 405 次調査出土 功効開闢鉄造一括遺物 1 点 ⑩平城京跡第 317 次調査出土和琴 1 点 ⑪平城京跡第 431 次調査出土木桶 1 点 ⑫平城京跡第 28 次調査出土木桶 1 点 ⑬平城京跡第 578 次調査出土唐三彩足立足 1 点 ⑭平城京跡第 2 次調査柱抜土柱鉢 1 点 ⑮平城京跡第 440 次調査出土人形集合 1 点 a 大安寺境内出土軒瓦、軒平瓦 b 平城京跡出土腰帶金具集合 c 平城京跡第 1 次調査出土胡拂 d 平城京跡出土墨書き土器集合 e 平城京跡第 459-2 次調査出土「四合」墨書き土器 f 銀鉢 3 種 g 平城京跡第 317 次・273-1 次調査出土相琴・琴柱 h 平城京跡第 484 次調査出土ココヤシ i 陶瓶集合 j 奈良三彩集合 k 平城京跡第 167 次調査出土分崩	①～⑯ 貸出・掲載許可 a～k 撮影・掲載許可
12	H 22. 6.28	有限会社作品工房	『週刊・江戸』第 31 号 特集「脇による天下統一」に掲載	『奈良市理賃文化財調査概要報告書』平成 16 年度 口絵 6 揭載 大衍脇による具注解の漆紙文書 1 点	貸出・掲載許可
13	H 22. 7. 6	株式会社北國新聞社	『愛藏版 ふるさと人物伝』に掲載	西大寺境内第 25 次調査出土「皇甫東朝」墨書き土器 1 点	貸出・掲載許可
14	H 22. 7. 9	岡山市立オリエンタル美術館・財团法人中近東文化センター付属博物館	特別展「ペルシアの宝物—至高のガラスと銀貨の世界」に展示・図録に掲載	西大寺境内第 25 次調査出土「神護景雲二年三月五日」木簡 1 点、イスラム陶器出土状況 1 点	貸出・掲載許可
15	H 22. 7.20	毎日新聞学芸部	毎日新聞夕刊連載「あおによし〜奈良のは 1300 年」に掲載	『平城京左京二条二坊十二坪 奈良市水道庁舎建設地発掘調査概要報告書』図版 23 揭載 「相接所」「左相接」墨書き土器 2 点	貸出・掲載許可
16	H 22. 8.11	地域情報ネットワーク株式会社	『月刊大和路ならら』2010 年 9 月号に掲載	元興寺境内第 66 次出土 水琴窟出土状況 1 点	貸出・掲載許可
17	H 22. 8.14	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	平城遷都 1300 年記念、橿原考古学研究所付属博物館 70 周年記念秋季特別展「奈良時代の匠たち—大寺建立の考古学」の図録、広報に掲載	①大安寺境内第 6 次調査出土 大安寺式軒瓦 1 点 ②大安寺境内第 58 次調査出土 桜山瓦窯 平瓦、道具瓦、日干し煉瓦 1 点 ③大安寺境内第 100 次調査出土 西唐相輪風檻 1 点 ④大安寺境内第 100・102 次調査出土西塔水槽 1 点 ⑤大安寺境内第 68 次調査出土三彩坐木先瓦 1 点 ⑥大安寺境内第 110 次調査 西塔空室中撮影写真 1 点 ⑦平城京跡第 327-3 次出土 輪 1 点 a 大安寺境内第 100・102 次調査出土軒瓦材配用扉 b 平城京跡第 51・56 次調査出土井戸枠材配用扉 c 平城京跡第 56・286・286-2 次調査出土井戸枠材転用闇材 d 平城京跡第 292 次調査出土上井戸枠材転用闇材 e 平城京跡第 296 次調査出土上井戸枠材転用連子窓枠 f 平城京跡第 520 次調査出土井戸枠材埋垣根材	①～⑦ 貸出・掲載許可 a～f 撮影・掲載許可

18	H 22. 9. 6	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所	奈良文化財研究所編「平城京事典」に掲載	①平成19年度秋季特別展パンフレット『並びたつ大塔』掲載 大安寺跡全景1点 ②『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成14年度口絵掲載 大安寺跡出土の風铎と風鈴1点 ③西大寺旧境内第25次調査出土「皇甫東朝」墨書き土器1点 ④杉山瓦窯2号窯1点 ⑤須恵器長頸甌集合1点	転載許可
19	H 22. 9. 8	奈良県立橿原考古学研究所 個人	奈良県立橿原考古学研究所発行「八田道跡発掘調査報告書」考察に掲載	平城京跡出土石製腰帶具未成品写真8点	掲載許可
20	H 22. 9. 10	地域情報ネットワーク株式会社	「月昇大和路なるる」2010年10月号に掲載	大安寺東塔跡1点	掲載許可
21	H 22. 9. 14	京都府立山城郷土資料館	特別展「平城京の北・奈良京一本津川流域の奈良時代」に展示、図録、ホームページに掲載	①西大寺旧境内第25次調査出土 イスラム陶器集合1点 ②西大寺旧境内第25次調査出土木簡バケルデータ8点 ③地図バケルデータ1点 ④イスラム陶器復原イメージ図バケルデータ1点 ⑤イスラム陶器出土状況バケル1点 ⑥西大寺古墳内第25次調査写真・発掘区位置図・平面図・位置図・調査面写真バケル各1点 ⑦須恵山形土製品集合1点 ⑧唐三彩集合1点 ⑨天麁座須恵器高杯・文字拙大各1点 ⑩甲斐型杯集合1点 ⑪個人顔付注口1点	貸出・掲載許可
22	H 22. 9. 14	京都新聞出版センター	「近江 古代史への招待状」に掲載	平成20年度秋季特別展パンフレット「寧楽地寶」掲載 平城京跡第484次調査出土 コヤシ	貸出・掲載許可
23	H 22. 9. 30	財団法人関西文化学術研究都市推進機構	科学繪本「奈良の都の絵本—古代からのタイムカプセルー」に掲載	①杉山古墳出土 人物埴輪1点 ②埋蔵文化財調査センター常設展示図録『出土品が語る奈良の歴史』掲載 平城京跡第1次調査出土 奈良時代の土師器・須恵器1点 ③朱雀大路空中埴影写真1点 ④朱雀大路と朱雀門1点 ⑤宮殿庭園 園池と復元建物1点	貸出・掲載許可
24	H 22.10. 6	東京法令出版株式会社	中學歴史資料集「ビジュアル歴史」に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土「皇甫東朝」墨書き土器1点	貸出・掲載許可
25	H 22.10. 7	株式会社フィールド出版	歴史書「大後王」に掲載	奈物寺 積三角縁呂作鉢二神二獣鏡データ写真1点	掲載許可
26	H 22.10.20	株式会社学生社	「平城京 100の疑問」に掲載	平成20年度秋季特別展パンフレット「寧楽地寶」掲載 須恵器と土師器1点	貸出・掲載許可
27	H 22.11.16	奈良県立図書情報館	「大安寺展—平城京の仏教研究センター」に展示	大安寺发掘調査関連写真バケル33点	貸出・掲載許可
28	H 23. 2. 1	株式会社河出書房新社	「平島の考古学—古墳時代」に掲載	平城京跡第200次調査 背原東道跡埴輪窯	貸出・掲載許可
29	H 23. 2. 9	株式会社吉川弘文館	「すべての道は平城京へ」に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土「東海道」国名木簡 赤外線写真データ表・裏各1点	掲載許可

表5 資料閲覧

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	H 22. 5.13	同志社大学講師	個人研究	大安寺旧境内出土 平安時代以降瓦
2	H 22. 8.13	天理大学付属天理参考館職員	個人研究	平城京出土 軒丸瓦6点、軒平瓦6点
3	H 22.10. 4	天理大学生	個人研究	平城京第1・490・504・515次調査出土 桃核
4	H 22.11.16	大和郡山市職員	報告書作成	平城京出土 軒丸瓦10点
5	H 22.11.26	奈良女子大学大学生	個人研究	平城京跡第200次調査出土 塙輪
6	H 23. 2. 4	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所職員	個人研究	平城京跡第46・575次調査出土 軒丸瓦
7	H 23. 2. 8	筑波大学大学院生	個人研究	平城京跡出土 鉄製品30点
8	H 23. 3. 7	大阪大学大学院生	個人研究	平城京跡第522次調査出土 土器
9	H 23. 3.11	専修大学人文学科研究所研究員	個人研究	平城京出土 唐三彩、西大寺旧境内第25次調査出土 イスラム陶器
10	H 23. 3.16	一宮市博物館施設芸員	特別展資料調査	平城京跡第228次調査出土近世土坑出土 土器、元興寺旧境内第38次調査出土S K 03出土 土器

第4章 紀要

平城京跡出土の滑石製容器

池田 裕英

I はじめに

平城京跡から出土する容器には土器、木器、金属器の他に、数は少ないものの滑石を輪轂で成形したのものがたり、現在、管見で6点を確認している。出土量が少ないこともあって從来あまりとりあげられてこなかったが、それゆえに製作地や製作技術、用途といった面で検討する課題があると思う。本稿ではその滑石製容器を紹介し、それらの課題を考える際の基礎資料としたい。

II 平城京跡出土の滑石製容器

1は右京二条三坊六坪から出土した環状鉢付蓋である（奈良市教育委員会 1996）。口径 12.6cm、鉢径 5.9 cm、器高 2.95cm、鉢高 0.8cm。遺物包含層から出土し、厳密には時期は不明であるが、形態や調査で検出した遺構、出土遺物から奈良時代のものと考える。石材はやや赤みのある茶褐色の色調で、細かい白色砂粒が含まれる。外面とともに輪轂削りの痕跡が明晰に残る。鉢の内側の頂部外面に2条の、鉢の外面に1条の沈線が巡り、頂部から縁部にかけての外面には4条一组で2重に、縁部外面には3条の沈線が巡る。沈線の断面はV字形である。鉢の頂部、口縁端部ともやや丸みを帯びている。

2は右京四条一坊九坪のSX0603廃棄1から出土した滑石製の碗で、口径 8.6cm、器高 2.1cm、高台径 6.0 cm である¹³⁾（奈良県立橿原考古学研究所 2011）。外面は輪轂削りの痕跡が顕著であるが、内面はより平滑に仕上げられている。外面上端部は手持ちによる研磨で形を整えるが、他の部位に比べて仕上がりが粗雑であることから二次的な調整であると考えられており、本來の口縁部はさらに立ち上がるものと想定されている。高台の付け根には2条の沈線が廻る。1の環状鉢付蓋にも沈線が巡り、鉢の径が本例の高台径とほぼ一致することから、この例も口縁部が外反する鉢を模した碗と考えられている。

3は右京二条三坊三坪のSK601から出土した滑石製容器の底部片で、法量や厚さからみて壺の底部ではないかと思われる（奈良市教育委員会 1994）。淡青灰から茶褐色の色調で、径 1mm 程度の黒色の斑点や幅 1 ~ 2 mm の墨が流れたような縞状の筋がみられる。外面とともに輪轂削りの痕跡がある。高台の外面上に一条の沈線が施され、高台と底部の境目の部分にも沈線が加えられている。体部に比べると底部は厚く作られている。

4は右京二条三坊六・十一坪間の西三坊坊間路西側溝

の最下層から出土した壺片である。側溝から出土した遺物は奈良時代から平安時代にかけてのものである。色調は灰白～淡青灰色で、径 0.5 ~ 1mm 程度の黒色、白色微粒子が含まれる。頭部は短く、肩部にL形の把手がつく。把手には横方向に貫通した穴が穿たれており、本來は蓋を被せ、紐のようなものを通して縛るような機能があったのであろう。頭部と把手の間には沈線が巡る。内外面とも輪轂で削った痕跡がある。

5は4と同じく右京二条三坊六・十一坪間の西三坊坊間路西側溝の最下層から出土したものである。色調は灰白～灰色で、径 0.5 ~ 1mm 程度の黒色微粒子が含まれている。平坦な板状のもので、両面共に沈線が巡る。両面に沈線がある点はやや不自然であり、他の器物の可能性も十分考えられるが、平坦で、片側に薄くなっていることから蓋の頭部の破片と考えておきたい。

6は右京三条三坊八坪のSE154の掘形から出土した壺片である（奈良市教育委員会 1991）。平城宮土器IIIの土器とともに出土した。口径は 12.4cm に復原できる。色調は青灰～青緑色で、白雲母を多量に含むのが特徴的である。肩部に2条、口縁端部内面に1条の沈線がある。口縁部内外面から肩部上半にかけては輪轂削りの痕が明晰に残る。肩部外面は摩滅が激しく調整は不明である。

これらはいずれも輪轂を用いて作られ、器面に沈線が施される。石材は2～5が青味のある滑石で黒色ないし白色の斑点があるが、1はやや赤味のある滑石で、黒色の斑点はほとんどない。6は灰緑色で白雲母が多量に含まれ、表面がややザラつくのが他とは異なる特徴である。



図1 滑石製容器出土位置図 (1/25,000)

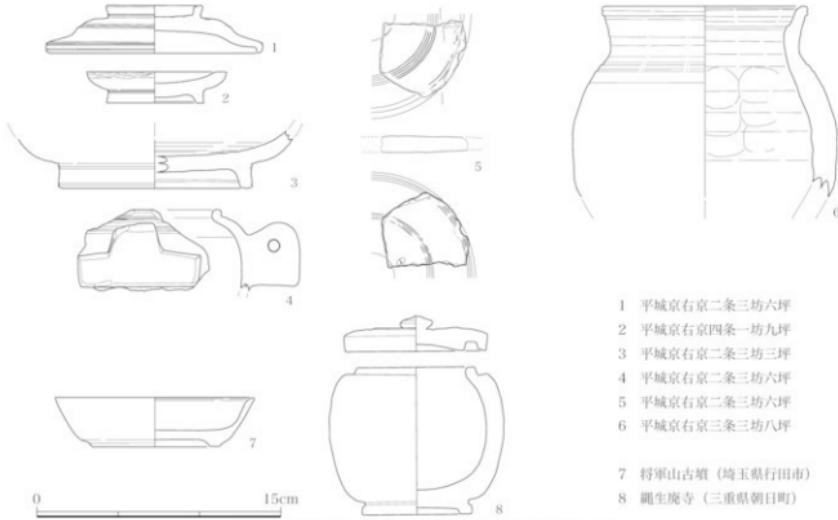


図2 日本出土の轆轤挽石製容器(1/3) 8は文献より再トレース)

出土遺構及び共伴遺物からみて奈良時代のものであることは確実である。1の蓋は包含層からの出土ではあるが、金属器に同じ形態がみられ、それを模倣した器形と思われる。この形態は土器でもあり、平城京跡では奈良時代中頃から後半にかけての遺構から出土することが多く、奈良時代末以降になるとあまりみられなくなる。この金属器の環状鉢付蓋が伴う口縁が強く外反する高台付鉢の出現は中国では西安市何家村出土の金銀器に代表されるように8世紀中頃前後のようであり（毛利光2004）、器形の特徴からも奈良時代のものと判断できる。

出土地は現在のところ平城京右京二～四条の一・三坊に限られている（図1）。特に1・3～6は集中している状況がみてとれるが、石製品の製作に関わる遺構や遺物などは見つかっておらず、現状では特別な理由は見いだせない。今後他の場所でも見つかると思われる。出土している遺構は、道路側溝、土坑、井戸、遺物包含層で、容器の遺存状態や出土遺構からは理納遺構や井戸に関わる祭祀といった特別な使われ方を推測することはできない。出土している器種は蓋、碗、壺である。但し、1の環状鉢付蓋は口径が12.4cmで、同じ形態の須恵器では15～22cmのものが多く、12cm台のものはあまりみられないことから、あるいは香川県善通寺出土銅製鐵骨器のような壺の蓋（帝室博物館1981）の可能性もあると思われる。また、2の碗も報文では口縁部が外反す

- 1 平城京右京二条三坊六坪
2 平城京右京四条一坊九坪
3 平城京右京二条三坊三坪
4 平城京右京二条三坊六坪
5 平城京右京二条三坊六坪
6 平城京右京三条三坊八坪

7 将軍山古墳（埼玉県行田市）
8 輪生庵寺（三重県朝日町）

が金属器の碗を模した器の可能性が指摘されているが、須恵器杯では高台径が9～12cm程度のものが多く、この碗の高台径が6cmとやや小さい点を考慮すれば、壺の底部片の可能性もあると思われる。そう考えると、5はよくわからない点があるが、出土している器種は壺類ということになり、滑石製容器の性格に関わる特徴といえるかもしれない。

III 滑石製容器の系譜

日本の滑石製品は、古墳時代に農耕具や武具などを模した小型の模造品や、平安時代前期から主に西日本を中心に分布する石鍋あるいは経筒等があるが、それ以外にはあまり知られていない。平城京例に先立つ轆轤を用いて製作したとみられる例としては、埼玉県将军山古墳から出土した石製盤（図2-7・東京国立博物館1986・埼玉県教育委員会1997）と三重県朝日町に所在する輪生庵寺塔心礎の舍利穴内から発見された滑石製有蓋壺（図2-8）がある（朝日町教育委員会1988）。

将军山古墳は行田市埼玉に所在する全長102mの前方後円墳である。明治27年に地元の人々によって発掘され、銅鏡、環頭大刀、蛇行状鉄器などが発見された。1991年から行われた発掘調査で円筒埴輪列や横穴式石室が確認され、出土した須恵器から6世紀後半から終わり（TK43～209）の年代が考えられている。石室内から出土した石製盤（図2-7）は高台がつき、口径12.4cm、

器高3.0cm、高台径7.8cmである。石材は黒色の蛇紋岩とされる。底部は外面とも平坦で、口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部は内傾させている。底部内面は荒い磨きのままであるが、その他は丁寧に磨かれている。沈線はみられず、丁寧に磨かれたためか製作時の轆轤削りの痕も認められない。この盤の時期については高台が付く点など古墳や銅鏡の時期にあわせて考えていよいのか検討する必要はある²⁾。

醍醐生庵寺は、1986～1987年にかけて塔跡の発掘調査が行われ、出土した瓦から塔は7世紀後半から8世紀初頭に造営され、9世紀後半に廃絶したと考えられている。その塔基壇中央の地下1.5mに据えられた心礎に舍利穴が穿たれ、舍利容器が置かれていた。舍利容器はガラス製容器を滑石製有蓋壺に納め、その上に唐三彩の楕を被せたものである。滑石製蓋は口径8.8cm、器高2.2cmで、頂部に宝珠形の鉢が付き、鉢が付く範囲を一段高く造りだしている。身の口縁に対応するかえりがある。滑石製壺は口径7.4cm、器高9.0cm、高台径7.2cmである。頸部は短く直立し、肩部には蓋を受けるためか平坦面を作り、体部は胴張りで、高台は角張る。いずれも蛇紋岩製とされ、濃緑色の地に灰褐色の斑文がある。外面には轆轤削りの痕跡がみられる。この滑石製有蓋壺について検討された上原真一人氏は、滑石製舍利容器の類例や共伴したガラス容器と唐三彩楕が隋・唐代の墓の副葬品に類例があること、舍利安置法が墓制の影響を著しく受けていることなどから一括して唐起源のものである蓋然性が高いと述べておられる（上原1988）。

轆轤は土器、木器、金属器の製作に使われ、「玉工用の「ろくろ」もまた、形態的・機能的に全く異なるところがなかった」（橋本1979）とされる。加工が比較的容易な鉱物の一つである滑石の器の製作は日本で行われていたかもしれない。同時に、上原氏が使われた「唐起源」という言葉はいささか微妙な表現であるが、日本国内で出土量が少ないとや製作遺跡が見つかっていないことから、国外からの搬入品の可能性があるとも考える。この場合、奈良時代の国外からの搬入土器の出土状況から推測すると、中国、朝鮮半島がまず候補となろう。但し、筆者は当該地域の事例に疎く、現在のところ同様の石製容器は見つけられてはいない。故に上原氏の紹介された資料を再度取り上げ、それ加えて管見にのぼった若干の資料にふれることとしたい。

中国での滑石製有蓋壺の例は上原氏は2例あげておられる（図3）。1つは洛陽閔林59号唐墓出土のもので、灰褐色を呈し、黒色の斑点がある。身は口径8.5cm、器

高13cm、底部径7cmである。平底で胴の張る体部と外反する口縁部とからなる。蓋には宝珠形の鉢がつく。共伴した遺物から盛唐中期のものと考えられている（洛陽博物館1972）。もう1例は大阪市立美術館が所蔵するもので、高さ8.3cmで、楕壺形のものである。唐代初期のものとされる（大阪市立美術館1986）。

一方、朝鮮半島の例に関しては、上原氏は朝鮮半島の滑石製舍利容器の諸例を検討され、「統一新羅における滑石製舍利容器は9世紀中葉に流行したと考えざるを得ない」ことから醍醐生庵寺の蓋付石製壺を「唐起源」と考えておられる。しかし、舍利容器以外にも目をむけると、9世紀を跨る資料が出土していることが知られる。

朝鮮半島での例は図4に百济、新羅地域から出土したものを持げた。時期は百济、新羅、統一新羅と幅があるが、形態や器種は限定的なようで、ある程度の傾向は何えると思われる。紙幅の関係からこれらについて詳しく述べることはできないが、器種には蓋、燈盞、小壺、壺、把手付壺、皿などがみられる。蓋は鉢があるものとないものとがあり、鉢のないものには頂部中央に孔が穿たれているものもみられる。環状鉢の蓋もある。いずれも外面には沈線が巡らされ、内面は頂部に向かって緩やかな曲線をなし、概して縁部よりも中央部の方が厚みがある。大半はかえりが作られているが、端部を丸く收めるものもある。燈盞は口縁部が直立するものと外反するものとがみられ、底部は平底のものと高台のあるものとがある。壺には小壺や把手付のもの、長胴のものがあるが、いずれも短頭で、外面に沈線が施されている。口径から上の蓋はこれら壺の蓋であったとみてよいと思われる。32の蓋付短頭壺は李養贊氏が蒐集され、国立慶州博物館に寄贈した資料群の中の一つで発掘調査による出土資料ではないが、形態等から統一新羅時代のものとされている。また、雁鴨池出土品の中には写真団版のみの掲載で法量等は不明であるが、口縁端部が外反し、体部中央に沈線を巡らせ、高台が付く石製容器がある（図5）。東大寺正倉院や法隆寺に残る鉢やそれを写した須恵器杯Lと同様の形態と思われる。鉢脚には環状鉢の蓋が伴うものがあり、石製の環状鉢付蓋が存在する可能性は考え



図3 中國唐代の石製有蓋壺（上原1988より転載）



図4 朝鮮半島(百濟・新羅地域)の石製容器 (1/4・各文献より再トレス、一部改変)



図5 羅鶴池出土
滑石製容器
(『羅鶴池』文化財
管理局 1993 より
転載)

られよう。

渤海も不明な点が多いが、土器の蓋では環状鉢付蓋が多く、滑石製蓋も出土しているようである(朱宋憲 1979)。

このようにみてくると、将军山古墳の盤は共伴した銅鍤と同じく船載品とみる考えがあり(桃崎 2006)、朝鮮半島では9世紀以前の滑石容器が多く出土しているだけ

でなく、永泰2年（766）の年号が刻まれた滑石製舍利壺が慶尚南道山清郡智異山南麓で発見されている（朴敬源・丁元卿 1984）。永泰2年の年号は慶州市仁旺洞で収集された滑石製蓋にもみえ（朴洪國・賈鍾壽 2006）、これも舍利壺の蓋とみられる。8世紀に滑石製舍利壺が一定量存在した可能性を伺わせる。繩生庵寺の有蓋壺も形態的な特徴をよく検討しなければならないが、その産地を中国に限らず考える必要があると思われる。

IVまとめにかえて

中国、朝鮮半島における類例の収集が十分ではないのを承知しつつも幾つかの資料を概観してみた。蓋の全体の形態や紐、かえりの形状、壺や小形容器の底部並びに高台の形状など相違点が多く、現在のところ、同一または祖形といえるような例は見いだせていない。このことや、時期は隔たるが前期古墳の副葬品に滑石製の盒子や壺がみられ、奈良時代でも滑石製の石帶があること等も考慮すれば、国内で製作された可能性はあるかもしれない。しかし、現状ではこの製作地を特定しうるだけの資料はまだ不足していると考えおり、今後の課題とした方が、日本では轍轍により製作された滑石製容器の歴史が認められず、朝鮮半島ではそれがあり、出土量も多い点には留意しておきたい。加えて、平城京例4の短頸壺の頸部の短い点や肩部に沈線があること、繩生庵寺蓋の内面頂部の形状が緩やかな曲線を描く点や慶州塔洞640-4番地遺跡出土の蓋（21）が環状紐であることなどの類似点もみられるのも興味深い。朝鮮半島では容器のみならず、仏像や仏塔などの滑石製器物がみられ、これらとの関係にも注意すべきと考える。中国、朝鮮半島での出土例には壺類やそれに伴うとみられる蓋が多い。壺は蔵骨器や舍利容器に用いられていたり、火を灯すための燈盞など特定の用途に限定される器のように思われる。平城京跡で出土している石製容器も壺やその可能性があるものが、多いとは言えない現状ではあるが、見受けられる。器が石製であることの利点の一つは土器に比べて壊れにくいことであろう。蔵骨器や舍利容器に用いられるのはこの耐久性・持続性的面が大きいのではないかと思う。また、長い距離のモノの運搬には容器の強度も必要であろうから、重さで不利な面はあるものの中身を保護するには石製容器は適したと思われる。平城京で出土している壺が小壺ではなく、容量の大きい壺であるのは、何かを運ぶための容器として都にもたらされたことを示していると考えたい。もう一つの特性は燈盞があるように、火に強い点であろう。注口のある把手付壺（40）は石の耐火性に優れた特徴を活かし、火にかけ、

薬湯などに用いたのではなかろうか。

石製容器は材質の性質上、残りやすく、今後類例が増えることが期待される。製作地の問題に関しては、形態や技術的な検討に加え、石材の理化学的な分析を行えば新たな知見が得られるとも思われる。国内での類例の増加を待つだけでなく、今後、中国や朝鮮半島における出土例の調査等、資料の探索を続け、検討を進めていきたい。類例を含め、諸般のご教示をお願いする次第である。

本稿を執筆するにあたり、石材については京都府立山城郷土資料館の橋木清一氏から、朝鮮半島の石製容器については立命館大学の高正龍氏から種々ご教示を頂くとともに韓国でいくつかの資料を実見する機会を与えていただいた。記して感謝申し上げます。

1) 奈良県立橿原考古学研究所鶴澤千子氏、前野さゆり氏のご高配により実見させていただきました。

2) 韓国国立博物館にて実見させていただきましたとともに同館王氏研究室古宮殿氏から有益なご教示をいただきました。

参考文献

（日本文献）

- 朝日新聞委員会 1988 「圓生庵寺跡発掘調査報告」朝日町文化財調査報告第1冊 上原真人、1988 「繩生庵寺出土舍利容器に関する若干の考察」『圓生庵寺跡発掘調査報告』朝日町文化財調査報告第1冊 朝日町教育委員会
大阪府立美術館 1986 「大阪の立派な滑石製品選集」
埼玉県教育委員会 1997 「等輪山古墳」（史跡埼玉古墳群整備事業報告書）-史跡等活用別事業-総認定編-1編

朱家輝 1979 「渤海國考古學遺存 16『渤海文化』渤海國遺物株式会社

帝室博物館 1981 「天平聖母」国書所刊行会

天理大学附属天理書院 2011 第63回の向山園図録「朝鮮半島 くらしのもの」 天理大学図書部

東京国立博物館 1986 「東京国立博物館開館記録・古墳遺物篇（開館東京）」

奈良県立橿原考古学研究所 2011 「平城京ニミ大路1-1国道308号整備事業に伴う先史遺跡調査報告書（Ⅲ）」奈良県文化財調査報告書第139集

奈良市教育委員会 1991 「奈良市埋蔵文化財調査報告書 平成2年度」

1994 「奈良市埋蔵文化財調査報告書 平成7年度」

1996 「奈良市埋蔵文化財調査報告書 平成7年度」

朴洪國著・賈鍾壽著 2006 「永泰二年 奉聖寺 路 瓷瓶 盒 小考」（就実大学史哲集）

史哲集 1996 「奈良の文化史31 pp88 財團法人法人大出振興局 桥崎義滿

2006 「全国鐵橋歴史問題の出現とその意義」『筑波大学 先史学・考古学』研究第17号

2004 「古墳時代アジの金銅製造業」（河原編）奈良文化財研究所史料第68冊 独立行政法人文化財研究所・奈良文化財研究所

毛利光雄著 2005 「古墳時代アジの金銅製造業II（河原・日本編）」奈良文化財研究所史料第71冊 独立行政法人文化財研究所・奈良文化財研究所（顧問文部省）

（国外文献）

韓国文化財保護廳社 2003 「慶州 北門路 王京遺跡 考・発掘調査報告書」

公州大学博物館 1992 「立山城 説明」

公州師範大学朝鮮語 1987 「公州師範附設定王宮跡 発掘調査報告書」

國立慶州博物館 1987 「韓國 李時暉 葬墓文化」

國立慶州文化財研究所 1996 「眞月井跡 發掘調査報告書」学術研究叢書14

國立慶州文化財研究所 2003 「慶州西洞院19番地墓」学術研究叢書14

國立慶州文化財研究所 2011 「李時暉 定林寺跡 發掘調査報告書」

（他） 研究会癡狂研究会 2010 「慶州塔洞640-4番地 道跡 考古調査報告書第38冊 慶州大學校附設、忠南相陽 1999 「眞月井北里 百川遺跡発掘報告（目）」

朴敬源・丁元卿 1984 「永泰二年鉄鑄石製瓶」（近畿陪都立博物館年報）第6輯

（中國文献）

文化部管理局 1984 「奉聖寺 遺跡発掘調査報告書」

1989 「勢勒寺 遺跡発掘調査報告書」

1993 「那羅寺 發掘調査報告書」

（中国文献）

瀬陽博物館 1972 「瀬陽明林59号唐墓」『考古』第3期 科学出版社

印刷・製本仕様データ

表紙：アートポストカード220kg/m²・マットpp加工
見返し：白色上質紙110kg/m²
巻頭図版：特アート紙135kg/m²
本文：白色マットコート紙104.7kg/m²
本文フォント：ヒラギノ明朝体
製本：縦開き・糸かがり綴じ

©2013 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成22(2010)年度

ISBN 1882-9775

印 刷 平成 25 (2013)年3月18日

発 行 平成 25 (2013)年3月28日

編 集 奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地
TEL 0742-33-1821
FAX 0742-33-1822
URL <http://www.city.nara.nara.jp/>
E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発 行 奈良市教育委員会
630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1
TEL 0742-34-1111(代)

印 刷 株式会社 明新社
630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

この冊子は、300部作成し、1部当たりの印刷経費は2,820円です

ISSN 1882-9775

**ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2010**

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2010.
- II REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE.
- III REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS IN 2010.
- IV BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH CENTER OF NARA CITY.

**NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,
2012**

**ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2010**

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2012